

ヤバい。異世界来ちゃった

ありくい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通ルールを守らない非常識な車に跳ねられて、気がついたら路地裏に転がっていた主人公。ここどこ…？俺はどうした…？全く見覚えのない場所。不思議と怪我をしていない俺の体。どうなってんだ…？

目次

やべえ。死にそう。	1
ヤバい。tsしてんだけど!?	3
ヤバっ。魔法あるんだけど!	6
ヤバいくらい暇だわ	9
なんかもう色々ヤバいんですけど!	12
気まず過ぎてやばい	15
特異魔法って、やばくね?	18
危なくてヤバい	21
難易度ヤバイわ	24
この人たちの体力ヤバすぎい	26
訓練メニュー、ヤバすぎるわ	29
ヤバい!筋肉が:悲鳴をあげているっ!	32
この世界、やばいよ、楽しい!	36
静かな空間って、ヤバいね。怖い。	38
ヤバい。布団から出られない。	42
ヤバい。豪遊って最高!	45
ゲームは熱くなるとヤバい。	48
:やばいくらいに警戒されてる!?	51
な、何ですか:??ヤバくないですか:???	55
これは:ヤバいですね。仕事量。	59
あつヤバい。	65
ヤバい予感がするぜ!	70
やばくはないかも?	73
銃声怖い:ヤバイよお	77

ヤヤヤ、ヤバかったあ。

我ながらヤバいことしてるう…。

寝顔はヤバい。

他人の家でお留守番ってヤバイよね

よく考えたらこの状況もやばくね？

貰った休みが余ったけどここまで余るのはヤバくね

それはやばくないっすかあ？

可愛さがヤバい

待て待て待て。それはヤバいって。

落ち着け、これはヤバい！

この作戦…絵面はヤバそうだね！

爽さんというか組織って絶対になんかヤバイよね。

なんかこう、二人っきりの会話ってヤバイよね。

少しやばめの聡太君の暗躍劇。①

少しやばめの聡太君の暗躍劇。②

なにもヤバくないクリスマス！

いつ見てもこの特訓やばいよねえ

普通のいちに…やばい子がいる!?

よくよく考えなくてもさ、俺ヤバイよね。弱すぎる

この人ヤバっ！

なにもヤバくない大晦日！

新年早々やばい人！

お布団のやばい包容力…

なるほど、それはやばいですねえ。

ヤツベエ…

やばいよお。

時間がなさすぎてやばい

え、私の世界、ヤバすぎ…？

視線の訴えってヤバいよね。

天才とヤバいやつ

一騎当千なヤバい奴

大好きなヤバい人

やば…ぐる…

ヤバい優しさ

狂人だ！ヤバい！

ヤバい状況に終止符を

やば…ははは

…あれ？これやばくね？

やばくね？強くね？

何気ない一言も案外ヤバい

…ヤバい人達だなあ

やばくなり始めた情勢

ヤバい。何すればいいんだろう

ヤバいと思いつながらも嫌なことは後回ししちゃう

ヤバい。意味がわからない。

これだからヤバい議題の会議は嫌なんだ！！

うわやつば！

ヤベエにも程がある

あー、精神的疲労がヤバい

俺やばくね？

179

182

185

188

192

196

201

205

210

213

217

221

224

229

232

237

240

243

246

249

253

257

260

263

266

ヤバい事情は知りたくなかった。

はは。お互いにヤバいね！

やばいね

やってることヤバい？

あく、ヤバい恥ずかしい

痕跡ヤバい

ヤバい人達だなあ

ヤバい。えっと、ごめんなさい

ヤバいね…どうしようか

この人達がいれば、ヤバくてもヤバいと思えないなあ

ある意味ヤバい敵地

ヤバい計画？

異世界だ！やばい！

ヤバい人望

信じたくない程ヤバい

ヤバいものを失って

こころヤバい

友達のこころもやばい

やばい女の子

ヤバい子達だ

暗闇はヤバい

効果ヤバい

余りにもヤバい属性モリモリのぐちゃぐちゃ

ヤバいけどなんとか…ならなくね？

希望と絶望がヤバい

ヤバい？異世界来ちやつた？	353
ヤバい世界だ：	357
ヤバいだろこの教会！	360
ヤバい雰囲気だあ：	363
名前知らないのヤバない？	367
インパクトヤバい	370
ヤバいぐらい不気味	373
人見知りヤバあ：	376
ヤバい（泣）	380
ヤバい方面に向かってそう	383
ヤバい決意	387
久し振りのやばい人	391

やべえ。死にそう。

やべえ。死にそう。

ウインカーつけてないから曲がんねえだろと思って車の横突っ切ったら曲がつてきたんだけど。ふぎけんなよ。クソいてえしなんか血も出てるし、車どっか行つたし通行人いねえし。

運悪すぎだろ俺。あーヤバイヤバイ。なんか寒気してきた。くっそ。せめてあの車のやつ道連れにしてえ…！

あ、ヤバイ。今頭くらつと来た。意識が…

ガヤガヤと煩い人の声とブウウウンと響く車の音が響く中で、俺は目を開けた。

お？生きてる？マジ？あの状態から入れる保険あつたんですか？

馬鹿みたいなことを考えながら、自分が置かれた状況を確認する。場所は路地裏。時間帯は夜で、死角となつて見えないが電気っぽい光が差し込んでいるのを見るに、この騒音もそこから聞こえているんだろう。

思いつきり現代だし、転生とかあるか？と思つたけどこれはなさそう。でも、体はどこも怪我してないし痛みもない。助けてくれたっぽい人もいないし、もしかしたら轢かれるところから夢かな？

まあ流石にウインカーつけずに曲がる車なんてねえか。

「ワツハツハ…あー、え？ちよ、え？みえあおう〜」

声、おかしくね？つか、視点低くね？それかこの建物がデカイだけ？というか俺の肌白くね？室内で長期的に昏睡してたとかある？

「あ、そうだ携帯」

ポケットからスマホを…待ってこの服何？思つくそワンピースじゃん。ちよつ、ええ？スースーするんだけど。

…とりま路地裏から出て帰ろう。財布もねえし携帯もないけど、どうやって帰ればいいんだろうね。ま、それでも動かないと何も始まらないよね。

なんか動かしづらい体を起こして、壁にもたれながら歩く。いやなんなの？マジで歩きづらいんだけど。

たった10m程度の距離をじつくり1分かけて、街の明かりが目に入った。

「あ」

目に入った明かりが強すぎて、視界が一瞬眩む。目が慣れてくると、街の景色が目に入った。

繁華街、だろうか。車が忙しなく行き来していて、スーツ姿のサラリーマンやJkが動き回っている。田舎とまでは行かなくても、こんな都会は来たことがなかった。

今の状態を忘れて、この光景を眺めていたいという欲求に支配され、ぼーっと街を眺めていた。そして、車に反射された自分の姿が目に入った。

「えっ？」

車だけじゃなく、向かい側のビルにも私の姿は反射していて、気のせいという言葉ではこの状況は説明できなくなってしまった。

ビルや車の窓には、白いワンピースを着て、銀色に輝く髪を後ろで縛りポニーテールを作った赤い目の女の子が映っている。

すぐに手を後ろに回すとそこには、あるはずのない髪がある。サラサラとしていて触り心地のいい、女の子の髪という感じだ。前を見ると、窓に映る女の子も、全く同じ行動をしている。

これって、そういうことだよな？

ヤバい。t sしてんだけど!?

ヤバい。TSしてただけど!?

視点が低いのも、肌が白いのも、声がなんかおかしいのも全部これのせいつてコト?うせやろ…。つてあ…

ま、まあいいけど?別に一度も攻めたことがない新兵なんて必要ないし?悲しくないし?下半身に違和感があることなんて別に悲しくないし?

グスツ

しつかし、どうすつかなあ。金はねえ、スマホもねえ、ここがどこかも分からねえ。おら野垂れ死ぬのは嫌だべ。

「交番にでも行こうかな」

保護くらいはしてくれそう。よーわからんけど、正義のおまわりさんに頼って見ますか!

さあ!と意気込んで路地裏から一歩踏み出す。慣れない体で突然動かしたため、思い通りに体は動かずにバランスを崩してしまった。

「あつ」

ベシヤア

顔あげらんない…!絶対見られてるよ…。しかもめっちゃ痛いんだけど!ヤヴァイ。恥ずかしぬ。

「ちよつ…えつと、だ、大丈夫…?」

ザ・日本人というような、黒目黒髪のOLっぽい女の人が心配そうに駆け寄ってきてくれたけど、

「大丈夫です!!!」

ダツ…ベシヤア

ツツツツツ

「うう」

あまりの恥ずかしさに、顔を手で覆ってしまう。周囲には人が集まっているし、女の人はまだ心配そうに声をかけてくれている。痛いし泣いちゃってるし、もう最悪。

「ええつと、もしかして痛いのかな。じゃあ治してあげるね。痛いの痛いの飛んで行け」

女の人がそういつた瞬間、顔のズキズキと痛むところが治った。
「もう痛くないよ。はいはい。この子は私がなんとかしますからさっさと散りなさい!」

呆然としているうちに、女の人が周りの観客を追っばらつてくれた。そして、目線を合わせてその人は問いかけた。

「お名前言える?」

名前…

「や、やいばです。竹本やいばです」

取り繕ってもボロが出てしまうので、仕方なく前と同じ名前を使う。

「やいばちゃんか。お母さんは?」

「あ…」

言葉に詰まってしまう。男だった時は当然母親はいたが、この子の母親は知らない。母親がいるのかもしれないし、死んでいるのかもしれない。

「んーわかんないか。じゃあ、自分が住んでいたお家はわかる?」

「……ないです」

「ん?」

「わからないです。お母さんとお父さんが誰なのかも、お家がどこにあるのか、分からないです」

驚いたように女の方は目を見開いてから、優しく微笑んで俺の頭を撫でてくれる。

「そっか。ごめんね。じゃあお姉さんと一緒に交番行ってみよっか。もしかしたらお母さんが来てるかもしれないしね」

「…はい」

お姉さんに連れられて、交番の前まで歩いていく。周りからは明らかに髪色の違う私と連れて歩いているお姉さんはとても目立っているが、多分俺が変に思わないように気づかないようにしているのだろう。

というか、咄嗟とはいえ、記憶喪失みたいな事を言ってしまった。なんで名前分かるのに両親わかんないんだよ。住む場所知らないん

だよ。もしかしたら家出とか思われてるかも？

「あ、やいばちゃん。あれ、見たことある？」

お姉さんが手で示した先には、赤い龍と青い龍がなめらかな動きで建ち並ぶビルの間を通っていた。うん。

「えっ？」

「あ、やっぱり見たことなかったんだ。キレイだし、かつこいいよね」
いやいやいや。なんでそんな冷静なの？ありえないでしょ？すげえ幻想的だし、まるで出来のいい3D映画…あ、これプロジェクトシオンマッピングってやつ？それなら納得。SNSに流れているプロジェクトシオンマッピングはヤバかったし、同じと言われても納得できさる。

「凄いですね」

「ホントだよね。どれだけ練習したら出来るようになるんだろう」

「へ？練習？これってプロジェクトシオンマッピングじゃないんですか？」

「ぶろじえくしょん？なにそれ。あれは、世界的に有名な魔法使いさんのパフォーマンスだよ？来日してくれている間、一定間隔でこのパフォーマンスをしてくれてるんだよ」

……………あんだって？

ヤバっ。魔法あるんだけど！

ヤバっ。魔法あるんだけど！

こんな優しくして真面目そうなお姉さんが嘘をつくなんてありえない。ということは本当…ほんとかな。からかってたりしないのかな。

「あの、えっと。魔法って…？」

「え、知らないの？なん——あ、そっか。やいばちゃん。魔法って言うのはね、目には見えないけど周りにある魔力つてのを使つてね、火をつけたり、水を出したりすることだよ」

俺が知っているラノベものとかの魔法と相違はない…かな？

「へー。じゃあお姉さんは何か魔法が使えるんですか？」

「うん。私はね、怪我を治すことが出来るの。さつきやいばちゃんがコケたとき、痛い痛い飛んで行けって言つてたでしょ？」

あ、そういえば…。お姉さんパワーかと思つたら魔法だったらしい。いや、お姉さんの魔力だからお姉さんパワーみたいなものか。

「はい。ということはお姉さんが助けてくれたんですね。ありがとうございます
ごぎいます」

「どういたしまして」

ニコっとお姉さんが微笑んで、その笑顔に見とれていると、お姉さんが立ち止まった。

「？」

「ついたよ。やいばちゃん」

見ると、既に交番の前に辿り着いていた。

「すいませくん。迷子の子がいたんですけど」

そう言うと、お巡りさんが奥から出てきた。一言二言お姉さんと言葉を交わしたあと、お巡りさんはこちらに向かつてニコリと微笑んだ。

「じゃあ少し中に入ってもらえるかな？お菓子もあるよ」

優しくしているのだろうか、警察というだけで身構えてしまう。それを見兼ねたのか、お姉さんが優しく手を引いてくれた。

「それでは、まずあなたの身分を証明出来るものはありますか？」

お巡りさんがお姉さんに問いかける。

「私は木本秋名といいます。身分証は…保険証でいいですか？」

「はい。……ありがとうございます。じゃあ次に、お嬢ちゃん。お名前前は？」

一つ一つ、お巡りさんは私のことについて聞いてきた。だけど、お姉さんに言ったことと似たような内容しか言えず、お巡りさんも困っているように見える。

「なるほど…。ではひとまず、やいばちゃんはこちらで保護という形で預からせて頂きます。秋名さんは最後にこの書類に記入して頂ければ、もう帰っても大丈夫です」

あ、そっか。お姉さんは連れてきてくれただけだからどっか行っちゃうんだ。

「分かりました。……はい。じゃあやいばちゃん。またね。ちゃんとお母さんが来てくれるといいね」

「は、はい。えっと、木本さん。ありがとうございます」

身元もわからない俺にここまで親切にしてくれたお姉さんに、心からお礼をする。というか、助けてもらってなんだが、色々と損しそうな性格だ。

「ご協力感謝します」

お姉さんは交番から出ていって、夜の街に混ざって行った。

「…それじゃあ、やいばちゃん。お母さんが来るまで暇だと思っから、ゲームでもする？」

お巡りさんは優しいげな顔でゲーム機を出してきた。お巡りさんのカバンから出していたので、多分個人の物である。

「あ、はい」

お巡りさんは忙しいだろうし、そもそもお巡りさんと一対一で話せるほどの能力は無いので領こうとすると、

くうくう

「……………」

「……………(´)飯食べよっか」

お腹の空く音がここまで恥ずかしいとは思わなかった。俺は、お巡りさんが出してくれたレトルトカレーを食べた。美味しかった。

ヤバいくらい暇だわ

ヤバいくらい暇だわ。

薄々分かっていった事だが、誰も来やしない。交番の奥に配置されているテーブルで書類仕事を堂々としているお巡りさんの前で、ひたすらゲームをやるだけの時間をずっと過ごしていた。

「やいばちゃん」

手を止めて、お巡りさんが話し掛けて来た。

「流石にそろそろいい時間だから寝たら？」

「あ、はい。寝ます」

正直ヤバいくらいに眠たかったので有り難い提案だ。どうせ来ないし、ある意味安心して寝れる。それに、もう交番で過ごして4時間は経過している。雰囲気にも慣れたものだ。

「あ、トイレ…」

「トイレはそこにあるよ」

「あ、はい」

そうじゃない。けどこんな言えるわけがない。お巡りさんに不審に思われないように、俺はトイレ前まで行き、深呼吸する。

よし。

難しかった。何がとは言わないけど、結局見ちやつた。はあく。なんか謎の悲しみが強まった気がするな。

お巡りさんが用意してくれていたお布団に入り、瞼を閉じる。いつもならここから数分くらい妄想したりして眠りに着くのだが、今日は色々あったせいですぐに眠れた。

「やいばちゃん」

ゆすゆすと体を揺さぶられ、俺は目を覚ました。あれ？ここどこ…？だれ？

「もう10時だよ」

「遅刻するー」

お巡りさんの言葉で一気に覚醒した俺は、すぐに昨日のことを思い

出した。つーか遅刻も何もなかったわ。ヤバいくらい焦ったけど良かった。

そうやって胸を撫でおろしている俺を見て、お巡りさんは苦笑しながら、

「遅刻って。それより、朝ごはんは食べるかい？」

「あ、ください」

図々しい気がしたが、お腹は空いているので好意に甘えるところ。前に出されたメロンパンをかじり、お巡りさんの話を聞く。

「さて、ここまで誰も迎えに来てないから、ちよつと質問してもいいかな」

「？はい」

優しい顔のまま、お巡りさんはこう尋ねた。

「もしかしてだけど、君は路地裏で目覚めたりしていないかい？」

「…はい」

驚きはしたが、ここで取り繕う必要性も感じなかったので、頷く。

「うん。分かった。実はね、君と同じような人が、最近多いんだ。記憶があんまり無くて、路地裏で目が覚めたって言う人がね。一人や二人じゃなくて、十人、二十人ほどにもものぼるから、一度政府の方針で一箇所を集められているんだ」

驚いた。俺のような人が沢山いる。実際の所は分からないが、全員俺と同じ転生者かもしれない。

「確実に判別できる方法があるらしくてね、もしそういう子がいたら、任意ではあるけど、半強制的に連れてきて欲しいと言われているんだ」

「でもそれ、違ったらどうするんですか…？」

「大丈夫だよ。その時は普通の迷子の対応になるだけだから、ちよつと面倒になっただけだけど、やいばちゃんの負担になることはないよ」

まあ違うことなんて無いと思うんだけど、もしもがあるからね。ちゃんと生きていけるみたいで安心だ。

「分かりました。いつ行くんですか？」

「交代の人が来るまでかな。あとー10時間くらいだね。暇だと思うからまたゲームする?」

「え、お巡りさん昨日も働いていたんですね…? 何時間働くんですか?」

「君は気にしなくていいよ」

なに? この世界の警察ってウルトラブラックなの?

なんかもう色々とヤバいんですけど！

なんかもう色々とヤバいんですけど！

お巡りさんのお仕事が終わわり、俺が連れてこられたのは、少し大きめの一軒家だった。住宅地に完全に同化しているため、お巡りさんがピンポンを押したときはびっくりした。

そして、出迎えてきたのはスーツに身を包み、モノクルメガネをつけたおじいさん。少し厳つい顔で、身長がお巡りさんより頭一つ分高いので、少し怖い。

「報告にあつたやいばさんですね。こちらへどうぞ」

おじいさんについていこうとするが、お巡りさんは敬礼をしたまま動かない。え、これ一人で行くの？

「——担当者もついてきてください」

それを見兼ねたのか、おじいさんがそう言うと、お巡りさんは敬礼をやめて俺の後ろについた。ちよつとだけホツとした。

案内された部屋は、ごく普通の生活感満載の家だった。こんな場所でなにかするのかと思えば、おじいさんは壁に手を当てた。それと同じに、壁が開き地下への階段が現れる。

そして、ついてくるようにと手で示しながらおじいさんは階段を降りていった。

…なぐに平然とヤバいことしてるんだよ。こちとら中身は男でも体は女の子だぞ。しかも美少女。しかも平然と隠し部屋みたいなもの開けるなよ。なに？不安がヤバいくらい募るんだけど。

そんな感じで立ち尽くしていると、お巡りさんが背中を押しながら優しい声音で、

「大丈夫だよ。あの人は悪い人じゃないし、もしもがあつても、お巡りさんがいるから」

と、言ってくれた。いやまあ、どれだけ拒否しようへ行かない選択肢はなさそうだし、あきらめ…お巡りさんを信じるとしよう。

階段をしばらく下ると、踊り場があり、そこに扉があつた。まだまだ階段は続いているようだが、そこに入っていくようだ。

その部屋は、いかにもシンプルといった感じであり、中央に大きめの機械があるだけで、他にはなにもない簡素な部屋だった。

「ここに手を当ててくれ」

言われるがままに手を置いた。瞬間、俺の手は拘束される。

「え？なにになに何なんですか!?!」

「ちよっ?!何してるんですか!?!」

お巡りさんも俺も、突然のことに驚いてしまう。でも、おじいさんは表情を動かさずに、お巡りさんを手で制した。

「これは素質のある人を区別する装置です。少しチクツとするかも知れませんが、我慢してください」

え…チクツとする…?

装置の方を見れば、ニューッと針が俺の手に向かって伸びている。

「え？やだ！助けて！」

暴れてみるが、一切意味はないようで、針はゆっくりと私の手に近づいてくる。

怖い怖い怖い！なんで針が刺さる様子をゆっくりと見せられないといけないんだよ！注射とかならまだしも機械とか信用できるわけではないじゃん！

「あー！針が!!!」

きつと、外から見たら俺の顔は蒼白になっていることだろう。というかやばい。怖すぎて涙が…。

ブスツ。

「あぎやあー！」

…ぶつ刺さったよ。ぶつ刺さったじゃねえか！おい嘘ついたなあ？ジジイよお！

怒りに震えていると、針が抜けたあとに私の手が解放された。小さな穴から出てきた血が、地面にポタポタと落ちていつている。

「大丈夫かい？やいばちゃん！」

駆け寄ってきてくれたお巡りさんが、消毒と絆創膏を貼ってくれた。よく見たら絆創膏は女兒アニメのキャラが載っている可愛らしいものだ。気遣いは素晴らしいが、何故そんなのを持っているのか、

そして、俺にとっては余計なお世話感が強い。

「…ふむ。やいばさん。貴方には素質があるようですね。では、やいばさんは私の方で預かるということ。お疲れ様でした。ゆっくりと休んでください」

後半の言葉はおまわりさんに向けられたものだろう。お巡りさんは敬礼を一度返すと帰ってしまった。

「それでは行きますよ」

おじいさんは階段を降り始める。すぐく反抗したい気持ちがあるが、俺は大人なので抑えて、ついていく。

「この先には貴方と同じように素質を持つ人間がいます。我々は貴方達の衣食住を保証する代わりに働いてもらいます。まあ、詳しい説明は、後で教官に聞いてください」

え？教官？軍隊かなにか？

「つきましたね。それでは、私はここで」

おじいさんは扉を開けると、引き返して階段を登って行ってしまった。でも、そんなことはどうでも良かった。

扉の先には、人がいた。子供から大人まで、多くの人が笑って過ごしていた。でも、おじいさんではなく、俺が前に出た瞬間、全員がジッと俺を見つめ始めた。

見定めるような、じつとりとした目。俺は静かに扉を閉めた。

気まず過ぎてやばい

……気まず過ぎてやばい。

なんで俺扉閉めちやっただろ。もう開けれないよ。

「うわあ〜」

「入っていいよ」

「あぎやつ〜」

地面に座り込もうとしたら、突然飛び込んできた光と声に心臓が跳ねてしまった。死にかけてるんかってぐらいドキドキしててやばい。

「え、あつ」

「……？」

ヤバい！キヨドリ過ぎてて向こうの子首傾げちやつた！つかなんだこの子！むっちゃ可愛い！透き通るような青い目に無気力そうな顔！服装とか髪見る限り男の子だけど、めっちゃいい！

「ちよつと隊長。どうしたんですか」

その子に続くように背の高い爽やかイケメン君が俺の方に来た。

これは陽キヤの匂いにする。敵だな（確信）

「さあ？喋らない」

「んー？あ、新入りかな？ねえねえ君。可愛い…間違えた。なんか嚴つめの老人に連れられてきた？」

ずいっと顔を近づけながら、爽やかイケメン君は尋ねてくる。それにしてもこいつなんて言おうとした？

「えつと、はい」

「うん。新入りだね。入りなよ。ここでの暮らしと皆を紹介するか
ら」

隊長と呼ばれる男の子と爽やかイケメン君について行って、私は
やつとその部屋へと入った。

「…集合」

「集合ー!!!」

隊長くんと爽やかイケメン君の掛け声に、散らばっていた人たちが

集合する。大体10人くらい。そして集まるとすぐに俺に目線が集まるので、隊長くんを盾にする。：いや、流石にそれは駄目だな。外面女の子だとしても中身成人男性だぞ。爽やかイケメン君は敵だし、耐えるか。

「はい注目！新入りが来たぞー！説明とかは俺等がやつとくから、困ってたら助けてやってやれ。でだ。自己紹介。どうぞ！」

突然そう振られ、

「あ、あ、はい！竹本やいばですっ！」

「おお〜元気いっぱいだね〜！じゃ、お前ら仲良くしろよ〜」

「しろよ」

「は〜い〜」

小さな子達が元気よく返事をし、集まっていた人たちは散り散りになった。しかし、大声というのはいつかからこんなにも恥ずかしくなってしまったのだろう。爽やかイケメン君め。

「じゃあまずは、俺達は何なのかを話しますか！俺達は、特異魔法を使用する人を逮捕する、いわば警察さ！」

なるほどなるほど。：分かるわけねえだろ。

「あの、特異魔法ってなんですか？それと、魔法自体よく分かってないんですけど」

「まあまあ焦らない焦らない。まずね、魔法について話そうか。魔法っていうのはね、簡単に言うとな体内にある魔力ってのを使って、火とか水とかを出せる現象のことを言うんだ。限界はあるけど、才能によつては、結構色んなことが出来るから、警戒は怠らないように！」
ほむほむ。魔力ねえ。ハッ。今の俺の体にはあのお姉さんの魔力が…？

……………きつつつつしよ。そんなこと考える自分に寒けがする。

「え、突然青ざめてどうしたの」

「なんでもないです。じゃあ特異魔法ってのは？」

「特異魔法ってのはね。明らかに普通じゃない魔法のことを言うん

だ。魔法なのか特異魔法なのかっていうのは、慣れれば分かるけど、はじめらへんは一部のやつは分かんないかも」

「そもそも魔法が分からないので分かりようがない気がします」
そう言うと、爽やかイケメン君は笑いながら一人の女の子を呼んだ。

「こいつを見てろよ？たのむぞ。聡太」

「はいっ！」

掛け声と同時に、聡太と言われた女の子は、ガチムチお兄さんになつた。

「あああああああ?!?!?!」

そして、ガチムチお兄さんは俺の様子を見て笑うと、俺になつた。

「キヤハハハ!!!」

ガチムチお兄さんとは似ても似つかない俺の声で笑う俺。変な気分だ。そう考えていると、目の前にいる俺は俺の方に走ってきた。っーか自分でも何言ってるのか分かんねえ。

「えいっ！」

飛び掛かれて、なされるがままにぐるぐると抱きついたまま回る。うっ。気持ち悪い……。

やっと回転が止まり、酔が覚めてから俺が横を見ると、超絶美少女が無表情で横にいた。俺の顔ではあるが、俺の顔はまだ二回目なのでドキツとしてしまう。

「…どっちっ」

隊長君が首を傾げている。ってそうか、この子、今いたずらしてるのか。黙って俺に成り切って、混乱させていると見た。

「分かってるぞっ？こっち」

爽やかイケメン君が抱きかかえたのは、聡太の方の俺。

間違ってますか??

特異魔法って、やばくね？

特異魔法って、やばくね？

目の前で場をめちゃくちゃに荒らし回っていた聡太君は隊長君に捕えられて大人しくなった。ちなみに今は普通の男の子になってる。「まあこんな感じで、特異魔法ってのは予想もできないようなことをやってのける、そんな存在なんだ。この聡太の特異魔法は自分の想像した姿になれる。回数は無制限、性別も体の作りも関係ない。しかも変化は一瞬。こいつと鬼ごっこしたら、多分一生捕まえないよ」え、そう聞くとヤバいな。

「へー凄いですね。でも、言っつてよかったですか？」

なんとというか、能力は秘匿すべきというイメージがある。

「まあ、知られたところで関係ないし、君は仲間だ。仲間が出来ることはしっかり把握しないと駄目だからな」

まあ確かに、この特異魔法は知つてようと意味は無さそうだ。たとえ知つていたとしても、人混みに入られれば終わり。もし犯罪を犯して、追われることになっても、捕まえるのは難しいというか不可能なのでは？

「えつと、じゃあ……隊長さんと爽やかイケメンさんはどんな特異魔法が使えるんですか？」

「ブフツッ！」

よく考えれば名前を聞いていないので、自分の心の中で呼んでいた呼び方をする。その呼び方……おそらく爽やかイケメンの方を余程気に入ったのか聡太君が笑い転げている。

「……名前教えてなかった俺が悪いか……」

「……いいと思うぞ」

「あはっはっはっ」

何を勘違いしたのか、落ち込んでいる爽やかイケメン君に隊長君がめげない慰めをしている。それも、聡太君にはお気に召したようで、過呼吸かってぐらい笑ってる。

「隊長く違いますよ。そうじゃないです。まあいいや。俺の名前は

爽。あのアイスと同じ名前。副隊長だから、そっちで呼んでいいよ」
え、あのアイスこつちにもあるのか。食べないと。じゃなくて、爽
やかイケメン君は爽か。爽やかイケメン君だけに分かりやすい。

「空斗」

隊長君は空斗君か。関連付けて覚えられ無さそうだけど、まあ、隊
長君で伝わるからいいや。

「で、俺の特異魔法だけど。ちよつと微妙なんだよね。あー、じゃんけ
んしよつか。さーいしよーはグー。じゃーんケーンぽん！」

「え、あ、ぽん！」

俺はグーで向こうはパー

「もっかい」

そこから十回以上やったが、全部負けた。嘘やん。

「まあこんな感じで、俺はちよつとだけ先の未来が見えるんだ」

…くつそチートじゃねえか。

「そ、そうなんです。じゃあ隊長さんは？」

「不老不死」

…ん？

「あー分かるわかる。思考止まっちゃうよね。でもね、隊長はこの中
で最年長だから、頼るといいよ」

「…マジですか」

隊長の見た目が幼いから、隊長と呼ばれているのはごっこ遊びかな
にかだと思っていた。

「それじゃあやいばちゃんの特異魔法なんだけど…どう？何か他の人
と違うところとかない？」

「え、いや、分からないです。その、突然違うところとか言われても…」
咄嗟にそう言ってしまったが、前は男で、こことは違う世界にいた

というのはその違うところに入ったたりするのだろうか。

「あー。そうだったそうだった。君もだろうから言っちゃうと、ここ
には転生者しかいない」

……え？

「基本的に特異魔法ってのは転生特典？って考えてもらえばいい。中

には転生前と同じ事ができたり、逆に出来なかったことが出来るようになったりで、様々だよ」

「え、あ、それじゃあ」

「ちなみに、転生前のことを聞くのはタブー。人には色々あるだろうし、コンプレックスに感じている人もいるからね。あと、ついでに言うと、転生前の世界はだいたい違うよ」

「…はい。じゃあ、どうやってこんなに集めたんですか？」

俺は路地裏にいたところをたまたまお姉さんに拾われたからここにいる。皆がみんなそんな都合よく行くわけがない。

「たまたまだよ」

「たまたま？」

「そう。全くの偶然。たまたまこの人達が目立っていたから、保護できたんだ。君も、その髪色で記憶がないなんて普通じゃないでしょ？」

「でも、それが理由ならそうじゃない人は？」

目立たない人だっている。普通に生きれる人だっているはずだ。「そういう人達の中で、何か他人に被害が及ぶようなことをしたら、逮捕するのが、この組織の目的。特異魔法はものによっては周りに重大な被害を及ぼすから、ちゃんと制御できるようにして、それを別のなにかに役立ててもらって、罪を償わせるんだ。多くは無意識にくとかだったりするから何とかなるけど、意識的にやってたら場合によっては、ね」

まあ、そういうような人はたとえ力が無くても似たようなことをしている気がする。

「じゃあ早速仕事に行こっか！いわゆる研修！聡太と俺と隊長も一緒に行くから、安心してね！」

「せめてある程度の身を守る訓練ぐらいはやらせて欲しいです」

「そんなの後々！さあ行くよ！」

後々じゃねーよ！

危なくてヤバイ

危なくてヤバイ。

語彙力が喪失してしまうほどに、目の前の風景は恐ろしかった。闇に閉ざされた夜の世界が2秒に1回のペースで照らされている。原因は、

ゴロゴロガツシャーン。

そう、雷だ。当たれば最悪死に至る雷が、雨でもないのにハイペースで降り注いでいる。こんなにヤバイのに。

「ねえ！辞めましょうよ!!」

「ほらほら、やいばは…だから、がま…なさい」

「聞こえませんか!?!」

雷の音で全く聞き取れない。というか今呼び捨てで読んでいたよな？俺、そんなの許可してないんだけど。

ってああ！隊長進んでる！ついてかないと…いやでもなあ。

「ほら行くよ!」

「えちよっ」

いつの間にか近付いてきていた爽さんに手を引かれ、無理矢理雷の雨が降る街へ連れてかれた。

「ひゃいっ!」

数メートル先に雷が落ちる。爆音に耳がキンキンして涙が出てくる。

「だから大丈夫だって。この雷特異魔法によるものだし、たとえ当てるこようとしても避けれるから」

緊張のかけらも感じさせない爽さんがにこにこことそう言うけど、そもそも雷は家の中にいたって怖いんだから大丈夫なわけない。

「そういう問題じゃないです!」

「ほらほらくやいばちゃんも気楽にさ〜」

聡太君までそんなことを!

「…いた」

「何がですか!」

「元凶」

唐突な接敵！隊長の視線を追うと、確かに、こんなに雷が降っているのにも関わらず、ビルの上に人影がある。

「行こう」

隊長に続き、爽さんも聡太君もビルへ入っていく。敵の本拠地に入るには躊躇なさ過ぎないかと思っただが、雷を使えるなら室内のほうが一番安全なので普通について行った。

ピカッ

「ひゃいっ！」

「ビビりすぎ」

「怖がりだねえ〜」

「なんでそんなに動じてないんですかっ！」

「静かに」

「…ごめんなさい」

怒られた。

途中からバレないように口を聡太君に押しさえられながら、ビルの屋上前の扉まで辿り着いた。

「うん。隊長、この先ですよ」

「分かった」

そのまま、隊長は扉を開けようとする。

「ちよ、ちよつと待って下さい！作戦とかないんですか？」

「ない」

「隊長が頑張るだけだよ」

The 脳筋じゃねえか。

「副隊長はともかく、僕もやいばちゃんもそんなに戦えないし〜」

「じゃ、そういう事で」

そうして、本当に一人で敵が居るであろう屋上に踏み込んでいった。扉は開けられたまま、俺の見学の為だろうけど、ここに攻撃でも飛ばされたらどうす——

爽さんがいるから関係ないのか。

絶対死なないんだから、余程のことがない限り隊長は負けないだろうし、もしかして結構良かったりするのかな？

そう思った数秒後、首根つこをギュツと引っ張られると、俺がいた位置を雷が通って行った。

絶対雷の挙動じゃねえ！

難易度ヤバイわ

難易度ヤバイわ。

隊長の戦いぶりを見るに、相手の使える攻撃は雷のみみたいだ。と言っても、その雷は自然に起こる雷と同速で、空から、手から、体から、多彩な攻撃をしてきている。

ちなみに、実際その様子を見ているのは聡太君で爽さんが時々首を引っ張っている。俺？俺は角で震えてるよ。俺女の子だもん。

…うん。

「あつ、隊長勝った」

「嘘でしょ!?!」

聡太君が言ってきた情報だけで考えると、ただ死なないだけの隊長は麻痺したり何なりで近付くことすら敵わないと思っていたのだが、隊長は思った以上に強いらしい。

あんな可愛い顔して…

「ほら、やいばちゃんも行くよ」

どうやら、今回の犯人が気絶しているので、皆で運ぶらしい。非戦闘員の俺が運ぶのが一番良いと言われれば、反論なんてできない。

見に行ってみれば、犯人というのは幼い少女だった。俺と同じくらい、つまりは15歳くらいだ。こんな少女がこんなことをしでかすとは。特異魔法ってヤバイわ。

「じゃあお願いね」

「僕も手伝おうか?」

「聡太君に手伝ってもらわなくても大丈夫です。よっころしよよおのおお!!」

前世の感覚で運ぼうとして…ビターンと俺は倒れ込んだ。

痛い!この子の分重さが増したせいでめちやくちや痛い!

「何やってるの?」

呆れの言葉とともに、俺ごと少女が持ち上げられた。

「かつるいね。ちゃんと食べてる?」

聡太君が持ち上げてくれた。身長は同じくらい…そう言えば聡太

君の本当の姿はこれなのか？違って、ホントはムキムキマッチョマンならこんな力持ちなのも納得できる。

「ん。じゃあ行きますか——聡太！今すぐその雷女を落として走れ！」

「了解！行くよっ！」

「えっ？—ゲフツ」

抱えられた私の目の前に、水が降ってきた。ドバっと、ビルを覆うくらいの水の塊からバケツ1杯分くらいの水が。

「走れ走れ走れ!!!」

水の塊は俺達を追うように移動し、水を降らせてくる。当たったとしても無害そうに見えるが、一度当たって足をとられでもしたら、一瞬で水に埋め尽くされてしまう程の速度と頻度で降ってくる。

「ちよっただけかかっていま、ゲホツゲホツ」

「喋らないほうがいいぞー！」

そうして走り続けてはや数十分。現場から何キロも離れたところでやっとそれは止まってくれた。俺は、疲れ果てた聡太君に地面に投げ捨てられる。

「ゲフウ」

「はあ、はあ、はあっ。何だったんだあれ…」

「聡太？」

「知らないですう…オエツ」

俺の扱いに文句が言いたかったが、どう考えても俺は楽をしている立場なので、ずっと地面で蹲っていた。

この人たちの体力ヤバすぎい

この人たちの体力ヤバすぎい。

あんなに息を切らしていた聡太君も爽さんも、気づいた時にはなんともないような顔で歩き始めていた。

そもそもあの距離を走り切るなんて前世の俺ですら無理だ。だといふのにここにいる人たちは走り切った。隊長に至っては息すら切らしていない。隊長の特異魔法本当に不死だけ？

「まあ、雷も水もいつかは捕まえないといけないけど、やいばちゃんには見せたいものは見せられたかな」

「見せたいもの…？」

「だから、特異魔法の恐ろしさだよ。雷も水も、死にそうだって思ったよね？」

確かに、あのときは何がなんだか分からなかったし、自分以外はそれ程脅威に思っていないように余裕そうだったため、恐怖に足が竦むなんてことは無かった。でも、もしあの場で一人なら、何度死んでいただろうか。横殴りに飛んでくる雷、溺れさせようと襲い掛かって来る水。思い返せば、遅れて恐怖が湧き上がってくる。

コクコクと頷くと、満足したように爽さんは頷いた。

「こういうことをしておくよね、訓練に身が入るんだよ。知らなかったら、これまでの生活との違いであまり身が入ら無かったりするからね」

なるほど、確かに俺とかは現代日本で普通に過ごしていただけの一般人なのだから、こういう経験がなければダイエットみたいにサボりがちになるかも知れない。

そう考えながら帰路を辿っていると、隊長が口を開いた。

「…爽。今回の犯人は」

「放置でも大丈夫そうですね。また何かするなら駄目ですけど」「分かった」

そんなことを勝手に決めていいのだろうか、そうは思ったが、考えたって仕方ない。経験が違うのだ。あの人達にはあの人達なりの考

え方があるのだろうか。

そうこうしていると、家についた。厳ついおじいさんが出迎えて、長い階段を降りて地下へ行く。

「じゃあ今日はもう休もうか。聡太、案内してあげて」

「はいよ〜」

気が付けば見たことのない女の子になっていた聡太君はゆる〜く返事を返し、俺の手を掴んできた。

「ごつちだよ〜」

「なんで変えてるんですか?」

「ん?なんとなくだよ〜」

どうやらこの人は意味もなく変身する癖があるらしい。めんどくさっ。用事があるときどうしようもないじゃん。いや、名前叫べばいいか。

「はい。ここが部屋」

「え、個室あるんですか」

「うん。ゆつくりしていつてね」

どっかのおまんじゅうみたいな一言を残して、聡太君は去っていった。

与えられた部屋は、安いアパートくらいの広さだが、一人ならこれで十分だ。ベッドはなく、布団だが、この狭さなら布団のほうがいいのだろう。

畳んであった布団を広げて、早速目を瞑った。瞬間、頭には昨日から今日にかけて、まさに非日常とも言える時間が駆け巡った。

「色々あった」

本当に、そうとしか表せない。爽さんのことを考えても、これは転生なのだろう。俺は死んだ。そして、私になった。

一人称とか、今は敬語だけど喋り方とか、変えたほうが良いのだろうか。ま、なにか言われたら考えよう。

それよりも、特異魔法。俺にとっては魔法もそうだが、理不尽の押し付けとも言える。自然現象ですら操れる、ふざけた力。そんなものが俺にあると言われても、しつくりとこない。魔法ですら、俺は使え

るのだろうか。分からない、分からないが、少なくとも、これだけは分かる。

俺は弱い。

秋名さんの口ぶりからして、魔法が使えることが普通の世界で、俺は魔法を使えない。力も前世と比べて相当落ちている。そんな状態では、街ですらまともに歩けなさそうだ。だからこそ、訓練には身を入れないと、死んでしまう。

せっかく拾った命だ。無駄にはしたくない。

「よし」

俺は、決意を固めた。

訓練メニュー、ヤバすぎるわ

訓練メニューヤバすぎるわ。

「ほらほら、足止まってるー」

「はあっはあい！」

グラウンド30しゆうめえええ…。おがじいよお。これアップじゃねえよおおうつ。

ベタツ。

「だから言っただろ？中級はまだ早いって。止めたのにさー」

「ぜったいいちゆうぎゆうじやないでしょお。これおとなでも無理ですよー！」

訓練メニューは初級（小学生以下レベル）中級（大人以下）上級（限界を越えろ！）がある。小学生ではないと思って中級選んだらこれだよ。死にそう。

「まあ、もう無理そうだな。今は隊長達が昨日お前が行った場所でボランティアしているはずだからそこ行ってこい」

「はあ、はーい」

教官と呼ばれる、訓練の先生にそう言われ、俺は体が動くようになってからそこへ向かった。

「お、やっぱり来たな」

隊長達と合流すると、爽さんに早速失礼なことを言われた。

「むう。でも厳しいですよあれ。何が大人用ですか？」

「ちゃんと警告してくれてただろ？意地張ったお前が悪い」

爽の正論。やいばは心にダメージを受けた！

「やいば。今回は配給と荷物運びがあるけど、どうする？」

「配給をお願いします」

もう俺の体はぼろぼろなんだよ。秋名さんに癒やされたい…。そうして引き受けた配給だったが、まあまあこれも辛かった。今回の雷事件。規模がかなり大きかったみたいで、かなりの数の人が物資を受

け取りに来ていた。

量は足りているみたいだが、人手が圧倒的に足りない。すべての場所に長蛇の列が出来るみたいだ。いや、これもっと改善しろよ。人手呼べるだろ。隊長さんよお。

そういう事を聡太君に愚痴ると、トレーニング！って言われた。はあ…。

とにかく、結構な広さから人が来たので、色々な人を見かけた。普通の主婦さんとか、元気な男の子とか、色々、中にはシャイなのか分からないけど、深くフードを被った子も来た。喋ろうとすらしなかったが、隣の女の子、兄妹？っぽい子が代わりに話してくれたので、事なきを得たりもした。

そして、日もくれた頃…

「終わったああ!!!」

お疲れ様でしたと、他のボランティアさんと挨拶を交わしたあと、皆で帰りながら大きく伸びをした。

「あはは。お疲れ様。やいば」

「…全然疲れてなさそうですね」

「そりやまあ」

本当に体力バカだなあ。

「爽」

「分かっていますよ。大丈夫です」

「？」

「ああ。気にしなくていいよ。今日の夕飯の話だから」

なんだ。それなら…

「タンパク質多めがいいです」

「はいはい」

今日は頑張った。今から夕飯が楽しみだ。

そして出てきたのは、豆料理が主体のメニュー。

…肉が！食べたかった！

ヤバい！筋肉が…悲鳴をあげているっ！

ヤバい！筋肉が…悲鳴をあげているっ！

「アガあー！」

この見た目からは信じられないような声が出るが、個室なので誰も気にするものはいない。そんなことよりも筋肉痛が酷すぎる。何だこれ。動けん。何をしようにも痛みが走る。しかしこのままでは…
ぐう~~~~~

腹が、減った。

「ふう〜」

行くぞ。

「はアッ！アアアアアアアアアア!!!」

筋肉痛↓叫ぶ↓腹筋が死ぬのコンボが！グアアアア。

しかし、立ち上がったのは事実だ。このまま、食堂まで…！扉を開け、痛みながら進む。

「きゃー!!」

追い掛けっこしている子供たちがこちらへ向かってきている。俺がいるような部屋は幼い子供には与えられず、少し広い大広間的な場所ので教官と一緒に寝ている。おかげで友達ができるのも早く、よく遊んでいるらしい。確かに昨日もそんなことをしていた。

じゃなくて

「よけ、ないと…」

ドンッ

ベタッ

「あ、ごめんなさい。大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。気をつけてね」

「いこーぜー！」

「きゃあああー!!!」

ドタドタと足音が遠くへ行く。叫び声が聞こえなくなったところで…

「ぐあああ!!」

しかもここから立ち上がるなんて…！無理！

「え、何やってんの？」

目の前には俺の姿をした女の子がいる。聡太君だ。

「助けて…筋肉痛が…!!!」

聡太君はしやがみ込み、俺の体をつつき始める。

「ふぐうー！」

「つふふふふふ」

「ごろずうー！ごいづはごろぎないとだめだあ

!!!!!!

「はあく。よつと」

一通り笑うと、聡太君の手から光が出てくる。俺の体を一周すると、俺の痛みがフワツと軽くなった。

「はい。じゃあ行くかうか」

「聡太君！」

救世主である。痛みを弱めてくれただけでなく、肩もかしてくれりなんて!!

そうして、俺は何とか食堂へ辿り着き、美味しい朝食を食べたのだった。うまあく。

「…それでは、まずは魔法についてだがー」

今回、筋肉痛が酷いと相談すると、魔法の練習をしたらいいと言われた。魔法！魅力たっぷりなその言葉に俺は即答し、今、講義を受けているわけである。周りは様々な年代の人がいるが、どっちかという体力のなさそうな人達が集まっている。なるほど、これなら俺も浮かないだろう。

どうやら、魔法というのは体内と外にある魔力を使い、あらゆる現象を起こすというものらしい。普通の人は出来ることに限りがあるのだが、たまにとんでもないことを起こすことが出来る人がいて、そんな魔法を特異魔法と言うらしい。

「まあ、お前ら全員使えるはずだ。一般人では稀だが、転生者は例外なく使えている。しかしな、隊長のように常に発動するものもあれば、しないものもある。気付けるものもあれば気づけないものもある。

特異魔法っていうのは、分からないことが多いんだ。というわけで、今回は、いや、これからは、魔法というのは普通のしか教えられないから、特異魔法は個人でやっておくように」

ほほうほうほう。なるほどなあど頷いてみると、魔法の説明が始まった。

魔法には属性とか、そういうのはなく、完全に才能と努力の問題らしい。しかし、どれだけ才能がなくとも、努力すればある程度の実力までに行けるらしい。そんな言葉から始まった実技。前に立ったのは――

教官だった。

なんで？この人違うでしょ？

「はい。疑問を浮かべてそんな顔のやつがいるが、魔法ならこいつに教えてもらうのが一番でつとり早いからな。じゃあ頼むわ〜」

「はあく。お前言葉でも教えられるようになれよ。――よし。じゃあ行くぞ。今から、何があっても慌てるなよ」

?不穏な言葉が繰り出されたかと思いきや、俺の体が勝手に動いた。
(?!?!?)

視線を巡らせると、他の人も皆、教官も含めて全く同じタイミングで手を上げている。

(なにになになに?!?!?)
「行くぞ。魔力弾」

そう言い切ると同時に、俺の体の中から、何かが手のひらに流れていった。それは手の上で形を作り、球となって真っ直ぐに飛んでいった。

それはすぐに蒸散したが、言葉を失ってしまうほど、不思議な感覚で、沸々と、感動が湧き上がってきた。

気がつけば体は自由に動き、教官は疲れたというように汗を拭いた。

「はいはい。今のが魔法だよ。感覚を忘れないうちに、さっさと練習しなさい」

教官がしたこと疑問はあったが、そんなことよりも魔法への興奮

が勝ち、何度も何度も、倒れ込む直前まで練習してしまった。

「うぶ。気持ち悪い…」

「あのね、止めたんだからさっさとやめなさいよ」

「ごめんなさい…」

教授（さっきまで授業をしていた人）に抱えられ、俺は何とか自室に戻った。

気持ち悪さに苦しみながらも、その日は興奮が収まることは無かった。

この世界、やばいよ、楽しい！

この世界、やばいよ、楽しい！

魔法という存在をこの身体で実感してから、訓練に対する物凄くモチベーションが上がった。肉体的な方でも、ちよつとずつ体力がついていくのは楽しいし、何より身体能力をあげる魔法を使った時の爽快感がやばい。

地面を蹴れば、だいたい2倍くらいの力が出る。その代わり通常の2倍くらい疲れるけど、どうでもいいくらい気持ちがいい。

それに、魔法とかもちよつとずつだが上達出来ていて楽しいのだ。速度とか威力とか、本当に少しずつ上がっている。まだ火とか水とか特殊なのは出来ないけど、いつかは出来るんだと思うとわくわくが止まらない。

とまあ、結局は魔法最高という感じだ。最近では、まだ復興しきっていないあの都市のボランテアや、ちよつとした買い物などのついでに、街を散策するのもハマっている。

この世界。科学は俺の前世と同じくらい進んでいて、そこに魔法が付け足されているので、前世の上位互換的な感じだ。周りを見ると、高層ビルやマンションが並ぶその横に、文字が浮かんでいたり、空中をジェット機とかついでにないのにふよふよと物が浮いていたりとても面白い。

というわけで、今も絶賛街を散策中である。ボランテアにも慣れたもので、いつもより1時間も早く終えられた。そこを隊長達に頼み込んで、自由時間をもらったのだ。

「おっーまたあの龍だー！」

ビルの間を赤い炎と青い炎でできた龍がくねくねと飛び回っている。ビルの横を沿うように動いたと思えば、高く高く飛び上がり、急降下して地面スレスレにまで落ちてきている。危なくないのかと思ったりはするが、流石に安全性は考慮していたのか、その道路には一時的な封鎖がかかっていた。

「こんなの、出来る気がしないな」

魔法という存在が使える今でも、いや、今だからこそ信じられない。練度も、魔力も、俺とは掛け離れているのだろう。

周りでは、俺と同じようにそのパフォーマンスに魅せられる人が沢山いた。スマホを掲げているあたり、この世界でもSNSは変わらならしい。

一通り見て、満足した俺は道を歩く。お金は無いので見ることも出来ないが、それでも、見たこともないような物があって、なかなか楽しい。特にこれ、魔道具。

俺の前世の家電と同じ事が出来る魔法を魔力を込めるだけで使えるという物だ。サイズはとても小さく、手のひらサイズで、これをお皿の上に掲げて魔力を流すとお皿がキレイになるらしい。

まあ、これがあるからと言って、家電の価値が下がるわけではない。お皿を洗うだけと言っても、魔力は使うため、飲食店では当然魔力が足りない。だからこそ、電気に頼るしかないのだ。この製品は、四人ぐらいが限度だろう。

そんな感じで、様々な商品を見て楽しんだのも束の間、夕暮れを告げるチャイムが鳴った。ここから拠点まではまあまあ遠いので、体に魔力を纏わせて走ろうとする。そこで違和感に気づいた。

「あれ？こっちじゃなくね？」

なぜかわざわざ遠回りして帰ろうとしていたらしい。すぐに体の向きを変えて、拠点の方に走り始める。そして、

気づいたときには、俺の周りは静寂に包まれていた。人は俺を除けば一人もおらず、車の音も、人の喧騒も聞こえない。ただただ、変わり続ける信号と風の音が時間が止まっていなことを伝えてくれている。

突然の異常に、俺の背中を汗がったった。

静かな空間って、ヤバいね。怖い。

静かな空間ってヤバいね。怖い。

何処かに逃げ出したい衝動に駆られるが、突然の悲鳴に、それは叶わなかった。

「いやああああああああ!!!」

どこまでも静かな空間に、その悲鳴は響き渡った。場所は、すぐ近く。多分、あそこの角を曲がれば、悲鳴の主がいるはずだ。

「どうする」

俺はまだ一般人にすら敵わない。だというのに助けに行くなんて、犠牲者を増やすだけなのではないだろうか。そうは思いながら、俺の足はそっちへ向かっていった。

なんてことはない。多分それでもこの空間で一人が嫌だったんだと思う。震える足を押さえながら、顔だけ出して状況を確認する。

そこには、屈強な男と、年齢は同じくらいの、小さな女の子が対峙していた。悲鳴の主はきつとあの子で、まだ何もされていないようだが、時間の問題だろう。証拠に、男の顔は醜く歪んでいた。

身体能力を上げる魔法は、ずっとかけたままで、多分この距離なら俺レベルでも不意はつけるはずだ。しかも、拠点はそこそこ近い。

やるしかない。ここで俺が逃げれば、あの子はどうなる。いや、違うな。今、俺が一番恐れているのは、逃げて、後悔に吞まれてしまうことだ。

人を見殺しにした。それは脳の奥底に根をはって、一生忘れることなんて出来ないはずだ。

「行ける」

小さく、己を鼓舞するように呟く。

少女は、近づいてくる男の手に、覚悟を決めたかのように目を瞑る。それを見て、男は笑みを深めた。

——— 今だ。

「ああああああ!!!」

固く握り締めた拳を、助走のスピードを載せたままぶち当てる。

「がつ」

間拔けな声が出て、男が少し後ずさった。すぐに少女の手を掴み、走り出す。少女も、足をもつれさせながら着いてきている。

「なっ……。マテやゴリアアアア!!!」

怒りに染まった声に、心が震え上がる。それでも、足は止めない。

「走れ、走れ、走れ、走れ、走れ」

それだけを考えて、地面を駆ける。そうして、曲がり角を曲がった瞬間、炎が後ろに迫っているのが見えた。

魔法持ち。それなら、ここから最短のルートは直線なため、魔法的となってしまう。幸いにも今はブロック塀によって、向こうからは死角となっているから大丈夫だが、ここを超えられれば終わりで、それまでに拠点につけるほど、相手の足は遅くない。

ああ、魔法というものを考えられていなかった自分が恨めしい。もう少し早く気づいていれば、道を変えることも出来たはずなのに。

「静かにしてね。隠れるから」

囁くようにそう言うと、すぐそのの、行き止まりの道に逃げ込んだ。普通、こんなことしたら、袋のネズミになっただけだが、ここは違う。ゴミ箱や自販機などで、身を隠すことが出来るのだ。まあ、知られていたら終わりなのだが、そこは俺を犠牲にすればいい。

「ちよつときついかもだけど大丈夫?」

そうして指をさすのは、ゴミ箱である。場所が薄暗い路地裏なだけあって、ここにゴミを捨てる人は少ないため一人くらいなら入れる。少女は少し顔を歪めながらもコクリと頷き、なるべく静かに入っていく。そして、俺もすぐに身を隠した。

見つからなければそれでいい。見つかったても、俺だけならまだマシだ。だから、俺は少女が見つかりそうになる前に、見つかるような位置で息を殺す。

静かなだけあって、足音はよく聞こえる。ザツザツと、少しずつ近づいてくる足音に、心臓は大暴れだ。

「どこだあ〜?」

不機嫌さを隠そうともしない声。さっきまで誤魔化せていた恐怖

が、再び俺を襲った。荒くなりそうな呼吸を必死に抑えて、男が通り過ぎるのを願った。

(お願いします。お願いします。お願いします。)

「行き止まり…？他に隠れるところあったか？」

男のその発言に、冷や汗が流れ始めた。

そうだ。足音すら聞こえるんだから、声なんて筒抜けに決まっているじゃないか。ああ、やらかした。もしかしたらとは思っていたが、囁き声すら拾われるとは。

不審に思えば近づいてくるだろう。そうなれば、覚悟を決めないと。

しかし、男の足が動くことはなかった。

「待てよ。あの女も近くにいるのか…」

なるほど。俺を警戒して近寄れないらしい。まあそれはそうだろう。こんな袋小路に入れば、いつ奇襲されるか分からない。と、そう考えるなら、同時にこうも考えるはずだ。

「魔法で様子見か…？」

予測していた言葉を男の口が紡いだ瞬間、弾かれるように俺は男へ迫った。慌てたように、男はこちらへ手を向ける。

「炎弾！」

「しねやアアア!!!」

男の炎に手が触れる。それでも、俺の体は止まらない。深く、深く、鳩尾を抉った。

「早く出てきて！」

多分、男が気絶するにはまだ足りない。そして、それは俺では無理だ。結局は、逃げないといけない。まだ、俺の手のひらは炎の暑さを訴えていない。そうなる前に、全力で男の脛を殴った。

「ぐああああああ!!!」

少なくとも、これで走れない。ビビりながらも出てきた女の子の手を握り、再び走り始めた。

男が悶えているところからは、ギリギリここは死角だ。魔法も飛ばせないに決まっている。

走って、走って、走って——魔力が、切れた。

がくんとスピードが落ち、その緩急で姿勢を崩す。そうして少女ごとこけて、目に入ったのは、憎悪に満ちた男の顔。

さつきまでとは比べ物にならない程の巨大な炎弾に、俺達は照らされていた。

「隊長！」

「ん」

気づけば、俺たちの体は宙に浮き、真下を炎弾が通過していく。

そのまま、屋根に着地して、俺たちを宙に浮かせた隊長が口を開いた。

「よくやった」

隊長の視線の先では、爽さんが男を完全に拘束していた。それを確認した俺は、安堵に包まれて、その場で意識を落とした。

ヤバい。布団から出られない。

ヤバい。布団から出られない。

今、俺は圧倒的布団の魔力に取り憑かれていた。

自室にて目を覚まし、何があつたか思い出した後、もう既にかれこれ一時間は布団に籠もっている。勿論、あの女の子や屈強な男のことも気になっている。しかし、布団の絶妙な気持ち良さに囚われ続けたいた。

「……ってあれ？」

そう言えば、俺の手はどうなっているんだろうか。一度、男の魔法に直撃したはずだが、全然痛くない。

手を掲げ、じっくりと観察する。火傷の痕がない。

「誰か治してくれたのかな」

回復魔法的な何かがあるのだから、そうなんてもおかしくはない。それなら、お礼を言いに行かないと。

変に考えてしまったせいで、目はすっかり冴えてしまった。まあ、だからといって布団から出られるというわけではないのだが。

その時、ノックの音が響いた。

「やいば。起きてる？」

うわ、来客だ。面倒くさあ。いや、いい機会か。

「は~~~~い」

間延びした返事をしたあと、グツと体に力を入れて、体を起こす。

3秒くらいぼーつとしてから、扉を開けた。

「お疲れ様。疲れているところ申し訳ないんだけど、色々話を聞きたいからご飯食べない？」

扉の先の爽さんがそう言うと、俺は急激に空腹を自覚した。

「食べます」

くうくと腹を鳴らしながら、俺は言い切った。

食堂にてご飯を食べながら、話の顛末を聞く。まず、女の子だが、あの後女の子に変身した聡太君によって無事家に帰された。お礼がし

たいと言われたらしいので、時間があればあってほしいとのことだ。

男の方は、普通にそのまま警察行きらしい。過去にも似たような犯罪の容疑者にも上がっていた男だが、証拠不十分で捕まえられず、今回、過去の分の罪も吐いたため、かなりの重い処罰がくだされるらしい。

「ま、そこは正直どうでも良くてね？本題は、もしかしたらやいばの特異魔法が分かるかも知れないってことなんだ」

「マジですか？」

「うん。マジのマジ」

「ほお？全然自覚ないな。まあ気絶している間に何かあったかも知れないし、ちよつと期待したい。どうせなら、派手なのがいいな。」

「まあまずね。今回の男って、特異魔法使えるタイプなんだよ」

「え？」

「使っていたか？いや、もしかして…」

「えっと、人がいなくなるやつですか？」

「そう。男の特異魔法は人避けの魔法で、自然と効果範囲の人達が離れて行くっていう効果なんだ。どうやら対象を選べるみたいで、被害者以外にそれを使って、無理矢理二人きりにして襲っていたらしいんだ」

それを聞いてゾツとした。なるほど、それなら警察も捕まえられる訳だ。目撃者がゼロなのだから、監視カメラに映らなければ証拠も少なく、被害者は助けを呼べないから安全に楽しんで始末できる。

「あれ。じゃあもしかして…」

「そうだね。不思議と、やいばには効いていないんだ。それにね、男と女の子から証言があって、やいばが魔法をかき消したって言うんだよ」

「かき消した…？あ、もしかして…」

あの時、痛みを感じなかったのは脳内麻薬によるものじゃなくて、そもそも効いていなかった？

「心当たりあるんだね。なら、明日はちよつと実験してみようと思うんだ」

「実験？」

「そう。やいばの特異魔法におおよその予測はつくけど、特異魔法はしっかりと理解しておかないと危ないからね。まあ、今日は後半日くらいあるから、後は自由でいいよ。はいお金」

「え!？」

さらっと手渡されたのは、前世でもおなじみ諭吉さん。それも10枚。

「報酬だよ。特異魔法による犯罪の解決には一定の料金が支払われるから、これはその一部だね」

「いいんですか？ありがとうございます！」

「使い過ぎには注意って言いたいけど、今日くらいは好きにきなさい。あ、でも見せびらかすようにするのはダメだよ。やいばは見た目は幼いしその髪の毛が目立つんだから、犯罪の標的にされかねないしね」
「分かっています！」

子供扱いされている気がするが、そんなことよりもやりたいことに思いを馳せる。あれとか、それとか、買いたいものはたくさんあったのだ。

「行つてきます！」

「気をつけなよ」

俺はルンルン気分で街へ繰り出していった。

ヤバい。豪遊って最高！

ヤバい。豪遊って最高！

そう思ったのも仕方ない。お金を手に入れた俺は、お腹も減っていないのでゲームセンターへ向かった。結構大きめのゲーセンで、音ゲーやクレールゲーム、メダルゲームなどよりどりみどりだ。

まず手始めに諭吉を一枚両替し、その他の諭吉はしっかりと財布に入れて口を閉じる。流石にゲーセンで一万以上は小市民の俺の心が許さなかったのだ。

「ふんふんふん。何しよっかな〜」

前世でもゲーセンには来ていたが、あときは少ないお金でどれだけ楽しむかを考えていた。しかし、今は違う。俺は今、1000円が100枚ある。下手な確率機でも、絶対に取れるだろう。

とはいえ、クレールゲームにお金をつぎ込むのはちよつと嫌なので、さつさとメダルゲームと音ゲーのある所へ移動する。目移りしながらも、適度に色々なゲームを遊んでいく。

めっちゃ楽しい…！

きつと俺は今これ以上ないくらい笑えてるのだろう。やはり豪遊こそ正義なのだ！

そんな感じで、某釣りのゲームを楽しんでいると、ある二人の少女が目に入った。片方は、以前ボランティアの配給でみた女の子。どうやら無事にゲーセンに行けるくらいには生活に余裕を持てるようになったらしい。

良かった良かったと思いつつ、もう一人の女の子がどうしても引つかかっていた。

(何処かで…？多分あの女の子の隣りにいるんだから、この前フード被ってた子だよね…？)

うんうんと記憶を辿っていると、辺りが真っ暗になった。

「へ!?!」

ざわざわと辺りが騒ぐ中で、咄嗟に周りを見渡せば、外では大雨が降っていた。俺の耳には聞こえなかったが、もしかすると雷で停電し

たのかも知れない。

まあゲーセンなのだから非常用電源もあるだろうと、大人しく待っている、何かがぶつかって来た。

「いたっ！はっ！ごめんなさいごめんなさい！」

「えっ何？ライカどうしたの？」

「女の人にぶつかっちゃって…」

「何してんのよ！えっとごめんなさい！ついパニックになっちゃって」

暗くてよくわからないが、声的に二人の女の子が俺にぶつかってきたらしい。そんなに痛くなかったので別にいいのだが、この子達以外にもテンパっている人がいそうなので落ち着かせたほうがいいだろう。

「大丈夫だから。落ち着きなさい。もう少ししたら電気つくと思うから、ね？」

「は、はい」

さて、さり気なく女の子たちをこっちに寄せといてつと、うぐん。落ち着きの無い人多いな。さつきからバタバタとしてるし、危ないなあ。

そんなこんなしていると、少ないが、電気は付いた。

「ん、ほらね。大丈夫？怪我はしてない？」

怖がらせないように、なるべく棘のない声を意識して声をかける。って、この子さつきの子達じゃん。

「は、はい。大丈夫です」

「私もです。って、この前のボランティアの人ですよ！あのときはありがとうございました！」

「どういたしましたして。外は雨だし、多分雷かな？災難だったね」

ん？雷…？

あつ

「はい。……ライカがどうかしましたか？」

「…いや、何でもないよ。この子、この前君のとなりにいた子かな?」
「あつ、あーそうなんです。ちよつとこの子シヤイなので…」

「そつか。じゃあお姉さんはまだ遊ぼうと思ってるから、ここでバイバイかな?」

「んー、私達お金ないしなく。あ、見てもいいですか?」

「良いけど、お金はあげないよ」

「そういうのじゃないです!ただ、私達今帰ってもやることなく暇なので」

「…わかつたよ」

「ありがとうございます!あ、自己紹介まだでしたね!私は天里レイカと言います!」

「天里レイカです…」

「そつか。私はやいばだよ」

俺は、何とか笑顔を浮かべて、二人を見た。レイカという名前の少女と、レイカという、この前の雷の事件の犯人を。

ゲームは熱くなるとヤバイ。

ゲームは熱くなるとヤバイ。

ちよつとどころか、すっかりめに警戒していたライカちゃんにゲームに勝てた喜びのあまりハグしてしまったときに、そう思った。ほんと、良くない。

というか、これまで遊んできた感じ、この子達年相応の女の子なんだよね。初めはライカちゃんばつかと話してたけど、慣れてきたのかライカちゃんも話すようになってきたし、そうなるよと本当にあの事件の時の犯人とは思えない。

いやまあ、特異魔法が見た目で決まるんなら、隊長はなんなんだって話なんだけどね。ただ、性格的にあんなこと出来る子なのかなあ？

話している感じ、レイカちゃんとライカちゃんは双子で、ライカちゃんの方がお姉さんらしい。ただ、どう見てもレイカちゃんの方がお姉さんらしい、というか過保護で、すごくライカちゃんを気遣っているような感じがする。

まあそんなこんなで時は経ち、時計の短針は6を指していた。

「あ…、もうこんな時間か。流星にそろそろ帰らないとだよ？」

「あ、ホントだ」

「本当ですね」

レイカちゃんとライカちゃんがそれぞれ反応して、帰り支度を始めた。外を見ると、雨は止んでいたがかなり薄暗くなっている。何かあったとして、ライカちゃんは大丈夫だとは思いますが、レイカちゃんはどうなるか分からない。それに、別の事も知っておきたい。

「ねえ。君達の家ってここから遠い？」

「えっ…まあ、遠い、とも、言えなくはないかな？」

「じゃあさ、送ろうか？」

不審がられるかもしれないが、物は試しで聞いてみる。

「あー…」

しばらくの沈黙の後、ライカちゃんがレイカちゃんに耳打ちした。

「あ、はいはい。じゃあお願いします。ライカがもつと話したいらしいので」

「なんで言うの!?!」

仲睦まじく話す二人を見ると、自然と口角があがってしまう。まあ何にせよ、送らせてもらえるなら好都合だ。

「それじゃあ、帰ろっか」

俺達は、ゲームセンターを出て、帰路を辿った。

「…ということがありました」

二人を送り届けた後、俺は拠点に戻り、隊長と爽さんに報告した。「そっか。やいばが話した感じでは悪いようには見えなかったんだね?」

「はい。むしろちよつと仲良くなっちゃったと思います」

「うん。ならいいよ。見逃すっていうか、捕まえるつもりもないし」

「え、そうなんですか?この前はいつかは捕まえないとか言ってたよな」

その後放置でも良さそうとかは言っていたが、あれは居場所が分からないからというだけだと思っていた。

「ん〜。実はさ、この前の事件。死者0人なんだよね」

「はい?」

「しかもね、火事とか、それすら無かったんだ」

「え…」

2秒に1回雷が擦り注ぐあの環境で、しかも雨が降っていないくて、それなのに死者0どころか火災もゼロ?

「まあ要するにね、あの子は…ライカだっけ?ライカは場所を選んで雷を落としていたんだよ。なんなら被害っていうのは雷による停電くらいしかなくて、お店とかそこらには支給金が出たから大丈夫。だから、一度くらいは見逃そうかなって」

「えー。まあ分かりました」

その理由に思うところが無いわけでは無いが、正直ライカちゃんとは親しくなった訳だし、領いてしまう。そもそも、自分では抱えきれないから報告した訳だし。

「…あとね。出来るならこっちに引き入れちゃってもいいよ」

引き入れる…。なるほど、そういう選択肢もあるのか。

「じゃあ明日はやいばの能力実験だから、よく寝るんだよ」

「はい」

あつ、そういえば明日はそういう日だった。何されるか分からないし、しつかりと休むとしよう。

……………そう言えば結局お金全然使ってないや。

…やばいくらいに警戒されてる!?

…やばいくらいに警戒されてる!?

朝食後に呼び出された場所には、隊長、副隊長、教授、教官と勢揃い。離れたところには小さな子や聡太くんなど、顔を合わせるくらいの人もこつちを見ていた。

これは何なのだろうか。そんなに重要なことなのだろうか。そもそも教官とか教授が居なければ訓練は余り出来ないわけで、だどいうのに総動員である。俺はレイドボスか？

「はーい。じゃあ始めるよ〜」

「うおおおおおおおおおおおお」

爽さんの掛け声に、周囲の観客が歓声を上げる。

…????

「あの、これはどういう…?」

「ああ、やいばには言ってなかったね。実験とかするときには、見ている人が多い方が色々なことに気づけるでしょ? だから、訓練も何もかも中止にして、こういう場を設けたんだよ」

「ああ、納得はしました」

いや? 歓声の理由が分からん。

「ちなみに、いい意見を出した人にはボーナスが入るよ」

「うおおおおおおおお」

お金好きすぎだろ。分かるわその気持ち。

「じゃあ、まず何をすればいいんですか?」

「うん。じゃあやいば。あのときに何か変わったこととかした?」

その言葉に、頭を唸らせる。

「いや、特に何も。強いて言うなら、身体強化…?」

「ほほう。ならやってみて」

「はい」

体に魔力を通したことで、体が少し軽くなった。

「ん〜。いきなり危ないのはアレだしなあ…お?」

何かに気付いたように爽さんは顔をあげた。

「やいば。突然だけど当たると痛いかわからないのか、どっちがいい？」
「痛くないのに決まってません？」

それ以外何があると言うのか。もしこれで痛いのを選択すれば、周りからはMだと思われるに違いない。

「…そうだよね。教官」

「分かった」

爽さんと呼ばれて、教官が前に出てきた。そう言えば、この人変な魔法を使えた気がする。詳細を聞くのを今まで忘れていたが、あれが教官の特異魔法なのだろうか？

「では行こう」

その言葉に一瞬身構えるも、俺の体には何の変化も無かった。教官は手を上下させては、こちらを見て首をひねっている。

「うむ。効かないな」

「『おおお〜〜〜』」

観客のざわめきが、それが異端なことだと教えてくれている。

「あの、教官の特異魔法ってなんなんですか？」

「ん？俺の特異魔法は俺と全く同じことを対象にやらせるというものだ。体の動きも、魔力の流れも、何でも俺がやったとおりに動く。そこに相手の意識は存在せず、タイミングもコンマ数秒の狂いすらない」

…エグくね？それって相手が格上とかでも最悪相打ちに持っているんじゃないの？しかも魔法が使えなくても、教官が操れば、魔力がある限り魔法を打ち続けられるってことでしょ？

「それってやばくないですか？」

「そうだな。しかし、この前みたいに、体に覚えさせるにはこれ程効率の良い手段はないのだ」

あく、確かに。だいたい逆上がりとかでも一度出来れば次も出来るという物だ。きつと魔法も、一回目が難しく、二回目以降はコツが掴めるということなのだろう。いやめちやくちや便利だな。

「はいはい。そこまでね〜。とりあえず特異魔法は無効に出来るっばいね。じゃあ次！」

その言葉と同時に、目では捉えきれない速度で、隊長に四肢を拘束された。

「へ?何を…」

同時に、教授が魔法を貯め始めた。

「ちよちよちよちよちよちよ!?!」

無理矢理腕が伸ばされ、そこに青く燃える炎が飛んでくる。

「いやあああああああ!!!」

断末魔が上がるのと同時に炎は手へ触れて——消失した。

「ハアツ、ハアツ!」

恐怖からか息が荒くなってしまっている。そんな俺を尻目に、俺以外は話し合う。

「うん。やつぱり予想通りここまででは行けるみたいだ。さ、ここからはどんどん未知の領域へ踏み出していこう」

「おくく」

再び、俺は四肢を拘束された。

「…あれ?」

今度は隊長ではなく、複数人による物。そのまま何かするのかもしれないが、いきや、何処からかロープを取り出し、俺をぐるぐるまきにする。もちろん腕だけ伸ばされて、しっかりと固定されている。

「じゃあ隊長。お願い」

「ん」

隊長は、水や炎など、様々な物質を出現させる。そのどれでもが、明らかに教授のものより威力が高そうで、心が震え上がった。

同時に、未来が予測できる。

その予測は外れることなく的中し、俺の右手は、ひたすらに的ときれ続けた。

体はちつとも痛くなかったが、心には相応のダメージを負った気がする。そんな中、やっと拘束が外されて、晴れて自由の身となった。

「終わりですか!?!」

期待を込めて発した言葉は——

「いや？昼休憩だよ」

呆気なく踏み潰された。

食事中、聡太君がおつかいに出されていた。『ホームセンター』なんて言葉は気の所為だということを願いながら食べるご飯は――

普通に美味しかった。

な、何ですか…？ヤバくないですか…？

な、何ですか…？ヤバくないですか…？

目の前には、そこら辺の石ころに加え、割と普通のハンマーが用意されている。信じたくはないが、これも俺の能力の実験とやらに使うのだろう。

…いやおかしくね？

「は〜い。じゃあ後半戦！物理はどうなのか。いきましよう！」

「無理に決まってるでしょ!？」

(魔法がいけるなら物理も、とかいけるわけ無いだろ！)

爽さんは、笑顔で「やってみないとわからないでしょ〜？」とハンマーを持ち出す。そして、背後には隊長の気配。

「…なんか、ごめん」

普段そんなに話さない隊長が謝るあたり、流石に悪いと思ってるらしい。

「悪いならと思うなら離してください」

「…ごめん」

ハナセつつつてんだろお!!!

そんなやり取りをしている間にも、ゆつくりと爽さんは近づいてくる。

「大丈夫だよ。流石にそんな強くはしないって」

「痛いんですよね!？」

「……」

「なんで黙るんですか！ねえ！やめて！いやあああああ!!!」

ゴッ

「ッ！」

騒ぐには至らないけど、結構クル痛み…！

「うん。効くみたいだね。…こんなものかな？」

お？終わりそう？終われ終われ終われ終われ終われ終われ
爽さんはどこからか紙を取り出して、じつくりと見る。

「あ、うん。最後に飛び道具だね」

ですよね。だって石あったもん。でもそれで最後だ！

「最後なんですわね!?じゃあさっさとやりましょう!」

「え?まあここに書いてるのは最後だけど…」

「さあさあ早く早く!」

「えー?じゃあ、ほっ」

催促したのが悪かったのかもしれない。ろくに準備をせずにフィジカルおぼけから投げられた石は、風を切りながら俺の鳩尾を抉っていった。

「ウツ…」バタツ

何回、人の前でコケないといけないんだろうか…。痛みにも苦しむ傍ら、俺はぼんやりと考えていた。

…とはいえ終わったのだ!

やったあああああああ! (歓喜)

「はい。じゃあ質問ある人」

あああああああああ? (疑問)

「魔法で動かした物体ってどうなるの?」

あああああああ!!! (悲鳴)

「ブッフ」

ずっと俺をみていたであろう聡太君が吹き出した。みせもんとちやうぞコラ。

「聞いたな?じゃあやいば立てー」

「うう…」

嫌嫌立ち上がると、爽さんが石を空中でプカプカ浮かせていた。

「じゃあ合計3回投げね。1回目は元々ある石を最後まで魔力で動かしてぶつける。2回目は途中で魔法を解除してそれまでの慣性で飛ばす。最後は、魔法で作った玉をぶつける。これでいくからね」

「せめて腕にしてくださいね!」

もう鳩尾は嫌だ。

「はいはい」

というわけで、1回目、痛い。2回目も同様。だが、3回目だけは何も感じない。それどころか、魔法と同じように消失した。

「なるほどね〜。これまでをみるに、自分に関与する魔法を無効化っ
ぽいね。他はあるかな〜?」

絶望を感じながら振り向いたが、幸いな事に、もう案はないよう
だった。

「うん。じゃあこれで終わろうか。最後に、幼い子の目と耳塞いでー」
すると、観客席の方で大人達が子どもたちの目と耳を塞いだ。慣れ
ているのか恐ろしく早く、何をするのかと右往左往していると、隊長
が目の前にやってきた。

「座れ」

「はい?」

よくわからないが、言われたとおりに座ると、隊長が強引に体を
引っ付けてきた。

「えっ?何ですか?」

「いいから」

グリグリと体を押し付けながら、隊長は慣れた動きで己の腕にナイ
フを突き立てた。

「——っ!?何やってるんですか!?!」

血が吹き出しているその腕を、隊長は俺の体に押し付けてくる。
が、みるみるうちに傷口が塞がり、俺に血がつくことさえなかった。

「…」

隊長は話さない。そのまま立ち上がり、爽さんの元へ行く。

「あ〜うん。これで、身体強化とか、その辺りは無効化出来ないのは分
かったね」

爽さんの言葉から考えると、隊長は自分の体を使って体に変化する
系の特異魔法を実験してみたということだろうか。だとしても、わざ
わざ腕をナイフで捌く必要はないはずだ。

「もつと、それこそ聡太君じゃ駄目なんですか?」

「あ、それもあつたね。気づかなかつたよ」

これは本当に気づかなかつただけなのかな？そんな疑問が浮かんだけど、多分聞くだけ無駄なのだろう。なんと言うか、そんな気がする。

「さっ！じゃあ総評だね！あ、もう子供達は放してあげていいよ」

気を取り直したかのように、爽さんは振る舞っていく。

「まあまず、なかなか強力だね。やいばの魔法は。これまでの結果をみるに、やいばが体に魔力を流していれば、一方的に魔法で攻撃できるからね」

「まあそうだが、魔法以外では駄目だな。肉弾戦には使えないだろうし、銃でも向けられればそれこそ終わりだ」

銃。この世界にもあるのか。魔法があるのだから飛び道具なんてそんなに発展しないと勝手に思っていた。とはいえ、警戒なんて必要なのだろうか？

「あの、銃なんて警戒する必要があります？」

「え？そりゃあるよ。だって魔法より銃の方が速いし、ちゃんと人を殺すなら、魔法より銃とか、ナイフの方が多いわけだし」

え？マジか。銃なんて魔法でちよちよいのちよいだと思ってたぜ。

「あ、もちろん魔法を極めたーとかなら魔法の方が強いけど、そこまで努力出来るなら仕事には困らないし、何か事件を起こす人達は努力もたいしていらぬ銃のほうを使うんだよね」

「なるほど…。というかそんなに銃出回ってるんですか？」

「そういうわけじゃないけど…あくでも、この前特異魔法を悪用する奴らの中に銃を売買するのがいてね。それでちよつと出回っちゃったと思う。まあ普通は持ってないよ」

おお。そういうこともあるのか…。

「まあとりあえずはやいばは訓練かな。もしかしたら犯人がなかなか捕まらないときに、特異魔法の警戒として連れて行くかもしれないね。じゃあこれで本当に終わり！お疲れ様でした」

そうして、俺の能力実験は、幕を閉じた。

これは…ヤバいですね。仕事量。

これは…ヤバいですね。仕事量。

特異魔法が判明してから数日後に仕事と言われ、渡された資料。ぱつと見十数件の事件がちらちらと並んでいる。どれも、やっていることは悪質極まりないが、命を脅かされたりはしていないものばかりだ。

「えつとね。やいばの特異魔法を上…まあ上司的な所に報告したら、こんなものを渡されちゃって…」

「え、あの、納期は…?」

「あ、そこは安心していいよ！早くとは言われてるけど、あくまでやいばの練習というか、現場慣れって感じだから決まってるじゃないし」

「あ、そうなんですか」

「そうそう」

「で、近くの地域の事件解決の間隔を開け過ぎたら被害が増えるだけじゃなくて警戒されて逃げられるんですよ」

「…そうだね」

「そうなればもう解決は絶望的ですよ」

「…うん」

「つまり、短期間でまとめて何個かを繰り返すってことですよ…」

「そうなるかもしれないね…」

「なんとというか、絶望的だ。爽さんも可哀想にという目で見てきている。…ウザい。」

「誰か手伝ってくれる人って…」

「それは聡太がやってくれるよ。というか、これからは基本聡太とペアでやってもらおうと思っていてね」

「ほほう。意図は分からないけど、聡太君は化け物フィジカルの一人だ。一緒にいてくれるならとても心強い。最悪背負ってもらえるしね。だが…」

「あの、聡太君は何か言ってたんですか？」

「え？強制だよ。絶対に嫌がるだろうし」

…この組織、もしかしてブラック？

そんなこんなで一件目。内容は万引き、こちら辺の地域ではものすごい数の万引きが繰り返されていて。被害総額はかなりのものらしい。だどいうのに足取りすら掴めていないらしい。

十中八九特異魔法によるものだと考えられているため、ここに俺が呼ばれた訳である。ただ、少し疑問があった。

「ねえ。どうやって見つけるの？区切られてると言っても、流石に地域全部は無理じゃない？」

「えつとね。規則性というか、最近警察を舐めに舐めきってるのか3, 4件ぐらいにまで被害が狭まったらしいよ」

「なにそれ…」

その3, 4件のお店が可哀想すぎる。というか、そこまで絞られているならいけるだろうなってんだ？

「それに加えて、最近は一気に大量に盗ってるみたいだから、見晴らしのいい場所でやいばが見張ればいけるかなって」

「ふーむ。ちなみに時間帯は？」

「ランダム。どの時間でもありえる。流石に朝の1時から4時にはどこもやってないから例外だけどね」

「つまり？」

「徹夜♪」

「はあ~~~~~」

二人で大きいため息を吐いた。

「…どう？」

「眠い…じゃなくて、問題なし」

「分かった。はい缶コーヒー」

缶コーヒーは好きではないが、眠ることは許されない今、とても重宝する。有り難く飲み干して、再び監視を始める。

「…アハハッ」

「…どうしたの」

「いやなんか幻覚見えてきたかも」

「ん？なに？？」

「警察さんと店員さんがコンビニから何か運んでる。一生懸命運んでるから大変そうだね」

「何言ってるの？」

横に聡太君が来たので、指を指して教えてあげる。

「ん？別に可笑しくなくない？なんか、バル○ン焚くとかじゃない？」

「は？何言ってるの？」

突然聡太君が意味不明な事を言う。業務時間中に焚くわけ無いでしょ。警察にも手伝わってもらうとかなおさらありえないし。

「ってあれ？聡太君にも見えてるの？」

「え？うん」

「……。あれじゃん！」

どう考えても普通じゃないし、何より聡太君が”見えているのに”不審に思わない。つまり、これは特異魔法による何らかの作用が掛かっているに違いない。

だが、俺一人である警察と店員が向かう先へは行きたくない。どうせ勝てないからと口を酸っぱくして言われているし、事実、まだまだ弱い。つい最近純粋な肉弾戦で小さい子供に10敗を期した程度である。

ん？俺弱すぎん？

じゃなくて、どうやって聡太君を動かすのかが鬼門だ。いや？聡太君は特異魔法の影響にかかる前提でいるんだよね？なら何でも聞いてくれるのでは？

「聡太君。犯人分かったから、あの人達について行って！」

「？まあ良いけど」

そう言いながら、聡太君はどこにでもいそうな配達員のお兄さんに変身する。やべえ、目を離したら終わりそう。

「じゃあ捕まっついてね」

「お願いします！」

聡太君の背中に捕まると同時に、聡太君は弾かれたように走り出した。

あつという間に追いついて、歩き続ける警察店員グループの最後尾について行く。俺はどう考えても不自然で、しかも髪色のせいで死ぬほど目立つので少し後ろから眺める。

警察店員グループは速度を落とさずに進み続け、ある家の前で立ち止まる。最短ルートを通っていたので、もしかしたらカメラで見ても気付けないのかもしれない。

集団は荷物を置き始め、積み終わると去っていった。とりあえず聡太君を呼び戻す。

「なあやいば。犯人ってこの家か？」

そうして指すのは、荷物を置いた向かいの家。

「違うよ。そっち」

「ほー」

一応教えれば認識出来るらしい。しかしまあ、今気付いたのだがもしかして聡太君下手したら敵になるのでは？だとしたら完全に終わるな。ハハッ。

「聡太君。暗闇で見えづらい格好になれたりする？」

「うん」

そうして、何から何まで真っ黒な姿へ変わる。そんな聡太君を荷物のすぐそこにまで寄せて、それを壁として俺も隠れた。

多分きつとおそらく隙はつける。あとはその隙をどれだけ活かしてリターンを取れるかと言った所だろう。だが、俺には秘密兵器がある。

てってれーす た ん が んー

特異魔法を防ぐには魔力を体に流しておかないといけないため、魔法以外の攻撃手段を求めた結果、これを貫つた。ちなみに実戦経験はゼロ。止まっている相手に当てるのを見ただけである。

「もしそこから人が出てきたら、すぐに取り押さえてね」

「了解」

何でもやってくれるので、3周回ってワンとでも言えばやってくれ

そっだ。と、くだらないことを考えていると、ドアが開いた。

「ぐふっ。ちよろいな〜」

趣味の悪そうな声を出しながら、男は一步踏み出し——即座に取り押さえられた。

「ナイスイ！喰らえっ！」

すぐさまスタンガンを首に押し付ける。

「アバババババ」

漫画のような反応をして、男の体が動かなくなる。

「気絶したかな…？」

そう思い、スタンガンを離す。が、ギョロリと動く男の目が、それが間違いだったと俺に伝えてくれていた。

ふらりと、聡太君が立ち上がる。俺は何も言っていないから、原因はどう考えてもあの男である。

「聡太君？一応聞くけど、大丈夫？」

「…」

まあ喋るわけないよねえ！と思っていると、真っ直ぐ魔法が飛んでくる。

あら？これはもしや…。

しばらく立ち止まってみたのだが、やはり聡太君は魔法を打つのをやめない。なるほど。botみたいになるのかな？

試しに近づけば、魔法をやめてファイティングポーズを取る。どうやら持ち場から離れるつもりはないようで、離れたらすぐに魔法を打ってきた。

それなら、やることは一つである。

「にーげるんだよお!!!」

聡太君相手に肉弾戦とか、無理！

と、言うわけで、やってきました見晴らしのいい高台！ここでも、聡太君が男を守っている様子が分かりますね。男の苦悶に満ちた顔も、じっくり見えます。というわけで、

「小さく、小さく」

聡太君に、というよりはあの男に気づかれなくらい……！集中して、集中して魔力を圧縮する。

「最悪外してもオツケー。外したら、すぐに電話で応援を呼べばいい。そう。外しても大丈夫」

深呼吸して、淡く光る小さなボールを打ち出した。ゆつくりと、確実に。多少速度が遅くても、あの位置からなら星の一つに見えて終わりのはずだ。

確実に、確実に、確実に。成功すれば、聡太君が逆恨みで殺される可能性が格段に下がる。

当たれ、当たれ！当たれ！

ゆつくりと、ゆつくりと、それは男の方へ向かい……

「あつ」

直前に強風によってズレた。まさに、速度を落としてしまった弊害である。

ズレた魔力弾は、風に導かれ——聡太君の側頭部にクリーンヒットした。バランスを崩し、聡太君が倒れた先には積み上げられた荷物達。

荷物は崩れ、動けないでいる男の上になだれ込む。聡太君は、荷物の角に頭をぶつけて気を失い、その場に倒れていた。

「…ラッキー」

急いで向かい男を縛り上げた後、犯人輸送用の応援が来るまで、ずっと聡太君を看病した。打ったのは頭なので膝枕をしようと思っただが確実に足が痺れるので、適当にカバンを枕にしてあげた。

ごめんね。聡太君。

あつヤバい。

あつヤバい。

「なんでやばって顔してるの？」

「!?」

目を覚ました聡太君に開幕早々そう言われてしまった。俺、そんなに分かりやすいのだろうか。はたまた心が読めるのか。

「何でもないよ。災難だったね」

「本当だよ。操られた上に仲間にも見捨てられるなんて…おおよ」
咄嗟に儂げな少女へ変わり、悲しい表情を惜しげもなく披露してくる。

「…覚えてるんだ。でも今はこうしてね？助けたし、犯人も捕まえたから」

それから、縛り付けた男を見せて、なんとか見逃してくれないかな〜と思うが、聡太君は儂げな少女から姿を変えてくれない。

「でも、最後の攻撃ってやいばでしょ？」

「えっ」

「魔力弾って基礎ではあるけどものすごい非効率だから使う人なんていないんだよ。それこそ習い始めたやいばくらいしか」

詰んだか？いやまだ…。手遅れだな。

「…すいませんでした」

でも操られる聡太君も責任はあると思います。

「…あのねえ。もう一つ言いたいんだけどね？どうして自分でなんとかしようと思ったの？」

「はい？」

何言ってるんだ？取り押さえるときも聡太君を頼ったし、追跡するときも同じくそうだ。自分でなんとかしようとかしてないんだけど？

「なんで分かってないの…。まずさ、男を取り押さえてって言ったよね？あれさ、気絶させてってお願いすればよかったよ？」

「あー」

「その後もさ、魔力弾で助けようとしたのかも知れないけど、そんなこととはせずにさっさと逃げて応援を呼ばいいんだよ。それに、やいばは唯一無二の特異魔法が使えるから、僕なんかより価値が高いんだよ」

え？

「いや、それは違うよね？確かに俺：私の特異魔法はこういう場面で役立つかも知れど、聡太君はもつと広い場面で役割があるよね。価値だけで見るなら、よっぽど大事だよ。いや…というか、価値云々で命を捨てるようなことは駄目」

応援を呼べという話なら、俺は大した戦力にもならないからおかしな話ではない。でも、その言い分は納得できない。

「…ただの言葉の綾だよ。でも、これだけは覚えておいて」

姿形は変わらないけど、言葉には、それ相応の変化があった。

「もしものときがあれば、僕は自分の命を捨てても君を助けるよ」

……あれ？

「なに？告白？好きなの？」

「……………」

「……………」

儂げな少女は、笑顔を浮かべて言った。

「黙れよゴミ」

ピンと突き付けられた中指が、彼の心情をこれ以上ないほど表していた。

なんやなんやあつて、

あんなに大量にあった仕事は一段落ついて、残り一つの地域を残すのみとなった。徒歩で行けるくらいの距離な為、一旦休みということ、ひっさびさの休日である。

「うえ〜い」

「うーい」

そんな休日は、聡太君との打ち上げから始まった。どちらも未成年（聡太君は不明）なので、サイ○でご飯を食べながらのんびりと話をする。

一回目の事件のこともあって、そんなに距離感はなくともフリーに話すことが出来るようになった。今日の聡太君は男の子である。

「でもさく、前のは笑ったよね」

「あくあれね。あんな大層な事を言っておいて、一瞬で無効化されるのは可愛そうだったな」

話題と言っても、基本は事件の話である。一回目以降、特に苦戦はせずにスムーズに行けたのだが、なかなかどうしておちちよこちよいな人もいたもんで、ネタには困らないのだ。なんだろう、警察に見つからないというところだけにステータス振っちゃったのかな。

「でね〜…」

「…なんか視線集めてるな」

「ああそれ？どうせ私の髪でしょ。自分でもなんだけどもめちやくちやキレイじゃない？サラッサラよ、サラッサラ」

「ん。ホントだ。手入れとかは？」

「いらぬいらぬ。したことはないもん」

「それ将来ハゲるよ」

「ハゲンわ！」

失礼な奴だ。イラッと来たので腹いせにピザをぶんどってやった。上手い。

「うまく〜…そろそろ別のところ行くっ？」

「賛成。ゲーセン行く」

「いいね！」

というわけで、次の目的地はゲーセンである。

というわけでやってきましたゲーセン。前回と同じところでありませぬ。

「何すんの?」

「まずは音ゲー」

前回行ったときはかなりハマってしまった音ゲーである。カードも買ってしまったし、ついでに聡太君も引き込もうという算段である。

「ほらほら、聡太君もやろやろ!」

「いややるけど…」

暇だしと呟きながら、横で聡太君が遊び始める。それを見て、ハマったらしいな〜と思いつつながら、俺も遊び始めた。

しばらくして、途中でちらつと見れば、聡太君は余裕で高難易度をフルコンしていた。

…意味不明なんだけど。

他にもクレイゲームや○リオカートもやったが、全敗した。ちくしょう。

「あつやいばさん!」

「こんにちわ、やいばさん」

そんなこんなしていると、まさかの天里姉妹と遭遇した。

「あ、久しぶり〜。レイカちゃんもライカちゃんも元気そうだね〜」

笑顔で挨拶を返して、ついでに聡太君の紹介も済ませる。聡太君には前々からこのことを言っていたので、特に何事も無かった。

そのまま4人で遊び、ライカちゃんと聡太君が話すようになってきた頃、それは起こった。

「わっ」

「なにになに!?!」

「あわわわわっ」

また、辺りが暗闇に包まれた。外の光が入り口付近を照らしているので、雷とかではない、というか、外のビルは普通に電気が点いていた。

つまり、

「やいば」

「うん」

最悪の場合を想定しておこう。備えあれば憂いなしである。

ヤバい予感がするぜ！

ヤバい予感がするぜ！

まだ暗くなっただけだが、絶対にそれだけでは終わらないだろうという確信があった。しかし、暗いところに目が慣れて、ある程度あたりを見回せるようになれど、何かが起こることはない。

「やいばさあん」

何処か涙声のライカちゃんの声が聞こえた。正直、今は静かにしてほしいので、こっちこっちと引き寄せて、しーと唇に手を当てながら撫でてあやしてあげる。

聡太君、そして、レイカちゃんは最大限警戒してきよろきよると忙しなく視線を動かしている。やはり、レイカちゃんはしつかりし過ぎだ。

そして――

ポンツ

軽い爆発音とともに、暗闇に照らされたゲームセンターが一気に明るくなった。都合良く下を向いていた俺ですら、目が痛くなるほどの光。間違いなく、仕掛けてくるのは今だ。

「隠れるよ」

全方向から狙われる今の位置は非常によろしくない。せめて背中や壁につけておきたい。光ったのは入り口の方なので、なかば強引に三人をそこから隠れるように連れて行った。

「聡太君？目、見える？」

ライカちゃんと俺は大丈夫だが、レイカちゃんと聡太君は辺りを見ただけ不味そうだ。証拠に、レイカちゃんは目を押さえて苦しんでいる。

「一分あればなんとか…」

見た感じ、回復魔法を全力で使っているらしい。それなら、少なくとも1分間は俺とライカちゃん：おそらくライカちゃんはそんなに使いたがらないだろうから俺で被害を減らす必要があるらしい。

敵が来るであろうところは入り口一択。光を放ったなんらかの炸裂音が静かな所をみるに、大々的にする訳では無いだろうから、十数人が一気に入ってくることはないと思いたい。

そうして、入り口に人影が見えた。大体5〜6人くらいだが、俺以外に気づいている人はいないみたいだ。まあ他の人も目があ目があ！と苦しんでいるのだから当然と言える。

(でも、少なすぎない?)

ここはかなり大きめのゲームセンターだ。一般人とはいえ、前世基準で言うとバグり散らかした強さを持つのがほしい100人くらいいるのだ。単純計算で一人20人は無理があるだろう。

「聞け！ここは我等が占領する！貴様らは人質だ！一箇所に集まれ！」

人影のうち一人が叫ぶ。が、その声は一部の人にしか聞こえなかったらしい。まあ目があ、目があ！で阿鼻叫喚なのだから聞こえない人がいるのも仕方ない。

ただ、好都合ではある。どうやら皆殺しとか、そういう類ではないらしく、それなら、目立つ行動を起こす必要はない。

「チツ」

聞こえてないと分かった向こうの人間は当然のように銃を取り出して、撃った。

：

(ムリムリムリムリ!!!)

特異魔法は警戒していたが、これは流石に予想外だ。いや考えればわかるけど！

シン、と静かになった店内は、完全に向こうの独壇場だ。一人ひとり縛られて、固められていく。

まだ見つかっていないが、このままだと時間の問題だろう。隊長に連絡は入れられてないが、素直に従ったほうが生き残れそう。

そんな思いから、隠れるふりをやめ、立ち上がろうとすると、聡太君に押さえられた。

「聞いて」

小声で、聡太君は話す。

「絶対に出て来ないで、これで助けを呼ぶんだ」

渡されるのは、電話と、番号の記された紙。

「話さずに、ただ携帯を地面に置いておけば、勝手に音から判断してくれると思うから、そうしてね。それと、出来ればあそこから出るんだ」
そうして指したのは、従業員用の入り口。よく見れば、薄暗い光が見えた。路地裏か、そこらへんに窓でもあるのだろう。

「そして、出来るだけ正確に助けに来た人に情報を伝えるんだ。分かった?」

「:助けは分かるとして、逃げるのはなんで?」

「決まってるよ」

聡太君は見られているのにも関わらず、「私」の姿へと変化している。

「君が死ぬのは避けたいからね。さあ、ちゃんとタイミングを見極めるんだよ?」

聡太君は、必要のないくらいの大声で叫んだ。

「止まれ!」

視線を集め、そして、一部の、テロリスト共の口元が弧を描く。

「みつけたあ……!」

どうやら、あくまでメインは俺らしい。

やばくはないかも？

ニタツ微笑うテロリスト共を見て、確信した。今回の騒動はやいば、そして俺をターゲットとした行為だということ。まあまずいと言われればそうでもない。ヤバい度で言うなら多分ヤバくない。

「おやおやく？君はもしかして、我等の仲間に手を出した不屈き者じゃなあ〜い？」

「さあ？お前らみたいなのは知らないな」

「しらばっくれても無駄だ！そもそもそんな髪持っついてごまかせると思ってるのか！」

まあそうだろう。何件か犯人を捕まえてきたが、その様子をそいつらの仲間に見られていない確証は無かったわけで、遠目からでも目立ってしまうやいばの髪は、絶好の目印であることに違いはない。

「いや、だが、お前たちみたいなのがミなんて見た事ないんだが」

「ハッ！そんな挑発には乗らねえよ！」

挑発で冷静さを欠いてくれればと思ったが、そうは問屋がよろさないらしい。まあいい。相手の特異魔法、少なくとも、停電の原因となる物があるはずだが、相手を見るに頼るものは銃だろう。

「ところでえ〜？お前の特異魔法は〜？確か特異魔法とか無効化するんだっけえ〜？じゃあさ〜こんなのはどうかだっ！」

舐め腐った態度を崩すことなく、ペラペラと喋る男はフルオートで銃をぶっ放す。幸いなことに、後ろはクレールンゲームがあるため流れ弾などはかなり減る。避けたって大丈夫である。

「ハハハハハハハ!!!お前たちを殺せば、また俺たちの天下なんだよお！」

「いや、まあそんなことはないよ」

「はっ？」

ぶっ放して気持ちよくなってそうな男を叩きのめす。銃が落ちたので、即座に踏みつぶせば、もうこいつは何もできない。

いや、発言からして、隠密系の特異魔法を持っているのか。

流れるように足を踏み潰すと男の絶叫と心地のいい音が響いた。

中々健康的な骨である。

「とりあえず一人」

油断してくれていた為、簡単に倒せたものの、これ以降は同じような倒し方は出来ないだろう。

「お、お前はなんだ!？」

当然、答える義理なんて物はない。一番近くの敵へ、大きく踏み込む。

(お?)

そんなに軽くしたつもりは無かったのだが、防御姿勢も何もとつていない奴に耐えられた。2発3発と繰り返すが、あまり手応えがない。

(後回しにしようかな?)

反撃してくる様子もないから、と考えていると、それは起こった。

銃声。

狙われたのは、こっちではなく、向こうの方。その銃弾ですら、男は耐えてみせた。

誰かが叫ぶ。

「ぶちかませー!」

己の何倍、いや、何十倍もあろうかという魔力が、全方位に、魔法となつて解き放たれる。仲間を巻き込まないためか範囲が絞られたそれはその分だけ圧縮され、威力を増す。

そして、たとえ範囲が絞られたとしても、0距離で戦っていた自身は逃げられない。

空間をくり抜くように生まれたクレーターは、男の放った物がどれ程に恐ろしいのかを物語っていた。ゲーム機だったものは、塵すら残さず消えていて、存在があるのは、クレーターの中央に立ち尽くす男のみである。

「おお、ほんとに偽物だったのか」

本来、ターゲットとなる対象には魔法もとい特異魔法は効かないということは分かっていた。それ故に、切り札とも言えるそれは使わなかったのだが、桁外れな身体能力を見て、もう一人の方じやないかと考え、男を、切り札を切った。

(ちようどいいな)

「分かったか！貴様らも反抗すると同じ目に合うぞ！」

さっきの奴に感化されていた人質共は、これで多分落ち着いただろう。まだ目的は達成出来ていないのだ。

警察が突入してくるまでに、やいばという少女を殺す。あれは、俺達にとって天敵とも言える能力を保持している。消しておかないと、後々の活動全てに影響がでてしまうのだ。お陰で、命に賞金がかかっているほどである。

「よし、探すぞ」

「待てーまだそこにいるぞー！」

仲間の叫び声に、咄嗟に辺りを見回した。すると、両腕はもげているものの、人の形は保っている奴が壁にもたれかかるように座っていた。

「…流石に死んでいるだろう」

あれで生きているのであれば、それこそ人間ではない。

「さあ探すぞー！まずは——」

ドサツと、警告を促していた仲間が倒れた。

「なっ…」

動揺している間にさらに一人。これでもう、ここにいるのは残り三人となる。

「固まれ固まれ！」

切り札と、もう一人の仲間とで固まって、なぜか五体満足な化け物に対峙する。

流石に、無くした腕の治療は考えるのも恐ろしいほどの魔力と、気が遠くなりそうな程長い時間が必要になる。だが、この速度での化け物は治してきたのだ。

(回復系か?)

可能性があるとするなら、俺達と同じ特異魔法。即死しなければ、即座に治すとも言うのだろうか。

「っ！」

詰めてくる化け物に対して、咄嗟にマシンガンをぶつ放す。もう仲間はほとんど伏しているの、そこまで気を使う必要はない。

(当たれ! 当たれ! 当たれ!)

何発かははずれるが、殆どが化け物に命中する。だが、速度は緩まない。いや、血すら出ていない。

「グッ！」

横にいた仲間が倒れる。多分、化け物が投げた何か当たったのだ。だが、そんなことは気にしてられない。ナイフへ持ち替えて、確実な間合いで振り切った。

(殺った!)

ナイフを心臓めがけて突き立てる。タイミングも距離も完璧で、事実回避行動は取らせなかった。が、手に残るのは肉を裂く感触ではなく、空を切るだけの空虚感。

目を見開いて、絶望を知った。

「化け物が」

ぐりんと、俺が刺した部分ごとがくり抜かれた腹を見ながら、俺の意識は途切れていった。

銃声怖い…ヤバイよお

銃声怖い…ヤバイよお。

すでに携帯での連絡は済ませたものの、俺達は動けないでいた。

いや、流石にこれまでの付き合いで聡太君がこれくらいで死ぬとは考えられない。だからそっちはいいんだけど、問題は…

「ひっ…」

「…」

ワタシノ、ホカニ、コドモ、フタリ。

置いていくなんてありえないし、一緒に行こうにもライカちゃんは完全に腰を抜かしている。いや、それが普通なのだ。ライカちゃんはすごく冷静で、視線を追っているとゲーム機の反射で様子を伺っていた。どう考えても子供じゃないです本当にありがとうございます。

「どう？動ける」

「つつっ!!」フルフル

だよねえ。

「いや、ライカは私が運ぶので行きましょう。一人減ったので気づかれづらくなってると思います」

「…」

何なのこの子。

…行くか。

いい感じに聡太君が頑張ってるから、本当に何事もなく従業員用の部屋に入り込めた。ライカちゃんはすごく安心したかのように息を吐き、レイカちゃんはまだ警戒している。

「ん、あそこだね」

先程から見えていた光の方には、ドアと、堂々と待ち伏せしている男がいた。

…うん。何あれ。流石にこれは気づく——

「あれ？行かないんですか？」

ライカちゃんならまだしもレイカちゃんがそんなことを言った。嘘でしょ？見えてないの？

えー？実はこの世界で有名な置物だったりするのかな？

「っ！」

「わっ！」

「キヤッ！」

馬鹿みたいなことを考えていると、壁を挟んだ向こう側で耳が痛くなるほどの爆音が響いた。三者三様の驚き方をしながらも、確かに見た。

あの男もめちやくちやビビってた！

というわけで生きてるのは確定。いやまあ分かってたけど。それよりも、多分これは特異魔法だろう。透明人間かな？まあ場所が分かってるのなら何か先制で攻撃を加えたいところ。

だが、考えている時間はない。不審に思われたらお仕舞いだし、なんならあの男はこつちをチラチラ見ているのだから不審に思われる一歩前だ。

「ヤバそうだね。早く行こう」

突然の爆音に焦った感じを出しながら、急かすように二人を後ろに回しながら前に行く。獲物は見た感じただのナイフ。ただ、突然の爆音が響いたとき以外、息を殺したように静止している。明らかに慣れている動きだ。

ナイフの間合いまで、残り5歩。

まだ動く気配はない。

残り4歩。

動かない。

3歩。

動かない。——なら、チャンスだ。

「フッ！」

一歩を大きく踏み出してナイフの穂先を狙う。予想外の展開に男は動揺したのか焦ったように立ち上がり、そして、ナイフを落とした。

今！殴れ殴れ殴れ！

一発、二発ともろに入るのがいくつがあるが、もはやお決まりというように力が弱くて倒しきれない。だが、確実にダメージが入っている。それは確実だ。

よほど焦っているのか、さつきからたまに飛ばしてくる魔法は、当たることすらしない。

「ちよまつー何やってるんですか!？」

申し訳ないが、双子の質問に答えられるほどの余裕はない。言うなれば、たった一言。

「窓から逃げろ！」

命令形なのは申し訳ないが、仕方ないのだ。

「えっ、ええっ?」

「…ライカ。行こう」

困惑したようなライカちゃんの声。まあ外から見れば俺は空気と戦ってるように見えるわけだし仕方ない。レイカちゃんが引っ張ってくれてると信じたい。

と、そんなことを考えている余裕はない。気づけば、目の前の男は少しずつだが体制を整え始めていた。

(ああ、もう！自分の弱さに腹が立つ！)

聡太君であれば、いや、普通の人ですらもうとつくに気絶させているはずだ。だというのに俺は何をしているのか。流石にまずいので魔力の配分を大幅に増やし、短期決戦を目指す。

「レイカ。やいばさん。もしかして、見えない人と戦ってるの?」

「…分からないけど、多分そう。私達には見えない何かと戦ってるんだと思う。さつき空中に突然ナイフが出たと思ったら落ちていったし」

「…えっつと」

「気持ちちは分かるけど。逃げないと。それがやいばさんが望んでることなんだから」

「……でも」

「いいから！」

響くレイカちゃんの怒声。集中しすぎていたせいで、それに少し気を取られ、遂には攻撃を貰ってしまった。

「…くっ！」

(クソっ。集中しろー少しでも時間を稼がないと…！)

追撃に手から魔法を放ってきたが、それは効かないので気にしない。むしろその隙を強引に狙う。

「はあっ?」

透明状態で待機してただけに、やはり俺のことは分かっていないみたいだった。魔力を籠めた拳が、キレイにクリーンヒットする。

「見えた！」

レイカちゃんの声。どうやら殴ったことによつて見えるようになったらしい。しかし、よほど入り方が良かったのか、少し距離が出来てしまった。

——違う。あれはわざと後ろに跳んだのだ。

少し離れた距離を詰めるより先に、男の手が懐に伸びた。取り出されるのは、何の変哲もない拳銃。慣れたような手つきで引き金にまで手が伸びた。

「ダメ!!!」

「まっ」

双子の声が響いたその時、目を潰すのかと思うほどの閃光が部屋を埋め尽くし、遅れて轟音が響いた。

「カツ…！」

耳が痛い。目が開けられない。前には敵がいるのにつ…！
が、追撃が来ることはない。いや、相手も同じなのか…？

暫くして、やつと視界が晴れた。耳鳴りは収まらないが、それでも現状把握に務めないといけない。

まずは、双子。何を言っているのか分からないが、喧嘩しているみたいだ。だが、怪我はなく無事。

部屋自体も一部を除いて無事。

そして、無事とは言い難く、黒く焦げた床の上には――
衣服が破損した男が、ピクリとも動かずに倒れていた。

ヤヤヤ、ヤバかったあ。

ヤヤヤ、ヤバかったあ。

銃を向けられたときは終わったと思ったが、間一髪でそれは防がれた。

目の前の男にはしる火傷跡と、まだ耳を苦しめる爆音からして、ライカちゃんの雷が、俺を助けてくれたのだろう。

「ちよつ！大丈夫!? って……あー」

急いでこちらに來た聡太君は、この惨状に暫く黙り込むと納得したように頷いた。同時に、双子は俺が立っていることに気付いていなかったのか、駆け寄ってくる。

「あ、良かった……」

「ほんつとうに、申し訳ありませんでした！」

嬉しそうに飛びついてくるライカちゃん、美しい土下座を決めるライカちゃん。容姿は似ているのに中身は本当に似てない。

「えつと」

なんと言おうか。恐らくだが、ライカちゃんは俺に怪我をさせかけてしまったことを謝罪しているのだろう。まあ、それは心配するようなことではない。むしろ助けられたわけだし。

「いやいや全然。むしろ、あのままだったら死んでたよ。ありがとうね、ライカちゃん」

「〜♪」

嬉しさ全面で顔を擦り付けている様子は本当に可愛らしい。とはいえ、だ。

じつ……

「なに？」

ふんっふんっ！

「突然頭振ってなにがしたいの？」

ダンダンダン！

「え〜？……あ、分かった」

やっと意思が伝わって、聡太君はライカちゃんに見られないよう

に、男を引きずり出した。今は、ライカちゃんは気付いていないし、考えてもいないのだろう。自身のソレが、人を殺しかけた、あるいは、殺しているということ。

多分、絶賛聡太君が延命処置をしているはずだ。間に合えば良いけど、間に合わなかった時、その事実をこの子が知るのは、まだ、良くない気がする。

場合によっては心が乱れ、暴れるかもしれない。このくらいの子なら良くあることだが、この世界の、この少女に限っては、生半可にそれを許してはならない。

話をそらすかのように、俺はライカちゃんに尋ねた。

「ねえ、お母さんはいる？」

なんの脈絡もないこの質問。そして、何もなければ、絶対に聞かない質問。警戒色を濃くして、ライカちゃんはこちらをじっと見つめてきた。

「…ふふ。特に他意はないよ。ただね、お詫びとお礼をしないといけないから」

微笑んでみるけど、レイカちゃんはまだ警戒を崩さない。

「そもそも、あなたは何者なんですか？」

「何者、か」

どう答えるべきか？警察ですとか、適当な嘘を並べるべきなのか？

いや、嘘はバレるか。子供は、特にこの子なら鋭そうだし。

「そうだな。ただのボランティアさんだよ。そうでしょ？」

間違ったことは言っていない。故に、胸を張ってそう言える。

「いや、まあそうですけど…」

納得してなさそうなレイカちゃんの声。だが許して欲しい。実際なんと言おうべきかわからないのだ。沈黙が続くので、適当にライカちゃんを撫でておく。

ほわ〜〜

にへらと顔をダラケさせるライカちゃん。かわいい。

「います。まあゲームセンターに来ているんだから、分かったとは思いますが」

そんな沈黙の中、レイカちゃんは口を開いた。

「あんまりうちの親は私達に触れようとしません。原因は…いえ、なんでもないです」

悲しみに満ちていて、それを必死に隠すような声だった。

「そっか。会えるかな?」

「…出来ると思いますけど、今日はだめだと思います。多分いないので」

「え?大丈夫?」

「あ、はい。いつものことですし」

おお…いつものことって、それ育児放棄では…?いや、好都合っ
ちや好都合なんだけど、それはねえ。

うん。強引だけど、いつか。

「えーっと、そうだな…。じゃあさ、しばらく一緒にいない?」

「はい?」

「だからさ、お母さんとちよっとお話したいから、お母さんが来るま
で、お邪魔してもいい?」

「は?」

「泊まりに来るの!?!」

レイカちゃんの興奮気味な声が、よく響いた。

我ながらヤバいことしてるう…。

我ながらヤバいことしてるう…。

元男、現女。言葉巧みに幼い女の子二人しかいない家に泊まる。
通報案件だろ、コレ。

「お、おじゃまします」

「ようこそー」

「ほんとにきた…」

出待ちしていた二人に迎えられる。いつも、と言うか、普段なら二人を送っていくためこんなことにはならないはずだが、今回はこのことを報告しないとイケなかったので別々に帰ったのである。

ちなみに、犯罪者ハントもこれに伴い後回しにするので、暇になった聡太君はなんと、今回私達が襲われた組織を壊滅させて来るらしい。しかもほぼ一人で。意味がわからない。

やり方を尋ねても、詳しくは決まっていなくて濁されてしまったが、これまでのやり方的に、今回捕まえた仲間の一人に化けて侵入し、荒らしまわるとかなんとか。

声もいじれるため、命令を改変したり、仲間関係を悪化させたり、中々ネチネチとした、しかし集団には効果的そうなり方だ。

と、そんな話は置いておいて、今日からしばらくお世話になる家は、子供二人が住むにしてはしっかりとしていた。中はよく片付いており、寝室、リビング、個室2つにトイレとバスは別れていた。なんなら前世の俺のアパートより良い。これなら一緒に住まないと勿体なくね？

リビングに腰を落ち着かせ、二人からこれまでどうしていたのか尋ねる事にした。

「えつとねー。ご飯は…これ！」

ゴソゴソとダンスを漁って、取り出したのは一万円札。え、もしかして…

レイカちゃんの方を見ると、コクリと頷き、

「はい。お惣菜とか買って過ごしてました」

…まじかあ。いや予想は出来たけど…。お惣菜、は別にいいんだけどどうしても食品添加物とか気になるしなあ。リン酸塩とか、成長に悪いものもあるし。

ふっふっふ。では、やいばさんが一肌脱ぐときがきたみたいですねえ。

「よし。じゃあ今日は私が作ってあげよう」

「え、いやそれはちよつと申し訳ないというか…」

「カップ麺美味しいよ?」

「あはは。気にしないでいいし、カップ麺よりも美味しいよ。じゃあまずは買い物行こうか。何食べたい?」

俺は前世ではそこそこの期間自炊していた。好きな配信者が料理配信を始めれば、それを真似るように様々な物を作っていたので、レパートリーもそこそこある。さあ、なんでもこい。

「えつと…」

「そうだな…」

「うっうっうん」

一緒に首を捻って唸る二人。可愛いなあ。

「ハンバーグとか、オムライスとか、後はテレビで見たことあるやつでもいいよ」

そして、時折相談したりしながら数分後…

「ハンバーグで、お願いしますっ!」

悩みに悩んだ末、とても子供らしいものに落ち着いた。その後は、3人でスーパーに行き、ハンバーグの素材等、必要なものを買って揃えた。じつと見つめていたので、ついでにプリンも買ってあげる。

「と、いうわけで、召し上がれ!」

腕によりをかけて作ったハンバーグにコンソメスープ、ポテトサラダを並べていく。

お腹を空かせた二人は、しっかりと頂きますをしてから食べ始め

か。

あのとときの、巨大な水の塊。多分あれは、この子によるものだ。姉を助けたいが為の力の行使、だと思う。そうなれば、この双子はこの小さな身体でもすごい力を持っている事になる。

やっぱり、この子達は放っておいたらダメだ。この前の事件は何がきっかけなのかは分からないけど、被害が出るような事をやったのは事実なのだ。今回は見逃されるっぽいけど、同じようなことを繰り返せば次はない。

「いったい何があつたのか…」

安らかに眠る二人は、どこをどう見てもただの子供だ。出来るならきっかけを聞いて対策したいけど、多分それはまだ早い。もつと仲良くなつて、向こうから話してくれるまでじゃないと、余計な傷を抉るかもしれない。

だから今は見守っていこう。周りの人もそうだけど、何より、この子達が幸せで居続けられるように。

寝顔はヤバイ。

寝顔はヤバイ。

考えてみてほしい。ぼんやりとした頭で目を開ければ、目の前には天使が眠っているのだ。しかも二人。ヤバくね？

と、お陰でぱっちり目と目が覚めた俺は、起こさないようにしながら朝ご飯の準備を始めた。食パンがあったので焼くだけでもいいが、今日は日曜なのでせつなくなると、フレンチトーストを焼いてあげた。

甘い、大丈夫だね…？という不安を持ちつつ、寝ている天使を起こし始める。ゆっさゆっさと体を揺らせば「んう」と呟いて布団にうづくまる天使達。ウツ（尊死）

そんな子達も、フレンチトーストの香りを送れば起きた。空腹は最大の味方だね！

「おいしそう」

そんな声と空腹音が響いたので、俺は笑顔で食べていいよと言うと、子供達はリビングに向かった。ライカちゃんはダツシユ、レイカちゃんは壁を伝いながらと、なんとも別々の個性を見せてくれたが。

「いただきます！」

「…いただきます」

追いかけてリビングに着く前に、元気ないただきますが聞こえた。見ると、二人とも笑顔でフレンチトーストを頬張っている。しっかりと、心のメモリーに保存しておいた。

「そういうば、二人は学校どうしてるの？」

気になっていたことを尋ねた。見た目からはどう見ても義務教育の年齢だが、育児放棄的なのもされていたらっぽいし、確かめておきたかったのだ。

「学校行ってる！」

「近くの中学校です」

ほほう。

「給食？」

「いや、パンとか買ってますね。給食はないタイプなので」

「いやー！栄養偏っちゃう！この年でそれはまずいよ！」

「分かりました。お弁当も作ってあげます」

「ほんと!?やったあ!!」

「え、いいんですか?」

「当然」

「こんな可愛い子が栄養の偏りで病気になったりとかありえないからね！早起きなんて余裕よ！余裕！」

「ところで、やいばさんっておいくつなんですか?」

「突然そんなことをレイカちゃんは尋ねてきた。」

「突然どうしたの?」

「いえ、よく考えれば私もレイカもやいばさんのこと何も知らないなあって思いました」

「そういえばそうか。質問はしても、されることはなかったし自分から話した事もない気がする。なるほどなるほど。親密になるには、やっぱり互いの事を知るのが一番だしね！」

「いいね、それ。じゃあなんでも質問してきな?つとその前に、私ねー」

「俺はー」

「ん?何歳だ?」

「そもそも知らんやん俺。身長はだいたいこの二人よりも顔半分くらい高いけど、たかがしれてるっちゃしれてる。そもそも身長からは大体しか分からないから考えたって仕方ない。」

「何歳と言おうか?正直に分からないでも良いけど、それだと余計な事考えさせちゃうだろうしなく。…うん。」

「18歳だよ」

「随分間がありませんでした?」

「いや、17か18か分からなくなっただけだよ」

「じゃあ次私!えっと、やいばお姉ちゃんはー」

「適当に誤魔化したら、レイカちゃんが強引に話をかえてくれた。つてまつて!?お姉ちゃんだつて!お姉ちゃん!ヤバイよ!」

「お家どこなの？」

答えにくい of 答えにくい。流石に拠点の事は言えないから、何か適当に誤魔化したいけど…これって絶対に…

「どうして知りたいの？」

「お泊りしたい！」

ですよー！まあそれなら答えは一つだろう。

「ごめんね。実は聡太君…この前の強い子とシェアハウスしてるから、勝手に呼べないんだ」

「むー。残念」

ちよつとしよぼくれるライカちゃん。可愛い。反対に、レイカちゃんは少しもじもじしながら聞いてきた。

「えつと、じゃあ聡太さんとやいばさんってその、付き合って…？」

「いません！」

まあこの年頃の女の子だからね、そう思うのは仕方ないけど、それはそれとして俺が笑顔で中指たててくる野郎と付き合うわけ無いだろ！って待って。聡太君って男の子なの？そもそもアレに性別の概念あるの？

ふむ。また一つ、新たな謎が生まれたな…。

「付き合うつて、好きなひと同士がくつつくこと？」

純粹なライカちゃんはこてんと首を傾げながら尋ねた。俺もレイカちゃんも間違っていないなと思い、コクリと頷く。

「じゃあやいばお姉ちゃんと付き合おう！」

そのままギョツと抱き着いてくる。

……。

……。

……。

ウツ。

他人の家でお留守番ってヤバイよね

他人の家でお留守番ってヤバイよね。

お弁当を渡し、笑顔で二人を送ったあとそれに気付いた。何をしていたのかも曖昧だから、下手な事は出来ない。とりあえず感覚でお皿洗い洗濯風呂掃除とこなしたが、まだ正午である。

「ひくま〜」

二人が帰ってくるまで後4時間くらいかな？昼食も適当に済ませ、ダラダラと過ごすが、こうなるとなにかしないという焦りが生まれてしまう。

筋トレでもしようかなとタオルを地面に敷くと、この家の鍵が閉まった。

「!?」

ばつと時計を確認するが、まだ一時。余程のことがないと帰って来ることはないはずだ。なら泥棒かな？いや、だとしたら鍵が閉まる音の説明がつかない。ピッキングするならその前に開いてるか確認するだろ普通。

よし、隠れよう。これで俺は昼間に女兒二人の住む家に隠れる銀髪少女となるわけだ。こわ。

忍び足でもなく、鍵を開けていた人はズカズカとリビングに入ってきた。その人は髪色はライカちゃんやレイカちゃんと同じ黒髪で、何処かその二人の面影を感じた。

(母親?)

その女性は躊躇いもなく一万円を財布から取り出すと、机の上に置いて文鎮代わりに皿を載せる。そしてそのまま洗濯機の方に行き、何もせずに帰ってきた。そしてすぐにカーテンを開けて、干してある洗濯物を確認する。

「嘘でしょ……」

なんか啞然としている。多分この人は母親なのだろう。お金を置き、家事の様子を確認する。やるつもりだったのだろうか。

しっかしどうするか。ここですいませくんと話しかけるものなら

不審者扱い即逮捕だ。とはいえ次がいつか分からないから話しかけたい気持ちもある。

はあ。これなら堂々としてた方が話しやすかったのに…。

はっ。そうだ。外で会えばいいんだ。たまたま通りかかった通行人Aとなれば万事解決！世間話感覚で話せる！

となればさあ行動だ！泥棒の如く慎重に家から脱出する。幸いにもまだぼーつとしているから無事気付かれずに扉の前まで来ることが出来た。次の目標は音をたてずに扉を開けることである。まず扉を確認！ドアベルを確認！撤退！

…どうしよ。窓からは流石に…いや、待てよ。俺前世より小さくなってるから行けるのでは？

そおーつと、そおーつと…

脱出！小さな体とすとーんという効果音が聞こえてきそうなスタイルのお陰で上手く出ることが出来た。後者はともかく前者は訓練のとき前世との違いで苦しめられていた部分なのでこういう側面があつてよかつた。後は出待ちするだけだぜい。

数分後、やつとこき母親らしき人が外に出てきた。タイミングを見計らって、話しかける。

「あつああああああの！すつ、すこしいですか！」

「はーっ。」

ここで陰キヤになるなよオレえ！

よく考えたらこの状況もやばくね？

よく考えたらこの状況もやばくね？

だってさ、平日の昼間に貴方の娘のことを知っていますっていう外見年齢15歳くらいの銀髪の女の子が、その娘さんの住む家の前でそこから出てきた人に話しかけてるって状態なわけじゃん？

知らん！突き進め！

「あ、あの！お時間頂いてもよろしいですか！」

「え、はい…。貴方学生？」

「いや違います…」

「サボってる訳では無いのね。ならいいですよ。どうしましたか」

そう言つて、優しい笑みを浮かべてくる。どう見ても育児放棄するような人ではなさそう。いや、こういうのは外見では分からないと古事記にも乗っている。

「えっと、貴方の娘さんのことなんです！」

「はいはい」

頷きながらも、少し目の前の女性が緊張しているような気がした。

「私にくださいー！」

「はっ。」

先程までの緊張はどこえやら。女性は意味がわからないといったふうにならなっている。そして俺も、見切り発車で進んだことを後悔している。

「あ、えっと、間違えました！えっと、お宅の娘さんは特異魔法を持っていますよね！だからその、私が入っている組織的な場所で使い方とか、そういうのを学んで欲しいなど」

特異魔法。その言葉が出た時、確かにその女性は身を固くした。無意識に体を震えさせるほど。

「あ、えっと大丈夫ですか…？」

「…っ！……あの、中で話しませんか」

そう言つて、女性はレイカちゃんとライカちゃんの家、名字を使うなら天里家を指さした。

「その、まずはお聞きしたいのですが、もしかして娘が何かしましたか？」

「え、あ、はい。そうですね。ちよつと前に起こった異常気象とも言える落雷と、先日のゲームセンターでの強盗事件がありまして、その強盗のうち一人を倒したくらいですね」

やはりこの女性は、いや、母親は知っているのだろう。ライカちゃんやレイカちゃんの持つ能力のことを。

「ああでも、安心というか、どちらも罪にはとられませんよ。2回目とはもかく、1回目はその場の最高責任者が見逃すと言いつつ切ってしまったので」

「その組織というのはなんなのでしょう…？」

「あー、そうですね…」

言われてみればあの組織ってなんなんだろう。少なくとも特異魔法による犯罪を取り締まり、警察との連携もしているわけだから、非公認ではないのだろう。と、少し言葉を選びながらも、そう説明する。「なるほど…」

そうして沈黙が生まれ、時計の秒針がお節介にも時間の流れを意識させる。

「…えっと、ライカさん、レイカさんの友達としてお尋ねしたいことになるんですけど、どうして貴方は二人から離れるのでしょうか」

やはり、この親はどうにも毒親といった感じがしない。この家も、お金も、家事をしようとしたことも、そして今、真剣に考えていることも、どれもが子供を想っているように見えた。

「…レイカとライカは、生まれつき特異魔法を所持していました」

母親は、昔を思い出すように語りだした。

「私も、今この場にはいない夫も、そのことは全くもって悪いことだとは考えませんでした。むしろ神から与えられた才能であり、将来は安泰だと喜んだ程です。どんなものであれ、特異魔法は活かされるのですから」

「ただ、その子達の特異魔法が何なのかは分からなかったもので、普通の子供のように過ごさせました。共働きだったので保育園にも通わせず、何事もなく普通の子供でした」

「ある日、ライカが私と夫とレイカを呼び、新しい魔法を覚えたの！と言つて、公園に連れていきました。当時は小学生で、簡単な魔法を覚える時期なので、そんなものだろうと気軽な気持ちでした。その場には他の人はおらず、それだけは本当に良かったと思います」

「ライカが手を空に掲げると、雷が落ちました。あまりにも突然に響いた爆音と閃光に私達は動転してしまい、それはレイカも同じでした。間近に迫った雷の衝撃は、大人ですら動転する程で、レイカにはそれ以上の衝撃があったのだと思います。身を守るためなのか、大量の水が彼女の周りを止め処無く流れ始めました。」

「はじめは雨程の勢いと水量が、川、滝と勢いと水量は増していき、暴走し始めました。公園と言う狭い範囲内で水は暴れて、遊具やベンチを動かして、公園は滅茶苦茶になりました。そのレイカに関しては、通りすがりの人が止めてくださり、犠牲もないこともあって公園の莫大な修理費を払うだけで済みましたし、お金にはそれほど困っていませんでしたので払える範囲だったのが幸いでした」

「一件落着かと思えば、そこからが地獄でした。私と夫は愛していた子どもたちに恐怖を覚えてしまいました。ライカとレイカは私達にきつちりと謝ってくれて、それを許したのに、私達はずっと引き摺りたまま、生活にすれ違いが増え始めました」

「安心できるはずの家が最も気張らないのいけない場所になってしまいました。夫は精神を病みました。夫が頼れなくなると、私もすぐに音を立ててしまつて、逃げてしまいました」

語るたびに母親は涙を流していた。

「お金と、一週間に一回の家事だけをして、顔も見ずに逃げてしまうのです。たまに、顔を見ようとすれば体は震えてしまいますし、声も。もう、あの子達の傍にはいられないんです」

そこで、母親は俺を腫れた目でしつかりと見てきた。

「娘をよろしく願います」

何かを噛み殺すような声は、とても重かった。自分では押しつぶされそうな程にはその重圧は大きい。だけど、

「…はい」

話を聞いた代償として、それは背負うべきなのだと思った。もし潰れそうなら聡太君でもなんでも使って、強引に。

「ありがとうございます」

だけど

「せめて、別れを告げるくらいはどうですか？」

グスグスと泣く声をきっかけに、途中から聞いていた二人を、ようやくと母親は認識した。後から聞いた話だと、学校が早く終わったらしく、俺を驚かせようというライカの提案で忍び足で入ってきた二人は、母親の存在に気づき、呆然と聞いていたのだという。

母親が震えながらも二人に話しかけたのを確認して、俺は部屋から出ていった。邪魔でしかないこの存在は、いるべきではないと思ったのだ。

その後、寂しさを埋めるように抱きつき、泣いていた二人には何も話しかけなかった。ただ、二人が持つ合鍵が、答えを如実に物語っていた。

貰った休みが余ったけどここまで余るのはヤバくね

貰った休みが余ったけどここまで余るのはヤバくね。

実を言うと、もつと時間がかかると思ってたので一ヶ月くらい貰っていたのである。いやまあ、その前は数ヶ月くらい働き詰めだったのだが。

感じたくはなかった罪悪感の元、深夜に拠点に一度戻ることにした。報告のため、というよりメインはお願いの為でもある。

俺は決めた。これからは、二人と住むことを！

正直に言うと、はじめはなんとか懐柔して仲間にして、拠点に連れ帰ろうと思っていた。ただ、たった三日間で尋常じゃなくらいにこの家族に入れ込んでしまった。

なので、あの二人が望むなら、それを叶えてあげたいのだ。というわけで、二人は家に居たいと言い、学校も通い続けたいらしいのでそれを伝えるに行こうというわけである。

旅行くらいの期間を空けた拠点は何処か懐かしい感じがした。まあこのお願いが通ったところで拠点にはいつでも来れるので感慨とかはないだろう。いつも通り厳ついおじいさんに挨拶してから長い階段を下っていく。というかあの人がいつ寝てるんだ？

「失礼しまーす」

「お、やいばじゃん」

時間が時間なので小声で入ったのだが、しっかりと返答があった。声のした方向にいたのは爽さんと隊長。聡太君は流石にいない。

まあ聡太君はあんまり関係ないので、カクカクシカジカと事情を説明する。

「———ということ、お願いできませんか？」

「いっよ」

わお。あっさり許可が出た。

「ちなみに聞きたいんだけど、空いてる時間とかある？」

「あー。多分暇な時間は出来ませぬ。でも二人が帰ってくる頃には居てあげたいので、お昼から3時間くらいだと思います。後は今みたい

な深夜ですね」

「ふむふむ。なるほどね…。なら、休み分は仕事もないからゆつくりしてるといいよ。まあ体が鈍らないようにジム感覚でここに来たほうがいいとは思うけどね。で、休みの後なんだけど、基本的な活動は夜だから、深夜12時くらいにここにきてほしいな。」

深夜12時。最近の若者（中学生）は余裕で起きてそんな時間帯だが、あの二人は食生活以外は超絶健康的な生活を送っていたのでその時間くらいには寝ている。なので行けそうだ。

「はい。大丈夫です」

「じゃあそれで。ちゃんとその仕事の日はちゃんとお昼寝しとくんだよ？寝ぼけて死んだら死にきれないし」

「あ、はい。分かりました。ってあの、仕事の日とかはいつ報告貰えますか？」

「そりゃ前日に…そっか、やいば無かったね。携帯。…分かった。今は、開いてないね。明日の昼来れるかな？携帯買いに行こうか」

明日の昼。普通に二人は学校だから居なくても大丈夫だろう。しかし、携帯契約にはいろんなものが必要だった気がする。特に身分証明書とかどうするんだ。

「それはなんとかするから、それよりも早く戻りな？起きられたら悲しい思いさせちゃうんじゃない？」

「そうですね！分かりました！」

うおおおお！身体強化ア！はっしれえええ!!!

そんなこんなで翌日。美味しい朝食（自画自賛）を作り、お弁当を渡して見送ると、なる早で家事を終わらせる。念のため書き置きの手紙も残し、準備万端と家を出た。鍵はちゃんと二人が持っていたので大丈夫。

この世界の携帯を余りよく知らない。でも、家電等町中を見る限り、スマホに夢中の人も何人かいたわけで、前世との変化は少なそうだ。故に、そんな携帯が楽しみである。

「お、きたきた。はいこれ」

期待を抱きながら拠点につくと、爽さんに何かを渡された。

どれどれ…『竹本やいば、住所……………』

撮った覚えのない写真とともに、身分証明書を渡された。そもそもここに写っている俺はスーツを着ているけど、生憎まだスーツを着たことがない。つまり、ニセモノ？

え？

それはやばくないっすかあ？

それはやばくないっすかあ？

警察との連携もしてるから、公にされてる系の組織かも知れないけど、身分証の偽物作るのはアウトじゃないの？許しちゃっていいの？というかこの写真いつ撮ったの？

「なんか勘違いしてそうだけど、それ偽物じゃないよ」

「ええ？この写真撮ったことないですよ？」

「いや、それは聡太がいるからさ…」

いやそうじゃねえか！というか待って、これが出るんだから、例えばコスプレとかをした写真とかも勝手に作れるってわけだよ。え、他人のデジタルタトゥー作り放題じゃん。やっぱヤバいねあの特異魔法。

「改めて聡太君の恐ろしさを感じますね…」

「まあそうだね。あ、あともうちよつとかかるけど、あの二人の身分証も作るし、それに伴ってやいばも保護者となるようにもしておくからね」

「もうなんでもありませんね…ありがたいですけど」

「じゃあ買いに行こうか」

「はい」

テレレレツテツテッテー やいばはスマホをてにいった！

スペックを紹介するぜ！世代的には最新の1つ前！特に前世の物と違いはなかったぜ！はい。

スマホ自体に不満はないけど、魔法がある分期待はあったので、少し残念だ。便利なのに違いはないので構わないのだが。

「じゃあこれですと、はい」

「はい。じゃあここに送られてくると言うことでもいいですか？」

「うん。じゃあこれで終わりだね。体が鈍らないようにちよくちよくこつちには来るんだよ?」

「分かっていますよ。ありがとうございます」

某メッセージアプリの友達交換をして、爽さんと別れた。個人的には仕事の連絡は専用アプリでもあるのかと思っていたが違ったらしい。

どれだけ早くともあと一時間は帰ってこないの、ゆっくりと歩き、街中を見ていった。やはり、何も買わなくとも見ているだけで中々楽しい。ユニークなデザインが多いおかげである。

「あ、あのー!」

と、歩いていると、声をかけられた。振り返れば、全く知らない女の人。指輪をつけているので誰かの母親とかだろうか?

「竹本やいばさんですよ。ほんつとうに!娘を助けて頂きありがとうございます!」

ガバツと頭を下げられてひたすらに困惑する。誰だよ娘。つかなくて俺の名前知ってるんだ?

「え、あの?とりあえず頭上げてください。あとどつかでお会いしましたか?」

「いえ、初対面ですね。以前娘が暴漢に襲われていた時に助けてくださったと聞き、その助けてくださった方が銀髪の赤い目のことだったので貴方なんじゃないかなと」

いやこつちの返事も聞かずに断定するのはどうかと思う。でも普通貴方しかいないと言われれば反論は出来ない。むう。

しかし、名前は合っているので助けたことは事実なのだろう。うん。娘だから女の人で、この人若いから多分子供。そもそも覚えられてるってことは多分聡太君じゃなくて俺が助けたんだよね…。あつ。

「もしかしてここら辺での特異魔法の…」

「そうですそうです!まさか巻き込まれてしまうとは…。改めて本当にありがとうございます!」

そういえば会ってなかったな。お礼云々言われてたけど、完全に忘れてたわ。

「ぜひお礼をさせてください！」

「え、いやそれは…。別にいいですよ。仕事ですんで」

「そんなこと言わずに！お時間は取らせませんから！」

セールスマンはたまたま町中のアンケートか。時計を見ても、まだ時間に余裕はある。

「いいですよ」

「ありがとうございます！」

「というわけで、どうぞ！」

少し歩くと、おそらくこの人の家であろう所まで来た。玄関に置いていたのか、すぐに戻ってきたその人の手に握られていたのはなにかのチケットと、袋である。

「えっと、これは…」

「水族館のチケットです！もうすぐ期限が切れるんですけど、私の家族は飽きたのか行きたがらなくて…。あ、もう一つはただのお菓子です！余り物を押し付けているみたいで申し訳ないですが、どうぞ！」

渡されたチケットを確認すると、期限は今週の土日で終わり。枚数は4枚。ふむ…。最高か？神か？

「ありがとうございます！ありがたく使わせてもらいますね」

「はい！ところでお茶とか…」

「あ、ごめんなさい。それは時間が不味くて…」

「あ、そうですね。無理言ってしまうごめんなさい。くだいですが、本当にありがとうございます！」

「というわけで、水族館に行こう！」

「えっ？」

ほかんとする二人に、俺は堂々とチケットを掲げた。バアアアン「チケットを4枚貰いました！期限は日曜日まで！一人までだけど、

友達を誘えるよ！」

「おおおおおおお!!!」

「本当ですか！」

「本当です！夢でもありません！」

「わーわーい!!!」

「ありがとうございます！」

二人の笑顔が見れただけで大満足。感謝しないとね！

可愛さがヤバい

可愛さがヤバい。

水族館当日。お気に入りと言って二人が着た服はめっちゃ可愛かった。なんていうのかは分からないけどとりあえず可愛い。ならそれでいい。

今日に備えて色々と下調べを済ませておいたので、準備は万端である。イルカショーもあつたので整理券の配布場所の確認と、それ用のカップ。ハンカチやティッシュにエコバッグと予定外のこと起きてもいいように使う予定の3倍くらいのお金。残る不安要素は、レイカちゃんとレイカちゃんの友達である。

誰か一人が楽しめなければ、全員に広がってしまう。だからこそ、レイカちゃんとレイカちゃんの為にも、全員楽しめるようにしなければ！

少し浮足だっているように見えるレイカちゃんに手を引かれて、待ち合わせ場所へ向かう。るるん気分のこの子は本当に可愛い。動きには出していないが、表情はニッコニコのレイカちゃんも非常に良い。

さて、待ち合わせと言ったものだが、手を引かれ向かった場所は住宅街。なるほど、まあ中学生であれば家も近いわけで、当然かと納得する。ただまあ問題なのは――

「えっ」

「ああ…」

つい先日。俺がこのチケットを手に入れた家が、待ち合わせの相手の家だと言うことだ。世間狭っ。

「なるほど、そういうことがあつたわけですね」

「お姉ちゃんカッコいい！」

顔合わせの瞬間、微妙な間が生まれてしまったことで知り合い？と

聞かれたので正直に答えた。まあ別にそれはいいのだ。この子：名前知らないや。この子が二人の友達というなら全然良い。

しかし！このチケットはこの家から貰ったものなのだ！その時言われたのは”家族が行きたがらないから”。皆楽しもう計画を土足で踏みにじられた気分だ。だが、まだ希望がある。それは、

友達となら新鮮な気分で楽しめるかもく計画！

…。あくライカちゃん可愛いなあ。

「あの、その…」

さて、問題のこの子だが、さつきからずつとこの調子だ。はじめのライカちゃんレベルでキョドっている。ただ、ここで失敗すると後にも響くこと間違いなし。とりあえずは自己紹介からである。

「よろしくね。私の名前は竹本やいば。なんて呼んでくれてもいいよ」

「はっ、はうっ！わ、私の名前は蔵元響ですよろしくお願いしますっ！」

間に句点が入らない程の早口。見れば真っ赤に頬が染まっている。

「響、どうしたの？なんでそんなに緊張してるの？」

「だって！だってえ!!」

ほぼ涙目である。というか、響ちゃんは俺の事をどう思っているのだろうか？さつきからずつとガチガチだし、レイカちゃんの言うとおりに緊張してるのかな？

「響ちゃんね。よろしく」

「ちゃんっ…!?ありがとうございます！」

「え…うう、うん。まあそろそろ時間だし、行こうか」

「おー！」

「はい」

「よっよろしくお願いしますー！」

三者三様の返事を聞いて、俺は歩き出した。しかしまあ、響ちゃんなんかキャラ濃そうだわ。

さて、いざたどり着いた水族館。スタッフさんの優しい笑顔と対応に、ライカちゃんは縮こまり、逆に響ちゃんは平気そうだ。やっぱりライカちゃんは人見知りで、響ちゃんは俺のみ人見知りなのだろうか。

まあそんなことは置いて、整理券の場所に向かいながら道中の水槽を見て回る。やはり、水族館というのは良いもので、他3人も楽しそうにしていた。個人的にはオオサンショウウオが隅に何匹も重なっているのが好き。

「わあ……！」

大きな水槽に見とれる二人。多くの魚が優雅に泳ぐその姿は、やはり水族館の醍醐味と言っても過言ではない。少し暗めの部屋が、これ以上ない程に引き立たせている。

ただ、響ちゃんも見てはいるが、二人よりも少し落ち着いた反応だ。どれだけ見ても飽きないと言わんばかりの二人の反応に少し驚いているくらいである。

「ねえ、響ちゃん」

「ひやいつ！なんでございますでしょうか！」

「ふふっ。そんなに緊張しなくていいよ」

「はっ、はいっ！」

またまた顔が真っ赤だ。りんごみたい。

「あんまり良くわからないんだけどさ、水族館って嫌いだったりする？」

「へっ？…全然そんなことないですよほんとにマジで安心してくださーい！」

「そう？それなら良かった。でも来たことはあるんだよね？」

これはあれかな？気を使ってるのか、単純に思春期ゆえの家族と行きたくない的な感じなのかな？

「あっはい。お母さんが好きなので何回か行ったことがあるんですけど、その、クラゲが好きすぎて全然動かないんです。だからちよつと嫌で最近はいんまり……」

「あー」

まあ確かに興味の薄いところに長時間は辛いところがある。まあそっち方面のマイナスならなんとか出来そうである。

「ちよつと私トイレ行ってくるね」

「は、はいっ！」

楽しそうに見ているうちにさっさとトイレを済ませようとするき出す。そして、ある人物を見つけて固まった。

「ん？」

さもそれが当然だと言わんばかりに、俺が過去に捕まえた犯人が、清掃員として働いていたのだ。

待て待て待て。それはヤバいって。

待て待て待て。それはヤバいって。

出来ることなら無視したいけど、万が一の事を考えればそんなこと出来るわけがない。いや、わんちゃん他人の空似という可能性も全然ある。と、言うわけで。

「あの〜すみません」

「はい。どうしまし…」

目を見開き、固まる男。これはもう確定ですね。

「ねえ、なんでここにいるの?」

「ちよちよちよちよつと待ってくれ! 違うんだよ! これはあれだ! 俺の特異魔法が評価されて、偶々警察で雇ってもらえたんだよ! 別に俺がやってたのせいぜいが万引きだろ? だからそんなに罪重くなかったんだって!」

「へえ〜?」

「いや本当だから! 考えても見ろって! 物をワープさせるなんて滅茶苦茶に有用だろ? 俺は万引きとか逃走にしか使わなかったけどさ、仲間を現場に移動させるときとか、リミットが迫った爆弾をとりあえず飛ばすとか色々あるだろ?」

ああ。そういえばこいつそういうやつだったか。たしか、自分以外をワープさせる特異魔法で、俺には効かないから油断したところをぶん殴って終わったんだっけ。

怪しくはあるけど、ひとまずは信じといてやろう。こいつは人を飛ばせるといっても空とかには出来ないから、そんなに危険という訳じゃ…ここだとやばくね? 水槽の壁でも飛ばされたら大惨事だよ? いや、いや、流石に大丈夫でしょ。うん。

「まあそれは分かったけど、じゃあなんているの? しかも清掃員つばい格好して」

「え、いや、その…」

「言えないの?」

「当たり前だろ! というか察せよ! 詳しくは言ったらダメだと思っ

らばかすけど！言ったらアレだよ！パトロール！」

ああ（察し）。それにしても最近面倒事多くないですか？一週間前にテロリストいたばっかだよ？いや、あれの対象俺だけど！

まあ、それならいい、かな？とりあえず警戒はしておくけど、警察が事前に察知出来ているならすぐになんとかなるだろう。そうと分かれば早く戻らなきゃね。

「ふーん。まあ邪魔して悪かったね。じゃ」

「お、おう。頼むからもう余計なことはやめてくれよ？」

「お前別に私のこと知らないだろ」

なんで知ってるかのように話すのか。別に余計なことしたことあんまりないよ。

3人のところに戻り水族館めぐりを再開。ヒトデの感触に叫んだり、深海魚に怖がったり、ペンギンに心を奪われたりと中々良いリアクションをしてくれた。ドクターフィッシュもいて、4人全員で手をつけてみると、導かれるようにレイカちゃんに集中した。ちよつと寂しい。

そんなこんなで時間は巡り、ついにイルカショーの時間になった。

「おおーっ！すごいすごい！」

イルカのハイジャンプに芸の数々。さつきからずっとテンションが上がりっぱなしだ。前世のものと違い、こっちのイルカショーには魔法も使われている。次々とカラフルな輪っかが空中に出てきて、それをイルカがくぐっていく。

時にはなにもないのに水がハネ、それをバツクにイルカがポーズを取るといようなパフォーマンスもあった。飼育員さんの掛け声のおかげで、なんとか写真を撮る事も出来たし、大満足だ。ちなみに、カップのお陰で大丈夫だったけど、この席は他の所よりも多めに水をかけられた気がする。でも皆「キヤーー！」と、満更でもなさそうなのでOKです。良くやったイルカ。

『名残惜しいですが以上で終わります！最後にイルカちゃん達に大き

な拍手を！」

そんなアナウンスとともに、会場は拍手に包まれた。

「私あの子が一番好き！」

「いや、この子の方が可愛いよ」

感想を二人が興奮した様子で話している。響ちゃんも経験済みではあるけど、なかなか満足そうで二人に混ざって話したりもしていた。

辺りには夕焼けが差し込み始め、夕暮れを伝えるアナウンスが入った。見るところは全部見たし、この子達にも少し疲れが見えた。そろそろ潮時かなと話し掛けてみれば、お土産屋さんに行きたいとレイカちゃんが言った。反対する理由もないし、終わりにはちようどいいかなどそれを了承。

そして、これまで全くなんのトラブルのないまま楽しめたことが、逆にこれから何があるかを伝えてきているようなものである。

ドンツと、地面が大きく揺れた。

「地震ですか!？」

「わ、わ、わ」

「ライカ落ち着いて」

「響ちゃんも落ち着いて。なるべく固まっておこうね」

ライカちゃんと響ちゃんが不安を抱くのと同じように、周囲の家族やカップルにも不安が広がっていく。なんにも無ければ良いなど考えていたが、やっぱりそれは甘かったらしい。

ただ、今回に限っては俺をターゲットとしたものではないだろう。警察が事前に動いているということは計画的な犯行であるのだから。知らんけど。

(逃げといた方が良かったかな?)

無駄に貧乏性を発動させるべきでは無かったかも知れない。警察がいるのだから未然に防げるんじゃないかななんて悠長過ぎたか。

まあ取り敢えず助けをーって。

「うっわ。圏外…?」

「えっと、どうかしましたか?」

不安にさせないようにレイカちゃんには黙るべきかなと思ったが、周囲の人も同じように考えたみたいで、ザワザワと困惑したような声が響いた。流石に何でも無いは無理そうだ。

「いや、携帯が圏外ってなってるんだよね」

もしこれでワープ君が警察側じゃなければ詰みなんじゃないだろうか。連絡出来ないし。いや、まだただの自然災害という可能性も無いわけではないが、流石に薄すぎる。

そうこうしていると、二つの声が響いた。

「オラオラオラア！全員従え！」

パンパンとなんの躊躇いもなく銃を乱射し、全くもって本来の役割を果たせないであろう迷彩服に身をまとう男達。

「2階の非常階段付近！対象を発見！銃を持っています！」

突如現れた黒い隊服と大きなシールドにヘルメットを被る完全武装の警察。後清掃員。

そして、そのド真ん中に私達。

「はあ？」

落ち着け、これはヤバい！

落ち着け、これはヤバい！

ふざけんなよこっちは子供がいるんだぞ！あーもうっ！

「ふえっ」

「…」

「ひゃっ」

取り敢えずテロリスト側から子供達を隠すように移動させる。銃であれば余裕で死ぬるが、それ以外の遠距離手段ならなんとかなる。

「今すぐ一般人を保護しろ！」

「動いたら撃つぞー」

もはやテンプレとしか言えないやり取りを繰り返す。というか見てるんだろ！早くしろ！

咄嗟に見えた男を睨みつけ、体から魔力を抜く。

そして、次の瞬間には警察の後ろにワープしていた。

「!?」という顔をしている子供達を前に、ゆっくりと息を吐いた。あの男が本当に警察側で良かった。さて、後は警察が攻勢に移っておわー

「ぐわっ」

バタツ

「グツ」

バタツ

「ガツ」

バタツ、バタツ、バタツ。

何もせずに、次々と喘ぎ声をあげて倒れていく。発砲音はもちろん無く、男達が動く様子もない。その勢いは止まらない。

「クツッがあー！」

しかし、その流れは強引に断ち切られた。テロリスト集団のワープ。清掃員面のお陰か優先的に狙われることの無かったそれは、大量の汗を吹き出して膝をつく。

「A班！一般人の誘導！残りは倒れている者達の様子を見ろ！しばらく

く転送は使えない！」

すぐに意識を切り替えた警察の素早い行動で、迅速な避難行動がなされる。恐らく、テロリスト集団はまだこの建物にいるのだろう。外ではなく、一箇所に集めようとしている。まあ、外に放つ方が不味いのは分かる。

「ありがとう。助かった」

「ぜえ、ぜえ。ど、どんなもんよ」

まったくもって今回は命を救われた形である。というか便利だなその特異魔法。人を助けるのにも陥れるのにも使えるし、いや、ほんとは捕まえられて良かった。そして前の罪が万引きとかいうしょぼい罪で良かった。

「お母さんらも、こっちへ」

なんか母親に見られてるらしいけど、あんまりこの子達と身長は変わらないよ?とか、どうでもいいことは置いておこう。それよりも、ここは任せて大丈夫なのだろうか。まだ、警察は倒れたままだ。

「…ふむ」

「あの、」

考えていると、レイカちゃんが声をかけてきた。すぐにできる限りの笑顔を作って対応する。

「どうしたの?」

「その、悪い人達。倒しませんか?」

ちらりと掌から水を出して、少女は囁いた。

……だからこの子人生何周目だよ。

さて、そうと決まれば現状確認である。まず、俺が確実に守らないといけないのがレイカちゃん、ライカちゃんそして響ちゃんである。他の方々は申し訳ないが警察様におまかせしよう。

その警察だが、数十名ほどがまだ起き上がらない。フル装備の警察が傷一つつかずに倒れるのは、どう考えても特異魔法としか考えられ

ない。そして、それに対する対抗札はない？のだろう。まだ確実とは言えないが。

さて、銃を全員が持ち、一人遠距離で無音で少なくとも気絶させる特異魔法を持っているテロリストチーム。キツすぎだろ。

「作戦は？」

ゴニョゴニョ……

なるほど。であれば、一瞬でいいからテロリストを足止めさせる必要があるらしい。しかも、意識はどこかに向けさせる形で。

警察が倒れる原因不明の攻撃は俺でなんとかなる。でも俺は、銃でなんとかなってしまおう。あーくっそ。どうすれば…あるやん。

「ねえ」

「なあ、ん、だよお」

「アレ持つてる？」

指をさした方向を億劫そうに男は見た。

「ああ。ここにはねえな。まだ別室」

望み通りの答えに、自然と口角が上がる。

苦しそうに息を切らす男に、俺は微笑む。

「な、なんだよ」

「装備貸して！」

ニツコリと、負担がかかる事承知で言ってみせた。

「は、あつ。こ、これで、もう無理だぞ」

特異魔法に必要な魔力がかなり少ないというのに、魔力切れで動けなくなった男に手を合わせる。思えば、名前を知らないこの男を酷使し過ぎなんじゃないだろうか。どうでもいつか。

よし、準備は出来た。後はここにテロリストが来るのを待つだけである。

「あのっ。何をするつもりなんですか…？」

おっと、こんなところに組織でも何でもない一般人がいる。ええつと、誤魔化しは…別にいらないよね。というか知ってるか。

「テロリストを倒そう計画だよ」

「え、いやいやいや危ないですよ警察に任せましょうよそんなやいばさんが死んだらみんな悲しみますよー」

「ちよつと落ち着こう？ちゃんと、死なないためにこうやって装備着てるんだから」

物凄い早口でまくしたてるなこの子。いやまあ、この子が言うことは何も間違つてないのだが…世の中正論が正しいことなんて少ないよね！

「でもさ、警察さんが減るたびに危なくなるんだよ？それなら、早い方がまだ死ににくいでしょ？」

要するに囮は多いほうがいいよねということである。もつと言え
ば、それで銃よりも特異魔法を使ってくれるなら尚良し。

「でも、それは…」

「大丈夫。一応この前も助けたでしょ？絶対に私達は負けないから」

「でもあの時は最後に…」

「だから大丈夫。今回も、心強い仲間がいるからね」

ドアを蹴破る音が響き、悲鳴と、銃声に紛れ、俺は飛び込んだ。

この作戦……絵面はやバそうだね！

この作戦……絵面はやバそうだね！

当たり前だが、警察さんのような完全武装なんてつけている暇がなかったのも、簡単に着けられる部分だけの装備だが、安心感は違う。

だからといって当たりに行くのは普通に死ぬるので、全部避ける想定、当たっても、運が良ければ助かるという意識で走る。

「なっ！」

驚く声が響くのは、警察の方。当然ながら、一番想定外なのは警察さんなので仕方ない。というより、ここで同じように突っ込まれては作戦が瓦解する。

一番大事なのは、一人でも多く倒すことではなく、一人でも多くこちらに意識を裂かせること。特に大事なのは特異魔法持ち。理想をいえば、その対象を特定するところまでいきたい。

「なんだこの女？」

油断してくれてありがとうございます！動こうとしない男を前に、愛用武器のスタンガンを取り出す。1回目の気絶未満の威力じゃ足りないと言え、特別なのをくれたので首に当てれば一発だ。死ぬまでいかなないのでとても使いやすい。

「こいつ——」

うし。一人。まあこれで全員の注目が集まっただろうし、結構な人の視線が俺に行くと思う。と、いうわけで！

ドプツと、水の塊が落ちてきた。

「何だ何だ!？」

その水はテロリスト集団を包み込み、葉に乗るような水滴をバカでかくしたようなものへと変わる。ゴポツと、数名が驚きから大事な大事な酸素を吐き出した。

いや。無事成功だね！当然だが、この水はレイカちゃんによるものだ。このまま放置すれば、どんな超人でも酸欠になる。もちろんそれを防ごうと、中のテロリスト集団は暴れる。大きな水滴から出よう

とする。

「はい、戻ってね〜」

飛び出そうな足をゆっくりと押してあげた。本来のパワーなら、もしかしたら足りないかもしれない。でも、水の中に相手はいるのでとても軽いし、相手の動きは鈍い。

それならお前はどうかと言われれば、そもそも俺は水の抵抗を受けない。さっきも言った通り、これはレイカちゃんの特異魔法によるものなのだ。だから、俺に触れた瞬間消えるってわけ。

そして、この作戦のもう一つの穴として、レイカちゃんが直接狙われることにある。銃は使えなくとも、少なくとも1名は特異魔法を持つものがあるのだから、俺という特大な囷が必要なわけである。

後、これは自分のエゴではあるのだが、溺死させるとレイカちゃん何か考えてしまうかもしれないから、気絶するくらいにしておきたい。……というのは建前で、多分本当は俺が人の死体を見たくないというだけなのだろう。

そういうわけで、完全に空気を吐き出しきつたやつから引きずり出していく。後、追い打ちにスタンガンも忘れない。ちなみにこの場合、体の表面の方に水があると、そつちに流れて内蔵とかへのダメージが軽減されるらしい。だから安心？だ。

だが、一つ問題が。これ特異魔法持ち誰？なんか全員苦しそうに上向くだけなんだけど。いやまあ、そこまで頭回らないならそれでいいんだけど、でも特定はしたいよなあ〜。

カタツ

「何!?!」

上から響いたかすかな物音に、速攻で反応して目を向ける。すると、ダクトのようなところから、ゆっくりと拳銃が突き出されていた。

「っ!」

反射的に体を捻る。瞬間、弾丸は俺の体を擦って地面に跳ねた。

すぐに移動。水滴の塊の後ろに回る。流星に仲間ごと撃つことはないらしい。

(迂闊に動けないな)

まあここで伏兵に気付いたところでこの状況が変わるとは思えない。ここで互いに何もしなくても、相手の戦力が刻一刻と無力化されていくだけなのだから。

後、居場所が分かれば…

「ガボツ?!」

はい。レイカちゃんの餌食です。で、多分だけどこいつは…

「グッー!」

うん。警察さんが倒れたから、十中八九コイツだわ。というわけで、銃は水中なのでまともに使えない。体は水で動き辛い。特異魔法は俺には効かない。

「えいつー!」

ビリッと、首にスタンガンを当てて、戦闘は終わったのだった。

ちなみに、他にいないのか確認が済んだあと、レイカちゃんを褒めちぎろうと三人の所に寄ろうとすると、警察に呼び止められた。

「あの、お話を聞かせて貰ってもいいですか?」

「あっはい」

任意（強制）で色々と質問された、が、爽さんの名前を出すとそれだけでその質問時間は終わり、帰っていいと言われた。

おい、ほんとにそれでいいのか?

爽さんというか組織って絶対になんかヤバイよね。

爽さんというか組織って絶対になんかヤバイよね。

そんな疑問を思い浮かべたが、クツソどうでもいいので気にしない。そんなことよりライカちゃん和レイカちゃん。後響ちゃんだ。

さて、今回はただ水族館に行くだけのつもりが、とんでもねえ事件に巻き込まれてしまった。俺やレイカちゃんライカちゃんは一応そういうのを倒す組織にいるのでまだいい。いや良くないけど。

ただ問題はマジでなんの関係もない響ちゃんである。最終的に助けられたとはいえ、一時期は命の危機を感じさせるところまで来てしまったので、アフターケアはしっかりとしないと。

とりあえず今は帰り道。疲れ果てたレイカちゃんを支えるようにライカちゃんと響ちゃんが寄り添って歩いている。いい関係だなあと感心する。

「三人ともごめんね？こんなことになっちゃって」

「いえ、別にやいばさんが原因というわけでもないでしょうし」

「うん！」

「わ、私もそう思いますっ！」

うう、ええ子たちやでええ。

「ありがとう。ところで響ちゃん。どうしよつか？」

「どうしようってのは…？」

「お母さんになんて説明しようかなって思っって」

少なくとも、警察が説明に来ないなんてことは無いはずだ。だってなんか他の人達にも話を聞いていたし、しかも響ちゃんは未成年なのだから。…どうなんだろ？

「ええつと、助けてもらったとか…？」

「うん。まあ一先ずはそれでいいかもだけど、どうする？私も一緒に説明しようか？」

「い、いえっ！そんなことにお手を煩わせるわけにはっ！」

うんうん？まあ一人で出来るならそれで良いけど…。まあ一応連絡先とかは交換するか？

「あ、なんか携帯とかある？もし親御さんに上手く説明できなかったら、電話してもらうとか出来るけど？」

「えっ！良いんですか！ありがとうございます！」

バツと取り出した響ちゃんの携帯と連絡先を交換した。すごい満足気に響ちゃんはお礼を言っただけど、お礼を言うようなことか？

「ばいばい。響ちゃん」

「じゃあね！」

「さようなら」

「うん。ばいばい。後、やいばさん。今日はありがとうございました」
響ちゃんの家の前まで行き、別れを済ませた後、手を繋ぎながら帰る。

「今日はレイカちゃん大手柄だね！ご馳走にしよっか！」

「え！やったねレイカ！」

「うん。そうだね」

そうやって二人は喜んでいるが、どこかレイカちゃん表情に曇りがある気がする。なぜ、なんて思わない。むしろ当然だと思う。過去の話から、レイカちゃんが特異魔法、それが特異魔法で傷つけることにトラウマを抱えて無いとも限らないのだから。

「じゃあレイカちゃん。レイカちゃんが決めていいよ！」

「ええっと…レイカは？」

「えーつと、すき焼き！」

うくむ。せめて食べたいものと思ったけど、この感じだと無さそうかな？

「じゃあそれをお願いします」

「え？レイカはいいの？」

「うん。私もすき焼き食べたかったし」

「そうなの？じゃあ一緒だね！」

レイカちゃんの優しい思いやりにほっこりしつつ、気持ちを切り替えるために少し声を出す。

「じゃあ材料買いに行こー!」

「おー!」

「そうですね」

各々返事をして、スーパーに向かった。

「おいしかった」

「ご馳走様でした」

手を合わせるレイカちゃんにライカちゃんが慌てて手を合わせる様子にクスツと笑いながら、こっそりとレイカちゃんに耳打ちした。

「ねえねえ、ライカちゃんが寝てからお話しない?」

「:分かりました」

無事了承が得られたので、すき焼き鍋を片付けてお風呂を沸かす。ついでにトークアプリを起動した。もちろん、給料の為である。

『今日の働きつてどうなりますか?』

『ああ、水族館のことね? 勿論給料は出るよ』

『それなんですけど、レイカちゃんとライカちゃんの分もありますか?』

『あるある。安心して』

『良かったです! じゃあ通帳とか預かってもらえますか?』

『? 渡すつもりだけど』

『いや、流石に大金を渡すのが不安なんですよねえ。お小遣いとして私の所から出すので、一旦預かってもらえますか? 二人にもそう言うっておくので』

『なるほどね。いいよ。あ、そうだ。忘れてたけど、この前のゲームセンターの事件。あれ色々と詳細が分かったし、ついでに聡太がやり切ったらしいから明日とかそっちに行くかも』

『分かりました。ありがとうございます』

うし。後はレイカちゃんと話すだけだ!

なんかこう、二人っきりの会話ってヤバイよね。

なんかこう、二人っきりの会話ってヤバイよね。

ドキドキするし、失言すると逃げ道がないからね。しかも、相手が少し複雑そうならなおさら。

「はいお茶。コーヒーもあるよ」

「お茶でいいです」

受け取ったお茶で一旦落ち着かせる。どっちかというところ自分の気持ちを持ちを落ち着かせるのがメインだけどね。

「…で、話ってなんですか」

のんびりとコーヒーを飲んでいたら、静かな雰囲気には押されたのか、レイカちゃんから切り出してきた。

「うーん。まあ大したことじゃないから気楽にね。話って言っても気になったことを聞くだけだからさ」

まだ少し肩に力が入ってそうなのレイカちゃんに少し笑ってしまう。

「今日はどうだった？」

「…楽しかったです。水族館は久しぶりだし、響ちゃんとも遊べたし、イルカさんも可愛かったの」

「うんうん」

「最後はあんなこともあったけど、なんとかできたし、そんなに怖くなかったの」

この子怖くなかったとか言っちゃったよ。俺ですらちよつと怖かったのに。

「今日は本当に助けられたよ。レイカちゃんがいなかったら誰か怪我してたかもしれないし」

「…はい」

また顔が曇った。

「はいそれ」

「はい？」

「レイカちゃんって、特異魔法というか、今回の話をすると嫌そうだよ。ね。どうして？」

ずっと考えてたけど、ここはまつすぐに聞いてみようと思った。悪手かもしれないけど、思いつかなかったし、こうしたほうが逃げ道も無くせていいと思う。

「あんまり、好きじゃないです。その、私は人を傷付けてしまっているのに、それが褒められるのが、なんというか…」

「そうなの？でも、それにしてもは容赦がなさすぎじゃない？」

レイカちゃんの特異魔法を見るのは2回目だけど、どっちもかなりエグいと思う。

「いや、あれは…。だって、ライカが危なかったのだから」

お、やっぱりレイカちゃんの行動基準はライカちゃんなのかな？

「ふふ。レイカちゃんのことが一番大切なんだね」

「…はい。ライカは私の大事な大事なお姉ちゃんなので」

うんうん。いいねえ。

「じゃ、話は戻すけど。レイカちゃんは特異魔法は嫌いってことではないのかな？」

「嫌いじゃないけど、それで人を傷付けてしまうのは…」

「でも、今回はむしろみんなを守っていたよね。誇ってもいいと思うんだけど…」

「分かってるんですけど…どうしても抵抗があって」

うん。でも、この抵抗があると、やっぱ戦えたりはできなさそうだよ。解決できたら良いけど、無理もさせたくないし、うん。

「分かった。じゃあ隊長に言っておくね。戦いたくはない、んだよね？」

「そうですね…。あ、でも、ライカが行くなら絶対に行きます！絶対に言っておくさー！」

「え？で、でも、無理は良くないよ？」

「それでもです！」

突然勢いづき、レイカちゃんは声高々と宣言した。こ、これが姉妹愛か。強い愛の力を感じるっ！

「取り敢えず落ち着こうか」

「あっ…。そうですね」

レイカちゃんは恥ずかしそうに席に座り直した。それを見ながら、一口お茶を飲んでみ、もう一度聞く。

「本当に、行きたいの?」

「レイカが行くなら、絶対に」

「でも、土壇場で躊躇しちゃうと、足元を救われるよ?」

「絶対にレイカとは離れたくないんです。たとえ何があっても、レイカが嫌だと感じてても、絶対に!」

流石に愛が強すぎませんか?これがデフォルトなんですか?

「えっと、本当に大好きなんだね」

「当たり前です」

少し誇らしげに胸を張るレイカちゃんはとても可愛らしい。まあ、できるだけレイカちゃんの要望どおりになるように話をつけておこう。後、もつと強くならないと。少なくとも、レイカちゃん達が実際に犯罪に対処するのはもつと先だろうしね。それまでにレイカちゃんもレイカちゃんも守りきれぬくらいには強くなっておこう。

「あ、そうだ。ちよつとお願いがあるんですけど」

ほう。レイカちゃんがなにか言うのは珍しい。

「どうしたの?」

「その、組織の拠点?って所に連れて行ってください!」

「良いけど、どうして?」

「レイカのために、強くなりたいです!」

戦闘する気満々じゃねえか。

少しやばめの聡太君の暗躍劇。①

「えーっと、他に仲間はいますか？」

「…」

「なるほどなるほど」

「…」

「では、その仲間はどこにいますか？」

「…」

「そのメンバーの情報は？特徴とか、後、特に特異魔法とか欲しいですね」

「…」

「よし。じゃあこれで終わりますね。連れてつていいよ」

傍からみれば何も進展していないような取り調べを繰り返し、得た情報をまとめ始める。

「え〜。まずは――」

そうして話されたのは、相手側の拠点の住所。構成員一人一人の特異魔法、癖、生活パターンである。うん。相変わらずただの取り調べでわかり過ぎだと思う。そして口が軽すぎると思う。

「まあこんな感じ。じゃあ逃がすのは誰にする？誰でもいいよ」
「ん〜」

相手側の兵器といえば、あの屈強な男だろう。取り調べでは、男は何かをエネルギーとして溜め込み、放出する魔法と話したようで、停電もあの男が起こしたらしい。ようするに、電気をエネルギーに変えて、常に充電していたということだ。

まあ、あの男は言いなりというか、銃弾を平気で受けている辺りあんまり仲間とは思われていないんじゃないだろうか。なら、あんまり適していない気がする。見捨てられたら溜まったもんじゃない。

「じゃあこれで」

変身対象に選ぶべきは、副隊長的ポジションの男。ミート、というコードネームらしい。ちなみに隊長はハンバーグ。面白いなこいつら。で、逃がすのは…これでいつか。

「え？これでいいの？こいつ透明男だよ？」

「まあ、単独行動を許すんだからそれだけ忠誠心があるんだろうし、発振器あれば透明なんて屁でもないよ。殴り合いなら負けないし」

「ん、そっか。了解」

さ、後は見るだけかな。じつくりと、じつくりと、ね。

「おい。逃げるぞー！」

冷たい牢屋に蹲っていると、大声とも言い切れない声が背中に届いた。意味が分からず、ぼーっとした思考のまま振り返った。

「何してるんだー！」

「…ミート？」

「そうだよ！もうお前しかいないんだ！速く！」

チャラチャラとした鍵を握るその男はミート。俺達の部隊の服リーダー的ポジション。焦っていきそうな顔が、月明かりに照らされていた。そこで、今の状況を理解した。

戻れる。そんな希望が頭をクリアにした。

「何があつたんだー！」

「話は後だ。ついてきてくれー！」

そうだ。経緯なんてどうでもいい。今すぐ逃げないと。

まるで慣れた道を走るかのように、迷わずミートは走り出す。そこに違和感なんて感じない。だって、それがミートの特異魔法、道標の効果なのだから。

あの女を探すときも、これは大いに役立った。時折反応が切れるせいで難航したが、なぜかまったく切れないタイミングがあり、そこで一気に距離を詰めたのだ。

「!?待てー！」

看守の、焦りを含んだ怒声を聞いた。

恐怖と同時に、信じていたが生まれてしまっていたかすかな不安さえも晴れた。この方向は合っている。そして、看守の速度では俺達に追いつけない。

「こっちだー」

曲がり角を曲がると、蓋のズレたマンホールが合った。そこに躊躇なく飛び込むミートに続き、俺も飛び込む。当然、すぐに蓋をもとに戻す。

ドタドタとした足音が遠くに行ってから、ミートがライトを取り出した。

「ふう。なんかあったな」

「お、おい。な、何があったんだ…?」

ミートは俯いて、悔しそうな声を滲ませながら言った。

「見てしまったんだ。ハンバーグが連れて行かれるのを」

「ど、どういう…それってただ取り調べなだけなんじゃ」

俺たちはなんの強制力もない取り調べを受けさせられていた。組織の為に忠誠を誓う身として、何が来ても話さないつもりであったが、あまりにもあつさりとしていて拍子抜けなほどだ。

「俺もそう思ったさ。でも、ハンバーグは戻ってこなかった」

唇を噛み締め、ミートは上を向いた。

「その後、俺も呼ばれて連れてかれた。連れてかれた部屋で、ハンバーグが血塗れになっていたんだ」

「なっ…」

「怒りとか、恐怖とか色々あったけど、俺はすぐに逃走を選択した。道すがら仲間の牢屋も通ったが、人の気配は無かった。お前だけだったんだ。まだ連れてかれて無かったのは」

言葉が出なかった。仮にもあの組織は公的機関はずだ。それが裏ではこんなことまで…。恐怖と畏怖が混ざり合い、でも、それが自分達のやっていることの正しさを伝えてくれているような気がした。「そんなことが…。クソっ。絶対に許せない…!」

己がしたことは柵に上げ、義憤に駆られる自分の事を認識せずに、決意を固める。

「そうだな。だがまだ力が足りない。だからこそ、戻ろう」
「ああ！」

決意に満ちた視線をお互いに交わしあった。

「…ということがあったんだ」

ザワ、と仲間達が騒ぎ出した。総勢50名にも至る程に成長したこの組織の部長達が集まり、会議する場でミートは話した。

「くっ。どうする？ここから離れるか？」

「いや、しかし、それでは費用が…」

ハンバーグ班はこれの中でも有数の実力があったため、怖じ気づく仲間には逃げようとし始めた。でも、それは認められない。口に出そうとして――

「待ってくれ！」

ミートが叫んだ。

「どうせ逃げたところでいつかはまたぶつかり合ってしまう。それなら、相手側の拠点の位置がわかる今、倒し切るべきだ！」

「いや。待ってくれ。海外ならそんなことは無いはず。つまり、ここで下手な戦いに挑むより引いたほうが確実なはず。ここは…」

「いや、それではあまりにもハンバーグが報われない！どうか、どうか協力してくれないか…！」

「…そうだな。ハンバーグの貢献は凄まじい。なら、俺達が受けた恩を少しでも返さないと」

「待って！そんな感情論なんかでこの組織の行く末を決めるわけには行かないだろ！」

「いや、それでも！」

賛否両論の意見が飛び交う。それは過激さを増し、仲間割れをし始める。

「スマン！待ってくれ！ここで喧嘩したって意味はない！…もう一度

冷静に話し合う時間を取ろう。それで結論を出すんだ。期間は5日後でどうだろうか」

崩れ始めた空気が、ミートの言葉で静まった。良かった。なんとかなったみたいだ。

二度目の会議当日。会場は騒然としていた。

「なんだ…？」

ミートが疑念に満ちた声を出す。視線の先には、人の輪ができていた。辺りに漂うは俺たちにとって嗅ぎ慣れた臭い。血の臭い。

「退いてくれー！」

人をかき分け、当然あるのは死体。それも、積み重なった各りーダー達の死体である。

「どうしてっ…！」

「ま、待て。あれは、反対してた奴等じゃないのか…？」

そうだ。見れば、海外への逃走を選択した奴ばかり。それが、恐怖に満ちた顔を浮かべて、撲殺されている。

それは、音を出さない為か、はたまた必要ないからか、分からない、分からないが…。

「許せねえ！絶対に奴らをぶっ殺さねえと！」

少なくとも、逃げるという手段が完全に潰えてしまった。ここには、組織に所属するものしかない。つまり、誰も気づかれないで大量に殺人をおかした裏切り者がいるというのに、それを突き止めようとする。としない。

なぜか。殺害された者にある共通点を守れば殺されないと分かったからだ。畏怖と恐怖心からそれに縋るしかなくなってしまふ。

だが、俺にとっては好都合だ。

むしろ、ここまでハンバーグに好意的な味方がいたとは！最高だ！ここまでの強さであれば、勝つのも現実的になってきた！

「フッフ」

いけない。笑いがこぼれてしまった。

「おい…？」

ミートから、疑念に満ちた視線が向けられた。ダメだダメだ。ここで不信感をばら撒くのは良くない。

「ゲホッ、ゲホッ。スマン。咳だ。でも、これはチャンスじゃないのか？今なら全員賛同してくれるぞ」

「なっ…それはそうだが…」

なぜかミートは不本意そうだ。よく分からないが、こういったすれ違いは昔からあったわけだし、今更だろう。まあいい。それよりも、今はこの事件を起こした犯人のことだ。是非コンタクトを取っておきたい。この作戦においては大事なキーパーソンなのだから。

そうこうしているうちに、勝手に話が進んで、明日決行と纏まった。話が早すぎるが構わない。対してそれは問題ではないのだから。

「待て。その前に犯人を…」

ミートの叫びは、恐怖に塗り潰された。

少しやばめの聡太君の暗躍劇。②

「行くぞー！お前達ー！」

本来の予定の次の日。本当なら昨日出撃していたのだが、殺されたリーダー達の部下を集めるのに時間が必要だとミートが主張したため、そのために時間を一日設けることになった。

少し不本意ではあるが、戦力は多いほうがいいだろう。

「点呼ー！」

各部隊が点呼を取り始める。昨日のお陰で人が増えたため、見て判断が難しくなったのだ。

「欠員なし！」

「よし。なら行くぞー！」

「待つのだ！」

叫び声が、響いた。

……………は？

恐らく、全員の思考が一時的に止まったはずだ。その声は、この組織にいたのであれば誰もが関わり、聞き慣れた、男の声である。

「ハンバーグ…？」

誰かがそう呟いたと同時に、男が壇上に立った。

「すまない。心配をかけたな。ワタシはハンバーグ！」

沈黙が辺りを支配する。誰も、言葉を紡げない。

どういうことだ？ミートの話が正しいなら何故ハンバーグがいるんだ？いるのはおかしいんじゃないのか？…：そういうえば、ミートは姿を変える特異魔法を持つ者がいると言っていた。もしかして…。

「突然のことで頭が回らないかも知れないが、今回の作戦は中止だ！ミートは内通者である！」

ざわ、と動揺が波のように広がっている。だが、ここで耳を貸すの

は馬鹿がすることだ。

「待て！ミートの言葉を思い出せ！ミートは言っていたはずだ！姿を変える奴が居たと！」

慣れないことではあるが、なぜかいないミートの代わりに叫ぶ。ここで過ちを正さないと取り返しがつかなくなる。

「ほう。ポテトよ。ではミートがそうでないという証拠があるのか？」

圧をかけるような態度で、ハンバーグは、いや、ハンバーグの姿を騙った偽物は高圧的に問いかけてきた。

「あいつは俺達が捕まった所からずつと俺と一緒に行動していたんだ！特異魔法も使っていたし、偽物な訳がない！」

「しかし、あやつの特異魔法は道を覚えていれば誰でも出来る。証拠とするにはいささか弱くないか？それに、あやつ自身が内通者であるという可能性は捨てきれないだろう？」

「っ！だとしても！お前が偽物である可能性の方が遥かに高い！それに、もし内通者であるなら、一緒に逃げるのは俺以外にするはずだ！この、透明を持つ俺なんて逃しちゃいけない筆頭だろう！」

離れた所での口論に、組織の仲間達は2つに割れ始める。外から見てもそれは分かりやすく、ハンバーグを支持する側はハンバーグへ寄り、ミートを支持する側は俺の方へ寄ってきた。

一発発射の空気は、緩められることは無かった。

「殺れ」

偽物の一言で、すべてが崩れ去った。

「と、こんな感じだったよ」

「よくそんなにうまくいったね。めっちゃめっちゃ簡単に崩れそうだけど」

「いやね、下準備はちゃんとしてたから。一部の者には不信感を覚え

させるように立ち回ってたし、逆にポテト君みたいに完全に信頼させるようにもしてたんだからね？」

なるほどねえ。まあ同じ事やれと言われても俺には無理そうだな。というかやっぱ怖えな。聡太君。

「あの。それだと最後に何人か残りませんか？」

「あはは。十人以下なら余裕で始末できるよ。それに、なるべくハンバーグ側に戦力を寄せてたから、強めのは不意打ちで倒したしね」

こっわ。というか、聡太君の言ってる壊滅って文字通りの意味なんだね。捕まえるんだと思ってた。

「お疲れ様。ご飯食べてく？」

「いいね。食べる食べる」

「よしきた。ちようど使い切りたいたいものもあつたし、今日はお鍋にしようか」

「わーい！」

「良いですね」

締めはうどんで明日の朝は雑炊。鍋はこのセットが最強だと思う。異論は認めん。

うっしやー！腕によりをかけて作るぞー！

なにもヤバくないクリスマス！

朝、いつも通りお弁当を作り、朝食の用意を済ませた後、時間が余っていたので携帯のニュースを開いた。

「うーん。まあ特になにかあるわけじゃな…」

クリスマス。

「!?」

すぐにカレンダーを確認する。

「12月25日…」

今日クリスマスじゃねえか！

「おはよう」

「おはようございます」

「お、おはよう二人とも！待っててね。ご飯入れるから！」

眠そうに目を擦りながら起きてきた二人にご飯を配膳してあげてもぐもぐと食べる様子を眺めながら様子を見計らって切り出した。

「ねえ。二人とも今欲しい物ってある？」

もぐもぐと口を動かしながら、二人はコテンと首を傾げるようにして質問の意図を尋ねてきていた。

「今日はクリスマスだからね。サンタさんをお願いしたら良いもの貰えるかも知れないよ？って思ってたね」

「…サンタさん？」

「いないんじゃないんですか？」

…

…

…

待て待て待て待て待て待て

「え、どうしてそう思ったの?!?!?!」

「だってクラスの男子が親がサンタだって言ってたし、貰えなくなっ

たのもお母さんが離れてからなので…」

……………よし。

「ふふっ。安心して。サンタさんは本当にいるんだよ。さあ、お願いを言つてごらん？」

「行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

「行ってきます」

二人を見送ったあと、すぐに通帳を取り出して着替える。出掛け先は近場のショッピングモール。早急にプレゼントを揃えることが必要だ。ラッピングは店員さんがやってくれるだろう。

ある人物に連絡をつけながら走り出す。ライカちゃんはテレビで見たと聞いていたゲーム機。レイカちゃんはそのソフト。なんというか、本当にレイカちゃんはそのかが欲しいのかと思わなくもない。とはいえ、サンタさんとして失敗は許されない。正直ちよつと厳しそうだが、なんとかかして見せよう。

開店直後、最短距離でもちやコーナーへ向かう。どれだけ予約で一杯でも、一つくらいは予約販売以外の販売もあるはず、という希望を頼りにしてである。

なんか後ろに鬼気迫る勢いのお父さんお母さんがいるが、俺も伊達に仕事を頑張っているのもあつて、ギリツギリそれを掴み取れた。後ろで崩れ落ちる音が聞こえたが、多分この人達車持ちだろうからさらなる活躍を期待しよう。

プレゼントを特に苦戦無しで買えれば、次はケーキだ。晩御飯用の仕込み含めてお昼には帰っておきたい。というわけでケーキ屋へ直行。

「ホールケーキありますか！」

「申し訳ありません。売り切れておりました…」

oh!No!

どうする?どう…。作ればいいか。

晩御飯の材料とケーキの材料を揃える。時刻はお昼。さて、まだまだやることは満載だ。

「とうわけで聡太君!」

「はい」

「サントさんやってくださいお願いします何でもしますから!」

ペターんと額を床につけてお願いする。何でもしますはやり過ぎかも知れないが、聡太君は笑顔で俺に指を立ててきた俺の仕事仲間である。ヤバい事は出来ないはずだ。

「…自分でやれば?」

ごもつともな返答が帰ってきた。いや、それは分かっているのだ。しかし、俺は見逃さなかった。キラキラと目を光らせていたライカちゃんの横で、レイカちゃんの目が胡散臭い物を見るような目になっていたことを!

何もしなければ起きることはないレイカちゃんだが、ライカちゃんの枕元に立つとナチュラルにレイカちゃんは起きちゃうので起きてしまう可能性は大いにある。そうなったとき、横で俺が寝ていれば来たサントさんも本物だと思ってくれるはずだ。

短時間でもそう思ってくれば、ライカちゃんの夢は守れる!

「衣装も何もかもご用意させていただきましたのでどうか!」

「…俺仕事か」

「事前に爽さんに確認取ってまあすつ!」

「はあ…。じゃあご飯食べさせて。しばらくの間」

「え、そんなんでいいの?お金とかじゃなくて?」

「いや、やいばより何倍も俺稼いでるからね?…そうじゃなくてやいば料理上手いじゃん」

え、そうなの?」

「なんで分かかってないの?」

「え?だって有名な人の料理真似しまくったものばかりだよ?そりゃ長年作ってるけど…」

「いや、有名な人の作ってる料理を長年作って年季が入ってるわけだからそりゃ上手いでしょ…。まあじゃあやってあげるから。あ、あとこれ要らない」

そう言っただけで聡太君はサンタ服を返してきた。瞬間、聡太君はサンタ服を身に纏った。

「もう服すら要らないじゃん」

「別にどっかのポケモンみたいに模様違ってわけじゃないからね？下には服も着てるし、そっちから見たらサンタ服になるだけだから」

カ○リキーみたいな設定はないのね。了解。

「じゃ、俺待ってるからねー」

「はい。ライカちゃんとレイカちゃんが帰ってきたら遊んであげてね」

飾り付けも済ませてケーキも焼いてご飯の準備も終わらせて、クリスマスパーティーの準備はもう完璧だ。で、だ。

「サンタコス…」

この体は可愛いから絶対に似合う。見たいので言えばミニスカが良いけど、それは恥ずか死するので却下である。後聡太君にからかわれたら辛い。

でも！二人のサンタコスは見たい。めっちゃ見たい。絶対可愛い。というわけで買ってきましたサンタコス！俺も着たらきつとみんな来てくれるはず。きつと。多分。

「ただいま」

キタアアアア!!!でも待って俺サンタコスなんだけど!!!いや、ここはもう腹くくれ!

「おかえりーそして、メリークリスマス！」

飾り付けた部屋に二人を招き入れて、笑顔を振りまいた。

盛大に料理やケーキで盛り上がる。腕によりをかけたのもあって二人は美味しそうに食べてくれたし、サンタさんにもなってくれてとても幸せだ。

もはやお馴染みの聡太君とも楽しそうに話している。

「どう？楽しい？」

「うん！」

「はい！」

サンタコスで振りまく眩しい笑顔とお礼の言葉。

「それは良かった！」

本当に、何よりも最高のプレゼントである。

そして、夜も深くなってきた頃…。

「…もう寝る？」

「ヤダあー。サンタさん見るうー」

そう言いながらライカちゃんやんは船を漕ぐ。レイカちゃんも疲れるようで、ライカちゃんほどには至らないがとても眠そうだ。

「いい子にしないと貰えないからもう寝よっか。ほら、歯も磨こう？」

「…うん」

どうやら眠気が勝つたらしい。レイカちゃんも着いてきて、最終的には二人とも寝てしまった。

(じゃ、よろしくね！)

(…はいはい)

さて、私も眠いから寝させてもらおう。任せたぞ、聡太君！

「…面倒くさっ」

一応リアリティを出すために二人が寝る直前に家を出てしまったので、入るところから始めないと行けない。まあ扉は開いて——
ガチャ、ガタガタガタ。

「？」

ガタガタガタ

「???」

ガタガタガタガタガ…ハッ!

これだと通報されかねんし二人が起きちゃって仕事が果たせなくなる。後でやいばにはこれをダシに期間延長させるとして、どっから侵入しないと。

窓。ガタガタ。

煙突。あるわけない。

これ俺以外だと詰んでるじゃん。馬鹿か?

というわけで止まっている換気扇の合間に体を小さくして滑り込む。後はドアを開けてプレゼントを運びこめば解決だ。

リビングに一步踏み出して——人影。

「フオッフオッフオッフ。おや、寝ていると思っていたんじやがのう」

「不審者!」

そう言い切るレイカの視線は少し鋭い。

「不審者? わしやサンタじゃよ。ここにプレゼントがあるでな。フオッフオッフオッフ」

「やいばさんは寝てた! 聡太さんも帰った。扉も窓も全部締めた! 貴方は誰なの!」

犯人を問い詰めるような口調だが、多分寝ているレイカに配慮するか、それとも俺の小声に合わせてか、少し小声になっている。

「じゃからサンタというておろう。ほれ、君の姉のプレゼントじゃ。しかし聞かなかつたのかの? 悪い子のもとにはサンタは来ぬぞ?」

「要らない! そんなことよりレイカの安全の方が大事!」

「フオッフオッフオッフ。姉妹愛が強くて結構。じゃがな——」

「っ!」

多分捉えきれないであろう速度で背後に回る。そしてそのまま目に布を巻く。

「悪い子には、お仕置きなんじゃよ」

ライカとおんなじ布団に巻きつけて、プレゼントを置いて即座に去っていった。

最後に一言。

「サンタに勝とうなど百年はやいわ！フオツフオツフオツ」

「わあ！」

「…」

ライカちゃんの声で目が覚める。すぐに時計を確認したけど、まだ朝は早い。なんか硬い枕から顔をどかして、声のしたほうを見るとライカちゃんが嬉しそうにプレゼントを抱えていた。

その横で、なぜか目隠しされながらライカちゃんの布団に潜り込みプレゼントを片手に持つライカちゃん。訳がわからない。

「つてあれ？」

枕が異常に硬い。枕の方を見れば、クリスマスのラッピングがされた箱が置いてあった。

「聡太君…かな？」

メリークリスマス、と書かれたカードに、シンプルなデザインのエプロン。

「やいばお姉ちゃんも貰ったんだ！」

「そうみたいだね」

「…外して」

そんなライカちゃんの手元のプレゼントには『姉妹愛に免じてプレゼントじゃ！』と付箋が付いている。

「クリスマス。どうだった？」

「楽しかった！」

「た、楽しかったですよ？」

いそいそとライカちゃんは付箋を手で握り潰してから言った。

「やいばさんはどうだったんですか？」

そりや当然。

「最高のクリスマスだったね！」

メリークリスマス！

いつ見てもこの特訓やばいよねえ

普段とは違い意気揚々とするレイカちゃんと言いかちゃんを連れて、拠点にやって来た。お願いされたのもあるし、顔合わせも大事だからね。

「え？ここですか？」

外見だけ見ればマジでただの一軒家なのでこうなるのも無理はない。厳ついおじいさんに「ピッ！」と言いかちゃんが鳴いていたが気にせず、地下への階段を開けてもらおうとレイカちゃんはポカーンとしていた。可愛い。

さて、俺が初めて来たときもそうであったが、扉を開けた瞬間は大体見られる。逃げ出しかねない言いかちゃんを背中に隠して扉を開けた。

ジツ…

「はいはい皆集まれー！新入りだよー!!」

案の定視線が集まったが、すぐに爽さんが視線をずらしてくれた。まあ、紹介するから結局視線は集まるんだけどね。

「というわけで、はい。自己紹介どうぞ！」

「甘里レイカです！」

「あつあ、あ、あああああ」

「落ち着いて言いかちゃん。ほら、深呼吸、深呼吸」

「ふうっ。は、はみやさと言いかですっ！」

うーん。この言いかちゃんの極度の人見知りどころにかならないかな？流石に行き過ぎな気がする…。

「えっと、私達は姉妹で、やいばさんと一緒に暮らしています。まだまだ若く経験もないようなものですが、日々精進していきますのでよろしくお願いします！」

なんか突然社会人みたいなこと言うじゃんこの子。

まばらに拍手が起きた後、爽さんが声をあげる。

「なんと、この子達は特異魔法がもう使えます！つまりくく？」

「「実験！」」

「その通りー!」

「うおおおおお!!!」

うん。相変わらずお!金好きだなあ。レイカちゃんはニコニコしてるけどレイカちゃんは怯えてるからやめてあげて欲しい。

「あの、ちなみになんですけどやいばさん。これ何なんですか?」

あ、そういえば言っていない。

「二人とも。ごめん。かんっぜんに頭から抜けていました」

「あー」

「やいばお姉ちゃん…?」

やめて!これ以上ジト目で俺を責めないで!泣いちゃう!

「ああ、待って待って。言ってなかった俺も悪いから!えーっとね。簡単に言うると君たちの特異魔法を見ようってことだよ。自分の特異魔法の強さとか弱さとかを皆に評価してもらって知っておくのは大事だからね」

「…え?皆の前でやるんですか?」

「え?うん」

「そんなあ…」

レイカちゃんは悲しそうにレイカちゃんの方角を見る。ウツと反応したあと、レイカちゃんは少し下を向いてから。

「レイカ。これは大切なことだからやろう」

意を決したようにそう言った。レイカちゃんは完全に崩れ落ちた。

「よし。じゃあそうだな…。取り敢えず使ってみてくれるかな?」

少し曖昧に感じるような問いに、二人はそれぞれ行動を起こした。

どこからか雷を出現させ地面に叩きつけるレイカちゃんと小さな水のボールを作って投げるレイカちゃん。やはり、轟音と閃光を撒き散らすレイカちゃんの方角に視線が集まった。見られたレイカちゃ

んは黙って俺の後ろに隠れる。

「ふむふむ。なら次。全力であの的を壊してみて」

「ほら、ライカちゃんもやるんだよ」

「う…はあい」

さつきと同じようにライカちゃんは雷で的をバツキバキに燃やして砕く。ライカちゃんは大きな水滴を作って的を浮かし、叩き落とすて割った。

「オーケーオーケー。で、レイカ？君もつとできるよね？」

「え、えつと？どういうことですか？」

「全力で。だよ。ほら」

「え、いや、今のが全力ですよ？」

「ハハハ。隠そうとしなくていいから」

物凄いバチバチとレイカちゃんと爽さんの間に火花が散っているように見える。というか全力ってなんだ？

「…えい」

馬鹿デカイ水の刃を作り出し、的を破壊した。

…

……

「おおおおおおお!!!」

「…」

少し不機嫌そうな顔で黙り、爽さんの方向を睨むが…

「!?レイカ凄い！」

「え、そう？」

ライカちゃんに褒められた瞬間デレツと顔を崩した。うん。やっぱりレイカちゃんはライカちゃんに弱いね。いつもどっちかと言うと引つ張る側なのに不思議だあ。

「はい。よくできました。じゃあ誰か！他になにかありますかー？」

そこからは質問タイムに移り、様々な実験を繰り返した。

というわけで、やっとごさレイカちゃんの待ち望んでいた特訓である。疲れてるのは疲れてるっぽくて、俺がやっているのを見学という形になった。

「ハアツ、ハツ、はああ!!」

バタツ。

「やいばさん!」

「お姉ちゃん!!」

「よし。50周終わりだぞ。良くやったな!」

駆け寄ってくるレイカちゃんにライカちゃん、そして教官。うん。30周で死にかけてる時と比べたらかなり成長したような感じがする。

「よし。アツプは終わりだ!」

「え?」

「…これ、アツプ?」

「ふふふ。そうだゲホオツ」

「やいばさん!」

「お姉ちゃん!!」

後に、大人用メニューであると知り安心するが、子供用メニューのえぐさも見て、レイカちゃんは戦々恐々とするのであった。

うん。いつ見てもこの特訓やばいよねえ。

普通のいちに…やばい子がいる!?

レイカちゃんとライカちゃんの通う中学校はもうとっくに冬休み。たまに二人が遊びに行ったりするが、それでもお家にいる時間は増えている。

「うう〜?」

「…」

宿題に頭を悩ますライカちゃんと黙々と解き進めるレイカちゃんを眺めるのもはや日課である。

と、眺めているのもいいのだが、家事はしつかりとこなさないといけない。掃除は宿題しているので後回しにして、洗濯や料理を済ませようと…。

「あ、何もない」

年末も控えているのだから、買い溜めもしておかないと。

「二人とも〜?ちよつと買い物行ってくるから、留守番よろしくね〜」

「は〜い。いってらっしゃい」

「いってらっしゃい」

「行ってきまーす」

なんとというか、いってらっしゃいって言われるのは凄く新鮮で嬉しかった。

スーパーに来た。食材を買っていく中で餅とか買うつもりは無かったものもカゴに入れる。やっぱり正月は餅だろ。あとそんなに好きじゃないけどおせち。

レジ前には凧もあり、中学生がやるのかは分からないけど見てみたという欲望のもと買ってしまった。

満足気にスーパーから出て帰路を辿る。いやはや、もうすっかり慣れてしまって、顔見知りも増えた。たまに出現する響ちゃんのお母さんとも、もうすっかりママ友(?)である。

当然、冬休みとあれば平日の昼間だろうが子供がいるのは必然。遊

んでいたっておかしくないし、喧嘩しているのだって普通である。ただ、この世界はファンタジー要素があるので、そんな喧嘩も仲裁役が必要になる。例えば、あそこの仲が険悪そうな男の子と女の子をあげよう。

「みーちゃんのバカ!」

「馬鹿って言ったほうが馬鹿だよ」

「ツツツツツ!!!」

そんなやり取りを経て、女の子のおててから白い球が繰り出された。魔力弾、俺がもう卒業したそれである。

「痛っ!!!お前!!!」

それに対する男の子の返答は拳。ペチツと、でも女の子からするとガツンと感ずるのであろう拳を腕に受け、見事に涙が貯まる。

「バカバカバカ!!!」

当然の如くヒートアップ。魔力弾と拳。それが二人の間で繰り広げられる。しかし悲しいかな。それを見て止めようとするものは少ない。だって痛いし、どうせ死ぬまでいくことはないのだから。

「こら!君達やめなさい!」

そんな中、しっかりと間に入り、喧嘩を止めるのが、なんとまあ警察だ。そう。この世界は警察の規模が少しばかり大きく、パトロールが頻繁に行われている。マジで見ない日なんてない程にだ。

もしかすると、警察の規模が大きいからこそ、魔法というものがあったても治安は現代日本と同じくらい良いのかも知れない——

「うるさい!!!」

「グハッ」

警察が小さい子に弾き飛ばされ、こっちに転がって来た。

…スウー。うん。今日は普通の…

「近寄るなああ!!!」

木々をなぎ倒しながら、見えないなにかが迫ってくる。容赦のない、でも殺意という殺意はない攻撃。

やばい子いるねえ!?

警察を守るため、前に出てそれを打ち消した。

「ハッ。私は何を…」

一瞬気を失ったのか、あたりを見回す婦警さんに買い物袋を預けて仲裁に出る。

「落ちて落ち着けー。まだ大丈夫だからねー」

中々に威力のありそうな攻撃を周囲に乱発されては堪らない。特にこの男の子がさつきまで喧嘩していた女の子が一番危ない。めっちゃぶるぶる震えてるもん。

「うわあああ!!!」

ハイ駄目でしたー。思いつきりテンパってましたー。すぐにでも安全をと強引に体を女の子と男の子の間に押し込む。こうすれば、女の子は安全だ。

スタンガン——は駄目だね。流石に危ない。あくでもそうか。この子の体から衝撃波的なのが出ているのか。なら、

ガバッ

「よしよしよしよしよしよし」

「む??」

「え!?!?!」

男の子を思いつきり抱き締めて撫でる。全身で全身を包み込み、衝撃波が出る隙間を無くす。所詮子供なので、力も弱いから完全にこれで拘束できる。

ちなみに撫でているのは上方向も塞ぐためであり他意はない。

しばらくすると抵抗を諦めたのか力が弱まった。離してあげると、疲れたのか顔の赤い男の子がぜえぜえと軽く息を切らしながら出てきた。

「あ、えっとお…スウー。ご協力感謝します!助かりました!後はお任せください」

「あ、ハイ。お願いしますね」

まあうん。普通の一日だった。

よくよく考えなくてもさ、俺ヤバイよね。弱すぎる

力が弱い。マジで最近の悩みだ。

俺はこの体になってから力がなさすぎると思う。考えても見てくれ。魔力での補助ありで殴っても誰も倒せないんだぜ？なんなら魔力無ければこの前の子供にも力負けそうだったし。

まあ、それを補うためのスタンガンなわけで今続けている筋トレもいつかは実を結ぶと思う。でも、さ。

最近荒事多くない？このままだと死ぬくない？

例えばゲーセン。透明男に先制でぶん殴ってやったのにへなちよこパンチ過ぎて負けそうになったんだよ。おかしいだろそれは。

もう力は諦めて道具に頼ろうかな？正直俺の能力的にそれが一番あつてる気がするし。で、そうなるのなら必要なのは遠距離攻撃手段。銃や魔法といったものだ。

メッセージアプリで相談したら、銃は無理と言われてしまったので実質魔法となる。というわけで、サンタさんから貰ったゲームで遊んでいた二人を置いて、教授に会いに行った。

「まあこういうことです」

「はいはい。魔法をうまく扱いたいのね？いいじゃん。ぐつとぐつと。しかもちようどいいしね」

「？」

ちようどいいって何が…？教授は突然歩き出して、現代には似合わないファンタジーチックなローブを身に纏う人を連れてきた。

「というわけで、ミレーさんですー！」

「ちよ、やめてくださいよ師匠」

意気揚々と教授は紹介するが、有名人なのだろうか？まったく聞いた覚えがない。少なくとも最近のニュースじゃ聞いたことない。

「あれ？なんでピンとこないの？私の自慢の弟子なのに」

「ごめんなさい。ちよつと世間に疎くて…」

「ああいや、知らないのも無理ないですよ。私海外で活動しているものですし…。えつと、ミレーです。この人の弟子で、街でパフォーマ

ンスをしたりしています。最近もここでやっていたんですけど…」

街でパフォーマンス…？思い当たる節は——あつ。

「もしかしてあの炎の竜!？」

「あ、そうですね！見てくださっていたんですね！」

「おおマジか。凄い人じゃん。秋名さんも知ってたくらいだし、これだと俺のほうが例外なんだろう。」

「ふっふっふっ。それだけじゃないのだよ。この子はなんと！」

「なんと？」

「たっぷりと溜めてから、ドヤツツツ顔で叫んだ。」

「特異魔法を持たないのに世界に打ち勝てる天才なのさ！」

「せかい…」

「セカイ…」

「世界!?!え、なに?世界に打ち勝てるって?え?人類最強ってコト?

は?マジ?」

「言い方悪いです師匠!これだと私人類最強みたいじゃないですか!」

「でも特異魔法持ちを人間にしなかったら間違いなく世界最強だろ」

「そうですね!貴方にも空斗さんにも聡太さんにも勝てないんですから!!」

「サラッと爽なら倒せる宣言するな」

「あの、世界って?」

「なんかこの人がめっちゃ強いのはわかるのだが世界ってなに?他にも気になるけどそこだけは別格に気になる。」

「あれ?教えてないの?副隊長とか聡太から聞いてない?」

「えっと、多分…」

「マ?だってよミレー」

「いや知りませんよ」

「んー。と考えると、教授は切りだした。」

「意図は分からんから良いか知らんけど、教えてあげるよ。例えばね、私の特異魔法はこんなの」

「そう言つて教授は石ころを適当に地面から拾ってから投げた。カ

ン、と何度か跳ね返り、地面に着地すると、その石は手足を生やし踊りだした。

「わーきm」

「かわいいでしょ〜!!!」

「あつ…。はい」

「私の能力は動かないものを私の奴隷とする。言い方悪くするならこんな感じだね。これって一つまでにしか能力が適用できないし、握らないといけないのね？そこでこれよ」

そうして、教授の持つ魔力が突如膨れ上がるように広がった。

「な、何を…?」

「キヤアツ！」

突然ミレーさんの叫び声が聞こえた。その方向を見た俺は即座に後悔する。

「やつやめ、んうううう〜!!!」

手足の生えた机、石、本棚、本、すべてがミレーさんに詰め寄りそこから中をくすぐっていた。キモい。そしてエツツツ。どう考えても見ちやダメな類だ。特に俺は。

「ほらほら、ここがええんじやろ〜?」

「やめつつ!!!ほ、ほんとにいっ!〜ごろずう!」

うん。視線を逸ら…。

「させんぞ〜?」

「わっ!」

座っている椅子から手が生えてきて、強引に俺の体を固定した。そして、次は俺をくすぐり始める。

「ちよっ!やめっ!あははははははは!!!」

むこうと違つて俺は乙女でもなんでもないので容赦なく笑えるのが救いなのだろうか。多分向こうよりはエツツツじゃない。あ、やばい泣きそう。涙は男の恥ですわ!

「フンツ〜…あれ?」

体に魔力を通して力を入れれば、一瞬で俺をくすぐっていた手は消えた。なるほどねえ。俺の特異魔法には勝てないと…なるほどなる

一説では特異魔法はその人の前世の力なんじゃないかとか言われたりするので特異世界はその範囲だけその人の本来の力を取り戻すとかもありそうですね。あ、ちなみに一般的には知られてないです。というか知られたら皆怖がりますからね。分かります？この人が本気出せば簡単に街滅ぼせるんですよ？」

えーっと…この能力で街を…あ、ビルとか動かして街中を踊らせれば終わりか。うっわなるほど。

「私この人のせいで結構な人と殺りあってますけど、模擬戦で負けたのは聡太さんと空斗さんですね」

「あの、空斗さんって誰ですか？聞いたことはあるんですけど…」

「え？…この隊長ですよ」

あ、そう言えばそういう名前だったっけ。
「というわけでこの人って生かしても意味のない人類のガンですよ
ね！エイツ」

サクツ。

「イギヤアアア!!」

「ちよっ、流星にやり過ぎ…」

「はい？」

濁った目で見られれば、言葉を失ってしまうくらいの凄みがある。

いや、でも教授死んじゃう！

「いやでもー」

「大丈夫ですよ。殺しません。ただ、四肢をもいで私から離れないようにするだけです♡」

「駄目ですよ?」

ぶるぶる震える教授に手をかけようとするミレーさんを止める戦いは、隊長が来るまで続いた。

いやはや、流星に手加減してくれたおかげで守りきれた…。手加減してる…よね？隊長に止められ、爽さんに諭されるミレーさんと俺の背中に隠れ、震える教授の二人の関係性が凄く気になった今日この頃だった。

この人ヤバっ！

「というわけで！ミレー君にはやいばちゃんの師匠になってくれたまえ」

「はい」

手足の拘束が解かれ、ついでに身近にたくさん物を置いて完全に防衛体制を整えた教授は意気揚々とそう指示を出した。ミレーさんは特に気にした様子もなく返事を返す。

「はーい！じゃあ教えてあげましょう！何を教えてほしいですか？美肌の秘訣？有名になるやり方？魔法？あつ、魔法はある程度できる自信はありますけど、特異魔法は使えないんで知らないです！」

「あーそれなら魔法全般を教えて欲しいです」

「ほいほい。ならー。んー？様子見たいしどつかで…」

「その子ド天才だからマジで信頼していいからねー。あ、場所は適当な所で、ちゃんと周囲の安全を確認するんだよ？」

お母さんみたいな事を言う教授に返事を返しながら、俺はミレーさんについていった。

「ほうほうなるほど…。まあ普通だね。その様子だと始めたばかりでしょ」

「まあそうですね」

「なら、才能がどうか言えないかな。よし。じゃあーから教えてあげよう。お部屋どこ？」

「あ、私は今は寮じゃなくて——っ!!」

あつぶね！何突然聞いてくんの？答えそうだったんだけど。

「ん？どうしたの？」

「なんで当たり前のように住所聞くんですか？え？は？」

レイカちゃんもライカちゃんもいるんだから言えるわけ無いだろ

!

「いやだって、一日中教えるついでに家事等全部任せようかなって」

「…居候するつもりですか？」

「うん。師匠だし」

…無言で教授の方を向く。抜き足差し足で逃げていこうとする姿を一瞥して、聞こえるようにため息をついた。諸々の思い込めて。

「なんでため息つくの？」

「で、言っちゃうとあれなんですけど、私養ってる子がいるんですよ。なので、お断りさせていただきたいです。家事ならここに来てやりますので」

「…ふーん。じゃあ、まずは手取り足取り教えてあげるね。覚悟するんだぞー！」

さてさて、天才とも言われるミレーさんはどうやって教えてくれるのか、楽しみみである。

「はい！これで今日は終わりだね！」

ガクツ…。

「ほらほらく、為になったでしょ??」

「は……………いい」

「ほらほらく元気出してって！そんなに疲れてないでしょ? 私ならまだまだ動けるんだから」

…

……………

「ゲホツ」

ビチャツと口から赤い液体が飛び出した。

「ふへ?」

「ガホツ。ゲホツ。ゴホツ」

やべ、止まらない。

「ちよちよちよえ？あれ？なんですか病気でも患ってるんですか!？」
「うええホツホツ」

ヤバいよ。俺の可愛いお顔が見せられないほどに歪んじやってるう。

「はあく。やつぱこうなったかあく」

「師匠!？」

「予想通りすぎて笑っちゃうね。ほれ、魔力抜いてー」

魔力抜くー？あ、そう言えば入れっぱだっけ。

ベタン

あつ、一気に力抜けちゃったせいで血溜まりに顔突っ込んじやった。まあいつかあ。いやよくないかあ。流石に知らない人の前でこの醜態は…

「よくしよしよし。痛い痛い飛んでけ〜」

「別に、痛くは無いんだけどなあ。」

「おつ、喋れているじゃん。成功成功。後言ってみたかっただけなんだからいらんこと言うな」

「お？、おおく。体は楽になりましたね」

なんか何も感じなくなるぐらいには疲れてたけど、体の感覚戻ってきたー。うえ〜い。…

「オラッ！」

「ごふう!？」

よしっ。ストレス解消！気持ちいい!!!

「なんてことするんですか!？」

一瞬で立ち上がったド畜生が文句を言ってきた。

「何回死を覚悟したと思ってるんですか？びっくりしましたもん。いきなり体絞めてくると思ったらなんか体が体に入ってくるし、びっくりして特異魔法使ったのに体の中で暴れまわるんですよ？クソいてえわ、苦しいわ、視界も赤く染まるわ、ふぎけんじゃねえよ!？」

「だって泣かなかったじゃないですか!泣かないならまだいけるってことですよね?？」

「えっ」

「えっ」

「…ごめん。流石に無いだろうと踏んでただけど、まさかこのレベルとはね。命は救ったから許してくれ」

教授がこれは流石に…といった様子で謝ってきた。そんなことよ
り

「俺死にそうだったんですかあ!？」

「俺?」

「そんなことどうでもいいですよね!?!え、なに?どういうこと?」

「えっと、これはな、魔力で相手の体の様子を隅々まで確認するっていうやつなんだけど、一回で全部やると凄く苦しいからちよつとずつやるやつなんだよ…。やっておいたら教えやすいし、私も過去に、特にこの子にもやったんだけど…」

「そうです!師匠がはじめに私にやったじゃないですか!私だって痛かったんですよ!私悪くない!」

「でも教えたよね」

「…」

「やいば。今日は帰っちゃいなさい。ちゃんと教育しとくから、年始にでもまた来てくれ」

「あ、はい。ありがとうございます」

正直、いい教え方ならレイカちゃんとライカちゃんにもお願いしようと思ってたけど、絶対やめとこう。うん。今日は自分の為にもとびきりオイシイものにしよう。

いやほんと、やばい人だったなあ。

なにもヤバくない大晦日！

というわけで12月31日。今日はいつぞやとは違い完全に準備は整っている。と言っても大掃除くらいしかやらないのだから蕎麦くらいしかないのだけど。

「おはようございませす…」

「おはよ…」

「ご飯出来てるよー」

「はーい」

モキュモキュとご飯を口に運ぶ様子を眺めながら今日やることを整理する。

……………あれ？

掃除は普段からやっているせいで、やるとしてもちよつとぐらいだ。なんなら一ヶ月前に寒さに備えて暖房器具整備したばっかだし、マジでやることない。

「ねえ。二人ともなんか予定ある？」

「いや、無いですね」

「何もなーい」

普段なら拠点に戻ってもいいが今は絶対に戻りたくない。ド畜生がいるから当然だろう。

「…なら、お買い物行こっか」

足りなかったから買い出ししようと思ってたし、ついでに遊ぶなりして夜まで時間潰しますかね。

「あつ、皆でゲームしたいー！」

「あつ、そう言えばサンタさんから貰ってたね。いいよ。ちよつとだけ買いたいものがあるから私は行くけど、それが終わったら私もやろうかな」

「うんー！」

そう言えばこの世界でそういうゲームしたこと無かったし、ちよつと楽しみだ。

うん。楽しいね。皆初心者だから上手い下手なくて楽しいや。

「あーまた負けた。ライカちゃん強いね」

「当たり前ですネ」

「レイカのお陰！」

まあ、レイカちゃんの立ち回りが余りにも姉鼻頂で実質二対一みたいなところあるから全く持って勝てない。でも満足そうな二人は可愛いので全然オツケーです。それに、たまに勝てるしね。

と、そろそろ時間である。

「そうだ。二人はガ○使見る？」

「見る！」

「はい」

なんとこの世界でも、元の世界と同じようにガ○使を年末にやっているのである。なんだかんだ楽しみにしていたのだ。

「アハハハハ!!」

「ふふっ！」

楽しそうに笑っていてなによりだ。晩御飯を、後から蕎麦も食べるので軽めにつまみやすい物にして、食べながらガ○使を楽しむ。紅白もいいけど、やっぱりガ○使の方が好きだね。

「ちよっとお蕎麦茹でるけど、天麩羅いる？」

「いるー！」

「ライカが食べるので、私も」

「はいよー」

蓮根とエビをさくつとあげて、いつでも食べれるように置いておく。蕎麦も茹でて――

ガタン！

「!?!」

勢いよく扉の音が響き、すぐに人影がリビングに現れた。ぱっと見知らない人。だがこれは確実に、

「聡太君？」

「やいば、年越し蕎麦作って」

うん。だよな。

「あのさあ、インターホンくらい押してくれない？ほら見てよ。ライカちゃんもレイカちゃんもびっくりしてるよ」

「え？あの、なんで聡太さんだと分かったんですか？」

「え？勘」

うわまじかというような顔を全員にされたが、なにもおかしくくない？。これでも数カ月の付き合いだよ？そのくらい出来るでしょ。

「後、蕎麦はちよつと待ってもらえる？天麩羅もう一つ揚げるからさ」
念の為四人用買っておいて良かった。なんとなく来る気がしたも
んね。

「ゴロゴロしといて〜」

数分後、笑い声の一つ増えた。

「は〜い。お蕎麦できたよ〜」

時間が近づいてきたのでお蕎麦を持っていく。ふた…三人はゆく
〇くる年へとチャンネルを替えていた。個人的にはそんなものより
ガキ使がいいのだが二人がそれを望むならオツケーです。

「ライカ、ライカ。起きて！お蕎麦だよ！」

「んう？…やったー」

眠そうに喜ぶライカちゃん。ま、眠さもご飯食べたなら収まるかな。

「美味そう。おかわりは？」

「ありません。それは我慢してください。あとその姿もやめなさい」

シユンとなる聡太君。今の姿はなぜかタレントの姿である。多分
ガキ使に影響されてる。

「二二いただきます」

食べていると、テレビから除夜の鐘の音が響いた。

「あけまして、おめでとうございます」

「あけましておめでとう！」

「あけましておめでとーございます」
「あけおめ」

それぞれの挨拶を交わして、新年が始まったのである。

新年早々やばい人！

大晦日という、夜更かしの許される夜を終え、いつもの時間となっても起きない二人の朝ごはんとしてお雑煮を作りながら俺は新年の特番テレビを見て楽しんでいた。

「いや、前世はテレビを見ないのが普通だったけど、改めて見るといいもんだな」

テレビより動画サイトに食いついていた俺であるが、やはりテレビも良いものである。事故も炎上もほぼないから安心して見れるしね。

ピンポーン

「はれ？」

餅を食っていたせいでうまく言葉に出来なかった。じゃなくて、インターホンが来た。なんだろうか？

「はー…」

「来たよー！」

「み、ミレーさん…？」

特定されてるっ！

「えー取り敢えずこの前のはごめんなさい。師匠にぶつ通しで教え込まれたので二度とあんなことにはならないようにしますごめんなさい」

取り敢えず寒いので家に入ってもらおうとすると、突然謝罪をしてきた。どこか棒読みに聞こえるが、きつと気の所為…？

「ところで、どうやってここに来たんですか」

「あ、それ気になる？」

「当然です」

「この前、体を調べさせて貰ったでしょ？あのとときにやいば…あ、これからはやいばって呼ぶね。やいばの体のことなら知り尽くしちゃったからね。魔力で嗅覚を強化して特定したよ」

「ピッ！」

異常なまでの気持ち悪さに椅子ごと引いてしまう。

「いやそんな反応……。でもね、やいば……。やっぱ弟子っていいたい！」
「好きにしてください」

「弟子よ！私って超多忙なわけよ。聞いたことないかも知れないけど、大スターなの。私。この青く輝く髪と透き通るような碧眼からもわかる通り、故郷は別だしね。かなり長期間滞在してるけど、後少しだし、次来られるのはいつになるか……」

そう言えば秋名さんもそう言ってたっけ。

「だからね？弟子の要望に答えるためには急ピッチで進めないといけないわけ！泊まり込みもやむ無しってね！」

なるほど。そんな事情があったわけか。だとしても気持ち悪いけどね。

とか、そんなことを思っているとガタンと音がした。

まずい！レイカちゃんとライカちゃんが起きてしまう！これをあの二人と合わせてしまうわけには――

「おはよう」

「おはようございます」

「やだっ！弟子の子供かわいい！」

「終わった……」

子供発言は訂正しようか迷ったが、辞めた。

起きて早々不審者を見て、ポカーンとしていた二人だったが脳が処理能力を働かせたのか、レイカちゃんがライカちゃんを背中に隠しながら恐る恐ると言った様子で話しかけた。

「あの、もしかして、ミレーさんですか？」

「おや？もしかしてこの子達は知ってる……？ふふふ。そう。私はミレー。天才だよ！」

「おおお！なぜ我が家へ!?!」

なぜだろうか。レイカちゃんの状態が外用の活発なものとなっている。ほんと裏表激しいなこの子。後ライカちゃんも隠れちゃって。「聞いて驚きなさい！私は君達のお母さんの師匠なの！だからしぼら

くは一緒に暮らすわ!」

「レイカちゃん。ライカちゃん。ミレーさんお酒飲んじやって酔っ払ってるから変なこと言っちゃうみたい。聞かなかったことによっか」

「弟子? 嘘吐くのは感心しないなあ」

「あ、ごめんごめん。虚言癖だった。どっちにしろまともに話は聞かなくていいから」

「怒るよ?」

さて、どうすればこのド畜生をこの場から剥がせるのか。悩む。

「えっと、ミレーさん。ライカと写真撮ってもらえませんか? ライカがファンなんです!」

「ほほう」

「え? そうなの?」

満足げな顔を浮かべるミレーさんを横目に、ライカちゃんがこくと頷いた。なるほど。

「ミレーさん。お茶どうぞ」

「よくもまあすぐに態度変えたね。弟子」

ライカちゃんが尊敬するならちゃんともてなさないかね。

おずおずとした様子で隠れるライカちゃんをレイカちゃんが満面の笑みで引き摺り出してミレーさんの横においた。だが、レイカちゃんはカメラなんて持ってないだろうから私が――

ゴトツ。

「...え?」

かなりガチなカメラが即座に取り出された。手慣れた手つきで恥ずかしそうにもじもじするライカちゃんにフラッシュ。まるでプロのようにウンウンと頷いては、その写真を眺めていた。

取り敢えず私はライカちゃんと、そんなレイカちゃんを携帯のカメラに残した。うん。かわいい。

「さて、弟子よ。早速メニューに入るぞ。君達も見ててもいいが、真似はしたら駄目だぞ。これは、弟子用のメニュー。君達がやっても同じような成果を得られるとは限らない。むしろ、悪くなる可能性すらあ

るからな」

この子達はしつかりしているから、忠告があればやらないだろう。それに、かっこいい姿を見せるためにも、頑張るぞ！

「まず、魔力について。魔法のもととなる魔力っていうのは、本当にすべての物に代えられる万能な物質なんだ。ほい。これが拡大した魔力の粒子」

見せられたそれは、なんと表現すればいいのだろうか。ただ、言うなれば、一つの形を持っていなかった。ぐにやぐにやと多数の形に変形し、固まり、溶けて、分裂して、融合して、色もめちやくちやに変わっている。

「これが集まったりして魔法の現象を起こしているんだ。炎や水、生き物まで何でも表現して、そして、時間が経てば勝手に魔力に戻る。こういうものなんだよ。魔法って」

「じゃあ、怪我とかはどうなっているんですか？」

「怪我の場合も、一定期間代わりに働いてくれるだけだから。もしかしたら、治したばっかの場所を弟子が触ると、傷口が開くかもね？」
うえ、なにそれ怖い。

「まあつまり、この粒子への理解とコントロールが魔法には大切なんだよ。もう弟子の体は知り尽くしてるから、最高効率で頭と体にこれでもかと叩き込むのが、今から私がやること。覚悟してね？あ、限界もわかってるから安心して」

にこっと笑みを浮かべて、ミレーさんは立ち上がった。

…ガクッ。

きいてたはなしと、ちがうう…。

「やいばさん!?大丈夫ですか…?」

「やいばお姉ちゃん!!死なないで!」

ああ。二人から心配されてる…。嬉しい。あれ、目から汗が…。

「でも、血は吐かなくてすんだでしょ?ふふふ。完璧な調整…私って天才!!」

反論が出来ない…というか、口が開かない…。

「ムーっ!!」

「運びますね!!」

ライカちゃんが一転してミレーさんに威嚇して、レイカちゃんがどこか暖かな水でプカプカと運ばれる。しかも、息が苦しくならないように工夫もされてる。

優しさが身に染みるよお。

「弟子よ!泊まるのは勘弁してあげるけど、明日も来るからね!」

あしたも、がんばろう。

お布団のやばい包容力…

ピピピ。ピピピ。

「zzz…」

ピピピピ。ピピピピ。

「…んっ…」

あらーむ？あれ？

ピピピピピピ、ピピピピピピ。

おれ、あらーむなんてつけてたつけ？まあいいか。起きないと…
うーん。起きたくない。布団から出たくない。むうううううう。

ピピピピピピピピ。ピピピピピピピピピピ。

なんか長くなつてね？でも、このあつたかさからは逃れられねえよ。別にまだお休みだし、いいよね…。あつ、これあつたかい。ぎゅ。

「むう…う…むふ。ぎゅ〜」

なんか抱き返してきた。あつた…抱き返してきた!?

さつきまでの体たらくはなんだつたのか。意識が一瞬で覚醒した。
すぐに俺が抱き付く先をみれば、やっぱり抱きついていたのは天使だった。

「あつ、あ、あ…」

やばい。つかま——らないわ。ないよね？俺保護者的なもんだしこのくらいいいよね？いい？ありがとう。ぎゅ〜。

「何で二度寝するの？弟子？」

おおん？俺の夢を邪魔するのはどこのどいつだあ？と、声のした方向を見ると、スマホのアラーム画面を掲げたミレーさんが屈んでいた。

まずいですよ!!!!

その角度はダメ！見えてる！スカート履いてるのにそれはだめっ！

咄嗟のお布団ガードで視界に極力入らないようにしたが、それでも見えちゃったものは見えちゃった。悶々とした煩惱を必死に打ち消

していると、フツツに布団を剥ぎ取られた。

その布団ごとゴロゴロ移動して、コロコロコロコロと、ゴンツ。壁に額を打ち付けて、やっとこさ布団から出られた。

と、こんな感じで、ミレーさんはもうマジでいつの間にか家に居ることが多くなった。やることといえば俺の修行のみで、たまに俺が作った朝ごはんなどに感動していた。

ミレーさんの修行だが、正直めちやくちや良い。体への負担を無視すればこれ以上ないほどで、いまや俺も一秒くらいなら炎龍を出せるようになった。ちよつとかわくてカツコいいから好きである。

後、特に大きいのが身体能力をあげる魔法。この前聡太君と模擬戦的なのをしたのだが、肉弾戦。魔力の使用は俺のみオツケーという特殊ルールで遂に勝利した。え？そんなの負けるのかって？

失礼だな。過去三十戦は全敗だよ。

「よし。じゃあこれで一旦は教え終わったね！お疲れ様」

「はあ〜〜。ありがとうございましたっ！」

たった数日でかなり強くなったと思う。少なくとも、不意打ちで始める殴り合いにはもう負けないだろう。

「ホントはもつと教えたいけどそろそろ時間がね…ほら、こんなもうこんなじか——」

ミレーさんが固まった。

なかなか硬直から抜け出せてないので、ミレーさんの覗き込む時計を見た。

ぶるぶると小刻みに時計の秒針は揺れている。短針と長針は静止して時刻は9時10分。秒針がぶるぶる震えているから壊れたんだろうけど、空を見るにあんまりおかしいような気はしない。

しかし、そんなことならもつと早くに立ち直るんじゃないだろうか。あ、もしかするとお気に入りだったとか？いや、タイプはごく普通で、探せばすぐに見つかりそうなデザインだ。お気に入りでも、ここまで固まるか？

「あの？ミレーさん？」

「ハハ。ハハハ」

え？突然笑い出したんだけど。

「これは、不味そうだね。いや、事実確認が先かな？」

すつとスマホを取り出して、再びミレーさんは笑う。

「なるほどなるほど。弟子を見てもしやと思ったが、まさかやるとは！そして、ここまでとは！」

「ちよつと？」

勝手に盛り上がらないで欲しい。こっちはミレーさんの奇行に戸惑ってるんだから。

「弟子。スマホを見てみなさい」

「え？はい」

確認してみると、9時10分で、横につく秒数を表す数字は、一切動いていなかった。

「へ？」

「これを見てみてくれ」

次に見せられたのは時計アプリのストップウォッチ。開始ボタンを押して数字が動き始め——ゼロに戻り、また、動き始め、ゼロに戻り、戻り、戻り、戻り。

「ちよつ、何がどうなって…？」

「取り敢えず、家に入ろうか」

落ち着いた様子のミレーさんとんと背中を押され、家に入っていく。リビングでは、二人がゲームで遊んでいた。ゲームは問題なく進み、居間についているアナログ時計はミレーさんのと同じく小刻みに秒針だけが震えていた。

「レイカちゃん。ライカちゃん」

「あつ、やいばさん。お疲れ様でした」

「やいばお姉ちゃん。お疲れ様！」

ああ、二人は普段通りだ。良かった。

「こっち来て」

コテンと首を傾げながら近づいてきてくれる。特に理由はないが、こうしておかないと落ち着かなかったのだから許してほしい。まだ

この事態を飲み込めていないのだ。

「あのミレーさん。これは一体？」

深刻そうな顔でミレーさんに問いかける。

「…まずは…ね。私のこの時計は壊れないの。魔力時計って言って、パーツが壊れたら魔力による修正を即座に行うつてもので、私の魔力的に壊れることはないの。でも、これは壊れた。いや、違う。止まっていた」

ふと辺りを見回したレイカちゃんとライカちゃんが居間の時計に気付いてビクツと飛び跳ねていた。

「先に言っちゃうね…。しばらくは、空は変わらないよ。いや、空どころか私達の体も、見た目も、変わらないと思う。あやふやなのは許してね。私も初めてのことだから」

意味の分からないことをミレーさんは言っている。

「ちよつと見てて」

そして、なんととはなしに取り出したフォークを――

ザクツと自らの腕に刺し込んだ。

「は!?!」

「っ!?!」

「えっ!?!」

抜き出すと、みるみるとその傷は塞がって、何事もなかったかのようサラサラな肌へと戻る。

「私達は今、誰かの特異魔法の支配下に置かれてしまっているんだ」

なるほど、それはやばいですねえ。

なるほど、それはやばいですねえ。

「へーっ。所で二人とも眠くない？まだ大丈夫？」

「んーん。なんか眠くない」

「私もです」

「待って、突然何でそんな話になる？」

「え？今は二人が寝る時間ですし…」

「さっきまでの深刻さどこいったの？」

「いや、だってそんなの、その人が気が済むまでやるか、その人を倒すかしかないわけですよ？なら、おまかせしようかなって…」

聡太君や隊長、ミレーさんに爽さんとか言う人外戦力は沢山いる。俺いらねいだろどう考えても。

「はあ、あのね？もしかしてだけど多少ほっておいてもなんとかなると思ってる？やばいからね？」

「え？でも、怪我しないんだったら安全じゃないんですか？」

ミレーさんが己の体を使って証明してくれたじゃないか。

ミレーさんが物凄い呆れた目で見てから、諭すように言った。

「あのね、怪我しない≡安全じゃないことぐらいわかるでしょ？というかね、この状況の真にやばいところっていうのはね、説得以外の対処法がないことなんだよ」

「え？相手次第ってことですか？別に倒せば…」

「相手が負う怪我也治るに決まってるでしょ」

ああ、確かに。そう考えると、倒してもらってもクソもないのか。爽さんが説得する、とか？まあ何にせよ俺は要らないかな。

「ま、そろそろだね。はい」

スツとテレビをつけると、テレビは混沌としていた。

『緊急事態です！原因は不明ですが、全国各地の時計が正常に動かなくなっている模様です。また、ネット上で、怪我したけど治った等情報が出回っています。調査中ですので、落ち着いた行動を心掛けてください！』

バタバタと足音が響くスタジオで必死にアウンサーが伝えていく。というか、こういう人達は災害時にもしないとイケないわけで、大変だなーと。いや、樂觀視してる場合じゃないな。

スマホで皆の眩きを見てみる。やはり、好奇心に突き動かされ、色々な検証がなされている。まあ、どれが嘘で本当かなんて分からないが、大事な情報源だ。

しかし、俺はこの様子を見て、やっと不味さに気づいた。

今ネット民がやっていることはあくまで違ってもなんとかなるもの。腕を軽く切ってみたり、空の天体を観察したり、ジューズを零してみたり、可愛いものである。しかし、これがエスカレートしていったら？

傷がついても治るから、気軽な気持ちで取り返しのつかないことに挑み始める者がいないと、どうして言える？ フォロー数や再生数、いいね数。承認欲求に支配された人間は間違いなくやるだろう。

まあ、生きてるなら、いい。でも、問題なのは、この問題が解決した後の事。

前まで出来ていたから、死ななかつたから、これだけで愚行に及ぶものはどれだけいるのか。

なんなら、解決なんてしなくていい。この事件の首謀者が、気まぐれに解除してしまえば、何人かは死ぬ。

この状況が続けば続くほどそれは常識として広がっていく。早急な解決が望まれる反面、一定のところまで行けば、解決は望まれなくなる事例であろう。いや、そんな、一人の人間によるルールなんてない方がいいため、多少の犠牲を許してでも解決は望まれるかも知れないが。

「その様子だと、分かったみたいだね？ 弟子」

「はい」

「どういう」

「ライカあのね…」

ニヤツとミレーさんは笑う。

「さて、さつきも言ったことを繰り返そう。この問題の真にやばいと

「ころは、説得以外の方法が無いこと」

「そう。だからこそ、これは首謀者の意識のみで決まってしまう。爽さんの説得や警察の協力は必須だろう。」

「だが、例外がある。そう、弟子よ。君の特異魔法だ」

「え？俺の…ですか？」

「そう！君の特異魔法はすべての魔法を掻き消す！たとえそれが、天才の一撃であっても！世界を揺るがすなにかでも！魔法という枠組みにあれば、塵のように消えてしまう！」

「で、でも！私は相手の状態に干渉できません！相手が身体能力の強化をしていても、なんにも手の出しようがないんです」

「そう。隊長の時のように、聡太君の時のように。体を変化させる系であれば、俺が触れたところでなんの意味もない。」

「うん。それは知っているよ。でもさ、解決できる手段が残されているだろうか？」

「なんの……！」

「君の特異世界で、この特異世界を塗り替えればいいんだよ」

「自然と頭から弾いていた選択肢。だってそれは…」

「今から、特異世界を使えるようになれ。と？」

「そのとーり！」

「明らかに、無理難題の一つだからだ。」

「ま、私は特異魔法のこと、特に世界の事はなんにも知らないんですけどね」

「えっ、それじゃあ…」

「うん。師匠のとき、行こっか！」

「にっこり笑顔で、天才は師匠に丸投げした。」

ヤツベエ…

ピンポーン。

「お？」

教授に会うために準備を進めていると、インターホンが鳴った。

「はいはい」

適当に返事をしながら扉を開けると、そこにいたのは知らない人。

まあ、こういうときは大体…

「聡太く——「待ちなさいっ!!」」

パシツと必死の形相で突き出したミレーさんの手は目の前の人の拳を防いでいた。

「え？」

あ、これマジでただ知らない人か？

「燃えろ！」

ミレーさんは受け止めた手を捻り上げ、腕から炎を這わせて全身を燃やす。そのまま蹴り上げると、俺の体を引っ張って家に連れ込んだ。

「あつぶなあ…。はあ」

「あ、その、ありがとうございます」

「取り敢えずその体に纏わせてる魔力抜いて。そうじゃないと不意打ちで死ぬからさ」

あつ、いつもの癖でやっちゃったけど、今はそっちの方が危険なのか。ゆっくりと確実に魔力を抜いた。

「で、今のは…？」

あの人は何なんだ？見た事ないし、拳は見えないほど速かったし、でも殺意的なのは一切無かった。

「あんたも散々知ってるでしょ。聡太さんよ」

…え？

「あと分かっているとと思うけど、今回の騒動の原因は空斗さん。つまり隊長で、敵となるのは空斗、爽、聡太の三人＋何かあってところね」

はっ？

「really?」

「yes」

「……………は?」

まったく持って、信用出来ない、いや、したくない情報がポロツと零された。

「いや、え?」

「おつ、戻ってきた。なに?そんなに意外だった?もしかして爽さんとか聡太さんとか隊長とか好きだったりした?」

「いや、それは無いですけど…隊長の仕業なんですか?」

「うん。見たことない?隊長が傷を負った瞬間とか」

それはあるけど…確か、ナイフを腕に突き立てて、血を吹き出させながら俺に押し付けて来たんだよね。俺の服には結局一適も血は付かなかつ…あれ?

「心当たりある?」一応言っておくと、隊長の特異魔法は物体の時間を戻すことだよ。不老不死って言うのも、肉体がずっと戻り続けているからこそなんだよ」

だから血が付かなかつた?戻るなりなんなりで服についた血液もなかつたことになった?

「さつき私の腕をフォークで刺したときも血は出なかつたでしょ?そういうこと」

それなら、隊長のと考えてもおかしくない、のか。…正直、ミレーさんより遥かに信頼のおける人達だから、中々認められない。でも、可能性の一つとしては置いておこう。

「ところで、さつきの人…聡太君ですけど、来ないんですか?」

「ああ、うん。大丈夫。扉の鍵を閉めたから、ピッキングかなんかで開けない限り入れないよ」

「でも、壊されるんじゃない?」

「壊れても戻るから」

ああ、そうなるのか。今じゃどんな家でも鍵を閉めれば立派な要塞ってことね。

「あの、やいばさん？」

「やいばお姉ちゃん？」

「大丈夫大丈夫。心配しなくていいからね」

二人でいるのは危険かと思ったが、これなら留守番させたほうがいいのかも知れない。と、状況説明も兼ねて言ってみると、

「そうですか。わかり——」

「ついて行く！」

「…ついて行きます」

「ええ…」

手のひらくるんくるんのレイカちゃんは置いていて、なるべく残って欲しいんだけどなあ。

「やいばお姉ちゃんより私の方が強いもん！」

否定 できません。

いや、レイカちゃんと、なら勝てるけど、悪者と、なら10・0で惨敗だよ。音を置き去りにするレベルの速度でワンパンとかどうしようもねえ。

「いや、でも…」

「危ない！」

レイカちゃんが叫んで、いつの間にか後ろにいた人を水で飲み込ん で遠くへ押し流した。

「あ、え？」

「嘘…？なんで入ってきてるの？」

ミレーさんが疑問を零す。まさに想定外らしい。何故だ？夜だから窓もカーテンも全部閉め切っているのだが…あ。

「聡太君って小動物にもなれたよね」

「…あ」

小さくなれば、換気扇の隙間とか扉の郵便受けとかからいくらでも侵入できる。お家最強理論、破綻しました。

「ライカ！」

「うんっ！」

轟音と閃光が流れる水により体制を崩した聡太君に襲いかかる。余裕で死ねそうだが、傷も何もかも戻ることできなくなってしまふ。

「逃げるよっ！」

現状、俺の特異世界がない限りケリがつかない。俺で殴れば特例で効くなんてこともないので、マジで特異世界頼りとなる。なら、それが手に入るまで戦うだけ無駄だ。

でも、どう逃げるべきなのか。聡太君もいずれば——あれ？まだ抜け出してない？

「ミレーさん！」

「見えてるっつての！ライカ！ライカ！担がれなさい！弟子は走れ！」

「はい！」

「いい？まずレイカは定期的に水を流して、聡太さんまでの導線を作る！そして、ライカはそこに雷を落とし続ける！分かった？」

「はい！」

「いい返事！」

言われた通りに二人は行動する。こうして継続的に電気を送り込まれれば、一瞬とはいえ体が麻痺する聡太君相手になすすべはない。欠点といえば、めちゃくちゃ目立つというぐらいだろうか。まあ気にしてはいられない。

「よし。もういいよ」

「はい」

「はあい」

ライカちゃんの方を取り敢えず受け取って、ミレーさんに方針を聞く。

「これからどうするんですか？」

「師匠のところに行くよ。この事態を師匠は予測していたから、それ用の隠れ家もあるんだ」

「用意周到なんですね」

「まあね」

その隠れ家は雷でバレることの無いくらいには最後に雷を落とす位置から離れている。これまで通ったルートの延長線上とかでもなく、聡太君にバレることはないだろう。

「師匠ー？」

でも一つ問題が、

「誰もいないんですかね？」

「あれ、やいばお姉ちゃん！なんかお手紙あるよ？」

「ホントだ。えつと？」

『爽に隠れ家バレてた（*ノω*）テへ。時間は稼ぐからその本でなんとかしてくれ。あと情報共有は絶対されてるから、早急にここから離れるように！』

爽さんには、意味がなかったらしい。

やばいよお。

ミレーさんについて行って、第二の隠れ家についた。
一旦心を落ち着かせてから考える。

さて、この戦いは前にも言った通り早期解決が重要となる。その出先がこれである。詰みでは？

いや、まだそう考えるのは速い。教授は天才であるミレーさんの師匠なのだからどこぞの魔法本よろしくの見るだけで覚えられるタイプかもしれない。

というわけでオープン。

「…ミレーさん。解説求む」

「分かん」

N A N K A I!

そもそもなんだ？この『己の魔法の原点を思い出せ』とは？知るかなんで分かると思ったんだ。

「あつ。やいばさん。ミレーさん。これ」

暇だろうから携帯を渡していたが、そんな二人が何か見つけたみたいだ。

見せられたのは国营放送。空から何かを緊急中継していた。

「これは…」

「師匠と爽さんだね」

凄い戦いだ。踊り狂うようにビルや車が手足を生やして爽さんを囲む一方、爽さんは合間を縫って避け続けている。一部建物が密集しているところがあるので、そこに教授がいるのかもしれない。

「うーん。もつと近くで見れるの…あ、あつた」

すると、ミレーさんがもつと近い視点のものを見つけてきた。見た感じ動画投稿サイトの生中継だろう。この人度胸あり過ぎでは？

というか、こうしてみると教授側が悪役にしか見えない。多分振り回されているビルや車の中には人がいる。あまり気分は良くないが、止めるすべもないし止めたら止めたで不味いのでスルー。

配信に付属されているコメントは物凄く流れが速い。手足の生えたビルとかは気持ち悪いがそれでも見てしまう程にはインパクトが強いのだろう。

「というか、これって教授負けなく無いですか？ 周り固めたら無敵ですよね？ 今の環境的に」

「そーだね。泥試合待ったなしだし、しかも今って意識失うことも無いっぼいしね」

「え、そうなんですか？」

「ネットニュースで話題になつてた。なんか寝れないらしい。後怖いのが9時10分の時寝てた人は起きないってのもあるらしい」

真偽は定かではないが、怖すぎるだろ…。

「ほらほら、早期解決に向けて読み込め読み込め。まだまだページあるでしょ」

「正直1ページ目から理解が難しいの終わつてると思っています」

まあ読むかあ…。

うーん。一部は分かるんだけど…でも結局は『己の魔法の原点を思い出せ』に関わつてきてるなあ。原点かあ…。俺の特異魔法整理してみるか。

まず、というか、俺が使える特異魔法は魔法を無効化する。それに尽きる。でも、相手が身体能力を強化するとかには使えずにあくまで、俺に影響を与えるものを消すといった感じだ。

放出して先に消すなんてのも無理。ちゃんと自分で当たらないと消えない。あと、世界のフィールド的なのは消えないね。俺に魔力を通せば傷がつく今みたいに、世界が与える影響自体は消せるんだけど。

イメージとしては体にそういう膜を纏わせてる感じだよな。実際俺自身も身体能力強化が使えるわけだし。

こんなもん…かな？ いや、マジで原点つてなに？ えー？

「あつ、聡太さんだ」

マ？ちよつと切り上げて見よ。

というわけで教授vs聡太君。果たして結果は――

「ん？聡太か！おい！聞いてるかわからんがやいばとミレー！もう耐えれん！じゃあn「はい。ここまで」」

「あれ？配信終わっちゃった」

「最後の声的に爽さんだろうね」

気付かれてたのか。この配信者さんに、合唱！パン

「で、弟子よ。分かった？」

「いえまったく」

「まあ、もし簡単なら使えるか使えないかで別れることもないか」

「あの、ちなみにそこで気になったりしませんか？」

「え？」

「いや、たとえば…俺が特異魔法使えないとか？」

別により得ないことではないだろう。むしろあり得るよりだ。

「その場合は詰みなのでヨシ！」

「なにも良くないが？」

「でもそんなん考えたってしかたないし…。希望を信じるしか無いんだよ」

突然真剣なトーンで言われるもんだから反応に困る。まあそうか。希望ね。

「ちなみに、ライカちゃんとレイカちゃんはどう思ってる？」

「暗いの怖い」

「ライカがそう言ってるので…」

「命に変えてでも成功させます」

「うわ、目がガチじゃん。…ま、私ちよつと隠蔽してくるね」

この隠蔽とは、外から目では分からないようにするとうものだ。いい感じに光を屈折させて隠すらしい。流石天才。痺れるし憧れる。絶対の特異世界を使えるようになるんだ！という強い決意のもと、また本を開いた。

時間がなさすぎてやばい

あれから数日。もしかや?と思ったことがあれば何でも実行し、そして振り出しに戻るのを繰り返している。そんな中、やはり人類は2つに別れ始めていた。

まあ簡単な事だ。この状況を肯定するか、否定するか、己にそんな決定権はないはずなのに、それを言い合っていて少しイラツとする。：けっして、俺が上手く行つてないから八つ当たりというわけではない。

まあ外なんてどうでもいい。今は、特異世界を使えるようになる、である。もういつそ、はじめの文言を無視して、ひろがれーひろがれーと念じたり、魔力増加術!みたいなオカルトを頼つてみたりしたが、効果はない。

結局は『己の魔法の原点を思い出せ』というのが必要みたいだ。

「うーん」

「うーん」

「うーん」

気づいたら参加していたレイカちゃんとかライカちゃんと一緒に首をひねる。本当に何なのだろう。己の魔法の原点?知るか。気づいたら持つてたんだから。そうだな、転生して、んで：ん?転生?

そう言えば、俺が元々いた世界は魔法が使えないんだよな。もし、隊長みたいに世界中に俺の魔法を広められたら：それは、俺の元いた世界になる。

元いた世界に、魔法なんてものはない。あつたとしても、それは創作の中。現実にはない。たとえ目の前で魔法を見せられたとしても、大概は笑って、否定して、そうでなければ映像編集、マジックを疑う。そうして結局、魔法とは認めないのだ。

そうだ。これは魔法ではないんだ。これを魔法だと考えるから、求めた理想に矛盾が出るのだ。『魔法の存在しない世界を作る魔法』ネットであれば即座に指摘が飛びそうなコレを、理想としているのがおかしいのだ。

そう。言うなれば、これは俺の故郷を再現するだけの作業。俺の、俺だけの、『特異世界』をここに作ればいいのだ。

名前なんて、要らない。だってそれは、俺にとつての普通であるから。そうであることが当然なのだ。

「ひろがれ」

「ほえ？」

「やいば、さん？」

ああ、体が異様に熱い。何かが躍動して、待ち望んでいたかのように何かひろがる。熱は時を追うごとに急速に冷えていって、考える間もなく完全にそれは失われた。

さつきまであった感覚が無くなって、寂しいとは感じない。だってそれは元々無かったもの。元に戻っただけである。

「——できた」

喜びはない。だが、帰ってきたと錯覚を覚えるほどの安堵が身を包む。この状態を維持し続けたい。叶うなら、この世界で世界を塗り替えたい。いける、いける、いけるいけるいける。

「っ！待て！弟子！」

「ひうっ」

「ひっ」

「ひろがれ、ひろがれ、ひろがれひろがれひろがれひろがれ」

ゴンツ！と頭に衝撃が走った。

ぱつと体を支配していた安堵は薄れ、体に熱が戻ってきた。その熱はジーンと頭に集結したが、一瞬で戻ることによりそれも蒸散した。

視界をあげると、二人が蹲っていた。

「二人とも大丈夫!？」

やけに顔色が悪い。完全に青ざめ、目には光がなく、何かへの恐怖に埋め尽くされている。

でも、それすらもこの世界の対象内なようで、元に戻った。

「はっ！はっ！」

二人揃って荒い息を吐き出す。少しでも気休めにと背中を撫でながら、俺の頭を全力でぶん殴ってくださいったミレーさんに視線を送っ

た。

「何があつたかわかつてなさそうな顔だね。いいよ。教えたげる。ま
ず弟子は特異世界を使えるようになった。そしてさつき、弟子は特異
世界に飲まれていた。さらに言うと、その特異世界の枠組みに入った
瞬間、二人が苦しみだした。今あつたのはこんな感じ。おーけー？」
なるほど。そんなことがあつたのか……。待って、これをしたら、レ
イカちゃんとライカちゃんが苦しんだ？うっそでしよ……」

「つまり今度は、」

「力の制御、だね」

「まだまだ先は長いよう——」

「いた」

「よっ！やいば。久しぶり。後レイカとライカもおひさし！」

そんなことを言う暇なんて無かつたらしい。

え、私の世界、ヤバすぎ…？

突然出来てしまった俺の特異世界によって、ミレーさんの隠蔽が解かれてしまったのが原因か、目の前には爽さんと聡太君がいる。聡太君は仲間だとしても頼もしいが敵だと怖いつたらありやしない。

というか、来るの早すぎない？まだ特異世界を使ってから十分も経ってないんだけど？

「えーつと…速いですね」

「うーん。まあある程度目処はつけてたからすぐに行けたって感じかな。びつくりしたよ。外からじゃ全く分からなかった」

爽さんという経験豊富な人でも見破れない程なのか。凄いなミレーさん。

そして、なんの気まぐれかは分からないが、二人はまだ襲いかかってくる気配はない。なら、冥土の土産とでも言えば色々と教えてくれないかな。あ、今は死なねえか。ハッハッハ。

「で、やいばはどうなんだい？大丈夫？頭おかしくなっていない？」

「流石に失礼では？…私は家事スキルと魔法がレベルアップしたくらいですよ」

「世界もでしょ」

「…まあそうですね」

見られてたらしい。でも、何故かは分からないけど範囲内にレイカちゃんとライカちゃんの二人がいると苦しみだしちゃうから使おうにも使えない。

「あの、聡太さんはなんでやいばお姉ちゃんを殴ろうとしたんですか…？」

恐る恐るライカちゃんが質問した。人見知りのライカちゃんにしてはとても珍しい。少しばかりの決意が瞳に表れているような気がした。

「あー…うーん…」

チラッと聡太君は爽さんに目配せをしてから、話し出した。

「邪魔になるから、かな。ほら、どうせこれやってるの隊長だってわ

かかってるんでしょ？やいばは一番の不確定要素だし、確保しておきたいな〜って思ったんだよ」

おう。これでさっきの俺みたいな現象でこの状況になった、というわけでなく、意図的にやっていったのが明らかになったな。

「じゃあ私からも。この騒動を起こした目的はなんですか？」

お次はレイカちゃん。相変わらずこの子は冷静過ぎる。もうちょい子供らしい反応してくれていいのに…。

「あー、それは…隊長に聞いてもらうってことでいいかな」

「え？知らないのにこんなことやってるんですか？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけど…」

「じゃあどういうわけですか？そんなに言い辛い事が理由なんですか？」

「いやその…」

なんだこの圧。これほんとに中学生か？

「あー、いいよいいよ。…いや、俺から言おうかな。まず、隊長がこれをしている理由は、すっごい言い辛いんだけど、隊長の好きな人との約束を果たすためっていうね…」

「「「え？」」」

「いや、あの、申し訳無いけど、そういうことなんだよね…」

やけに爽さんが遠い目をしている気がする。まあこの理由なら無理もないかな。

「その約束は？」

「それはあんまり知らないから隊長に聞いてね。よし。じゃあそろそろいいかな。あ、俺達が協力する理由は簡単。恩人が大きなことをやるんだから、手伝うしかないってことだね！さあ、もういいかい？」

「あ、ちよつと質問」

「何かな？」

「さっき、弟子の特異世界を使ったら、あの二人が苦しそうにしてた。原因は？」

え、それ聞くのか。それ弱点教えるだけになりませんか？いや、知られてるからどうせ〜とかなのかも知れないけどさ…。

「え？なにそれ…。ちよつとやってみて貰っていい？」
おつと？流れ変わったな。

「え、良いですけど、この二人を避難させたいです」
「いいよいいよ。待たげるから」

話がまとまって二人を見れば、ミレーさんに引付いて準備万端の構え。それだけでどれだけさっきのが怖かったのか分かつちゃう。申し訳無い…。

「えつとじゃあ、行きます」

意識することは一つ。これは、魔法じゃない。

ひろがれ。ひろがれ。ひろがれひろがれひろがれ。

あ、体が熱くなってきた。さつきと同じ。行ける。

「きます…。きました!!」

そうして、パツと前を向いた時、

「あ、あつあつあつ。あああああ!!!」

「おつ？ああ、な、なるほど…。コレはあ、キツツツイなつ！」

めちやめちや二人が苦しんでいた。ていうか、聡太君マジで死にそう。体中掻きむしってるし見ているだけで辛い。なんというか…これって…

「放っておいたら終わりじゃね？」

え、そんなあつけなく終わるか？やってもいいのか？だしたら私
の世界ヤバすぎないか…？

「ちよつ！バカバカバカ!!!追いつかれるう!!!」

あつ拡張止まってないの!?!はやく止めないと!!!えつ待って!どう
やって止めるのこれ!えつちよつどうしたら…。

そんなとき、目の前には地面から少し出っ張っている石があった。
焦りは人を狂わせる。

「フーン！」

「やいばお姉ちゃ〜ん!!!????」

「見ちゃだめー!!!」

真つ赤な鮮血と、一部の人間にトラウマを植え付けて、ひろがる世界は消えていった。

視線の訴えってヤバイよね。

目を開けると、涙目のライカちゃんとレイカちゃんが側に立っていた。いや、意識はあったので分かっていたのだが、やはり気まずい。涙目となるのも全部自分のせいな為である。

「やいばお姉ちゃん…」

「本当にごめん。そんなつもりじゃなかったんです」

無言の訴えは心にクる。特に大切な人ならなおさらだ。完全に土下座の形となった頭を動かせない。

「…まあ弟子は悪くないよ。制御がままならなかったのは仕方ないんだから、ああいう選択も間違いないよ」

ミレーさんがフォローしてくれる。この言い方なら、多分間に合ったのだろう。良かったよかった。

「そろそろいいかい？」

「あつ…」

完全に蚊帳の外となっていた爽さんが、少しやつれた顔で話しかけて来た。顔は見えないが、聡太君はまだぐったりとしているみたいだ。

「なに？やんの？」

「ミレーが聞いてきたのに、なんで喧嘩腰なの？」

「えっと、何か分かりましたか？」

一応今は敵同士な筈だが、どういうわけかアドバイスを求めているこの状況。草。

「うん。分かった分かった。取り敢えずなんだけど、マジで制御できるまでは使わないで。被害甚大だから」

「あ、はい」

真面目な話っぽいからちゃんと聞いとこう。

「まずね、レイカやライカ、俺に聡太がこうなる原因は、やいばの世界のせいで、俺達の特異魔法が無かったことになるから、だと思ってるよ」

「「あつ…」」

ミレーさんと声が重なった。まあそのくらい突飛だったから仕方ないだろう。

「えっ、使えないじゃなくて?」

「そう。無かったことになってるね。未来と過去含めて、これまで一切魔法に触れなかった自分自身に書き換えられているって感じがしたから。最後まで行ったらどうなるのか…」

こっつっわ!!!

あれか?俺が特異世界の時に思ったことが関係してるのか!?そうだろうね!魔法なんてないって言い切っちゃったもんね!

「あとね、ミレーにだけそういうのがない理由だけど、それは間違いなく特異魔法の有無だね。特異魔法はやっぱ普通の魔法と違いすぎるからね…。書き換える…これ感覚でしかないけど、もしこれが本当なら、特異魔法を無くすことで余程その人が変わってしまいうんだろうね」

「ふーん。よし分かった。師匠として、これからはやいばが世界を作ろうとした瞬間鈍器で殴るね」

「!?!」

「とんでも無い宣言されたんだけど…?いや、やらないよ?」レイカとライカ二人に支障があるんだから、使わないよ?

「いや、そこまでしなくても…。制御出来ればそれで良いわけだし、多分やいばの特異世界の範囲内のみだろうから、隊長と同じで範囲から出ればもとに戻るでしょ。さっきも命の支障は無さそうだったし大丈夫大丈夫」

「いや、人格変わったら戻るとは限らないでしょ?」

「…そうだね」

「よし、後でホームセンター行ってくる」

爽さんのフォロー虚しく、俺は世界を使うたびに殴られることが確定したらしかった。流石に制御の練習くらいはさせてくれると信じておこう。

「あの…、ちなみにですけど、まだ戦う意思はあるんでしょうか?」

レイカちゃんがやつとこの異質な状態にメスを入れた。そうであ

る。なんで敵同士で意見交換してるんだ？おかしくね？

「いや、そりやあるけど…。そもそもこっちの目的はやいばを隊長のもとに行かせるのをできるだけ遅らせるって感じだから、話すのいいんだよね」

こくこくと後ろで聡太君が頷いている。そんな聡太君だが、やつと気分がマシになったのか知らんが変化を繰り返しまくっている。これはアレだ。多分テンションがおかしくなってるんだ。まあそんな奇行はどうでもいいとして。

「え？行かせるな、ではなく？」

「ああうん。時間稼ぎだよ。理由は知らなーい」

聞こうと思ったが、先に塞がれてしまった。しかしなるほど、それなら、ここで話してるだけでもいつかは行けるのか。争いを避けると考えるならありかもしれない。

「おーけーおーけー。よし。やるか」

「ライカ。準備して」

それを聞いた瞬間、二人は戦闘体制に入った。なんだこの二人。戦闘民族か？

「え？戦わなくてもいいんじゃないの？」

「違うよライカ。こういうのはね、いいよって言われたときには手遅れになっちゃうんだよ。隊長さんが取り返しのつかないことをする前に止めないと」

ライカちゃんは納得いったように手をポンと叩き、レイカちゃんの隣に並んだ。

さて、後は俺だけなのだが…。まあ、仕方ないか。戦いたくないのはあるが、それ以上にこの事態の解決が急務だ。太陽の光だとか科学的な不都合もいくらでも挙げられそうだし、何よりも夜より朝が好きと言ったレイカちゃんとライカちゃんのことを考えれば自然と選択肢は絞られる。

「お、やろうか。聡太」

「どっちやる？俺はやいばの方行く」

「了解」

聞こえるように、であろう。わざとらしく言ったその言葉は俺の思考を狂わせる。けど、まあ考えなくてもいいか。どうせ少人数だし、いいでしょ。

「やいば、私は爽さんを殺る。すぐに合流するから頑張れ」

小声でそんなことを言われる。しかし、師匠が仕留めきれてない爽さんをどう対処すると言うのだろうか。

一抹の不安が拭えないが、かと言って爽さんに勝てるかと言われれば否。どちらかといえば少しは理解している聡太君の方がいけるだろう。

コクつと頷くのと同時に、炎龍が無音で打ち上がる。

当然だが、この戦いが肉体的に作用することはない。精神面についても、致命的なまでにはいかない。言ってしまうえば、何をされようと、何をしようと、それはただの茶番である。そんな茶番で、相手の心を折らないといけない。

長く永くながく続く戦いが、始まったのである。

天才とヤバイやつ

「…おや？やいばから離れるの？それ大丈夫？」

「あなたをさつきと倒して合流するから大丈夫よっ！」

見世物として磨き上げた炎龍を十匹出して操る。爽さんは、身体能力とかは色々とバグっているのだが、能力は正直弱い。

なんだ？未来を見るって。私がこの炎の龍を増やすか消すかだけで結果は変わる。なんなら、右足を出すか左足を出すかでも変わる。

何が起るか予測して、先に避けたところで意味はない。避けるための予備動作から行動を変えれば、結局は当たってしまうのだから。

「よっほっはーい」

まあとはいえ、十匹の龍だと流石に手数が少なかつたらしい。道化のように避けられる。

「ホイ追加」

というわけで二十四匹。一匹一匹が大樹ぐらいの大きさなので、見下ろす光景は中々なものだ。これらはすべて私が操っているため、少し頭が痛むがいいだろう。

「うわー凄いねこれ。壮观だあ」

しかし何故だろうか、爽さんはそれでも避け続ける。それどころか少しずつ距離を詰めてきている。

「んー。よし」

高台から降りて、地面に魔力を流す。瞬間、地面から無数の棘が生えだした。

「…なんであたってないんですか？」

気が付けば、既に目の前にいる爽さんにそう尋ねる。

「いや、未来見えるからさ」

突き出される右手、未来が見えるのだから、回避行動は読まれる。なら避けない。

右手から針を突き出して、回避可能位置には炎龍を走らせる。

「ガッ」

相打ち。心臓を貫いた私と、顔面を潰した爽さん。互いに傷口をえ

ぐり合うが、避ける余裕がある分私の方が余裕がある。まあ避けなくてもいいだろう。今は貴重なダメージの与え時だ。

「ふふっ。すごい顔だね」

いや心臓貫かれていますお前の方がよっぽどだろと思ったが、声に出ることはない。うめき声となって喉を震わせるだけだ。

ああ、しかし前が見えない。そうなると炎龍の操作も怪しくなるから自走させる。

「おっと危ない」

(っ！チャンス！)

ぐちゃぐちゃの顔面から目だけを回復させ、飛び上がった爽さんに二十匹の炎龍すべてが集結する。身を焦がしながら腕をちぎり、傷口を抉り、上昇気流で打ち上げて、再度状況を始めに戻す。

勝確という奴だ。時折回復魔法をかけてやり、地獄のサイクルを加速させる。炎龍をさらに召喚して、予備も万全だ。

まあやはり、未来が見えるだけでは限界が有るということだろう。戦闘用ではなく、組織の運営という手腕で副隊長になった、ということかな。

それにしてもさっきのは飛んだ爽さんに対してアドリブで作りましたものだけど、実用性はあるそうだ。

「さ、助けに行くかー」

「いや、終わってないでしょ」

目の前から声がする。

「はっ！」

そこには何もいない筈だ。でも、嫌な予感に龍を走らす。空振り。いないのは確認できたが、それでも脳がガンガンと警報を鳴らしている。

「チッー！」

炎龍を足場に上へ逃げる。これなら不意打ちはあり得ない。そんな安堵の息は、喉を貫かれて止められる。

「!？」

私の膝が地面につく。

「?!?!」

私の視点は空にある。それなら膝が地面につくはずがない。

(幻覚の類！)

見えない地面に魔力を流して、己の体ごと針で貫く。

「ぐふっ」

ヒット音。耳は正常だから、聞こえた方向に炎龍を走らせる。ちやんと横一列に並べて、逃げ場を無くす。

ぷちっ。

………

はっ！

すぐにその場を離れる。

ぷちっ。

………

はっ！

一瞬で状況を把握して、

ぷちっ。

………

ダメだ。めいれ

ぷちっ。

………

がおくれ

ぷちっ

………

「ごぼ」

ぷちっ

………

「く」

自動的に体に仕込んだ力が発動する。強引に空気中の魔力を飲み込み、腕が、足が、臓物が、耐えきれずに弾けだす。

代わりに、飲み込んだ莫大な魔力が、望み通りの反応を起こした。

「うっわ、なにそれ」

無色透明な筈の魔力がどす黒い色を持って飛んでくる。いや、周囲の魔力を同じくどす黒い魔力へ変化させているからそう見えるだけだろう。

指先に到達。指先は腐り落ちて、そこを起点に全身に広がった。

「えーっと。ちよつとミスったな」

体が腐り落ちて、立てなくなる。戻る速度と腐食が進む速さはどちらが上か。

「幻覚見せるほうが良かったかな？」

相打ちを受け入れて、腐り落ちる体を眺めながら、爽さんは一人反省会を始める。

意識のない天才は、人類を滅ぼしかねない魔法を垂れ流す。

終わらない形で、この戦場は集結したのだ。

一騎当千なヤバい奴

「…じゃあやる?」

「んー。そうだね。ミレーさんが手伝ってくれるまで雑談したいけど、最悪爽さん来ちゃうからね。やろうか」

そこそこの間に一緒に活動していた仲間である聡太君が今は敵。経験から考えると、特異世界があろうがなかろうが聡太君に勝てる可能性は正直薄いなんてもんじゃない。ほぼ0である。

しかし、聡太君が最後に見た俺と今の俺は違う。そして何より、頼れる友達がいる。癖読みも交えて、聡太君の知らない事を有効なタイミングで切れば、勝てるはずだ。

まずは始め。絶対に右手から殴ってくる。

受けは吹き飛ばすのでなし。少し体をずらして、手に炎を纏わせてお腹に当てる。——感覚なし。見なくてもわかる。きつとそこは血一つでないきれいな穴が出来ている事だろう。

そして、俺を巻き込むように水が降ってくるけど、既にそこには聡太君はいなかった。

「レイカちゃんっ!」

「っ!…ライカ。我慢して」

「ふえっ!」

速度重視なのか、激流を生み出しこちら側へ流れってくる。寸前の所で聡太君の手が空振り、俺の背中へと隠れる。

「ゲホッゲホッ…むう。どっかーん!」

無差別に周辺に雷が撒き散らされる。聡太君の速度は移動速度ならまあ追えるといったところであるので、こちらへ来るルートを絞れるのは大きい。まあとはいえ、流星に近接戦を積極的にやるのはない。二人もいるしね。

「お腹に力入れてね!」

「はい!」

ミレーさんに教わったものの一つ。白龍。無属性の龍で、攻撃性能はゼロだが移動手段として最適らしい。乗って、高所へ移動する。俺

達と聡太君の一番の違いはリーチだ。コレを活かさないと手は——
「流石に甘いよ」

どこぞの海賊王よろしくの手で、白竜の首元を握りつぶした。
「うつつつわ」

すぐに別の白竜に飛び移る。

別に潰された所で白竜は生きていないので死ぬもクソもない。でも、リーチの差がないことが証明された。

「二人は攻撃。私はなんとかして避けてみるよ」

雷と水とは思えない威力の水滴が降り注ぐ中、それをかいくぐってくるであろう手に集中する。海賊王レベルに一直線なら対処しやすいが、この場合、クネクネと触手みたいに動いてくるから気持ち悪い。

でも、なんとか舞える。一度に二体が限界の白竜を出し惜しみせず、危ない賭けは避けて、安全択のみを選ぶ。

しばらく、動くことのない戦場。地面につく焦げ後は戻ったそばから焦げ付いていく。もう地球一年分の降水量を超えているであろう水は、残らずに消えていくので足を取るということができない。

なにかアクションが必要。こっちは時間制限ありで、向こうにはないのだからこちらから動くしかない。

というわけで、なんとは無しにスタンガンに電源を入れてから、水と一緒に下へ落とす。同時に、レイカちゃんの特異魔法で地面に残るすべての水をくつつける。雷は陽動として聡太君の周りに落とす。

「じゃあ行ってくる」

白竜に二人を残して、自由落下で聡太君に迫る。白竜はめっちゃくちゃ目立つデザインでペカーッと光っているため雷も含めて俺は相見辛いはずだ。

「ねえやいば。銀髪が目立つよ?」
「っ!」

水に浸され、感電している想定聡太君と目が合った。後うざい声も聞こえる。よく見れば、足元に長靴を履いていた。きつとおそらく、聡太君の特異魔法で作ったものだろう。

「チッ」

舌打ちをして、白竜により撤退を試みる。

「逃さないよ」

衝撃が走り、白竜から振り落とされる。受け身してから近づいてくるであろう聡太君に吹き飛ばされないように、俺の足に針を突き刺して地面へと固定する。

激痛は考えない。どうなろうが戻るんだから不意をつくほうが大切だ。

案の定拳が俺の頬をぶん殴る。クソ痛いけど、吹き飛ばないからチャンスでもある。

「つつかまえたー!」

追撃を喰らいながらも、手を掴むことに成功する。こうなれば——「ぶっ!」

水に包まれ、外側にはライカちゃんの雷による電流がまわり、完全に出られなくなった。

成功。こうなれば、もう脱出は無理だ。ただでさえ制限された水の中、外には電流が回っているので迂闊に出れば感電する。

こんな状況下でも、感電すれば動きは止まる。それはもう実証済みだ。こちらの勝ち——とはいかないと、盛り上がった地面が物語っていた。

「ガハッ」

流石に地面ごとやられれば堪らない。吹き飛ばされて、地面を転がる。追撃を体で感じながら、視線はさっきの現場へ向ける。

∴ああ、なるほどね。

地面は、重力に逆らって変形している。魔力を流したとしても、魔力が流れなくなればポロポロと落ちるはずだ。そうでないなら、聡太君の特異魔法によるものだ。

つまり——聡太君の特異世界によって拡張された特異魔法は、地面を変化させたのだ。

ははっ、考えておいた勝ち筋消えたんだけど、どうする?と、それよりもまずはこの状況の打開を目指そう。

隠し持っていた2個目のスタンガンを、魔法を経由させ手元へ運ぶ。

「流石に避けないでね？」

バリツと腕に命中させて、その隙に白竜で空へ飛んだ。そして、二人のカバーもありなんとか再度合流する。

「いやごめん。ダメだった」

「やいばお姉ちゃん大丈夫？」

「うん。気にしないで」

そうは言ったものの頭はかなり痛い。白竜二体操作は頭にめっちゃくちや負担がかかる。ある程度は魔力のサポートがあるとは言え、3視点同時に見ながら判断は厳しい。

「やいばさん。どうしますか」

「んー。でもこれかなりキツイよね。だって今は——」

高度百ちよい。誰であってもジャンプじゃ届かないその場所に、聡太君の顔が見える。軽く隠蔽をかけ用意しておいた鈍器をふるい、なんとか落とす。

「まあこうなるからね」

特異世界の解禁は、空の有利を無くすようなもの。故に、今から考える時間を確保するのもなかなか難しいのだ。

「…覚悟を決めます！」

レイカちゃんがそう言っつて、レイカちゃんの手を掴む。

「やるの？」

「そうじゃないとライカが傷付くかも知れないし、それに今なら人も傷付けないし大丈夫」

何をするのかと思っただけど、よくよく考えれば時々ミレーさんと何かしていたな。それに関わる何かだろうか。

「行くきます！『雷雨』」

二人の声が合わさって、空に一つの雲が生まれた。暗雲から零れ落ちるのは水滴。無数の水滴が地面を——真っ黒に焦がした。

「うえっ？」

流石にこれには聡太君もなすすべがないのか、身動きが取れていな

い。それもそうだろう。水滴一つが落ちた木は、まるで雷でも落ちたように燃え盛っている。：いや？これもしかして、水滴に雷でも内包されてるの？どうやって？

いやしかし、こんなもの町中でやれば全滅させれるんじゃないか？ミレーさんはうちの子になんてもん教えてくれとるんじゃない？

ま、まあいい。またしても何もしてないがこれで終わりだろう。無事倒せたということで、さつきから派手にやっていたミレーさんの方を向く。

「え？」

どす黒い何かに包まれ、様子がまったく分からない。いや、それだけじゃない。そのどす黒い何かは既にこちらへも迫っていて、聡太君が飲まれる直前だった。

そして、聡太君の足が、ボロツと崩れ落ちた。

「つつつつ!!!!逃げるよー！」

咄嗟に白竜を走らせて、どす黒い魔力から距離を取る。突然の衝撃に二人は魔法を切らしてしまっただけ、もう聡太君は起き上がらない。

「な、なんですか？」

「ひっ！」

どす黒い魔力に怖気づいて後ろに隠れる二人を安心させたいけど、それが出来るような状況では無かった。どす黒い魔力は広がり続けている。ゆつくりと、しかし全方面に確実に。

辺境のこの地であれ、少ししたら村がある。そこまで行けば…

何故隊長の特異世界がアレに効いていないのか分からないけど、アレは止めないといけない。どうせ逃げたって、確実にアレはこの地球を覆う。そんな気がする。

「ラスボス前としては、流石に強すぎるだろ」

苦笑しながら、白竜から飛び降りた。

大好きなヤバい人

「やいばお姉ちゃーん!!!」

横で叫ぶライカを落ちないようにしっかりと支えながら考える。

やいばさんのところへ行つたところで、何かできるわけがないからそれはなし。ライカが壊れるかもだし全身全霊で止めないと。

「レイカツ！離してー！」

「ライカ落ち着いて。この白い竜さんはやいばさんが動かしてるんだよ？それが離れて行っているから、きつと別の事をしてほしいんだよ」

「でもっー！」

「嫌われるよ？」

「…」

癪だけど、ライカはこれで何も言えなくなっちゃう。嫌われる訳なのに…。少し気まずい空気の中、白い竜さんはゆるゆると降下していった。偶然か意図してか、そこは知っている道だった。

これ、もしかしてこの騒動の元凶を連れてこいとかじゃない…よね。うん。あの人の性格的に絶対にそれはない。あの人は過保護すぎるから私達だけでの危険な行動は嫌うはずだから。

「…ねえねえ。もしかして隊長？つて人を連れてきてつて意味じゃないかな!?」

キラキラとした目で、ライカはそれを尋ねてきた。なんで気付いちやうんだ。そんなに察し良くないじゃん！そこが可愛いんだけど！

「いや、やいばさんはそんなこと…」

「絶対そうだよ！きつと強いから、やいばお姉ちゃんを助けられるもん！」

うん。説得は無理か。というか隊長つて人がこの騒動の原因なの分かってなさそう。

後ろを振り返つてみると、夜の暗闇に紛れ見えづらいが、はるか遠くに少しモヤツとしたものが見えた。聡太さんを一瞬にして飲み込

んだアレは常人じゃどうしようもないことは明白だ。中に入ったやいばさんを助けるには——おそらく助ける必要はないが——相当な実力者じゃないとダメだろう。

「…分かったよ。行こっか。でも、きっと強い人が敵にいるよ?」

「?…うん! レイカは私が守るから、安心していいよ」

はあ。突然お姉ちゃんにならないで欲しいな…。

自然と差し出された手を握り、私達は拠点へと向かった。

「ここだね」

「うん。覚悟は決めたよ!」

なんの、かと思ったが、ここで言うなら多分あのおじいさんのことだろう。ただの一軒家にしか見えない扉を開けて、隠し階段の元にく。案の定、おじいさんが厳つい顔をして待っていた。

「…お二人だけでしょうか」

「はい」

「そうですか…。お通りください」

お、おつと?

「じゃ、じゃあ行こっか」

「うん」

なんか簡単に通してくれた。余計なことは言わずに、先に進む。

静かな空間に一段一段と階段を叩く靴の音が響いた。響く度に心臓が鼓動を早めている、ような気がする。

「大丈夫だよ」

キユツと手が握りしめられ、そんな緊張は蒸散した。ああもう、私がいかにそういうことしたいのになあ。いつもわがまま言うのに、なんでこういうときはお姉ちゃんするんだ。

どこからか湧く蛮勇に任せて、扉を開く。最悪速攻で敵襲が来るかと思っていたけど、意外にも先にあつたのは、まるで喧嘩の後のよう

な、気まずい空間だった。

彼らは音を聞いてこちらを一齐に振り向いたけど、顔を確認するなりそらしていった。なんだろうか、誰か待っているのか？

と、どうでもいいことは置いといて、今探すべきは隊長さんだ。記憶が怪しいのでよく分からないし、聞いてみるしかないだろう。

「ねえ、隊長さん知らない？」

「え、レイカ？」

「何の用？」

目の前の幼い少年は、整った顔を少し歪めて質問を質問で返してきた。

「えっと、外が凄いから、助けて欲しいって思ってた…」

「だから、レイカ？」

「凄いつてなに？」

さっきからレイカが後ろでぼそぼそ言っているけど、それは後で聞こう。

「よく分からない黒い何か、木とかを腐らせてるの！」

「は？」

「ちよつとレイカ！」

「えっ、なに」

凄く心臓が跳ねた。あれ？レイカなんでそんなに焦ってるんだろう。

「その人隊長さんだよっ！」

「え？」

チラツと少年を見る。どう見ても年下。これが隊長？え、あ、え？

「えっ、そうなんですか？」

「え、うん」

嘘…。いや、別に不味いことは言っていない。強いて言うなら態度がダメだったただけだ。まだ行ける。テレビで言ってた。社会人の常識は謝罪！

「あつ、ごめんなさい！そうだとは知らなくて！」

「いいよ。あ、あと行くよ。なんかよくわかんないことになってそう

だし」

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

二人でお辞儀したけど、それには目もくれず隊長さんは扉へ向かっていた。

凄く呆気なくて、決めていた覚悟が意味なくなっちゃったけど、上手く行って良かった、のかな？

階段をタタタターンと駆け上がる隊長さんにおいてかれながら、私は少し安堵の息を漏らした。

やば……ぐる……

落下しながら、二人が驚かないようにゆっくりと白竜を落としていく。落とす場所は選べないけど、白竜に当たったところで痛いなんてことはないので、降りる場所は適当だ。

ちなみに、俺が落ちるときのこと是一切考えていない。まあ白竜さんクツシヨンが――

「へぶっ！」

はい、痛い。今やってみて分かったのだが、ここで魔法を使うのは中々に難しい。なにか魔法で出そうものならドロツとなって消えてしまう。というわけでクツシヨンの白竜さんは消えてしまった。俺は地面に激突した。

なんというか、もうちよいと考えて行動すれば良かった。興奮し過ぎだろ。俺。

ま、いいかと流して歩き始める。山奥の夜というのも相まって、月明かりだけが頼りである。その月明かりも、黒い魔力で少し遮られているのだが。

さて、まずは聡太君の場所。

人型のものはどこにもいなかった。ただ、聡太君の立っていたであろう足元にドロツとしたなにかがあるだけだ。うん。

………うそ？そんなわけないよね？

しばらく固まっていると、そのドロツとしたものが少しずつ変化しているのに気付いた。色が変わっている。小刻みに、一部が、色々な色に。肌色、赤色、黒色、白色、黄色、ピンク色。連想されるものが脳内に浮かび、危うく気を失いかける。

隊長の魔法と相殺……違う。この黒い魔力のほうが早く対象の身を犯している。だから、このドロツとしたなにかもカラフルな色をしているんだらう。戻った瞬間腐食――みたいだね。

気分が悪くなってきたので、何も考えずにその場を離れる。次の目的地はこれの元凶であろうミレーさんと爽さんの元である。

歩いていると、地面にぺちやぺちやと液体が増えてきた。場所は分

からないが、恐らくここは森だろうか。木々はそのままで、何か
…考えるのはよそう。

しかし、本当に静かだ。夜故に小鳥のさえずりはないのが当然だろ
うが、野生動物の生活音も、木々がざわめく音も聞こえない。

と、そんな状況に不気味さを感じていたのもつかの間。喧しい音が
聞こえてきた。

「何よ！仕方ないじゃない！」

「は？そんなわけないだろう？どうしてくれる？」

どうやら、誰かが口喧嘩をしているらしい。周囲の黒い魔力が晴れ
てきたのを考慮すると、まああの二人しかないだろう。

視界が僅かに晴れて、声と視界がクリアになる。

「あんたがさつきと諦めてくれたらこんなものにはならなかったよ！」

「君が負けを認めないのが悪いんだろう」

「なら思考ぐらいさせなさいよ！あんなにハイペースで首切る必要な
いでしょ!?あんなのされたら咄嗟に最終手段出しちゃうのも仕方な
いでしょうが！」

「仕方ないで済むわけ無いだろ！人類全員溶かしといてあーごめんな
さい。仕方なかったんですで許されたらこの世界終わりだわ！」

「うううううう!!わかってるわよ！でもどうしようもないじじやん
！これ私のじゃないから対策なんて私を作った奴らが死んだときに
消えたわ！バーカバーカ、ザマーザマー、最後に問題残しやがってえ
ええ!!!」

ミレーさんうるさいなあ…。

後ろを振り返れば、ほんつとうに少しずつだが、黒い魔力が離れて
行っているように見えた。それも、あの二人の位置、どっちかという
とミレーさんを中心とすると同心円状に。

すげえ。さつきの発言も含めてこの人以外の原因がいるとは思え
ねえ。

「あの」

「ワッ！」

時間も無いので話しかけたら、めっちゃめっちゃ飛び上がられた。爽さ

んも意外そうにこちらを見ている。あれ、未来見えてるんじゃない？
「え？やいばなんているの？聡太は？」

「いや、この状況は流石にこっちが優先かなって。後聡太君は呑み込まれました。その後は分からないですけどなんでか最後に聡太君が立ってた場所に黒いヘドロみたいなのがあつたつて言っておきますね」

あつ、ミレーさんが明後日の方向向き始めた。責任から逃げるなア！

「で、これどうにかできますか？ミレーさんがやつたんですよね？」

「いや、落ち着け弟子。私がやつたんじゃない。これは私の体に埋め込まれてた魔法が勝手に発動したわけで、決して私がやつたわけではない」

「そうだね。ミレーが馬鹿やったせいだよ。これはね、このまま波みたいに広がって行って、地球全域を1回通つたぐらいに消えるらしいよ」

「えっ？そんなんあり得るんですか？」

「ハハッ。笑えるよね」

えっ…それってレイカちゃんとライカちゃんを守れないってこと…？は…？

「どうにかできないんですか!?!つて、取り乱そうと思つたけど、これあれですよ。私になんとか出来るくね？イベントですよ」

「…そうだね。辞めてほしいけど、仕方ないよね…」

あつ、そういえばこの人特異魔法持ちだったつ。じゃあ苦しむことになるのか…。まあいつか。

「じゃあ行きますね。せー」

「待て待て待て!!!」

「は？なんですか早くしないとレイカちゃんとライカちゃんがやられちゃうじゃないですか!」

ふざけてんのか？あ？

「ちよつと待ってね。さつき聡太がいま溶けてるんだよね？」

「え？はい」

「さつきまで黒い魔力の中だった俺とミレーがなんで生きてるのかわかる？」

「んーと、隊長の特異世界？」

「そうだね。やいばってさ、特異世界を使えるようになりたかったのって隊長のを解除するためだよ」

ん？俺の特異世界だと、これと隊長のが一緒に消えちゃう…？あつ。

「聡太君が帰らぬ人に…」

「そういうことだね」

なるほどね。確かに、聡太君が死んじゃうのは嫌だし理由はよくわかった。

「じゃあどうするんですか!？」

どうしようもねえじゃねえか！

「いや、今からこの魔力地帯から出て、外から街へ届く前に止めるって言うのはどうだい？それなら被害もなく聡太も助かるしいと思うんだけど」

「あの、私が制御できる前提で話すのやめませんか？絶対私のやつが街に届いちゃいますし、それで事故ったら洒落になりませんよ」

「あつ、そうか…。えーと」

黙りこくる爽さん。え、もしかして選ぶの？聡太君の死と俺の特異魔法による被害による死者か、最終的には戻るけどの全員のヘドロ化か。悩むまでもなくヘドロ化の方がやばくないか？

「仕方ないか…。ごめんね。聡太君。後運悪く死んじゃう人達…。」

恨むならミレーさんを恨んでくれ…。

そして、何も言わない爽さんと頭を抱えるミレーさんを尻目に、発動させようとして――

「ストップ」

静止がかけられ、声のした方向を向く。

「え…」

空から隊長が、ミレーさんめがけて飛んできていた。そして、ミレーさんの耳元ギリギリに壮大な音を立てて着地する。

ミレーさんは地面でのたうち回り、蹲った。

ヤバい優しさ

隊長は、特に何か言うこともなく、ジッとこっちを見続けている。少し怖いのが、話をさっさと進めないと手遅れになってしまうのだ。故に、こちらから切り出す。

「えっと、何か用でもありました？」

「…ダメ」

そのダメが何を指すのかはよく分かる。でも、そこで退くわけにはいかない。

「放っておいたら、たくさんの方が苦しむですよ」

「でも、生きれる。それに死なない」

死なない。どう考えてもあれにやられれば死ぬと思うのだが…。多分隊長は最後に死ななければいいと思っっているのだろう。この世界なら、今のミレーさんと爽さんのように生き返ることができるのだから。

まあ、そこだけ見ればいいのかもしれない。でも、

「隊長の魔法のせいで、沢山の人が仮死状態になっているの、わかっていますか？」

現在、世界の時が止まったときに寝ていた人は活動出来ていない。ずっとずっと目を閉じて、でも、食事も、何もかも、今の世界のうえでは無意味であるから、死ぬこともない。植物人間とでも言うのだろうか。

「大好きな人が、大切な人が、もう何日も目を覚まさない。どういう想いで今を過ごしてると思ってるんですか？」

時間的に、この国の幼い子供は普通寝ている時間に発動している。当然他国には時差もあるので、下手すれば、世界人口の半分くらいは起きていないんじゃないのだろうか。

はじめはこの国だけだと思ってたし、危惧していたのは無茶による犠牲だったけど、情報が広まっていくにつれ、ようやく本質が見えた。この状況が続けるなんて、あり得ない。

「…でも、今これを消したら人が死ぬ」

目の前の塵は眉を擧めて、そして消えた。同時に、首筋に圧力が加わる。

「ガアああああ!!!」

「そんなに、二人を殺したいの?」

「あああ、あ?」

「今俺を殺したら、二人も一緒に死ぬんだよ?」

「ツツツツ!!!クツツツソが!」

やるせない思いを振り下ろせず、窒息しそうな首を抑えて、膝を付いた。

魔力を抜けば息が楽になって、尚更苛立った。

狂人だ！ヤバい！

隊長さんと共に外へ出ていく。早足で歩くため私より体格が小さいのに全然追いつけない。そのまま大通りを抜けて、ちよつとした広場で隊長さんは立ち止まった。

今更だが、見に行くとはいつつ隊長さんが進んだのは真反対。でも、そこにあるものを見て、納得した。

「ヘリコプター？」

中々お目にかかれない幼い頃の憧れともなるヘリコプター。多分、これを使ってあそこへ行くのだろう。いや、何か許可とかいるんじゃないのだろうか。

運転席には誰も座っていない。それっぽい人がいるわけでもない。なら使えないのでは…？とか思ってたなら、隊長さんが運転席に座った。

え？絶対免許ないでしょこの人。呆然としてみると、プロペラが回り始めた。え？この人なんなの？何者なの？それにもしかして置いて行くの？

…いや、置いて行ってもらった方が好都合かな。ライカと一緒に逃げられるし、ライカも安心できるでしょ。

「待ってー！」

「いや、ここは隊長さんに任せようよ。足手まといになっちゃうだけだしさ」

そんなやり取りに目もくれず、ヘリコプターは浮かび上がり——それを見つめていた私達の体が動かなくなつた。

あれ？

口が開かない。目も閉じれない。

しばらくしていると、体がある方向に向かって動き出した。それに合わせて、視界が前に固定される。見れば、私達の周囲の人も、同じように動かされているようだった。

全員が、同タイミングで同じ足を前に出し、進んでいく。異様な光

景に驚いている間も、私の体は進んでいる。

(ライカは!?)

視界の端ギリギリで、ライカも同じようになってきているのがわかった。原因は分からないけど、目的はわかる。

私達の足が向かう方向は、黒い魔力が漂う方向。それに周囲の人達も気づき始めて、動かない顔からもわかるほどに恐怖を感じていた。

(まずい。このままじゃライカが…!)

そう思っても、歩みは止められないし、どうにかする方法も思い浮かばない。焦りが加速する中で…、目の前が真っ白になった。

ほんの少し遅れて、爆音が耳に届く。使い物にならなくなるはずの視力と鼓膜は元に戻り、痛みで一周回って冷静になった頭でライカを見た。

多分、そういうことだ。

大量の水が、すべてを押し流した。

「づえほっ！えほっ！…はーっ」

めちやくちやミスった…！足元すくうぐらいで十分なのに思いつきり顔まで覆っちゃった！

周りを見渡せば、多くの人が同じように咳き込んでいた。

うう…。服もびちよびちよだし…皆ごめんなさい。

でも、なんの奇跡か分からないけど、体が動くようになった。すぐにライカのもとに駆け寄って、怪我がないか確かめる。

「ライカ。じっとしててね。痛いところあったらすぐに言ってね」

「いや、大丈夫っ！やめて、みんな見てるからっ！」

「えっ？」

見渡せば、確かに視線が集まっている。でも、それは正確には私達ではない。多分、見ているのは…。

「お前ら、悪い子かあ？」

真横から声が出た。ビクツと体を跳ねさせて、咄嗟にライカの前に立つ。その声は聞き覚えのあるもので、初対面の印象としては優しうだった人が、見下ろすように、私達を睨み付けていた。

怖い。でも、逃げるわけには行かない。

すると、その人は少し自分の頭を叩きながら、笑顔を作った。

「いや、悪い。お前たちは悪くないよな。どう考えてもこっちが悪だわ。すまん。ちよつとイライラしてた」

「…教、官？」

「おっ！覚えてたか！偉いぞ。そんなお前達には悪いけど、隊長に頼まれちゃったんだよ。一旦全員死んでもらうぞ？」

まるで、何でもないことのように、その人は続ける。

「お？まあ嫌な気持ちには分かる。でも安心しろよ。どうせ全員しなとイケないんだからさ」

ニコニコと、好印象を持たれそうな笑顔を崩さずに、その人は、私を見た。

「じゃっ、さっきの続きだ。お前の魔法で邪魔されたからな。使えないようにっつと」

そうして、また、体の動きを封じられた。

「どうだ？魔法使えないだろ？」

そうして、男が一步踏み出す。

ダンツ！と、全員の足音が揃う。

座ってた人も、咳き込んでいた人も、ジリジリと離れていた人も、ライカも。みんな立ち上がって足を繰り出していった。

(なんで…？魔法が…？)

「魔力の流れを止めてるからな。ま、これでも隊長とかは止められないんだが」

そうしてまた一步、私達も一緒に足を繰り出す。

(え?え?え?この人の特異魔法?でも待って。それってこのままじゃ…)

「まあまあ、俺含めて皆でいくんだからさ、怖がらなくていいだろ?ほら、みんなと一緒になら怖くないだろ?」

(嘘でしょ…?)

黒い魔力の直前で逃げるものなら、それに合わせてまた全体を水流そうと思ったけど、一緒に自殺するならどうしようもない。

「うつつつわ。狂人じゃん。こっわくい」

その時、声が出た。

緊張感のない声は、人々の意識を向けさせる。

声の下方向には一人の女性。

「君と戦う時、普段なら私は負ける。でもね?今は違うのだよ。君のだくいすきな隊長君のお陰で?私は?無敵の兵を手に入れたわけだからね。さあ!爽に負けた憂さ晴らしと罪滅しだ!」

振動とともに、建造物が私達を取り囲んだ。

ヤバい状況に終止符を

教授さんと教官さんが戦い始めて数分。一瞬で決着が付いた。

戦力で見れば、建物すべてが駒となる教授さんと、私達人間すべてが駒となる教官さん。それだけでもかなり教授さんが有利だと思うけど、それに加えて、私達は教授さんの操る建物に軟禁された。

教官さんが動きを止めているうちに、端々からどんどんと建物の中に放り込まれていったのだ。そうなつてしまえば、教官は一人で沢山の手足が生えた建造物と戦うというわけで。

私達はすし詰めになされた部屋の中で、体に自由が戻り、終わったことを知るのであった。

「お、やっと出てきた」

しばらく待っても救助される様子が無かった為、水でプカあと中の人ごと浮かせて出ていくと、教授さんが待つていた。取り敢えず無視して、はぐれてしまったライカを探す。

「あ、ライカー！」

ちょうど、私のところは違つてちゃんと出れるようになってる建物からライカが出てきた。体中をちゃんと確認して無事を確認する。

「ふう〜。で、なんで私のところもああしてくれないんですか？」

「おお、突然振つてきたね。後回しでいいかなって思つてね。…嘘嘘、分からなかったただだよ」

私以外の視線を受けて教授は発言を撤回した。

「…教官さんは？」

縛られてるのかな？と思つたけど、どこを見渡してもいない。

「ん？あのバカは建物くんにドナドナされてつたよ。奴の特異魔法面倒だからねえ。遠くへばいばいって。ちゃんとフタもしたから逃げられないよ」

ほー。もし縛られてる状態であの特異魔法の標的にされたらどう

なるのか気になったけど、今することじゃないかな。

「そうですか。：助けてくれて、ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます！」

「ふふ。大人だからね。当然だよ」

優しい笑みを浮かべて、教授さんは微笑んだ。

「で、次はどうするんだい？」

迫りくる黒い魔力から、教授さんの手によって一時的な避難を済ませたところ、そう尋ねられた。

「どうする…。うーん」

正直に言うと、このまま逃げたい。だけど、私達が余計なことをしたせいで隊長さんが行ってしまった。これを見逃すのは嫌だ。

「あの」

ライカが、消えそうなほどか細い声で教授さん呼びかけた。珍しくライカが話していることに驚きながらも、その内容に耳を傾けた。

「その」

恥ずかしがりながらも、ライカは叫んだ。

「やいばお姉ちゃんを助けてください！」

親しくない人とはいっても恥ずかしがって、意志を前に出せないライカが、声を張り上げた。昔、お母さん達に拒絶されてから初めてのことだ。

「うんうん。じゃあ君は？」

「お願いします。：私達の、やいばさんを、助けてください」

失礼のないように、頭を深く深く下げて、お願いした。私達より経験のある大人を頼った。でも、教授さんは、少し悲しそうな表情を浮かべた。

「…。任せ給え、そう言いたいのは山々なんだけど、私じゃ、あれはどうしようもないんだよね」

教授さんは片手を振り上げる。一つのビルが黒い魔力に向かって走り出し、触れた瞬間、生えていた手足が崩れ落ちた。

「こんな感じで、止まってしまうんだよ」

悲しそうな表情に、何も言えなくなってしまう。悔しさもあるけど、でも、少し気が楽にもなった。これなら仕方ない、よね。ライカを行かせなくてすむし、それに、その後も――

そして、ライカの目から涙が溢れているのを見て、私は頭が真っ白になった。

「ぐす…なんで、お姉ちゃんに迷惑ばかりかけちゃうの…！バカ、バカ！私なんて！」

「だめ…、ダメ！」

感情が昂り、自傷行為に走りそうなライカを必死に止める。そんな私達を、

「落ち着いて」

優しく、教授さんが止めてくれた。

「諦めるのは、まだ早いよ」

「え？」

ライカが、涙声をあげながら教授さんを見上げた。

「何事も、工夫が大事なんだ。私にはこれはどうしようもないけど、君達なら出来る。あの地獄を切り抜ける方法が、君たちにはあるんだよ」

教授さんは、私を見た。

「ねえ、レイカ。知っているかな。水っていうのは、色々な事が出来るんだ。飲んだり、人を溺れさせたり、一気に流しちやったり。それにね。水は物を壊すことも出来るんだよ」

「…知ってるけど、あれには二人でやった魔法も消えちやったのは見たし、流すなんて出来ないです」

「うん。そうかもしれない。でもね？あの黒い魔力になにかする必要はないよ」

なにかする必要はない…？…！

「土を、掘る？」

「正解」

でも、もし土の中を浸透して広がるなら、それは意味がないんじゃない

ないだろうか。

「大丈夫。これは物を透過するわけじゃないから。ちゃんと隙間を作らなければ大丈夫だよ。幸い、この世界はもとに戻るから、始めに開けた穴ももとの状態になるしね。あ、ちゃんと固めれば土は落ちないよ。だから天井が落ちて埋もれることはないよ。まあ、進むのが遅すぎたら土が戻ろうとして埋もれることはあるかもだけど…多分行けるよ。その場合はついていかせるブロック君が止めてくれるしね」
ぴよこつとブロックを出して、教授さんは続ける。

「次にライカ。君には率直に言うね。隊長を相手に戦えるのは君だ」
「…でも、この前負けたし…」

「聞いたよ。なら不意をつこう。君の特異魔法の都合上、一度当たればお終いだ。負けた時も、一度も当てられてなかったんだらう？」
「…うん」

「なら、不意打ちでも何でもするんだ。隊長は強いし、殺せないからこそ、そういう役割が必要なんだよ」

そこで話を打ち切って、教授は立ち上がった。

「さて、長話もここまでだ。最後に、伝言を頼んでいいかな？」

頷き、言葉を待った。

「避難民は全部私に任せろってね、やいばに伝えてくれる？」

「はい」

その返事を見届けて、教授さんは去っていった。私も、ライカと手を繋いで、歩き出した。

やば…ははは

眼の前が真っ暗に、なんてそう都合のいいことはなく、ただ、色の分からない世界をひたすらに見つめていた。

脳裏にはあの子達との短く、濃い思い出がフラッシュバックしている。

分かっている。別にあの子達ともう出会えないわけではない。むしろ、こんなことをするより隊長…あの人に擦り寄るなり何なりして二人の生存確率を上げるべきである。もしくは、あの中に突っ込んで、それらしきものを見つけるか。

それでも、俺は動く気にはなれなかった。

ただひたすらにあの子達を殺してしまっただけという事実が、俺を責めていた。罵っていた。嘲笑っていたし、侮蔑もした。

さらさらと、銀色の髪が頬を撫でた。そういえば、この体になる前に俺は死んだんだっけ。こうして生まれ変わりにでもしなかったらこんな気持ちにもならなかった。あは、これが『こんな思いをするなら花や草に生まれたかった』みたいな感情なのかな。…どうでもいいや。

「弟子」

あの子達との出会いはそれほど良いものとは言えなかったけど、関わるに連れて大切になっていった。抱いていた警戒心も、今の俺には微塵もない。命を投げ出せるほど、大切な子達だ。

「おい弟子。ねえ無視しないで、謝るから」

それを、こども簡単に死を経験させちゃって、そして、生き返るチャンスも、命を、他人に握らせてしまっている。きつとあの人ならブチ切れだ。いや、ちよつとニュアンスが違うか？いや、だから、そんなことを考えるんじゃないかな。もういいかな。

「…首根っこ掴めば行ける?」

「いや、これはこうだね」

『やいばお姉ちゃん!』

不愉快な媚びた声が、耳を震わせた。

その方向に視線を向ければ、一部、不快な顔をした物体がいる。隣には、人。多分ミレーさんだ。

「死ねよ」

心の底から嫌悪する。それは誰に向けたものか。自分か、ミレーさんか、不快な顔をした何かか。

その不快な顔を引っ返めて、人となった人物は何かを言う。少し、意識が向いていたから、かろうじて内容を聞いた。

「やあ、やいば。さつきぶりだね」

内容と行動から見て聡太君だろうか？それなら、新たに駆け寄って来たのは爽さんか？

何かを交わすと、聡太君らしき人物はこっちを見た。

「やいばが上手くやれば、もっと早く助けられるんじゃない？」

誰が、という部分は抜けているけど、誰を指すかはよく分かる。少しでも早くあの子達を助けられるなら、地獄から解放できるなら、そう考えると、少し力が湧いた。

「詳しく」

やるべきことを見つけた。

「あつ、弟子がこっち見た!!! やったよー！」

やる気が殺意に変わった!!!同時に、何かを察したのかミレーさんは頭を地面に擦り付ける。

「早く話して」

「はい」

早くと言っているのに、一々この人は姿勢を正している。意味が伝わっていないのか？

「えっと、まずは――」

どうやら、俺はさつき特異魔法を使いながら魔法を使用していたらしい。爽さんが苦しんでいたから確定だといい、だからなんだと思っ

たが、要するにそれを応用できれば、その二人がいるところを対象外にして隊長に気付かれずに助けられるんじゃないかと言うものだった。

確かに、二人を助けられれば形勢逆転なのだが、そこに二人も隊長の味方がいるぞと言えば黙った。筒抜けにも程がある。

ただ、練習はしたい。二人を守るすべを増やせるし、もし二人が人質にされてもそれを使えば助けられる。ならやろうかと思ったけど、隊長の前で許されるわけがなかった。

再び、世界を見つめた。

…あれ？これやばくね？

教授さんのブロック君の持つ灯りを頼りに、私達は地面を掘り進めていた。ずっと屈んでいることもあつて少し腰が痛いけど、我慢だ我慢。

そして、もう後戻りが出来なくなった頃、気付いてしまった。

「ねえ、ライカ」

「ん？どうしたの？」

「いや、これってどうしたら上が安全なのかわかるのかなって」

「あつ……」

チラッと、いや、じつとブロック君を見つめてみた。

「(・。・)」

「君、意志あつたんだね」

「待ってライカ。何が見えてるの？」

「え？なんかちよつと汗かきながら目を逸らしてるよ？」

「…え？」

見た目はキモいけど、意志があると考えるとなんかかわいく見えてきた。

よし。問題は解決してないけど、取り敢えず進もう。ここはそんなに深くないからもしかしたら足音が聞こえるかもしれないしね。

「よし。足を止めてごめんね」

「いや…うん。そうだね」

「く(・。・)」

かわいいなこいつ。

《やいば視点》

じつと世界を見つめてしばらく経った今。やつと行動をする気になれた。自責の念が、過去の行動を責めるところから何もしいないことを責めるように変わり始めていたからだ。

ともかく、周囲を見渡した。

まず、敵である隊長はよく分らない目で俺を見ていた。多分何かしようとする、俺を殺しにくる気がする。いや、多分殺すまでいかないかな。さつきだつて殺せたのにしなかつたし。

そして、メインではないが隊長につく聡太君と爽さん。特に何かする様子もない。少し大きすぎるような声で雑談していた。すぐ近くにミレーさんがいるので、もし何かしてこようとしても止めてくれるかもしれない。希望的観測すぎるかな？

そして、だいぶ俺の周りも開けてきた。それだけ、あの黒い魔力が進行しているのだろう。しかし、爽さんの言ったことが本当なら、あの魔力が増えて…？そうじゃないと地球覆えないよね…？

と、すると、早いうちじゃないと俺の特異世界でも消しきれなくなるかもしれないな。

まあ要するに、早いうちに対応しないといけないのに、俺は人質をとられているから出来ない。んで、ライカちゃんとレイカちゃんを保護してすぐにやろうとしても、戦力的に不安が残り、結局は対応が遅れる。

詰みじゃん。…まあいいか。できることをやろう。

「あの、空斗さん」

嫌だけど、知りたいことがあったから尋ねてみた。

「二人に何をしたんですか？」

黙りこくる隊長。まさか、質問の意味が分からないなんてことはないだろう。しばらくして、やつと口を開いた。

「教官の特異魔法に引つかかった。多分、街の住民含めて、十数人は黒い魔力に突っ込んでいったと思う」

教官の特異魔法。俺も一度やられたことのあるアレ。そういえばあの人もいたか。というか、そこまで大規模にできたのか、アレ。

「分かりました」

なるべく話したくないのでそこで話を切った。そして手持ち無沙汰になり、あたりを見渡す。

そこで不可解な物が目に入った。

「え?」

ちようど自分の体で隠れているのか、俺以外誰も気付いていない。

(なにあれ?)

ちっちゃい、すつごくちっちゃい腕が、地面からニョキツと生えていた。手をぶんぶんと振って、何かを確認したのか、シユツと引っ込んだ。しばらくして、その土がすこーしだけ持ち上がった。

(どういうこと?)

モグラだろうか。いや、そうじゃない。そこじゃないだろう。土がポコツとしてるのはまあ置いといて、あの手の正体の方が気になる。

ツンツンと持ち上がった土をつついて見れば、ビクツとしてから何かが出てきた。

すわ虫か!?と思つたら、そこには…

手足の生えた、四角い積み木のような物がいた。

はえ?えつ、キモ…。いや待って。このキモさは覚えがある。

(教授の…?)

そうとしか思えない。でも、だとしたら何でここに…?

その四角い積み木は手足をブンブンして何かに合図を送っている。

それは俺にはなく、別のなにか。そう、おそらくはあの積み木が出てきた穴に向かって…。

そして、しばらくの間をおいてから、事態は動き出す。

滝のような勢いを持って、下から上へと水が噴き出した。かと思いきや、閃光と轟音があたりを埋め尽くす。

それは聞き慣れた物で、何度も命を救われた音で、本当はそうさせたくなかった子達の、命を示す物だった。

「やいばお姉ちゃん!!!」

「やいばさん!」

二人の声と暖かみが飛び込んで来る。受け止めきれず、倒れ込んでしまうけど、その痛みも、二人のぬくもりも、どれもが現実だと知らせてくれて、それがどこまでも嬉しい。

「良かった…。無事で良かった!」

「えへへ」

はにかむように笑って、ライカちゃんは頬をかいた。後ろでは閃光が蹂躪しているが、お構いなしに二人は俺にくっついてくれた。

「あつ、そういえば伝言!レイカ。なんだっけ」

「えつとね…。教授さんが言っていました。避難民は任せろ、と」

あ、なるほど。教授が一枚噛んでいたんだ。さっきの謎のブロックもそういうことだろう。と、言うか…。

「ねえ、二人共…。もしかして、教官から教授に助けてもらったの?」

「うん!」

「はい。危ないところでした」

「そっか。…じゃあちゃんとお礼しないとだね」

本当に、本当に助かった。もう感謝してもきれないくらいだ。

「やいば!」

何かを伝えようとしている爽さんの声に、体を全力で跳ねさせた。少し二人にも衝撃が行ってしまったと思うけれど、仕方ない。

そして、俺がいた場所には空斗さんが立っていた。なんとか避けられたけど、避けさせてくれたのは――

「爽。どういうつもり?」

「いやいや隊長。流石にこの状況を無視なんて出来ませんよ。恩はあるけど、何でもするって訳じゃないんだから」

「爽さん…?」

「聡太は?」

「溶けるの嫌。思い出しちゃうし、流石に止めたい。それにちよつと前の戦い完敗したからこっちに付く」

「聡太君…?」

なんというか、サクサクと裏切っている。ふたりとも溶かされてるし、そこで思想から変わったのかな?いや、まあ経緯はどうあれ…。

(形勢逆転。かな?)

「隊長どうです? 諦めませんか? また今度にしましょう?」

「…」

なだめるように爽さんが話しかける。長らくの沈黙を経て、空斗さんは口を開いた。

「今更引き返せない。それに」

言葉を、続ける。

「それでも、俺は負けないよ?」

戦いが始まった。

やばくね?・強くね?

始まりは、ちょっと空気気味だったミレーさん。

「ほら、これでもくらえ!」

何十もの炎龍が目の前を焼き焦がす。その傍ら、ミレーさんは俺の背中を押した。

「ほら、始めなさい」

ああそうか。無理して倒す必要はない。いまやるべきなのはあの黒い魔力を消し切ることだ。

頼れる味方に任せきって、俺は胸のうちに語りかける。

徐々に拮げていくのではダメ。一気にやらないと、ミレーさんや爽さん、聡太君だけ魔法が使えず、不利になる時間が生まれてしまう。

「だから、ダメ」

「はっ…」

腹部に強烈な衝撃が走った。そして、浮遊感に襲われる。

「うわわわわわ!!!!ごめんねやいば!」

咄嗟に爽さんが支えてくれる。そして、少し体の向きを変えると、ちようどさつきまで顔があった位置から風を感じた。

発生源には空斗さん。いや、おかしいだろ。

「舌噛むなよ!聡太!」

結構馬鹿にならない速度で投げ渡された。クッションみたいな感覚で少し沈み込み、聡太君にキヤツチされる。

「やば」

聡太君の周りの地面が沈み込み、同時に飛び退くと、そこに空斗さんが飛び込んでいった。必死に塞ごうとしたのか土が戻ろうとしていたが、既にもうそこにはいない。

「うん。やいば。もう絶対に邪魔はさせないから、やって。あ、浮遊感
は我慢して」

もうなんかよく分からないけど、言われたことをする。だって今何があつたか分からないし。うん。何もできんわ。

少しでも集中するために目を瞑る。というか、こうでもしないと集

中出来ない。今ですらちよつと気持ち悪い。

よし。

これは魔法じゃない。

これは、故郷を再現するだけの作業。

——ああ、きた。この体が火照り、何かが飛び出そうとして——
「うん」

その一言は、嫌になるくらい耳に残った。

パツと目を開ける。目に入るのは、倒れ伏している皆と俺の首を掴む空斗さん。

「やめなくていいの？」

少しずつ、首が締まっていく。でも、俺は死なないんだという謎の自信があった。だから、少しむりをする。

「な、んで、こ、ういう、こと、を、！　するん、です、か！」

「…こうすれば、誰も死なない」

「目を、覚まさ、な、い人もいて！　悲、しんでる人だつ、ているんで、すよー！」

「…知らない」

「…っ！」

「もう、置いていかれたくない！」

より一層首への力がこもる。無意識的に足をばたつかせて、首を掴む手を剥がそうとする。でも、剥がれないし、力は強まっていくばかりだ。

「じゃ、あ、死ねー！」

ここだけ特異世界で包み込み、鳩尾を蹴る。余程いいところにはいったのか、目の前の奴は崩れ落ちた。

「がアツ」

「はアツ、はっはっ…うええ」

気持ち悪いけど、逃げないと…！

「びっくりした」

でも、間に合わなくて、御返しとばかりに鳩尾を蹴り飛ばされた。

でも、それで生まれたチャンスを、ミレーさんが拾ってくれた。

「やいば用の鈍器イ！」

特異魔法により戻ることのない衝撃をもろにくらう。

「ちよつと聡太！体借りるよ！」

次いで、大きな何かが空斗さんに投げられる。鈍い痛みで動かなかったその人には、それが鋭くぶつかり、赤い液体が飛び散った。よく見れば、聡太君の体がなんかギザギザしていた。

「よし、聡太！やれ！」

聡太君が倒れた空斗さんの上に立ち、変形する。同時に、周りの地面が盛り上がり、どんどんと乗っていく。

それを横目に、みんながこっちに来た。

「よし。これで終わりかな。ねえ、ライカ。しばらくしたらあの土の塊の一部が変色して聡太が出てくると思うから、そうになったら雷を落としてあげて。それで、隊長を今度こそ縛れるからね。あとやいば。1回特異世界解きなさい。死ぬよ？」

ああ、そうだった。そして、特異世界を解除すると、色々と限界寸前だったのが、余裕ができた。

「はあ…。このあとどうすっかなあ」

凄く遠い目をしている爽さんは置いておいて、二人を呼んだ。

「えつと、その」

「やいばさん。ライカなんのことが分かってないので今のうちにやってください」

「えつ」

「さあ早く！」

「はっはい！」

ついつい押されてしまって、他にも相談しないといけない人考えずにやってしまった。

後に、その場には苦しみに満ちた叫び声が響いたのだった。

何気ない一言も案外ヤバイ

突如降ってきた土砂に固められ、電流を流し続けられている。痛い
が、そんなのはとつくの昔に慣れていて、特に気にすることじゃない。
思えば、やいばと戦う必要は無かった。いや、正確には、今戦う必
要は無かったであるが。

最終的に戦ったとはいえ、あの黒い魔力を消すのだけ協力してい
れば、爽ぐらいは味方になっていたかもしれない。まあ過ぎたこと
だ。考えたって仕方あるまい。

突如、酷い頭痛が襲ってきた。それはすぐに収まったが、何故か脳
裏に、やいばの言葉が響いた。

『じゃ、あ、死ね！』

考えていなかった、いや、思いついても出来なかったそれは、今な
ら成し遂げられる。それは、何よりも魅力的に見えた。

舌を噛み、戻ったのを感じて手遅れだと知った。

(あーあ)

俺が元々生きていたのは、死が無くなった世界だった。人類が何年
も何年も積み重ねた技術で、人は死を克服し、無限の時間を手に入れ
た。

そして、そうなってから数百年後。

多くの人のやる事が無くなり、新しく娯楽を開発する日々に、
人々は飽きながらもまだ幸福を覚えていたそんな頃。

天才が、人を殺す方法を見つけた。

誰も死なずに、無限の時間も含めて荒事が無くなったこのご時世に
現れたそれは、世界を恐怖に陥れた。

彼らの主張はどうでも良かったから覚えていない。でも、解放だなんだと虐殺が始まり、ただただ俺はそれに巻き込まれた。

そして、この世界に来た。

「え…貴方何してるの？」

理解が及ばず、何日かその場でブーツとしていたら、話しかけられた。

「あ、すみません。なんですか？」

「あ、いや、貴方大丈夫なんですか？」

「？ええ。大丈夫ですよ」

「…え？でももう貴方ここに10日いますよ…？」

10日。気づいたらそんなに経っていたのか。まあいいか。

「あ、そうですか。でも普通ですよね？」

「…？」

コテンと首を傾げる彼女は、その地域の領主の娘であった。何故か気に入られ、ともに暮らし、この世界の常識を知り、文化レベルも慣れた。

そして、始めて別れを知った。

決して二度と会うことのない、絶対的な別れ。前の世界では自分が対象であったから知ることは無かった。

死。

「大丈夫？」

「…ごめんね。病気にかかっちゃうなんて馬鹿みたいだよね」

この世界では難病で、治すすべの無かったそれ。元の世界ではかなり苦しいけど十年くらい寝れば治ると言われていたそれは、人を殺す力があつたらしい。

「っ!!…絶対に死なない。俺もなったことあるけど、すぐ治ったし」

「…たはは。貴方のすぐはアテにならないなあ」

そして、彼女は息を引き取る前日の夜。悲しそうに呟いた。

「貴方みたいになれば、まだ生きれたのかなあ」

己の力を知らなかった当時は、涙を流すことしか出来なかった。

そして、また一人。

また、また、また、またまたまたまた、

出会いと別れを繰り返した。事故で、病気で、寿命で、事件で、幸せそうに、寂しそうに、悲しそうに、皆死んでいった。

そしてある時、大戦争に巻き込まれ、これが力であることを知った。師に出会い、その使い方を知った。その時、不思議と、あの時の彼女の言葉をはつきりと明確に思い出してしまったんだ。

そこから何年も何年も修行を続け、今に至る。世界を包む目処が経ったから、それまでの時間稼ぎとして世界を守る機関を作った。修行の過程で助けた人は沢山いたから、申し出たら皆手伝ってくれて楽ではあったけど。

そうしてあの日。俺は世界を包みこんだ。

しばらくして、光が入ってきた。

「あ、空斗さん」

やいばが、泥だらけの顔で穴を覗き込んでいる。…俺は覚悟を決めて、頼んだ。

「俺を殺せ」

「はい？」

やいばはポカーンとしているが、思考がまとまる前に押ししてしまう。

「殺さなければ、同じことをまた起こす」

別にもうそんなことはしないが、まあ脅しにはちようどいい。

長きの沈黙の後、やいばは覚悟を決めた。

「分かりました。なら、獲物は無いので魔法で」

炎を掌に出して、その手とは反対の方向の手を伸ばす。何も変わっていないように感じるが、多分今はただの人になっているのだろう。

轟々と炎が空気中で踊る。あれが俺を焼くのだろうか。…少しうなじがひんやりとしたが、まだ炎は来ていない。

(遅いな…)

見ると、やいばの顔が真っ青になっている。ダラダラと汗が滲み、見ているとこっちまで辛くなってしまう。

そしてやいばは、俺の視線に気付いて、口を開いた。

「行きま—「やいば。その必要はないよ」」

ふわりと、体が浮いた。

「…爽?」

「ごめんねやいば!覚悟を決めたところ悪いけど、俺は死んでほしくないんだ!後は任せてくれ—!」

目を白黒させている間にも、爽はやいば達から離れていく。

そして、爽は口を開いた。

「隊長。勝手に死なないでくださいよ。分かっていますか?貴方を慕っている人がどれだけいるか」

…それは、分かっている。

「なら、全員に許可取ってください」

許可。まあそれなら…。

「後は、今回の犠牲者全員にミライエイコマア謝ってから」

…ん?

「あのですね。隊長。あなたは取り残される苦しみを知っているんでしょう?なら、馬鹿なこと言わずに生きてください。たった一人じゃないんです。何人も何人も貴方を慕い、ついていこうとしているんですよ。そんな彼らの意志を無下にしないでください」

でも、それだと、俺は…。

「隊長。貴方も、特異世界の範囲を操れますよね」

「…うん」

「なら、俺等と一緒に残ります。ずっとついていきます。だから、」

爽は、拠点の前で立ち止まった。中にいる全員が出てきていた。
「貴方に生きて欲しい」
この日を俺は、きつと忘れないだろう。

…ヤバい人達だなあ

あれから、数日が経過した。

『3日前の騒動の主犯と見られる——』

ニュースの背景に流されているのは、やけに屈強な見た目の男がパトカーに載せられる様子だった。この男、当然のように隊長の代わりとなり、全責任を負った聡太君である。

「あれ俺ね。あ、豆貫うね」

「…なんでいるの？」

俺が朝のニュースを眺めていると、サラツと聡太君が入ってきて大豆を持ってソファに座った。意味わからない。

「脱獄してきた」

「通報しようか？こつちには特異世界があるんだよ？」

「酷い」

「聡太君だって隊長の仲間じゃん。なら逮捕されてもおかしくなくな
い？」

「まあまあ、爽も捕まっていないからセーフだよ。後それでも今の俺
を見ても分からないでしょ」

「…たしかに」

あの後、証人となる教授、聡太君、ミレーさんの三人で色々と話し
合い、途中から爽さんも話に入れて後始末を決定した、らしい。

その場にはいなかったのが教授から簡単に教えてもらったのだが、
主犯は聡太君が変身した人。後は、多くの人が直接見てしまった教
官、爽さんを警察に捕まえさせ、一旦落ち着かせようとしているつば
い。

なお、後に何故か爽さんが釈放。教官も同様に釈放されたが、まさ
かの報道はされなかった。おい、何をしたんだ…？

そんな中で聡太君だけはまだ刑務所にいたのだが、今は隣にいる。
なんでやねん。いやまあいいけど。どうせバレないだろうし。

「…おはよう」

「おはようございます」

と、そんなこんなしていると二人が起きてきた。学校はまさかの再開。二人は今日も学校である。なんでだよ。

もにやもにやとご飯を食べて、準備を整え学校へ行くのを見送り、二人きりになったところで切り出した。

「で、何しに来たの？」

「あー、これからどうする？って言う感じかな。ほら、今回のこともあったし、またこっちで働くのも…って感じじゃない？一応退職金は出るよ。こんぐらい」

そうして見せられたのはアホみたいな金額のお金だった。完全に働かなくても良くなるぐらいではないが、結構長く暮らせるレベルのお金だ。まあでも、正直に言うとは決まっていた。

「いや、そのままでもいいよ。よろしくね」

「お、いいの？」

「だって爽さんの下にいたほうが社会的に安全そうじゃん」
「確かに」

爽さんは、謎に警察とか政治家とかにパイプを持っている。偽の身分証作られたり、警察から一瞬で釈放される人を敵に回したくはない。「…ん。ならよろしく。あ、今日の恵方巻は2つ食べたい」

「分かった」

元々作ろうと思ってたので、正直そんな苦ではない。二つ返事で俺は了承したのだった。

「ただいま〜」

「ただいまです」

夕方になって、二人が帰ってきた。二人とも、やけに疲れたような顔をしている。

「あ、恵方巻だ！」

恵方巻を見て、テンションが上がったが、少し引つかかる物がある。「二人ともどうしたの？顔が暗いよっ。」

「ん、ううん、なんでもない」

「はい。気にしないでください」

話してくれなさそうだ。粘るのもなんだし、時間も時間なので一度ご飯と行こう。お吸い物も完成したから食べてもらいたいしね。

「よし。それじゃあ手を合わせて？」

「「「いただきまーす」」」

ん？なんか一人多くね？と思えば、聡太君がいた。なにも言わずに南南東を見ながら恵方巻を2本頬張っている。もきゅもきゅと食べる二人と比べると、えらい違いだ。

「来たならなんか言えよ」

俺は、豆を聡太君にぶつけた。

やばくなり始めた情勢

いつも通りの一日。何事もなく家事を済ませ、爽さんと聡太君からお金をぶんどった為しばらく働かなくても良くなった今日この頃、携帯に連絡が入った。

「…えっ？」

ついつい声を出してしまつて、テレビを見ていた二人に聞こえてしまふ。

「どうしたのー？」

「どうかしましたか？」

「あ、いや、なんでもないよ。ちよつと電話するから外に出るね」

普段なら気にせずするんだけど、今回は別だ。チラツと見ると、二人は気にしていないようだったのでほつと胸を撫で下ろす。

メッセージ通りに、響ちゃんに連絡する。いつぞやの強盗以来、ちまちま連絡は取っていたりするのだ。

「もしもし」

『あ、もしもし。響です』

「うん。じゃあちよつと詳しく教えてもらえるかな？」

『は、はい』

そうして、響ちゃんの話の逐一メモしながら聞いていく。

『……とまあ、はい。こういうことがあつたんですけど、どうしたら…』

所々言葉を濁しながら、響ちゃんはなんとか説明してくれた。

「…うん。ありがとうだね。まあこのご時世で、仕方ないといえれば仕方ないのかもしれないけど…。うん。なんとかしてみるよ。責任の一端は私にあるからね」

募る苛立ちを抑えながら、俺は通話を切った。

「…はあ」

外気に当てられて、冷えた手に息を当てる。若干湿つたような息が、一瞬だけ手を温めて、すぐに冷えてしまった。

あの事件の混乱が収まって、また普段の日常が始まるかと言えはそうでもない。少なくとも、あの騒動は人々の意識を大きく変えた。そう。特異魔法というものへの認識である。

これまでは、特異魔法は才能であり、人類の発展に貢献するものだと、持つ人も持たない人も共通認識としてそれを持っていた。

様々な分野での効率も上がって、災害時には多くの人が助かる要因となり得る重要な国の資源。いや、人類の資源であり、能力によつては丁重に扱われていた。

特に日本というしばらく争いとは無縁だった国では、特異魔法を恐れる声はあつても、それは表に出ることはなかったのだ。

しかし、今回を境にそれは変わった。

いまやネットどころか日常でも特異魔法を恐れる意見が台頭している。依然として意見を変えない人もいるにはいるが、それでも、そんな声の存在は大きい。

なかでは、悪魔、と特異魔法を使える人に蔑称をつけて、過激な発言をする人が多いのなんの。特に、テレビでも有名なインフルエンサーが身内がやられた、と向こうについてしまい、まさに日本は二分、いや、世界が二分されている。

まあそんな世の中で、精神的に未発達な子供達が影響されないなんてあるはずもなく、レイカちゃんやライカちゃんはいじめられているらしい。物理的にも、精神的にも。響ちゃんのタレコミだ。

…本来、二人なら負けるわけがない。でも、そこで足を引っ張るのが二人の過去^{トラウマ}。

聡太君と戦った時の、あのときとは事情が違う。いや、そこで二人が手を出せば、もつと不味い展開になるのは明らか。レイカちゃんはともかく、ライカちゃんは人を殺しかねない。こう考えると、悪魔と排斥する行為は間違つてないのかも。そりゃあ、ナイフをいつでも刺せる人とは仲良くしたくないよね。

まあ、だからって放置はしないけど。

解決に必要なのは、やはり何よりも世の中の意識の改革だ。周りが変われば、染まりやすい子供も変わる。とはいえ、それまでに二人が追い詰められてしまえばおしまいだから、メンタルケアも徹底しないとけない。

強引に、というのも行けなくはない。聡太君頼みになるけど、侵入は容易だ。後多分爽さんなら組織の誰かを突然の教育実習生として入れることもできるかもしれない。

まあ、どういう手段を取ろうと、あの人達を巻き込ませて貰おう。もし拒否されたら、その時はその時だ。

ひとまずは、冬の吐息のように、一瞬であっても温かみを感じられるようにしよう。

心の底から、二人を愛するんだ。

ヤバい。何すればいいんだろう

二人が寝た後、拠点まで行って5時間くらい語り掛けることでなんとか協力をもぎ取った。…実を言うと、大体3時間くらいで諦めていそうな顔をしていたのだが、そんな気持ちでやって欲しくないからさらに説得を続けたのである。

…いや、ほんとは1時間も経たずに決まったんだけどミレーさんの送別会に行つてたんだよね。あの人、なんか抗おうとしてたから俺の特異魔法で無理矢理…。

印象的だったのは向こうの人…多分政治家かなんかだと思うけど、物凄い形相だったことかな。視線だけでも怒ってるって分かった。なんなら連れて行く係の警察さん涙目だったもん。

未来が明るくないであろうミレーさんにはさよならと言っておいで、ともかくこうして準備、というか、人手は揃ったのだ。後はじっくり意識を変えていくことになるのだが…。

さて、何をすべきか。

まずは、日常生活の改善だろう。お金が沢山あるから、いつもより何段も上のご飯も作れる。しかし、俺は知っている。高い料理を日常にしてしまえば、普段の料理が物足りなくなる。それはキツイ。

だから、時々ヤバいくらい美味しいもの、というのがいいだろう。よし。じゃあ次。やっぱり、一番気分転換となるのは、旅行とかのお出かけだろう。しかし、二人の長期休暇はまだ先。だから大幅な旅行は組みづらいし、何より、今は反特異魔法団体が最も活発な時期。不快な思いをする可能性が高い。

…というか、俺が特異魔法持ちだと言うことはバレてないと思うんだけど、なんか皆やけに優しいんだよね。いや、同じくらいには厄介な人に絡まれるんだけどさ。なんだろ、ここら辺の地域でやったことといえばゲーセン強盗退治（俺の姿をした聡太君が）ぐらいなんだけどな…。でも、あれめちやくちや前だし…。流石に誰も覚えてないでしよ。

まあそういうわけで、うん。何をすべきだろう？

「ねえ、何したらいいと思う?」

「知らないけど…。なんで俺に聞いたの?」

というわけで、アドバイザーとして今日も今日とてご飯をタカリに
来た聡太君をお呼びした。レイカちゃんもライカちゃんも寝ている
ので小声での会議である。

「え…だって、このぐらいの年齢が喜ぶことかもわかってるでしょ
?昔からスパイやってたっばいし」

「スパイやってても中学生に混ざったりしないからね?というか混ざ
るとしてもそんな目立つ事はやらないし」

当たり前でしょといわんばかりの顔でそう言われた。まあ確かに
それはそうかもしれない。

「んー」

おっと、あんなこと言ってたのにちゃんと考えてくれてるっばい。
いいね。おやつ追加しよ。

「あつ」

「おつ。なにになに?」

「いや、ゲームは?」

ゲーム。…ふむ。なるほど。デメリットはよくある話だけど、現実
逃避にはいいのかも。いやしかし、うーん…。

「…そもそもさ、学校になんで行かせるの?」

「えっ」

「だってさ、二人が嫌だって言ってるんなら行かせなければ良くない
?」

確かに、嫌がつてるならそうかもだが…。

「別に中学でしょ?行かなくてもいいじゃん。やいばと同じように組
織で働くなら学歴いらないし」

「いや、将来の選択肢を狭めちゃうのはちよつとなあくと思つて。そ
れに、まだ二人からそういう話されてないし」

もちろん、学校に行きたくないとでも溢せば即座に甘やかして休ま
せる。

「…ん?待つて。やいばつてもしかして二人と話してないの?」

「えつと、話すって…?」

「いや、だからさ、そのいじめについて、二人から聞いた?」

「聞いてない、ね」

「なんで?」

「いや…だって、二人が話そうとしないから」

そう言うと、聡太君はわかりやすく肩を落とした。

「あのねえ、いじめって言うのは言い辛いんだよ。これまで話されてないっていうのは、辛くないと同じではないんだよ?そのいじめについて二人がどう思ってるのかは知らないけど、ちゃんと聞こうね?余計なおせっかいは要らないんだからさ」

…そっ、か。

「ありがとう聡太君。話してみるよ」

「んー。ちゃんと話し合うんだよ」

ヤバいと思いいながらも嫌なことは後回ししちゃう

思い立ったが吉日。そのような言葉があるように、思い立ったらその日のうちに行動に移すべきである。俺はそうはしなかった。勇気が出なかったとか言うへタレ精神全開だったからだ。

そしてその結果、二日経ってしまった。聡太君には告白でもするつもり？と言われてしまい、はずかしい限りである。

だが、今日は休み。一日中二人は家にいるから、いつでも聞ける。そう思っていたら夕方になってしまった。うん。

…今、手元には何かのお祝いかと思わんばかりのご馳走が並んでしまっている。どれも手間が掛かり、故に自分への言い訳としてきた料理たちだ。

流石にダメだろう。こんなことしていたら問題解決に滞りが出てしまう。というわけで、料理を振る舞い、お風呂を沸くまでの時間、お話しする時間を作った。

普段じゃやらないような真面目さに当てられて、ご飯のときはふにやっとしていた二人の顔も引き締まる。

意を決して、口を開いた。

「二人はさ、最近の学校はどうなの？」

直接聞くのは流石に…と思つたし、ここで響ちゃんの名前を容易に出したくないからこういつた形になった。それに、この質問ならたま〜にする時もあるので、不審に思われることは無いだろう。

「な、なんともないよ？」

「普段通りです」

少し動揺の見えるライカちゃん、普段通りのレイカちゃん。うん。ライカちゃんから聞き出せるかな。

「そっか。最近ニュースで物騒な話が増えてきたから、二人もそうなってないか不安だったんだよ。良かった。じゃあさ、ライカちゃん最近学校で何したの？」

「えっ…。本を読んだり、テスト勉強したり…。ホントだよ？」

「ふふふ。疑ってなんかないよ。ところで友達が増えた？」

人によつては禁止カードになりえそうな言葉をはきながらも、ライカちゃんの表情を伺う。あつ、ちよつと引き攣つた。

「う、うん！増えたよ！」

流星にこれライン超えかな。凄い申し訳なくなつてきた。いや、これで本当に増えているのなら切腹案件だけだ。

「：ライカ。これダメそうじゃない？」

「うう：。そんな事言わないでよお」

コソコソと二人が話している。しかし悲しいかな。全部聞こえて
いるのだ。

「えつと、何がダメそうなのかな」

「あつ」

二人は、やつと話す気になつたみたいである。

「その、ごめんなさい」

二人の話は、何故か謝罪から始まつた。まだ全貌は聞いていないからなんとも言えないし、曖昧な反応で返しておいて先を促した。

「えと：その：はじめは、あんまり気にしてなかつただけど、友達の男の子が私達をからかつて来てね？多分その子は遊んでるつもりだつたんだろうけど、過剰に反応する人が出てきちゃつたの」

ほう？まあこれはありそうな展開ではある。

「それでね、クラスが2等分されちゃつたの。当の本人の私とその男の子は蚊帳の外で、どんどんとヒートアップしちやつてて：」

ん？なんか話おかしくなつてない？

「後戻りできなくなつたのか、過激派の子達は私達に危害を加えてくるようになったの」

「ッ！」

来た、これだ。果たして許して良いものだろうか。

「はじめは我慢してただけど、昨日、面倒くさくなつちやつて」

許せねえよなあ！許しちやいけねえよ：おや？

なんか、流れおかしくね？

「二人で相談して、ちよつとだけ魔法でビビらせようと思ったんだけど…」

「私が、力加減間違えちゃって、ギュツ…て」

あれれ？ 深刻な私の気持ち何処に行った？ というか、これ思ったのとは別の方向にやばくなってない？

「え…その子達は大丈夫なの？」

「あ、う、うん。大丈夫、なんだけど…。その」

物凄いい辛いそうにもじもじしている。

「大丈夫。怒らないから教えてくれる？」

「え、えっと、その…」

その時、テーブルの上に置いていた俺のスマホが震えた。通知が画面に表示され、その送り主は響ちゃんであると分かる。そして、全文は不明だが、最初の数文字だけが表示され、嫌というほどに目を引いた。

「天里教…？」

「…なんか、神様にされた…」

はい
?????

ヤバい。意味がわからない。

「え、えくつと、うん。その、もう二人は嫌な目にあってないんだよね？」

「うん！」

「まあ、はい。いや、学校のどこであつても崇められるのは嫌ですけど……」

よし。なら、ひとまずはいいか。いいか？というか、これは解決すべきなのか？そもそもレイカちゃんがギョツとして崇められるって何なの？

「取り敢えず、ケーキ食べよっか。美味しいよ」

「やった！」

「……」

頭が混乱してきたので素直に喜ぶレイカちゃんと静かに期待した顔を見せるレイカちゃんにケーキを振る舞って、この日は眠りについた。

そして、爽さんと聡太君に事の顛末を説明したら、二人とも頭にハテナを浮かべていた。あつ、やっぱりおかしいよね？これ。

さて、まさかの結末で二人のいじめ問題は解決されていたのだが、かといってこの特異魔法差別は放置していいのかといえそうでもない。これが二人に影響を及ぼす可能性はまだ消えていないのだ。

「というわけで作戦会議〜!!」

この場には聡太君、爽さん、レイカちゃんにレイカちゃんの特異魔法の方々、一般人枠として響ちゃんとそしてまさかの天里教の教祖様に来て頂いた。

……いや、実は響ちゃんと教祖様は幼馴染だったみたいで、今日の予定をうっかり教えちゃった響ちゃんについてくる形で現れたのだ。

流石に事前に許可を求めてきていたが、サンプルとしてはとても大切な意見をもらえると思うので許した。ライカちゃんは怯えている。ふるふるしている。

本名は木本大我^{きもとたいが}。レイカちゃんとライカちゃんの同年代のお友達で、特異魔法を持たない一般的な男の子である。隊長の特異世界によつてお父さんにお母さん、彼の妹という彼以外の家族が永遠に眠らされてしまい、トラウマを抱えてしまった。

なお、その後は響ちゃんの家に向かい、メンタルケアをしたらしい。この場に元凶^{たいちよう}を連れてきて殴らせてやりたくなつたが、誰も幸せにならないので辞める。

というわけで、教祖様の紹介も終わったところで、一旦個人的な質問をした。

「ちなみにさ、ねえ、大我君。なんで天里教なんて物を作りたくなつたの?」

「レイカ様にこの世の真実を教えて頂き、その到達点におられるのがお二方と理解したからです。私に足りないのは力!弱者は淘汰されるべき!絶対的な力に私はそう教えられたのです!」

「大我...?」

「ん?どうした響?なんか変なもんでもついでるか?」

「そうじゃないけど...やいばさん引いてるからやめて?」

「ういー」

響ちゃんに諭され静かになる大我君。なんだこいつ?二重人格か?ちらりと爽さんを見てみれば、頭の上にはてなが幻視できるような表情をしていた。

「うん。開幕から話題をそらしちゃってごめんね。それじゃあ、作戦会議といこうか。まず初めに原因から考えよう!」

「「「「おー!!」」」」」

「じゃあ皆手を挙げてー?いいね!大我君」

「家族、もとい親しい人が数日間にわたり眠りについてしまうとか言う、国ですら解決できない事象を起こした以外にあるんですか?」

「そうだよね...」

もうまさに大我君の言う通りだ。反論の余地なんて無い。

「やいば」

「はい！爽さん！」

「特異魔法によって建物から手足が生え戦う動画がインターネットから世界中に広まったから」

「あー」

そういえばちよつと前ニュースにあがってたなあ。『こんなことをされては都市なんて一瞬で滅んでしまう！』って、差別派の理由として使われていた。ハハツ。反論の余地なくてウケる。

他の意見も似たようなものだった為、原因の話は終わりだ。

「じゃあ次は解決に向けて！どんなことが出来ると思いますか？おっ。結構手を上げてるね！じゃあまずはレイカちゃん！」

「力づく」

まって、この子特異魔法で人を傷つけるのトラウマって言ってなかったっけ？えっ？

「レイカに危害が加わるのなら別です」

あつ、そうですか。

「じゃあ次！聡太君！」

「力づく」

「：次、響ちゃん」

「えっと、力づくしかないと思います…」

「なんか未来見えるけど大我君！」

「我等がレイカ様の御力に屈服させるのです！」

「お前等野蠻過ぎだろ!!!」

なんで全員力こそ正義思考なんだよ！いつから？洗脳でもされた？

「いや、やいば。落ち着いて。実際問題こういうのは力づくが一番楽なのは確かだからさ。そういう選択肢が一番に来るのは仕方ないよ」

まあ、それはそうかもだけど。

「でも、そんなのじゃだめだから！もっと考えよう！」

そして、皆揃って口を閉じた。ですよね。

これだからヤバい議題の会議は嫌なんだ!!

極論として、どんな悪事であろうと死刑をくだせば、悪人は消える。悪人は無限に湧くわけではないし、人は学ぶ生き物なので当然だ。

だが、そんなことは出来ない。悪意があるかないかなんて判断は曖昧なものに過ぎず、故に悪人を完全に消すなら悪意あるなしに関わらず全員殺すこととなり、見事生きづらい世界の誕生だ。

力づくで解決と言えば、上記のようなことをするのであろう。殺す、程に過激ではなくとも、差別的思考を持つものすべてを力で捻じ伏せる。であれば、結局生きづらくなり、むしろ心のうちに秘める差別的思考が増大したり、増えたりする可能性まである。

と、こんな感じの説明を試みたら、「ならやいばは?」と視線で示された。

…わからん。

「あつ、やいば分からないって」

「!?」

そんなにわかりやすい顔していたか?それとも俺は未来分からんとしても言うのか?

「ああ、俺の特異魔法は心を読むなんだよ。ははは。まあこの話は後で」

ん?この人さらっと特異魔法持ちが禁忌される理由を1つ増やさなかった?え、後で詳しく聞こ。まあでもこれでわからないだと格好つかないし:うーん。

「:強いて言うなら、慈善活動を繰り返すとか、ですかね」

うん。悪いイメージを払拭するなら良いことをすれば少しは薄れるだろう。そもそも、特異魔法持ちが世界をめちゃくちゃに出来るというのは紛れもない事実な訳で、そこはどうしようもないのだ。

「まあ、それが良いのかな。ありきたりだけど」

「逆に聞きたいんですけど、こういう難しい問題の解決方法ってありますたりでしょ?」

生意気なことを爽さんが言ったので食い下がる。正直、SDGsと

か調べるとほとんどの確率で『募金』と『知ること』が『私達に出来ること』に入るのである。

「やいば。それはあくまで個人の話で団体だと変わってくるよ」

「……………つすね」

「そうだね!!!」

「…まあ、やいば…さんの言うことは決して悪い事ではないと思うか…ので、良いんじゃないですかね…と思います」

「あつ、別に大我君は私の事好きに呼んでくれていいよ?ちなみにそろそろレイカちゃん私に敬語で話すのやめてみない?」

「善処します」

「社会人かな?」

「じゃあ、そういう方向で進めましょう。ところでなんですけど、爽さん。うちの組織って外から知られてるんですか?後名前あるんですか?」

「あー、そうだね。名前は無いし、外からは警察の延長線上だと思われてるんじゃないかな?で、どうしたの?」

「いや、災害救助で思い出したんですけど、私達って昔ラ…ここら辺の雷の騒動でお手伝いしたじゃないですか。だから、うちの組織の名前とかあればいい宣伝になるかな、と」

例えば、地域の掃除であっても、○○の団体が手伝いました!と、十分慈善活動の宣伝になる。だから、団体に名前があれば、その団体良いイメージはつきやすいし、メンバーの構成上特異魔法持ちでも良い人がいると伝わるだろう。

「…ふむ。大我君と響ちゃんだっけ?…:はいいと思う?」

「は、はい!あのとときは何かの団体がボランティアしてくれてると思ってたので名前があったら覚えやすいと思います!というかやいばさん居たの?気づかなかった私はなんでもつたないことを…」

「まあ、響と同じだな」

「なんか響ちゃんが下を向いちちゃったけど、二人とも概ね賛成っぽい。うん、了解。じゃあそれと同時に、近いうちに出来そうなボランティア」

ア探してくるよ。…そのかわり、やいば」

「はい？」

「覚えてるか知らないけどさ、めちやくちや初期に頼んだ仕事、わかる？」

初期に頼んだ仕事…。ああ、聡太君と一緒にめちやくちや遠出を繰り返して犯人を捕まえまくったやつかな？

「はい。それがなにか？」

「あれさ、まだ一人残ってるんだよね」

…えっ

「というわけで、休み中断して行ってきたね。ほんとに代わりに俺が行こうと思ってたんだけど、やること出来ちゃったから。後聡太、逃げない」

「ほぼ空気になれたのに…！」

幸いにも聡太君は着いてきてくれるみたいだし、まだいいか。

「まあ、沢山頼んだので、その対価がそれくらいならいいですけど…つて、ライカちゃんどうしたの？」

「やいばお姉ちゃんどっか行っちゃうの…？」

「ライカ。わがまま言っちゃだめ」

ウツ。

「爽さん。私には残らないと行けない理由が…！流石に二人を家に残すのは…！」

「あの、お母さんがやいばさんの頼み事なら出来る限り聞いわ！と言ってたので、聞いてみましょうか…？」

「お泊り!？」

ライカちゃんがキラキラしている目を向けてきたので響ちゃんに頼んでみると、ものの数秒で許可が出た。うせやろ。

「えっと、じゃあ、響ちゃんありがとう。お母さんには預ける日にきつちりとお礼言わせてもらうね」

「は、はいー！」

「うん。問題解決だね。じゃあやいば。明日まで詳細送るから、よろしくね」

「はい。分かりました。またよろしくね。聡太君」
「ん」

久しぶりの、お仕事である！

うわやっぱ！

「グワアアアアアアア！！！！」

目の前にはもの凄い苦しむ男がいる。何を隠そう、こいつは今回の事件の犯人であった。

そう、ここに至るまでの経緯は、数——秒遡れば終わりだ。

犯人らしき人がいた。見てたらすぐに犯行に及んだ。ある程度操れるようになった特異世界をその人のみを対象に当ててみた。苦しんだ。

そういうことである。

「……これ俺必要だった？」

「そりゃ……要らなかつたね。まあ普通の暴漢には勝てな……勝てるわ。がっはっはっ」

「きも」

えっ。

さて、もう少し詳しく話すと、今回の事件は今、俺がいる場所……。そう。温泉街にて起こった盗撮事件であった。

この事件の異質なところは、一時期、警察の警備や私服警官が混ざっていたのにも関わらず防げなかつた。それどころか、私服警官であつた婦警さんが盗撮された始末である。

まあそれで、俺か、姿形を好きに変えられる聡太君か、どっちが行くのか言い争っていたら、まだ清掃中の女湯の前で立ち並ぶ一人の男がいたのだ。

だけど、聡太君は特に違和感を覚えていなかった。うん。何回も繰り返した事例である。そうして、練習も兼ねて男に特異世界をぶつけてみたのだ。

しかし、まあ、ミレーさんのお陰で俺はマジで敵無しになつてしまった気がする。特異魔法持ちはこれだけで無力化出来て、特異魔法が無ければ一方的な魔法で叩きのめせる。あ、圧倒的な身体能力を持

つ人とか、精神力でこの苦しみを耐えた人とかは無理です。

「あ、でも聡太君。私あの人運べないしやつぱ必要だったよ」

「ただのパシリ扱いを必要とか言わないで貰える?」

そうして、騒然となった温泉街から引きずり出して、人通りの少なめな路地裏の電柱に縛り付けた。

「で、懲りた?」

「ア、ハイ。マジسنマセンデシタ」

「ごめんで済んだら警察いらんぞゴラア!!!!」

「

「ヒイヒイヒイ!!!」

「ちよつとそこ。辞めなさい」

気弱な犯人をからかう聡太君を止める。こうやって、時々ふざけたことをするのが聡太君の悪いところだ。しかも、下手すればトラウマになりそうな手法をする。

「ま、お金目的なんだろうけど。そのお金どうしてる? 最悪、いや、確実に全部押収した上で慰謝料とかの話になるんだけどさ」

「エエ。ソウナンデスカ! ヒドイ…」

何が酷いだ? こいつ。というか、こういうゴミがいるから全体のイメージ悪くなるんだよ。誰だよ。連帯責任とか言う思想考えたやつ。こういう時の事も考えろよ。

「つか、お前場所変えようとは思わなかったのか?」

「ダツテベツニドウトデモナルシ」

「ほう?」

おつと、まさかのここで特異魔法を教えてくれるのだろうか。いつもなら爽さんが聞き出していたので新鮮な気分だ。

「へー。君の特異魔法何なの?」

「エツト、ジヨウシキカイカクデス」

「えっ?」

「はっ?」

「ナニい!」

突然のチート宣言に固まってしまった。ん? いや?

「え、だれ？」

明らかに驚いた人が一人多かった気がする。

「よーよー!!悪いがそいつはこっちが貰っていくぜ!」

「やいば、下がっ…手遅れか」

何処か陽気な声が出たと思えば、一瞬グラサンを掛けたチャラ男が見えた。聡太君がすぐに前に出たけど、その時には既に消えていた。あの、陰キャ犯罪男とともに。

「あく。逃げられちゃった。じゃないよね!?!どうする!?!」

ヤバいなんてもんじゃねえの逃がした!!!むしろあいつなんであれで小物だったんだ?そのレベルだよ!ミレーさんでも勝てないでしよあれ!!!

「…ニヤー」

「可愛くなってもだめだよ?癒やされるけど」

小さな子猫になった聡太君を撫でながら、俺は全速力で連絡の手筈を整えていた。

『…聡太君がやらかしてヤバイやつ逃しました!!!ヤバイです!詳細は』

(?..?..?)??ヨシ

ヤベエにも程がある

あの後、爽さんに呼び出され拠点に着いた。でも、珍しく厳ついお爺さんに呼び止められた。

「あつ、やいば様」

「わつ。えつ：貴方から話しかけられることあるんですね…」

突然の事にびっくりであるが、無表情の割に真剣な雰囲気を含めてもかと言うぐらい醸し出しているお爺さんは一枚の手紙を渡してきた。

「爽様からで御座います。拠点に入る前に読むように、と」

この人こんな口調なんだあ…と思いつつ、それを開ける。

『やいば。内容は分かった。それなら、悪用の仕方を知らないその人：常識を変えられるらしい子、適当にのぞき君にするね！のぞき君に悪用の仕方を教えられる可能性がある。そうなれば、間違いなく俺達全員おかしくなる。最悪、やいばが犯罪者になるかも。一応、聡太には何が何でもやいばの指示を最優先にするようにしているから、信じておいて。後、やいばは絶対に特異魔法を解かないこと！もし俺等が襲ってきたら、聡太と一緒に逃げてくれ！』

これは、うん。マジか…。

「ねえ聡太君。私達何しに温泉に行ったんだっけ？」

「ん？確か休暇でしょ？はあ、やいばやらかしたんだから、さっさと逃げない？」

「オツケー分かった。拠点には行かないようにする。後、私何をしたいの？」

「え？女湯の前で立ち並ぶ人を捕まえたでしょ？あれやったらだめだよ。知らなかった？確実にもう出禁確定だし警察来るかもで辛いね」

流石に無理あるだろ。でもこれが通っちゃう。そう！これが現実！…ヤベエにも程があるだろ。

「…取り敢えず、私家に帰るから着いてきて」

「ほいほい」

正直な話、ライカちゃんやレイカちゃんもかなり危ない。でも、聡太君の認識がこれであるなら、その場面を見ていない二人は多分大丈夫だろう。

先に家に帰っておいて、帰ってくる二人を迎える準備をしよう。これから先の受難の事を考えたら、二人に美味しいものを振る舞えるのも出来なくなるかもしれないし——

『次のニュースです。先日〇〇温泉街で——』

…待て。

『——として、竹本やいば容疑者が——』

…。

『指名手配されました』

……。

……。

…そっかあ。

流石に異常だ。これは、警察関係者とメディアを弄られた感じだろうか。でも、こうなったらレイカちゃんやライカちゃんに合うわけにはいかない。

「聡太君。しばらくでいいから、二人を任せていいかな」

「いいよ。多分だけど、俺また何かの特異魔法をくらってるんだよね？それなら従うよ」

おっと、聡太君は気付いたみたいだ。ま、気付いたところで何が出るかと言われれば、出来ないと言えないのだが。

「じゃあ、色々よろしく」

そして、防寒具に身を包み、顔を隠して重い一步を踏み出す。

「…やいば」

聡太君の声色に真剣味が増した。

「薄々感じてると思うけど、レイカやライカ、隊長も副隊長も、たといやいばが何かしていたとしても手伝ってくれるよ。…たとえば、犯罪スレスレでもね？」

聡太君は俺の姿が変わって微笑む。こうしてみると、この体って目立つな。びっくりだ。

「…ふふ。ありがとう。じゃあ、頑張ってみるけど、そうなたらよろしくね。あ、もし聡太君が来るならレイカちゃんとレイカちゃんを拠点に預けてね」

「はいはい。いつてらっしやうい」

ゆるい声に背中を押されて、軽い二歩目を踏み出した。

あー、精神的疲労がヤバイ

俺を追いかける人は、総じて善良な一般人だ。なんせ俺は犯罪者。それを捕らえようとする相手が悪人なわけが無い。…たぶん。

今は、警察3人。誰も特異魔法を使わないかわりに、身体能力は高めだ。まあ、それもミレーさんから教わった魔法があれば関係ないのだけど。

「ぐああああ!!!」

「ぎいやあああ!!!」

「あゝれゝゝ!!!」

…うん。まあ、たとえ警察でも一般的な人には負けないよね。

指名手配されてから数日。無事捕らえられることはないのだが、やけに見つかる。…いや、原因はどう考えてもこの銀髪だろう。長すぎるせいで帽子でも隠せない。くっ!せめて髪の手入れだけでもわかっていけば…。

というか、この体の良くないところが出始めたって感じた。前世の方が力も体力もあった。後身長も。これのせいで、夜に職質を受けてしまう。

まじなんなの?確かに見た目は身長的にもJKだけどさあ!話しかけてくんなよ!逃げるかぶつ飛ばすかしないといけないんだよ!というわけで、寝不足疲労困憊な今である。

「あー」

目の前には廃墟ですと言わんばかりの建物。ねーむい。マジで。中へ入り、適当な部屋に入って鍵を閉める。

「え…」

布団とすら言えなさそうな布切れがあるのが見える。もう、あれでいいかな…。そもそもこの世界に来たときは路地裏で寝てたわけだし…。

「あの、ちよつと…」

「おやしゆみなさい…」

やつぱり、目を瞑れば意識はすぐに飛ぶ。ああ、起きたときに捕ま

りまっていますんように――

「え、どうしようこれ」

困惑に満ちた声は、本人を除いて誰も聞くことは無かった。

【レイカ視点】

やいばさんが居なくなつて、もう数日が経つた。

「…」

レイカは、ずっと落ち込んでいる。というか、家から出ていない。もう、何かをすることそのものが嫌になつたようだ。悲しいけれど、でも、やいばさんが戻れば直るだろうから、問題ではない。

「あの、聡太さん。辞めましょう」

「え？」

今問題なのは、レイカを元気づけるのか煽るのかわからないけど、やいばさんの姿が変わつた聡太さんがいることだ。本当にやめたほうがいいと思う。

「あの、レイカは精神が極限まで追い詰められると容赦なくなるんです。下手したらこの家が燃えます！」

はじめは分からなくても、気付いた瞬間暴走してもおかしくない。そして、それで家でも火がついたら私達はどうすればいいのか。なんならレイカはそれでも動かないまである。

「うーん。じゃあどうしようかな。やいばに任せられてるんだけど…」

「そこは私になんとかしますから！レイカは任せてください！」

言つてはなんだが、この光景は見覚えがあるのだ。あの、お母さんとお父さんに拒絶され始めた頃に似ている。違ふとすれば、残っている希望が希薄ではないこと。それなら、そこを突こう。

「そう？ならこれ。まだ朝ごはん食べてないよね？用意したから、食

べさせてあげて」

「はい」

そして、何故かメイド服の女の人になっている聡太さんが去つていくのを見届けて、ライカのもとにいった。聡太さんは、やいばさんに私達の事を任されたとのこと。その時点で、前の親とは違う。愛されているのだと、感じるのだ。

「ほら、ライカ」

「…いらない」

だんまりと、こつちを向くこともない。小さくお腹の音なるけど、それでも、食べる気はないらしい。

「やいばさんは絶対に帰ってきてくれるんだからさ、その時に元気でいたほうが喜んでくれるよ？」

「…」

「それに、もしやいばさんが助けを求めてきたら、それに応えてあげたいでしょ？」

「…あとで食べる」

なんでこんなにやいばさんはライカに懐かれているんだろう…。羨ましいなあ。…はあ。

「ねえライカ。ちよつと提案」

「どうしたの？」

本来なら、やいばさんは罪を犯したのだから、もう関わらないようにするべきなのかも。それか縁を切る？

でも、

「やいばさんのこと、助けに行かない？」

私達も罪を犯したんだから、お似合いつちやお似合いだよね。

俺やばくね？

コトコトと、微かな物音で意識が戻る。

ああいけない。今は何時だろうか。って、そもそもここは…ああ、
適当な空き家で寝てたんだっけ。あく、確かに体が痛いわ。バキバキ
しそう。

「んんん!!!」

グーツと体を伸ばせば、痛気持ちよさに包まれる。同時にバキバキ
と背中が鳴る。

涙で潤んだ視界で辺りを見回して、月のあかりとは明らかに違うオ
レンジ色のあかりが目についた。まあまあ、民家ならよくあるこ
と。

え？

「あ、あの〜」

「うええええええええええ!!?!」

「わああああああ!!!?!」

静かな夜空に、傍!迷惑な叫び声が響いた。

「すいませんでした!」

100%俺が悪い。向こうには落ち度なんて一つもないし、なんな
ら無理矢理にでも指名手配犯に手を貸したと思われるのだ。本当に
申し訳ない。まあそこまでは言わないだけで。

というのも、この子は俺のことを知らない可能性が高い。お世辞に
も綺麗とは言えないぼろぼろな服に、ライフラインは確実に通ってい
ないこの家を住処としていれば、テレビなんて見ないだろう。証拠
に、もう懸賞金までかけられている俺を襲っていない。

「いつ、いえ、ぼ、ぼくも驚いてごめんなさい!おっ、じゃなくて、逃

げているのに叫んじやって…。ひ、久し振りに人と話したので…」
たどたどしく、そして残酷に俺の期待をへし折って来た。

「あ、え、私のこと知ってるの…?」

「あ、は、はい。指名手配されていた人ですよねっ!」

…すうーっ。はあー。

「えつと、じゃあどうして私を捕まえようとしなかったの?」

「いやその…ぼく電話使えないし、別に捕まえても…」

あー、なるほど?確かにそれなら…この子の力じゃ俺の体は小さくとも流石に厳しいだろうし…というか、

「ねえ、なんで一人なの?」

出来るだけさっさと逃げたいけど、気になってしまったので尋ねてみる。流石に、レイカちゃんやライカちゃんのことあつて、見逃せないのだ。

「…ぼく、誰にも気づかれないんです」

「…はい?」

「その、おねえさんはどうしてぼくがみえるんですか?」

男の子は何も考えてなさそうな無邪気な笑顔で、何処か寂しさを感じさせながら首を傾げている。

「それは…ねえ、ちよつとだけ痛いかもしれないけど、試してみてもいいかな」

「へ?はい」

「じゃあ、ごめんね」

「あつ——」

特異世界で、男の子を包む。やっぱり、苦しんでいるみたいだ。なら、もう答えは出たようなものだ。

「うう…」

「ああ、ごめんね」

少しふらつくその子を支える。それで分かったけど、男の子は体もまともに洗えていないみたいだ。匂いが…って俺もそうか。なんなら俺のほうがやばいまである。

男の子が苦しんでいる間、優しく頭を撫でる。こうしたら和らぐつ

てライカちゃんも言っていたし、やらないよりはマシだろう。

「…あ、の、これは」

「こんな確かめ方でごめんね。でもね、君のそれは特異魔法だね」

「とくいまほう？」

おっと、分からないか。…まあ、この様子なら学校は行ってないだろうし、一人で生きているみたいだから仕方ないよね。

かくかくしかじかと教授の受け売りを話す。そして、男の子に説明している間に、一度体から魔力を抜いた。

ぱっと、男の子の姿も、頷く声も、温もりも消えた。

すぐに特異魔法を戻せば、全部の感覚が戻ってくる。男の子が不思議そうな顔をしていたので、不審に思われないように途切れた説明を続けた。

これは、キツイや。

ヤバい事情は知りたくなかった。

「あ、多分どつかいくんですよね！それでは…」

「あー待って」

最初は子供であつても黙らせるかして逃げようと思つてたけど、それがやり辛くなった。

なんせこの子は孤独だ。この子の特異魔法、これまでの犯罪に使われていた物とは格が違う。姿が見えないと言えば透明なのだが、だとしてもそれは音もしたし触ったときの感覚もあつた。それが、全くない。

それだけならまあヤバい特異魔法ですんでいたんだけど、それがコントロール出来ないのは非常に致命的だ。いわば、誰にも関われない生活を送っているということになる。

孤児院、生活保護というように、孤児でも、仕事も貯金もない人でも、生きていける方法はある。でもそれは他者の力を借りてであり、この子の場合それは自ら拒否している。あ、意志がない状態で拒むのは自らって言えるのかな？まあいいか。

「えっと、ねえ、どうやって生きてるの？」

なんとなく、予想はつく。

「ええっと…その…」

言葉を濁すけれど、気まずそうに逸らした視線の先で分かつてしまふ。

「うん。まあ、そうなるよね」

あるのは、お馴染みのコンビニの包装紙。まあ、万引きだろう。

「ご、ごめんなさい」

「私に謝っても仕方ないよ。…えっと。今日はご飯まだかな？」

「え、あ、はい」

「おっけおっけ。じゃあ待っててね。ご飯作るから」

「えっ」

万引き店への対応がどんなものになるかは分からないが、今はこの子の健康状態を少しでも良くしたい。子供であるが故に、菓子パンの

「はいはい舌嚙まないでね〜」

おつと魔法飛んできた。ん〜

「ちよつと魔法飛んできてますよ!?!」

「そうだね〜」

大量の魔法がポンポンと飛ばされる。意味ないんだけどなあ。

間違っても男の子に当たらないように抱き抱えて、魔法を体で受ける。

「ん〜!ん〜!」

「我慢してね」

逃走劇with男の子を終えた頃、ライフラインが無いことに気付いたのでガスコンロとフライパンを追加で買ったら、すっかりお腹も空いていて、ハンバーグは大変美味で御座いました。

あれ?男の子が疲労困憊?なんで?

はは。お互いにヤバいね!

食休み。

ウ〜ウ〜ウ〜ウ〜!!!

「うるっさいなあ。ごめんね〜眠いだろうに」

「え、あ、いや〜まあ、はい」

少年よ。なぜそんなに複雑そうな顔をしているのだ。なにもおかしな事はないだろう? たまたま偶然大量のパトカーがこの廃墟の近くにいるだけだ。いや〜、どんな凶悪犯がいるんだろうね〜。

「あ、そうだそうだ。君の名前は?」

「あ、ええつと…まさしです」

「ほうほう。漢字とか分かる?」

「えつと、將軍の将に、司書の司です」

「はいはい。なるほどね〜…ん?」

なんだろう。猛烈に違和感がある。いや、ただただ、俺は男の子に名前を聞いたただけだよな? そこになにもおかしな事はないよな?

「どうかしましたか?」

「あ〜、いや、何でも無い。所でさ、君が望むならで良いんだけど、来る?」

「来る?」

「あ〜、う〜んと、私、今冤罪…」

そういえば、これって俺がなんだかんだ罪を消せても、別の罪が浮上するのでは?…心当たりないから、いつか!!!

「まあ、冤罪を消しに行こうと思ってるんだけど、くる? 嫌なら別に良いけど、終わったら迎えに行くからなるべくここに居てほしいなって思う」

「あ、その…」

どっちにしろ、この子は俺以外と接することが出来ない。万引きを悪い事だと思っているのなら、俺とこの特異魔法をなんとかしたあとで謝りに行ける。補填は…まあ、俺の残高なら余裕で出せる。多分働き詰めになるけど。…あれ?

「つ、ついて行かせて下さいっ!」

「ねえ」

「は、はい?」

何か…何か引つかかっているんだ。なんだろう。この気持ち。これは……………っ!?

「ねえ!なんで漢字読めるの?」

「へ?」

おかしくないか?この子はどう見ても10歳にも満たないただの男の子(?!)!なぜ漢字が読める?

「ねえ、なんで?」

男の子の目が激しく泳ぎ始める。

「な、なんでつてそりやあ、漢字ドリルとかで」

「ここ、ペンも何もないよ?」

「え、いや、でも!」

「後さ、そもそもなんで文字読めるの?ひらがなだつて教えてもらったりしてないんでしょ?誰に教えてもらったの?」

「あ、え、えつと、それは…」

男の子の目が伏せられた。これはもしや…??

「あの「ちなみにさ!特異魔法を持つ人には前世があることがあるんだよ」…え?」

……。

静かに見つめ合う。

「マジ?」

「突然ギャルになったね君」

というわけで、まさかのこの子。前世持ちでした。なんと、最近気付いたらここで寝ていて、体も変わってとこのことらしい。

「でさ〜、マジやばくね〜」

嘘だろこいつ。変わり過ぎだろ。

「アタシ昔はギャルだったんだけどさあ、なんか身に覚えが無いことで恨まれちゃって、屋上から落とされたと思っただらこうよー！」

待て待て待て。んだそれは。え？なに？流石に俺のとは世界違うよね？どつかのゲームの世界とかだよ？流石に。

「ねえねえ、おねーさんはどうなの〜？」

「あ、あのね？一応言っておくと、この世界じゃなるべく前世を聞くのは辞めとくんだよ。まあ、私は…いや、俺は車にはねられて死ぬと思っただらここで目が覚めた。体もこうなつてな」

「ほほ。お兄さんだった系？」

「そうだね」

「なるほど。つかやば、今のおねーさん凄い違和感あった。アタシもこうつてこと？なら、んん！はい。これで行きます」

おおマジかこいつヤバいな。…というか、ふと思っただが今の俺ってどうなんだろう。体は間違いなく女の子なのだが、まだ女の子は皆知っている辛いらしいアレを経験していない。確か前にレイカちゃんとかライカちゃんに怪しまれたんだよね。

「えっと、はい。ならついていきたいです。もう一人は嫌なので」

おっと。変なことを考えていたな。

「後、ちよつと思っただけど、元女のシヨタのアタシと元男の美少女ってめちやくちや相性よくない？よくない？」

「いや、まあ誰も聞かないから良いけど、ほんと違和感すごいね。君。…じゃあ早速いこうか」

「え？」

さして、耳を澄ませば、

風の音。

響く罵声。

迫りくるエンジン音。

大きさを増すサイレン。

何枚か向こうの壁が崩壊する音。

「レッツゴー」

「ひぎやあああああああ」

やばいね

「あの、ところでどうするんですか？」

警察とさよならバイバイして、男の子…ナルと呼べと言われたので、ナルがそう尋ねてきた。偽名だろうか？まあ多分偽名だろうな。知らんけど。

「拠点というか、集まってる場所ならもう特定してるよ。後は襲い掛かって…あゝ」

そういえば、あの常識改革とか馬鹿げた…常識改変だっけ？まあどっちでもいいけど、どうしようか。俺の世界にぶち込み続ける…それなら、一段落とはなるのだが、俺の行動範囲が極端に制限される。しかし、俺から離すととなると、もうダメだ。特異魔法が発動してまた振り出した。被害は出ているので、なんとかしないとならない。

まあ、特異魔法を無力化すれば、一時的に戻るから、その状態で相談しよう。

「え？ねえ、冤罪を無くすんだよね？なんで実力行使なの？」

あ、言ってなかったか。というかキャラ崩れてるぞ。まあ別に誰も見ていないからいいのだが、見た目の違和感がすごい。

「ああ、それは——」

ざっくりと掻い摘んで話す。ピンときていなさそうだけど、実際の変化を見れば納得するだろう。

「はい……」

「えつと、ここですか…？」

辿り着いたのは、めちやくちや高そうなホテル。きつと、最上階から見える景色はさぞ素晴らしいことだろう。

「よし。じゃあ行こうか」

「えつ、大丈夫なんですか…？」

まあ、入り口には堂々とガードマンがいるから当然だろう。まあ襲い掛かって来られればぶっ飛ばすのだが、先に確かめたいことがあった。

「ナル。今から侵入しようと思うんだけど、ちよつと実験してみようか。手を出して」

そうして、差し出された手を握る。

「今から入り口に向かうけど、暫く私の特異魔法を解除するね。そうしたら君の声は一切聞こえなくなるし、感触も分からなくなる。一応緩く握るけど、力を込め過ぎちゃったらごめんね」

「えつと、どうして?」

まあ、意味不明に思われるだろうが、知りたいことがあるのだ。

「ナルが着ている服も見えないから、ナルと触れていたらもしかしたら私も隠れられるんじゃないかなってね」

納得した顔を見て、俺は体から魔力を抜く。

途端、温もりは消え、さつきまで見えていたナルは存在すら危うくなる。夢か幻覚だったのでは、と思わずにはいられない。

まあ、そのくらい信じられなければ、魔法に突っ込むなんて馬鹿げた事は出来ない。きつとついてきてくれるだろう。

そうして、ホテルの前に立つ。ガードマン達の視線は固定されていて、こちらに向いている様子はない。しかし、この扉は自動ドア。開くとバレてしまうかも…ええ?

ドアが、開かない…?

えつ嘘マジ?えーっ!えー?どうしよ。

…:そういえば、このガードマン。ちよつと扉に近いよね。えつと、確かナルと繋いでいたのは左手。なら…!

「ふ、ふんぬううう!!」

おつつも!!!!

魔力を体に通せないから、非常にキツイ。というか動かな過ぎだろ!体幹どうなってるんだよ!君鍛えてるね!っ!かこれでよくバレねえな!

格闘すること2分。少し強めの風が吹いた。

「んっ」

ガードマンが体制を崩し、右肩がドアの赤外線に触れた。

ウーッ

「開いた!!!」

あやうく手を離しそうになりながらも、ゆっくりと入っていった。

やってることヤバい？

エレベーターに乗ってから、魔力を身体に通し、ナルを見た。

「上手く行ったねえ」

「びっくりしました。あんなにも必死に押ししているのに動かないなんて…」

「やかましい」

余計なことを言わなくてもよろしい。つと、エレベーターが動き出したな。あー、そう言えばエレベーターって監視カメラついてたよね。んで、階待っている間見れたよね。

ウィーン

「誰——」

「静かにしようね」

首元にスタンガンを押し当てて意識を奪う。…ん？これ、気絶はやり過ぎじゃね？…やり過ぎだわ。こいつから情報いくらでも吐かせられたかもしれないのに。後純粹に一般客の可能性がある。

「うわ、ヤバ…」

「あ、ごめんね？殺さないようにするなら丁度いいんだよ」

ナルにめっちゃ引かれてる。まあそうよね。まともの人に危害を加えたのが初めてだからね。そりゃビビるわ。

意識のない男性をそこらへんに投げ捨てて、エレベーターから出て、今度は非常階段を使用する。ここなら監視カメラは…あるかもしれないけど発覚は遅くなるだろう。

「…え、あの、エレベーターの階数ボタン見ました？」

「うん。行くのは15階だよ」

「え、階段で…？」

「行けるでしょ？」

「マジムリなんだけど。ん」

ナルは手を突き出してくる。まあ、子供なら当然だろうし、なんなら昔の私なら音を上げていただろう。色々ありすぎて、筋力はそこまですぐで体力はついたのだ。…聡太君には程遠く及ばないけどね。

「はいはい。ヨチヨチくいい子ですよ」

「その姿なら良いけど男って考えるとキモいわ」

え、この姿ならいいの？

上に来ました。はい。

「ひいひいひいひい!!!許してくれえ!」

「なら黙ろっか」ニコッ

たまたま偶然出会った警備員を組み伏せて、水を垂らしながらスタンガンをパチパチする。さぞ痛いだろうねえくと脅していくスタイルだ。いや、ほんとごめんね？君はただ、仕事をしているだけだろうに、こんなことしちゃってね？まあ仕方ないよね。聡太君とか爽さんいないし。

「あの方の部屋は——」

いや、親切に教えてくれるなあ。

「えっと、なんか怒ってますか?」

「別に?最近レイカちゃんとライカちゃんに会えなくて泣きそうなだけだよ」

「誰?」

「娘」

「娘!?!」

「中学生なんだけど、ちやんとご飯食べてるかな」

「中学生!?!」

ナルの目に同情が宿ったのを見て、ナルの勘違いに気づき訂正する。

「あ、養子ね、養子」

扱いとしてはあってるよね?これ。

「あ、そういう…」

良かった。勘違いは正されたみたいだ。

「じゃあ行くうか」

「はい」

というわけで、こちらがその部屋となっております。開けるにはカードが必要そうですね。鍵がかかっているとしたら開けようとするバレてしまいますね。

…。

流石に、力任せは対策されているよね？

ミレーさんに教わったとはいえ、まだ一般人でも届きうる範囲の身体強化しか使えない。高級ホテルなのにその対策がされていない訳がない。

やってみようかな…。

「ダメですよ」

「まあだよね」

なら、ちと工夫しよう。恐らくだけど、あのぞき君は誰かにうまく言われてやっていると思う。なんせあのレベルの力を盗撮に使っていたレベルである。逆に凄くね？

まあつまり、別の人間がいるはずだ。そいつに開けてもらおう。

こんこんとドアをノックして、即座に魔力を抜いた。

「ああ〜い。ルームサービスかあ？ごころ…」

おっじやまっしま〜す!!!

身体を部屋の中にねじ込んで、侵入を果たす。中はやはり高級ホテル。見たこともないほど豪華だ。そして、あの男、のぞき君が、ベッドで誰かとゴソゴソしている。

うっわあ…。

マジでドン引きである。恐らくだが、ナルにはちよいと厳しいんじゃないだろうか。

「ん？誰だテメエー」

「おっとう？」

身体に魔力を通してみれば、手に感触はなく、振り返ればナルが顔

を覆っていやいやとしている。あら、初心ね、この子。

「いや、誰だって言わなくてもわかるでしょ。有名人なんだよ？私」

「っ！ギンパツオンナ！」

のぞき君が叫ぶ。

「名前くらいは覚えようね？」

後ボソボソ言うな。聞こえづらいんだよ。

「ヤレー！」

その言葉とともに前に出るのは、さつき扉の所に出てきた男。見れば、いつぞやの、のぞき君を連れて行つたやつとは違う。まあ取り敢えず様子見に。特異世界を拡げていく。

∴反応なし。オーケー。ならこれそういうことだよな？

全力で右に身体を逸らす。チツ、と皮膚が裂けた音がした。うむ。聡太君と同等かそれ以上∴あれ？勝てなくね？

ナルのことは気にする必要はない。どうせ居場所はバレないのだから。だから、避けることに専念する。

「いつや厳しい！」

速すぎる！威力も馬鹿げていて掠つたら皮膚が裂けるレベルだ。流石に身体強化ありだろうから特異世界を拡げる？いや、もう隙がないし避けること以外に集中出来ない！

∴癩だけど、逃げよう。

相手のパンチを左腕で受ける。激痛はこの前の隊長のお陰で慣れているから、のけ反る勢いのままナルに触れた。

「ごめんねナル！」

傷付けないよう出来るだけ優しく持って横に跳ぶ。追撃を外した男はキョロキョロと辺りを見渡している。

そのうちに、俺は逃げた。

あく、ヤバい恥ずかしい

もう逃げに逃げてホテルから出た所で、路地裏に入り込んだ。魔力を抜き、ナルを視界に入れる。

「…ごめん」

「許しません」

多分どこかでぶつけたのだろう。頭にぶつくとたんこぶが出来ていた。

「ちよつと待ってね。はい」

微弱ながらも、回復魔法を行使する。本当に微弱だから、ちよつと赤みが引いただけだった。

「うわ…。魔法ってなんでもありませんね」

「そうなんだよね」

それでも実感があつたようで、驚愕を表していた。いや、俺としては一番君がなんでもありな気がするんだけどね？

「…はあ」

負けた。やっぱりこの世界おかしい。大体勝てるでしょとか威張っている俺が馬鹿だった。そもそもこんな世界で力を求めた奴は大体外だと分かっていないとダメだった。普通に考えれば、特異魔法持ちの聡太君よりも、そういうのがない人のほうが極めやすいんだから強いに決まっているだろという話だ。

「…頼ろうかな」

あんなこと言つた手前、恥ずかしいけど、もうそれしかないかもしれない。まあきつと手伝ってくれるだろうけど、その為には、充電が切れてる携帯を充電しないと。でも、充電器は無ければコンビニでも買えない。この見た目。好きだけどバレやすすぎて不便だ。

かと言つて歩いてまたあそこに行くのも、である。出来ることなら、あののぞき君がどこに逃げるのかまでしつかりと確認しながら、協力を頼みたいところだ。

「——つーわけでどうしよう」

「強盗すれば？」

ナルはサラツとそんなことを言っただけだ。

「やるわけ無いだろ」

「なんで？」

「冤罪を無くすためののに罪を重ねてどうする」

「今更では？ 後警察に勝てるのならもう司法とかガン無視でいいじゃん」

「…たしかに？ いや、それなら二人に強盗したと出るのか。うん。却下だ。」

「…お金っていくらあるの？」

いきなり何を言い出すんだこの子。いやまあ言いたいことは分かる。金でゴリ押せとかだろう？ そりゃ出来るよ。一応。でもね、今それは使えないんだよ。

「なんで？」

「口座抑えられた」

「草」

お陰で手元には数十万。いやまあ予測してたからしばらく暮らせるぐらいにはお金をおろしていたんだけど。

「はあく。じゃあ買ってきてあげようよ」

ん。と手を付き出すナル。手のひらにお金を載せながら、問う。

「お、いいの？ でもどうやって？」

ナルは人には見えない為、買い物なんて出来ないはずなんだけど。

「いや、万引き（お金を残すバージョン）でいく」

ほう。どっちにしろ犯罪な気がするのだが、まあいいだろう。俺が強盗するよりはマシだろうし。

「どころでき、もうごっこはいいの？」

「他の人いないからやる意味ないって」

それってボロが出るやつなんだよなあ…。

十分後。無事手元には充電器が手に入った。

自動ドアが開くのを待っていた為、こんなにも時間が掛かったそう
だ。

そうして、何件か来ていた二人レイカとライカの置いておいて、聡太君に電話を
かける。

同時に、俺の後ろで音が流れた。それが切れると同時に、聡太君の
声：いや実際はいくらでも変わるからアレだけど、声がした。

「私、メビーさん」

「パチもんじやねえか!!」

『パチもんじやねえか!!』

後ろで俺の声がした。

「よっ、やいば元気?」

「あー。うん。って!」

「やいばお姉ちゃん!!!」

ひしつとライカちゃん!が抱きついて来る。突然のこと過ぎて頭が
真っ白になり、姿勢を崩し、倒れそうになったので背中の向きを変え
た。

「げうっ!」

「ナル!」

柔らかい感触と苦悶の喘ぎが、ライカちゃんの鳴き声に掻き消され
た。

痕跡ヤバイ

「やいばさんのこと、助けに行かない?」

「行く!」

うん。即答。大きな声を出したもんだから、聡太さんもこっちに来た。

「ん?どうした?」

聡太さんにこのことを話すかどうか:いや、私達がこの人に隠し事を出来るとは思えない。主にライカが。

「あの、聡太さん。やいばさんを助けに行きたいんです」

というわけで、大胆に協力してもらおう。

「うん。オツケー」

特に悩む素振りもなく、許可してくれた。まあしてくれなくても無理矢理行こうと思っていたし、なんなら聡太さんはやいばさんの頼みでここにいるわけだから、やいばさんの為なら動いてくれるだろうとはちよつと考えてた。

「ちなみに、やいばの居場所に心当たりはあるの?」

当然の質問だ。でも大丈夫。やいばさんは指名手配がされているから、目撃情報も多数。そして何故かニュースで大々的に紹介されている。:なんでこの人は銀色の髪を隠さないんだろう。

「これ、ニュースでのやいばさんの目撃情報があった場所です。あとこれは、この前響に教えてもらったインターネットの情報です。どっちも地図に纏めてみました」

地図には、時間ともに簡単に書いた状況を記してある。驚くべきは、道中で発見が余りにも多い。そして、大体警察とドンパチしてから逃げている。

「へー。凄いね、よく出来てる。よしよし。じゃあいつ向かう?」

「今すぐ!」

「は、辞めておいて、ちゃんと準備をして明日行きましょう」

「えー！どうしてー！」

「やいば。ご飯食べよっか」

くう、と小さくお腹の音が鳴った。

次の日の朝。昨日の目撃情報を更新した。…なんでこの人は毎日のように最新情報が出ているんだろうか。

「こことここに目撃情報があつて、進んでいる向きのこつちじゃないでしょうか」

「お、そうだね。行ってみようか」

そこそこ遠いけど、電車を使えばそこまで時間はかからない。

「じゃあ速く行こう！」

元氣一杯なライカを先頭にして、やいばさん探しが始まった。

「悪魔には適切な管理が必要です！自由にさせずに、管理を徹底しないといとー！」

駅にて、声たかだかに叫ぶ団体が目についた。彼等に向けられるのは、熱心な眼差しと冷たい目。当事者である私達は、なんとも言いえない表情しか作れない。

「今、まさにそうでしょう！凶悪犯の竹本やいばは、重罪を起こしたうえ、今も被害を出しながら逃走しています！あれもまた、国が管理を怠った結末です！」

それを言われれば反論し難いけど、それでも、私達の豊かな生活を主に支えているのは特異魔法を持つ人たちなのに。それに、やいばさんは全世界の人を救った張本人だ。

とまあ、彼等にそれを説いたって仕方ない。無視しないと。

「ライカ。ダメだよ」

「う…。ごめんなさい」

あつぶない。完全に見てなかった。聡太さんがいなければ早速ド

ンパチ起こってた。いや、バレるかは知らないけど、人殺しはまずい。電車止まっちゃう。

「じゃあ行きましようか」

切符を買って乗る。今は平日だから不審に思われるかもだけど、聡太さんがいてくれ…

「なんで響の見た目なんですか？」

「違和感ないかなって」

トイレで変わってもらい、女の人になってもらった。女子トイレから男の人を出すわけには行かないからね。仕方ない。

そして、電車に乗っていると、聡太さんが一つの席をじっと見ている。

「どうかしましたか？」

「…いや、今はいいや」

聡太さんの見ていた席には、サングラスを掛けて南国風の服を着た人がいた。

ヤバい人達だなあ

最後の目撃情報があった場所に着くと、他にも何人か探しているような人もいた。流石に警察はもう見たあとらしく、一人残されているだけだった。整理用に…なんで？

「あの、なんでこんな人が…？」

聡太さんが恐る恐る尋ねていた。そんな人柄じゃないのに。もしかして姿形で態度を変えているのだろうか。

「あー、そうですね。…ここだけの話だと、犯人が特異魔法持ちということもあって反特異魔法派の団体がこぞっているらしいです」

ひそひそと、そこにいた婦警さんは周りを伺いながらそう教えてくれた。親切だ。でも、そんなことを勝手に教えても良かったのだろうか。

そんなことを考えていると、苦笑しながら、

「私はあの人に助けられたこともあるから、罪を償う以上に扱われるのはちよつと気に入らないのよ。特にああいう団体にはね」

嫌々と目線で示すのは、必死に現場検証をしている人達。やけに協力的に調査している。そういうことか。

「まあ、貴方達がどうかは知らないけど、多分そんなに悪い人ではないわよ。あの子」

「わかりますー！」

声をあげるライカに目を見張り、苦笑すると婦警さんは見張りに戻った。

不思議と、誇らしさが胸を覆った。

そうして、目撃情報をもとに周辺を辿っていると、聡太さんにちよちよいと止められた。

「ちよつとき、手伝ってほしいんだけど」

聡太さんがそういうのは珍しい。なんですかと聞くと、友達みたい

に話しながらついてきてほしいと。そういった聡太さんは、気づけば響みたいな姿になっていた。

特に話題といった話題が無いので、少し前のゲームの話をする。それと、サンタさんの話。サンタさんの話はしたことが無かったので、ライカは興味深く、楽しそうに相槌をうっていた。聡太さんも、それにならってか、適当に相槌をうっている。

ちらりと、聡太さんが向かう方向を見た。また、さっき電車で見た人南国風の服を着た人だった。

その人が、きれいなホテルの前で立ち止まると、黒いスーツを身に纏う人に会釈されていた。大きな肩幅に黒いサングラスをつけていて、少し怖い。

そうして、中に入ろうとした瞬間。

「ちよつと待とうか」

ガシツと、聡太さんが姿を変えてその人の肩を掴む。

「お話、聞かせてもらっても？」

につこりと、警察官の姿で笑っていた。

「おおー？ 僕なんかしましたかね？」

余裕綽々そうに、その男の人は笑っている。

「というか、警察手帳見せてもらえますか？」

まるで、持っていないだろうと言わんばかり。なのに、当然のように聡太さんは取り出した。私もびっくりだけど、向こうもびっくりしている。

「いやー。呼び止めたのは訳があつてね。ねえ君。少し前に温泉街で男の人を連れて行かなかつたかな」

「お！アレですか。いやーすごいでしょ。助けてやったんすよあの凶悪犯から!!! あんなに警察官退けてる人から逃したんすごいでしょ！」

楽しそうに、心の底から誇らしそうに男は言った。そうだねと、頷いてから聡太さんは言葉が続ける。

「あの男の人ね。別の余罪があるんだ。だから場所を知らないかな：

いや、知っているよね君。知らない訳がない」

そう言いながら、聡太さんは姿を変えた。男の人はそれを見て、表情を蒼白とさせた。

「っ?!効いてないか!!おい!こいつを捕まえろ!」

即座に行動し、ボディガードは捕らえようとしたその手を起点に、聡太さんに投げ出され、彼等は空を舞った。予想は出来ないと思うけど、男の人は分かっていたみたいで、銃を取り出していた。

銃口的に、多分撃たない。それよりも確率が高いのは多分近くの私達^{一般人}。人質か何かだろう。

まあ何にせよ、ライカに危険性が及ぶなら、それは排除すべきなので、

「えい」

「がぼあ!」

お口の中にたくさんのお水を入れてあげた。やり過ぎると器官に入って死んじやうから気を付けないと…。

「ゲエホッ!うっ!おっ!」

えづきながら、男は消えた。

逃しちやったかな…?とっていると、聡太さんはナイスと親指を突き立てていた。

いわく、あの男がいると、元凶を見つけても堂々巡りだから退かしたかったらしい。そして、入ろうとしていたホテル。ここに何かがあるはずだと入口を見ていると、

「えっ!」

「え」

「おっ?」

一秒にも満たない時間、姿を表したやいばさん。片手には黒い何かを抱えていた。

皆で領き合って、その周辺を探しまくった。

そうして、六十回目くらいの電話で、やっと発見した。

ヤバい。えっと、ごめんなさい

「うええええん!!!」

「ごめんね、ごめんね、よしよし」

優しく優しく背中を撫でる。いやはやしかし、こんなにも心配されるとは思わなかった。ちよつと嬉しかったりする。

レイカちゃんはどうかのか気になりはするが、取り敢えず今はライカちゃんだ。

「ちよつ 「ええええええん!!!」

「もうどこにも行かないからね。よしよし」

ライカちゃんの泣き声が何かを掻き消したような気がしたけど、気のせいだろう。

「ねえーいいかげ 「ほんと? ヒツク、もう行かない?」

「うん。私が悪かったよ。ごめんね」

「ヒツク。えへへ、お姉ちゃん」

ぎゅーつと腕に力を入れてきたので、俺もぎゅーつと抱き寄せる。顔をスリスリと擦りつけていたので、俺もその真似をする。こそばゆそうに、嬉しそうに微笑んだ。

優しくハンカチで涙を拭おうとして…暫くまともに洗濯して無かったハンカチを見て固まる。

「ライカ、こつち見て」

「ん?…んー!」

その隙に、レイカちゃんにぐいぐいと涙を拭われるライカちゃんがいた。負けた気分!

「ふぎけんじゃないわよ!!!」

「わっ」

びつくりしてついつい声をあげてしまった。別に良いのだけれど、3人が不思議そうに首を傾げていた。

「えっと、透明になるものなんだろうけど、何なの?」

「物じゃねえ!!!」

「物じゃないよ。えっとね、ナルっていう男の子んだけど、ちよつと

特殊な境遇の子でね…」

ざっくりと説明して、少し頭を撫でる。こうすると、俺の手が触れたところだけ見えるようになる。しかし、こうして見ると髪しか見えないから怖いな。

それにしても、ナルの特異魔法だと俺が能力を使っていない状態なら指先を握るだけで俺も全身が効果を受けるのに、俺の特異魔法の場合は触れた場所のみで、全体には行き渡らない。なんでだろう？

「へー。ちよつとナル？だっけ。動かないでもらえるかな。んで、やいばそのままできて」

聡太君が、頭を同じように撫でようとしている。ゆっくりと、その頭に手は届き、そして、

「…あーなるほど。感覚が無いね。通り抜けはない。んでここまで近付いても見えないし、ちなみになんか喋ってる？」

「え、なにになにこの人何なのめっちゃ美人ってやいばと瓜二つじゃないにこれどうなってるの？」

「えつと、私と聡太君が瓜二つなことにあたふたしてる」

「あつ、了解。で音は聞こえないと」

グルツと姿が変わり、誰かは知らないけどよく知ってる男の子が出て来た。いつもの聡太君だ。本体かは知らないけどね。

「ビギャツ！」

「めっちゃビビってる」

「言わなくていい!!」

そうだよな。普通聡太君の変身を間近で見たら驚くよな。配慮が足りてなかったわ。しかし、あのホテルでも、万引きのことでも、やはり感性がかなり普通だ。なんか落ち着く。

「え、えつと？どういうこと？」

「そこにいるんですか？その…ナルという人が」

「うん。そうだよ。二人よりも年下だね。顔は…ちよつと説明の仕方がわからないしなんと書いても失礼な気がするから黙るね」

「はっ..」

「ごめん。そういう意図はない」

実際、人の顔を文字で説明ってどうするんだ？かわいい、格好いい。イケメン、美人ぐらいしかレパートリーが…。

「オツケー。じゃあはい」

聡太君は、スマートフォンを取り出して、ナルに渡した。ふっと消えたことを確認すると、

「ちよつと電話で喋ってみて」

「は、はい」

『は、はい』

おおー。携帯から聞こえた。聡太君も、ライカちゃんとレイカちゃんにも聞こえたようだ。

「お、行けた。じゃあテレビ通話にもしてみて」

『はいっ！』

ピツと通話が繋がれると、パツと顔が映った。もちろん、みんなにも見える。

『みつ、見えますか？』

「えつと、えつと、はい」

「うん。見えますね」

「見えたね」

『や、やったああああ!!!』

心の底から嬉しそう[!]にしている。後ライカちゃんは早速人見知りが発動した。しかしどうやら、姿が直接見えないお陰かまだマシだった。

『これで！この人以外とも話せるっ!!!』

うんうん。良かったね。

「あ、そうだ。ナル。これで万引きは余裕でバレてて見逃されていたことがわかったね」

『あっ』

「えっ?」

「はい?」

「ほお?」

「いやあ、良かったね。これなら謝りに行くときにスムーズにいきそ

うだ」

シーンと、静寂がこの場を支配した。

「どうしたの?」

『バカあ!!』

「ちよ」

ポカポカと涙声で殴られ、俺は取り敢えずそれを身で受ける。痛くは無かったけど、なんで…?」

「犯罪者だって思われたら、引かれるかもしれないじゃん!!友達できそうだったのに!!」

「本当に申し訳ありませんでした」

ヤバいね…どうしようか

『う、うう』

「だ、大丈夫だから。(私達より)そんなに悪い事じゃないし、反省しているなら気にしないよ」

『ほ、ほんと?』

「うん。ね、ライカ」

「あつ、あ…うん…」

『レイカちゃん、ライカちゃん…!!』

「よろしくね。ナルくん!」

「よ、よろしく…」

『よろしく!』

うん。微笑ましい。これで3人の仲が気まづくなればマジでどうすべきか分からなくなっていた。

「で、どうする? 昼ぐらいにグラサン男を倒したけど」

「あー。私はのぞき君のところまで行ったんだけど、なんか強い男の人がいて負けて帰ってきた。うん。というわけで手伝って下さい」

ちよつと恥ずかしいけれど、素直に助けを求める。聡太君は笑いながら頷いて、

「まあ、相手はなんか組織っぽいからね。流石に仕方ないよ。で、ちよつと気になったんだけど、今から急げば間に合うかな?」

「…どうだろ。もうホテルの入口すら確認してないし、あのグラサン男がいれば関係ないもんね。…はあ。また探すのかな」

今回のホテルも、結構見つけるのに時間が掛かった。これをまた繰り返す。…それに、レイカちゃんとライカちゃんが来てくれたけど、それだと勉強が遅れちゃうよね。なら、なんでもいいから早くしたい。

「聡太君。もうなりふり構わず爽さんも使えないかな? 私じゃダメだろうけど、聡太君ならいけるんじゃない?」

「お、いいねえ。ちよつと待って。携帯をつと、やいばの使っている?」

楽しそうに話す3人に配慮したのか、俺に携帯を求めてきた。

「いやいや、それだと意味なくない？ 私関連って思われちゃうじゃん」
「それは今更でしょ。前も言ったけど、俺は隊長、副隊長よりやいばを優先しろって言われてるの。なんとやおうと変わらないよ」

（うーん。それでいいのかなく？）

そう思いつつ、俺は携帯を手渡す。すぐに電話をかけて、数分。

「よしいけた」

「なんでだよ」

そこ手伝ってくれるならあの時の置き手紙いらなくない？ 襲われるかもって、別れて行動する必要なくない？

「あの時はもっと強制力強いかなって思ってたらしいよ。でもなんか思ったよりやいばが悪いとは思えないし、隊長も副隊長も全然手伝えるって」

「わー」

嬉しいけど、あの二人いたら一瞬で終わるのでは？

「で、準備は進めてたから本拠地的な場所には今からでも凸れるって。あなのぞき君がいるとは限らないけど、どうする？」

「期待値を軽々しく超えるねほんと」

まあ早く終わるなら、是非そうさせてもらおう。

「じゃあ3人とも、いくよ」

「うん！」

「はい」

「もうちよい話したかったな」

電話を切って不満を言うナル。なんで俺にだけ聞こえるように言ったんですかねえ。

…まあ当然か。今は少年だけど、ナルは生前女の子で、しかも素の状態がギャル語だけに若いうち、それも沢山の友達と話す時期にこっちに来たのだ。多分年代よりは下だろうけど、同性の友達と喋れるのは心から求めていたはず。

「ごめんねナル。なるべくすぐに終わらせるからさ」

「…ねえ、この子たちに触れておいたほうがいい？」

「ん、どっちでもいいかな。もし相手がめっちゃやくちや強かったら、お願い。でも、その子達はとっても強いよ。私が言うのもなんだけど、心配ご無用!」

「あ、そうなんだ。…こんな可愛いのに、見た目によらないんだね」

「まあ、そうかもね」

「あ、そうそう。ねえ聡太君」

「ん?なに?」

少し、引つかかっていた事を聞く。

「あの、のぞき君が入っている団体って、どういう団体なの?」

聡太君は組織っぽいということしか分かっていなかったみたいだけど、爽さんは本拠地を特定している。であるなら、なんという組織なのかもわかっているのだろう。

「あ、それね。えっとね、退魔師って言う名前だね」

「退魔師?」

「そうそう。なんとびっくり、今テレビでよく言われている、悪魔とかいう差別用語を作った団体。つまり――」

今回の敵。特異魔法排斥運動にもふかしく関わっているみたいだね」

この人達がいれば、ヤバくてもヤバいと思えないなあ

「あ、どうも」

「おー、久し振り〜」

「ども」

集合場所に向かうと、爽さんと隊長がいつも通りの様子でいた。いやほんと、俺の長時間による調査、もつと短縮出来たんだね。RTAなら再走やるなあ。

「えつと、二人だけですか？」

「いや、別のところで教官と教授が皆を纏めているよ。今回は久し振りに全員出動だね」

おつと、そこまで多くとは珍しいな。あるとは聞いていたけれど、俺が居る時には初めてなんじゃないだろうか。

「いやね〜、今回は俺ら全員に影響が出る事柄だからさ、非戦闘員含めて皆気が立ってるんだよ。万が一にでも負けたくないから皆で来たんだよね。後：ちよつと気がかりが一つ」

「気がかり？何かあったんですか？」

「んー。例えばさ、今回、俺達には見えないその君みたいに」

突然指を刺されたナルが驚いている。正直、俺もびつくりだ。

「見えなくても、心は普通に読めるし、そこから位置も割り出せたりするんだよね。でも、今回、確実にいるはずのリーダー格の男がね、心が読めないんだ」

「え？単純にとても離れているとかじゃないんですか？」

「うん。その団体の所属している人がリーダーと話してるのは分かるんだよ。確実に。電波も切ってみたから、電話とかでもない。それなのに読めないのは…」

私を見て

「やいばみみたいな感じなんだよね」

「——っ！」

俺の能力を使われれば不味いことに——
って、

「いや、もし私と同じでも特に影響なくないですか？」

「アハハ。そうだね。そのとおりだ」

ここにいるうちの3人が特異魔法を戦闘に使わなくても強いです。やっぱ爽さんも隊長も聡太君も化け物だよ。

「でも万が一ってのがあるからね。最悪人海戦術もできるように人は揃えたし、警察さんも出動だよ。ちゃんとやいばからははず下から、安心して」

おお。俺犯罪者だった。見つければ終わりじゃん。

「ま、流石に大勢の中にいれば紛れるよね」

「どう考えても目立つよ」

ええ？

「というわけでここの地下だね」

爽さんに連れて行かれたのは、何かいますよ感満載の廃工場。テンションあがるなく。

「ちよちよちよ怖いってー!」

「ナル。大丈夫だから」

「ヒイ!?!」

「大丈夫だよ。ライカ」

幼い子達はきついらしいね。これ。…でもなあ。俺は聡太君とはこんな場面いくらでもあったからなあ。なんで悪い人達はこういう場所を好むんだらうね。…誰も近寄らないからだらうね。(自己解決)

「で、ここだとして、どういう手順なの？」

「二応先導隊として俺達が向かうよ。で、これで合図を送れるから、行けそうならGO! って感じだね。さあ。準備は…待って、ナルちゃん? だよ。君も行くの?」

さつきからずっと無理無理無理と叫んでいるからだらう。相当な怖がりように見えるはずだ。なんなら俺の足に捕まっている。

「あ、はいはいはい行きますう！」

「…まあ、幽霊でもナルの事は見えないよ。大丈夫」

「…うん。やいばが守ってあげるんだよ」

それについては安心してほしい。流石にちゃんと守る。

「オツケー。じゃあ行こうか。別にバレてもいいけど、なるべく静かにね」

コクリと、全員が頷いた。

廃工場の地下では、一人の男が笑っていた。男の目の前には、無数のモニターが、そこには、何よりも求めていた、銀色の少女が映っている。

「やっとだ。やっと出会えた」

足でくだらないことに力を使った馬鹿を憎々しげに踏みつけながら、季節外れの服を纏い、サングラスをつけた男へ言った。

「丁重におもてなししろよ？」

「おーおーおー！ひさっしぶりに本業やわ！」

嬉しそうに、執事服を身に纏った。

ある意味ヤバい敵地

廃工場へ侵入して、まずは見渡せる一階を探索する。誰かはいると思っていたが、案外誰もいなかった。

「静かですね〜」

「うん。逃げられ…てはないみたいだね」

爽さんの目が虚ろにぼんやりと下を見て、頷きそう言った。壁越しでいけるのキモいなあ。

「…やいばってわかりやすいよね」

おっと、顔に出てたみたいだ。

「まあまあ、そんなことより、その感じだと地下ですか？」

「そうだね。それを探そうか」

「その必要はありません」

突如響いたその声に、全員が見を固くした。声がした方向には、執事服を纏った男が一人。丁寧な所作で頭を下げている。

「む…ん????」

爽さんが困惑している。どういうことだろうか。

「本日、皆様の案内を務めさせて頂く、三藤と申します」

「へ？」

「は？」

「え？」

皆、その言葉に首を傾げる。そもそもなんで廃工場で執事なんだよ。じゃないよ。敵地で案内する執事って何だよ。

「爽」

「…いや、マジらしい」

そりや爽さんも困惑するよ。本心からそう思ってるわけでしょう？意味わからん。

「あつー…もしかして冥土へご案内ってこと？」

ナルが俺と爽さん以外には聞こえないのに声を張る。俺はありえそうと思ってしまったのだが、

「いや、普通に連れていくらしい。含み無し。それに、なんかおもてな

しの用意されてる」

「おや、お分かりになられましたか。流石です。そうです。様々なお菓子やお飲み物を御用意させて頂いております。お望みでしたら、毒見等させて頂きたいと存じます」

取り敢えず、これ以上ないくらいに困惑しながら、俺達は着いていく事にした。

流石に、廃工場の地下であるので、綺羅びやかな装飾はされていなかった。蛍光灯に照らされて、決して暗くはないが、石の壁も相まつて、広めな取調室みたいだ。

「お菓子をお食べになられますか？それとも、我が主人の元へお連れいたしましょうか？」

悩むまでも無く、直行するらしい。まあそのほうが都合が良い。なんせ、ここに目的ののぞき君がいるとは限らないのだから。

「かしこまりました。それでは、少々お待ち下さい」

懐からボタンを取り出し、ポチツと押す。地響きに警戒したが、背中側の壁が沈み、道が現れただけであった。：なんだよこれ。

かなり深いのか、先の見えない階段を、執事さんを先頭にして降り続けること数分。光と、ボロボロの木の扉が見えた。

「御主人様。お客様をお連れしました」

「入れ」

恭しく扉を開けて、中に入るように勧めてきた。ここまで来て罨とは考えられなくもないが、隊長を先頭にしてクリアリングする。：ナル以外は自然とそうしたが、酷いなこれ。

「おやおやお揃いで。お待ちしておりました」

御主人様という男は、こんな地下深くではあるが、そこそこ身綺麗で、整った、若い顔立ちをしていた。そして、珍しく、色が抜けたような白い髪を、後ろで纏めていた。

「…えっと、君の心が読めないんだけど、なにかしてるの?」

爽さんがとんでもない質問をしている。おそらくは、読めないことにより何らかの対策をされているんだろうと当たりをつけたのだろうが、その執事さんにもバレてしまうぞと思う。

「いやはや、何もしておりませんよ。聞こえないのは、不思議に思えるかもしれませんが、私が何も考えていないからです」

「はい?」

「私は、命令を実行するだけの機械。そう考えて頂ければよろしいのではないのでしょうか」

ん?それはこいつは機械ということか?

「どうぞ、お座りください」

席を勧められ、執事さんは次々とここへお菓子やお茶、コーヒーを持ってきていた。見せつけるように向こうは一杯飲み、お茶菓子をかじり、どうぞと手で勧めてきた。

「えっと」

初めに話し始めたのは爽さんなので、爽さんが中心に話を進める。

「まず、先に確認ですが、俺達に敵対する気はありますか?」

「ふむ。場合によるとしか。ああしかし、命については保証しましょう。そして、逃げたいと仰るのであれば、その三藤がすぐに逃がすでしょう。一人を除いて」

「ほう?その一人とは?」

「その銀髪の娘だよ」

ピリと、空気に緊張が走った。

「何を、するつもりですか」

「おお、怖い怖い。別に、私達の目的に協力して頂きたいだけです。命を脅かすようなことはしませんし、落ち着いてください。その子も、一度落ち着いてお菓子でも食べなさい。可愛い顔に皺がついちやうよ」

ライカちゃんは、レイカちゃんになんとか落ち着かせて貰っている。いやはや、しかし、どういふことだろうか。

「協力というのは、具体的には何なのでしょうか」

「それは当然、特異魔法の消去です」

息を呑んだ。それは、特異魔法排斥運動と何か関わりがあるのではないか。そう思わずにはいられない内容だ。

「いや、言葉が足りませんでした。正確には、不必要な、とつくでしよう」

男は、手元のベルをチリンと鳴らした。

「あ、あ、ご、御主人様……」

オロオロと、一人の女の子が扉から出てきていた。手には包帯を巻いているが、その形がおかしい。手の甲や指が無い。

「着いて来てください」

男はあるき出し、その前をオロオロとした女の子が先導する。俺たちも、その後に着いていった。

賑やかに、楽しそうな声でした。

それは一つの街であった。

見渡せるのは、小規模ながらも、人々の暮らす街。楽しそうに、笑う姿には、幸福さを感じる。無理をして、連れてこられたわけではなく、本心からここでの生活を望んでいるように見えた。

「ここにいる人間……私も、この子も含めて、皆」

女の子は、包帯を解き、その下の腕を——触手を、あらわにした。

「特異魔法……その副産物の一つである、異形化。ここには、それにより迫害され、暴行を受け、人生を壊されたものと、その子孫だけが集まっています。数にして、およそ1000。私が救えた、数少ない者達です」

ヤバい計画？

言葉を失う。俺たちの中にも、異形化とか、それに近い者はいる。聡太君や、隊長がそうであろう。

常に身体が一定の地点で戻るが故に、歳を取らず傷もつかない隊長。

どんな形にでも身体を変化させられる聡太君。

どちらかというところ、制御できる分、聡太君は少し違うかもしれない。」「で、ここに連れてきた意味は？」

爽さんが尋ねる。確かに、これまでの話とは繋がりが見えない。俺の特異魔法は、異形化をどうにかする力はない。一時的に、戻すぐらいならできるかも知れないが…代償として、苦しむ必要がある。

「私は、とある能力を持ちます。それは、強奪。人の特異魔法を奪う、そんな力です。その力で、ここに住む全員と竹本やいばさんの特異魔法を奪う。そうすれば、やいばさんの特異魔法によってすべてが消える。そういう算段です。どうでしょうか？」

「どうでしょうかって…」

爽さんはちらりと俺を見た。判断を委ねているように見える。

話だけ聞けば、それは歓迎すべきことだ。たとえ、特異魔法が消えたとして、それで大勢を救えるのなら、お釣りがくるだろう。別に、最悪、俺の特異魔法がなくなったとて、皆いるから大丈夫だ。

「それだけならいいですけど…他に何かありませんか？」

なにか、別の意図はないのか。そう不安に思っただけで仕方ない。だってそれなら、ここまで回りくどい方法を取る理由が分からない

「何か…特には何も」

何を言っている？と言わんばかりに首をふる。まあ本心であろうとなかろうとそういう反応はするんだろうなとは思った。

「じゃあいくつか質問」

「どうぞ」

「不必要な特異魔法って？」

「それは当然、この子達のような異形化。そして、世界を揺るがしかね

ない物ですよ」

「世界を揺るがしかねない?」

「ええ」

ふむ。そこについての説明はなしか。

「じゃあ次。強奪ってどうやるの?」

「私は特異世界があるので、大丈夫ですよ。何もなされなくても、勝手にやらせていただきます。まあ、あまり上手くないので、特異魔法が残っていて欲しいなら、離れていただきますが」

「ふむ。それって何回もできるんですか?」

「さあ…それはなんとも。でも、多分出来ないでしょうね。私の強奪も、それで消えてしまうのですから」

「…なら、もしかしてですけど、俺の特異魔法のみあなたに移るんですかね?」

「ああ、そうです。でも大丈夫ですよ。私はそれで死ぬので」

「はい?」

「え?」

「ん?」

各々が、それぞれの反応をする。その中には、触手の手を持つ女の子も含まれていた。

「実を言うと、私はある人からすでに一度特異魔法を奪っています。私の師匠なんですけどね、その人の特異魔法は、不老不死にするものでした」

「!?」

そこで大きな反応をするのは、隊長。隊長と同じタイプだから、そうなるのも無理はないのだろう。

「その人に、私は頼まれました。奪ってほしいと。何度も何度も否定して、でも、その人にはお世話になっていたから、仕方なくそれを奪いました。瞬間、その人は塵となりました」

懐かしさを感じさせる表情を浮かべている。さつき機械と言ったが、それは違うのだろうか?

「別れも言えず…いえ、これは必要ないですね。とまあ、もし失敗し

て、私が強くなったとて、あなたの力があれば、私なんて秒殺ですよ」「待ってください！そんなの聞いてません！」

突然声をあげたのは、触手の女の子。声には焦りが隠せない。

「死ぬなんて！そんなの聞いてませんよ！だめです！みんな悲しみまです！」

「そんなこと言っても…君達はそれが無くなれば無事なんにも言われずに外で生きれるんだ。ちゃんと、状況は整えるから安心して」

「そうじゃなくて！」

「…状況を整えるって？」

気になったのか、レイカちゃんが小声で呟く。場所が場所なので、少し響き、男の耳もそれを拾った。

「ああ、それはね。君達がここに来た元凶。彼の特異魔法の常識改変を使うんだよ。彼の特異魔法はもう既に奪ったから、いつでも、というか、もうやいばさんのはどうにかしましたよ」

ほう、てかまじか。それはありがたい。

「私を無視しないでください！」

触手の持つ女の子は、その男に触手を絡みつかせた。逃さないと、そんな意志がありありと浮かんでいた。

「ハハ、困ったな。一応、私と同じ思いはさせたくないから、別れの挨拶はしようと思っていたんだけど…」

「すみません！皆様！お通ししますので、どうか皆にこのことを教えて下さい！皆で説得します！」

女の子は鍵を俺に投げて、扉をさした。それで、行けということだろう。

「ハハハ。まあ構いませんよ。出来れば、貴方の視点から見る外の世界を話してあげてください。何日でも大丈夫ですよ」

「ちゃんと目を見て！話を聞いてください！」

皆で顔を見合わせて、残るのもなあ、といった感じなので全員で向かうことにした。

異世界だ！やばい！

「わあ…」

誰の声か分からないが、感嘆の声が漏れた。先程、上から見たときは特に気にしていなかったが、こうしてみるとまるで異世界みたいだ。

…いや、俺にとっては元々異世界なのだが。

「ひっ」

ナルが怖がりながら俺の後ろに隠れた。視線の先には、トカゲ頭の人間：リザードマンみたいな感じだ。鱗があるわけではなく、手足はツルツルとした普通の肌で、そうしてみると、不気味さが目立つ。

こう、なんとというか、本当に一部が違うというだけなので、人間と重ねてしまい、より悪さが目立っている。

「えーっと、どなたですか？」

ぎよろりとした目をこちらに向けて、そのリザードマンみたいな人は話しかけてきた。声はまさかの女声。まあなくはないか。

「あ、どうも。えーっと触手の女の子の…というよりは、あの男の…」

あれ？俺達あの男の名前とか何も知らなくね？

「え？えっと、もしかして、御主人様に仕える春のことですか？やけにおどおどしている…」

「あ、多分それです。その子にちよっと伝えてほしいと頼まれたんですよ」

「春がわざわざ自分で行かずに？本当ですか？」

「あー、それは…」

特に隠すことでもないの、その御主人様という人が考えていることを、普通に話した。まあ、俺の特異魔法についてはちよっとぼかしたけども。

「なんですって!?今すぐ皆に伝えないと!!!」

やっぱり、彼らにとっては一大事らしい。物凄くテンパっている。

「春だけじゃ心配…。あの！お願いなんです！この先まつすぐいくと、役所があるんです！そこに行けば放送局を使わせてもらえると思

うので、私の代わりにみんなに伝えてください！お願いしまーす
返事を待たず、彼女は行ってしまった。
!!!!

「どうする?」

今更ながら、俺達はまあまあな大所帯である。俺にライカちゃんとレイカちゃん。ナルに聡太君に爽さん。そして隊長だ。移動には皆の了承を取らないと。

「まあ、行ったらいいんじゃない?」

「うん」

爽さんと聡太君が答える。他の皆もそれに同意みたいだ。

「ねえねえ、観光しない?」

「あ、観光か」

ナルがそう言うので、それを皆にも共有したら、皆も反対というのは無かった。やっぱり皆も気になるみたいだ。かくいう俺も、異世界感あふれるこの街は回ってみたい。

「けど、時間はかけ過ぎたくないから、役所に行くまでの間にしようか」

役所は、この大通りの最奥だから、それでも充分楽しめるだろう。

「はい」

「了解」

「えー」

ナルや、文句を言うでない。

さて、大通りのお店を巡る。基本的に、お店を経営するのは食べ物系は普通の人が多く、加工された物売る場合は特異魔法によって変わった人が多かった。どうやら、外に買い出しする機会の多いものは普通の人が経営しているらしい。

「はい。焼鳥だ」

「ありがとうございます」

出店もあり、食べ歩きながら回る。正直な話、売り物は地上と早々変わらない。完全な都会ほど発達はしていないが、地方都市ぐらいは

ある。

それでも、店員が違うだけで結構新鮮に感じる。さっきのリザードマンみたいに、体の部位が別の動物に変わっていたり、喉から手が出る人とか、腕がたくさんあったりだとか、ケンタウロスみたいな人がいたりだとか、様々だ。

：今俺は面白いと思ってるけど、本人からしたら嫌なのだろうか。まあ、表には出さず、普通の人と同じように接しようと心がけてはいるが、上手くいつてるだろうか。わからないけど、それは努力しよう。

観光にしては、ここは観光地でもなんでもないので、安い物を食べ歩きながら、役所の前まで来た。なかなか楽しく、聡太君はいろいろなお土産を買おうとしていた。止めた。

「じゃあ、爽さん。後はお願いします」

リザードマンさんは行けると言っていたけど、交渉しなくていいとは思えないから、爽さんに全部お任せだ。

「…どちら様でしょうか？」

「ああ、実は——」

話し始めてから数分後。無事、許可を貰えた。しかしその背後では、物凄く忙しそうに役所は回る。焦りはよく分かり、そこからも、あの男への信頼感が伝わってきた。

更にそこから数時間後の放送の後、地響きが鳴るほどの大移動が発生した。

ヤバい人望

「凄いですね」

「これさ、もし俺等がここの御主人様？倒しに来てたらどうするつもりだったんだらうね」

「怖いこというな」

余計な一言を言った聡太君を爽さんが叩きながら、目を瞑る。

「…うん。これ凄いな。本当に全員からなんの悪感情も持たれてないね。なんというか、狂信者と言いたくなるね。いや、これは自然にできた好感情だから、そういうものではないんだけどね」

ほー。であるなら、一度くらいミスしても笑って許されそうだな。

「で、どうしますか」

「流石にあそこには行けないよね。だから、ほら、」

街には、ポチポチとだが、人がいないわけでは無かった。見た目的に、これは…多分、子孫とかの系列な気がする。全体的に若い。

「情報集めかな。暇つぶし感覚で聞いてみようか」

「あ、こんにちわ」

「こんにちわ。君はその、御主人様のところに行かないの？」

「えつと…あ、もしかして外の方ですか!?!是非話を聞かせてほしいです!僕もいつか外に出ようと思ってるんです!?!」

噛みつくように食いつき、男の子は目をキラキラさせた。どうやら、外に尋常ではない憧れがあるみたいだ。

「お、いいよいいよ」

爽さんが優しく教え始めた。基本的にはここと違う所。うまいこと良いことと悪いことを組み合わせて、希望を失わせずに、悪い所とこのものも、しっかりと教えていた。勿論、特異魔法排斥運動のことも。「へえー。外ではベルトをつけて変身する人とか5人組のカラフルなヒーローはいないんですか?」

「あつ」

あ

爽さんは突然の難易度クソ高質問をぶつけられた。ものすごい冷や汗を掻いている。

「あ、えーと」

さて、夢を壊すのか壊さないのか。

「聡太っ！」

「変身っ！」

「へ？」

同時に、ワクワクするようなBGMが隊長のスマホから流れ始めた。素晴らしいチームワークだ。

「おおく!!!」

ふんず!と再び目を輝かせる男の子。どうやら、夢を守れたみたいだ。というか、この人たち今のニチアサわかるんだ。

「私達、次に行きませんか？」

テレレンとポーズを取っている3人の男を置いておいて、ライカちゃんとレイカちゃんとナルと一緒に別の人に話を聞くことにした。

「あ、ナル君は見てでもいいんだよ？」

「いや、別にあんまり興味ないからライカちゃんの言葉は嬉しいけどついて行くよ! って言ってる!!!」

「要約すると、気持ちはありがたいけど、もう卒業したから大丈夫だよだって」

「あー、そういうのもあるんだねえ」

ライカちゃんは、うんうんと頷いている。ナルはキレている。

「ちよつと! なんてそうなるの!!」

「大人びた発言は似合わないかなって」

「ちゃんと言ってる!!」

「はいはい」

そうして、一字一句ちゃんと伝えたら、ライカちゃんはどっちにしろ笑顔でうんうんとナルがいると思われる方向を見ていた。

いやあ、うん、ナルのこと、どうにかしたいな。

話すとき、仲間外れというか、会話に入り辛いナルをどうすればい

いのか、やはり大事だなと思う次第だ。弄る以外でちゃんと会話しないといけないけど、スマホが一つしかないから難しいんだよな。

というわけで、

「こんにちは」

「ん？アンタ…よそ者かい？」

今度はおばちゃん風な口調の女の子だ。大体私と同年代かな？不思議と、なかなか年季が入っているような気がする。

「アンタ、可愛い顔して失礼なこと考えてるね！」

「へ？あ、いや、そ、そんなことないですよ！アハハ」

勘鋭っ！

「で、なんだい？」

「ああ、その、よそ者というのはそうなんですけど、ちよつとお話が聞きたくて…」

「ああ！いいよいいよ。大歓迎さ。外の人の意見は貴重だからね。あ、これ食べる？外だとどんな感じなんだい？」

そうして、紙コップに入れた食べ物を試食させて貰った。ライカちゃんもレイカちゃんも、そして、俺の分はちよつとだけ取ってからこつそりナルにあげた。

「え、いいよ」

「いいから」

「…ん。美味しい」

ナルの発言は聞こえていないだろうけど、追いかけるように二人も感想を言った。

「あ、お、おいしいですー！」

「そうですね。全然、私達のほうでも売れると思います」

「あら？嬉しいわね…で、質問というと、御主人様のことかい？」

「あー、まあそうですね。特に知りたいことってというのが、何も知らな

いから無くて」

「ほうほう」

「なんでもいいので教えてほしいです」

「なんでもねえ…。難しいが…。ああ、これ」

「これは？」

「確か、うちの親が助けられた時の写真だったかな。ほれ」

その写真には、仲良くピースをして写真を撮っている人達がいた。

片方は見たことがある、さっきの男の顔だった。

「それ、怒られるとかなわんから写真取るぐらいにしておくれ」

「あ、ありがとうございます」

必要かはわからないけど、一応撮った。しかし、やっぱり仲良さそ

うだ。めちやくちや人望が厚そう。

「で、これはアタイの主観だけど、…あの人はいい人だよ。ホントに。

アタイは助けられた恩はないけど、それでも、わかっちゃまう」

「そうですか…。ありがとうございました」

最終的に、色々な話を聞いた。本当に様々な話があったか、それでも、殆どは「いい人だ」で終わった。

ヤバい人望だなあ…。

信じたくない程ヤバイ

そうして、しばらくすると、

「皆様、お迎えにあがりました」

突然、執事さんが後ろにやって来た。

「うっわビックリしたあ!!!」

「わっ」

「ピッ!」

「これはこれは。申し訳御座いません」

恭しく頭を下げられ、全員が落ち着くと、執事さんは切り出した。

「それでは、御主人様の元へ戻って頂きます」

そう一言。瞬間、眼の前には触手に拘束された男とその触手の主の女の子、顔だけリザードマンの女の子の人が説得しようと言葉を尽くしている様子が見れた。

「…え?」

「ん?…大体アンタはどれだけ大勢を——」

驚きで叫ぶことすら出来ないが、リザードマンさんはちらりと俺達を見たあと、何事もなかったかのように説得を続けている。どうやら、慣れているらしい。

「重ねて、お詫び申し上げます。驚かせてしまい、申し訳ありません」
ペこりと頭を下げた執事。この現象は、この執事の、特異魔法によるものなのだろう。それだけなら構わないが

「もしかして、グラサン男?」

そう意識すれば、声はまったくあの男と同一だ。余りの態度と見た目の違いで気付けなかった。

「ええ、その通りでございます。目的のためとはいえ、皆様には大変ご迷惑をおかけしたかと…。お許しくださいあればありがたいと思います」

ほー。なんか有能な執事からむっっちゃ嫌になってきた。敬語も煽ってるようにしか聞こえない。

「ウザ」

「聡太君。言葉を選んだほうがいいよ?」

「やいばは表情に気をつけたほうがいい」
どっちもどっちである。

「まあ、そんなに言われるなら…」

触手に拘束されてから、時間にして10時間ちよい。やっと男は解放された。疲労困憊の様子だが、なんとも言えないむず痒さが彼の表情に表れていた。

というのも、この10時間、リザードマンの人含め、この小さな世界の住人の殆どが、死ぬなど彼に願ったのだ。揺るぐことのない絆は、最早切れることは無さそうである。

しかしまあ、そうなつてくると、俺達はなんのために来たのだという話なのだ。

「ああ、いや、なんというか、申し訳ないです」

男は頭を下げる。こんな大規模に計画し、実行した先がこれでは、特異魔法排斥運動によつて傷付けられた人が報われない…いや、そもそもその話、たとえそれが臨んだ通りになつても、その人たちは報われないのだが。

「うん。ならこれからは、特異魔法保持者に対するイメージアップをしたいと考えてるので、その協力をお願いしたい」

特に何事もなく終わりそうだったので、爽さんが協力を申し出た。特異魔法排斥運動。これは正直、この人によつて話が大きくなったのだが、発端は間違いなく隊長であるので、どっちが悪いとは言ひ辛い。ので、特異魔法排斥運動へは協力して解決へ導きたいのだ。

このとき、常識改変の特異魔法を使うというのは、無しにした。というのも、この特異魔法は影響されない者達もいる。なんせ、これは過去にあったものを無くすことは出来ないのだから。

「ええ。それにつきましては、是非」

そうして、無事、協力関係を結ぶことが出来た。

「なんてね」

どこからか、軽い声がした。

——そして、この場は阿鼻叫喚に包まれた。

「げうっ」

一人が苦しそうな声を漏らし、それに続き俺以外の全員が苦しむ。

見覚えがあるこの現象。原因となりうるのは俺か、それに近い特異魔法を持つ目の前の…

男は、目も当てられないほどの変化を始めていた。ぐちゃぐちゃと、全身が変化している。それは留まることを知らず、呆然として眺めている間にも、止まらず。

何が、必要か？この場において、どの選択肢が最も有効か？

特異世界？

特異世界で、男だったものを包む。それでも、周囲の苦しみは止まらない。ならこれは、特異魔法を失ったことによる弊害？

なら、衝撃を与えて吐き出させる？

グニヤグニヤとしたそれを殴り飛ばしたところで、意味は無かった。

なら、なら、なら？

——何をすればいいの？

「ハァー！上手くいった上手くいった！で、君。さっさと特異魔法を解除してもらえない？操れないから不便なんだよ」

見慣れない人物が一人。その横には、執事が恭しく、その男に頭をさげていた。

「誰」

「誰でもいいでしょう？まー言うなれば、精神関係の…ああ、その人と同じのだよ」

「何をした！」

「何もしていないよ。強いて言うなら、その偽善者を洗脳して、この住人も洗脳して、その男の特異魔法を弾いて、後は…偽善者君に皆の特異魔法を奪ってもらったただだよ」

ま、君のは奪えないっほいけどねと付け足して。

「隊長」

「フツ！」

即座に殴り飛ばさ——拳は、空をきった。

残るは、苦しむ皆と俺だけ。執事と男か女か分からない、紫色の髪を持った人、そして、元は男だった何かは消えた。

そこから数分後。苦しみを乗り越え、そこにいるすべての人は目を覚まし、言った。

「誰？」

ヤバいものを失って

…え？

ざわざわと、人々は騒ぎはじめ。独特な容姿からはうつて代わり、ただの人となった彼等では、人々の区別がつかなくてもおかしくないのかもしれない。そう、彼らでは。

「ラ、ライカちゃん？・レイカちゃん？」

そう呼んで振り向いたのは、私が考えていた二人だけではなく、その場にいた大半。もちろん、それら全員が当て嵌まる訳もない。

私の視線を一身に浴びた二人は、言った。

「もしかして、私のことですか？それとも、この子のことですか？」

ライカちゃんがコテンと首を傾げて聞いてきた。当然頭は真っ白に、そして、他人のように妹を扱ったことから、物語のように現実は甘くないのだと知る。

例え姉妹であっても、その間に確かな絆があっても、記憶が残ることとはないらしい。

「あ、うん。そうだよ。君が花里ライカ。こっちの子が花里レイカって名前だよ」

「名字が一緒…？」

「二人は、双子なんだよ」

そう言われて、二人は顔を見合わせた。互いの目を通して、自身の顔にも目を通し、そして、納得したように、とはいかなかった。

「えっと、ごめんなさい。私、貴方の事が分からない、です」

「私も…」

きよとんと、よくわからないままに二人は謝っていた。とても、心が痛い。

「あんた。俺達を知っているのか？」

そう声をあげたのは、私が全く知らない人。ごめんなさいと、謝ることしか出来なかった。

今、記憶があるのは、私だけ…？

「あつ、あつあ、た、隊長？」

思い出した。隊長はあの中でも痛みを抑え込み動いていた。なら、希望は…。

返事はなく、キョロキョロと頭を動かす美少年が目に入った。隊長も、彼らの一人だったらしい。

「やいば」

私を呼ぶ声がした。全神経が求めた音に、何もかもを捨て、優先させて、その方向に向き直る。

「これ、どういうことなの…？」

「ナル…！」

「わっ！」

不安をかき消すように、私はナルに抱き着いた。と、そこまでしてやっと、冷静さを手に入れた。ナルが対象にならなかつたのは言うまでもなく、強奪する男の方がナルを認識出来ないからだろう。それに、ナルの能力を取るのは都合が悪いというものもあるはずだ。爽さんと同じく、今回の黒幕は精神に働きかけることができのだから。

そして、こうなればもう確定だ。この記憶喪失は、間違いなく、特異魔法を無くしたことにより発動したのだろう。

そして、今思い出したのだが、記憶を失っていないのは、私やナル、だけではない。あの男の特異世界が、どれだけ広くても、近くに、そういう人達がいたのだ。

「ねえ、いつまで抱きついてるの？」

「あ、ごめん。ありがとう」

「…セクハラで訴えてやるわ」

「やめてほしいな」

気を損ねたかと思ったけど、多分気遣ってからかったのだろうな。少し緊張がほぐれた。

「すいません。皆さん。私についてきてもらえますか？ 殆どの人の、住む家がある場所が近くにあるんです」

一人が立つと、それに倣って皆も立ち上がった。その中には、爽さんや隊長も当然いた。彼らには、別の説明をしようと思う。

そうして、広々とした地下の世界に順繰りに降りていく。

「ア、アンタか!!!、これはどういうことなんだい!?!」

焦ったような声がした。さっきの若いけどおぼちゃんみたいな口調の人だ。

「突然皆が苦しみ始めて、御主人様が来てくれたかと思ったたらアンタが来た!何か知ってるんだろう!教えな!!」

グラグラと体を揺すられる。しかしその行動も、俺の後ろを見れば目を見開き固まった。

「だ、誰、じゃなくて、もしかして…」

一度彼女は走り去り、しばらくすると戻ってきた。

「詳しく教えてもらおうよ!!!」

彼女の後ろには、同じく、目を不安に揺らした人達が大勢いる。一部、向こうで御主人様に生きてと言って、そして時間が時間なので帰っていった者達だ。

当然ながら、10時間にも及んだのだから、帰った人も当然いる。その人達にも、魔の手は迫って来ていたらしい。そして例に漏れず、記憶は飛んだ。

俺は、集まった人たちに向けて、ぎつくりと説明。補足は、ここに住んでいる記憶を持つ人をお願いした。そうでもしないときりがない。

そして、

「あの、私は、じゃなくて、私とレイカちゃん?は…」

「その、俺達もどうすれば良いのか…」

狼狽えるのは、隊長や爽さん、レイカちゃんとレイカちゃんという外から来た人達。しかし、彼等までこの地下の世界に任せるのは良くないだろう。

実際、原因がわかったとして、できることはないのだ。

彼等を連れて、拠点へと戻る。拠点には、呼ばれたけど結局使われなかったであろう人達が心配そうに待っていた。

「あっ！」

「隊長!!!」

「おかえりなさい!!!」

歓迎を受ける隊長は、当然パツとしない顔。そんな様子に喜色円満の彼らの表情に戸惑いが生まれ、しまいには声が薄れていった。

「実はね——」

再び説明し、拠点内は重苦しい空気が漂った。

こころやばい

俺達は一度、全員が拠点で暮らすこととなった。レイカちゃんもライカちゃんも学校があり、中学校とはいえ休みすぎるわけにはいけない。とはいえ仕方ないっちゃ仕方ないので、一度先生とお話をして、納得してもらった。

そしてそろそろ、二人の俺への警戒が薄れてきた頃だと思う。二人はパジャマに身を包み、リラックスした様子で俺の話を聞いていた。「ねえ、ライカちゃん、レイカちゃん。ちよつとだけ、昔の家に行ってみない?」

「…昔の家?」

「それ初めて聞いたよ?」

記憶を失ったせいなのか、レイカちゃんは敬語を外していた。望んでいたことではあるけど、ちつとも嬉しくない。

「えつとね、二人は元々、私と一緒に住んでいたんだ」

私が出会ってから、これまでの話を、ゆつくりと話していた。うつらうつらと船を漕ぎそうな二人を見て、話しすぎたかなと切り上げた。

「どう?行ってみる?」

「行ってみたい!」

「私も、行ってみたい。…でも、」

ライカちゃんは、ふと思いたったように言葉を続けようとして、静かになった。口を掌で押さえて、そして、レイカちゃんとヒソヒソとお話していた。この二人は、どうやら家族という自覚がちよつと芽生えてきたらしい。

「あの!」

結果が出たのか、ライカちゃんが真剣な顔で聞いてきた。

「やいばさんって、私達のお母さんじゃないんですよね?」

おっと、

「…そうだね。私は二人のお母さんじゃないよ」

そう答えると、二人は目を合わせて、そして言った。

「じゃあ、私達のお母さんは…?」

不安げな様子が、俺の胸をどうしようもなく痛めた。そして、この時の正答が分からない。どう、話すべきなのだろうか。

「……………今言えるのは、貴方達のお母さんは生きてるよってことだけかな」

俺は逃げた。

…出来ることなら、二人が思い出してくれれば。もしそうじゃなくても、いつかのために、はやく心の整理をしないと。

「…わかりました」

多分、私のただならぬ様子を気遣ってくれたのだろう。二人は、これ以上の詮索をやめた。そうして、席を立ったところで、

「あ、そういえばなんだけどね。明日、友達を呼んだんだ。明日、その家に来てもらおうかな」

「とも、だち?」

「誰、なんですか?」

怪訝そうな顔の二人に、俺は少しの願いとともに言った。

「響ちゃんって言うんだ。二人と同年の、かわいい女の子だよ」

「そうですか」

「あの、なんでこんな時に?」

二人の反応は、予想していた通りだった。

「…やいばさん?」

「いや、なんでもないよ。ふふ。そうだね。なんでこんな時に、か」

まあ、それは、

「単なる気まぐれだよ。もしかしたら、って思ったんだけどね。おやすみ、二人共」

俺の寝室で、少年が待っていた。

「で、どうだったの?」

「うん? 今日話したこと? なら、二人は行くみたいだよ」

「そっかあ…」

ナルには、俺が今日やろうとしていることを、なんでも伝えていた。「やいばつて、ずっと元気ないよね。ここ一ヶ月」

「そりや、ずっと関わってきた人の殆どが私を知らなくなったからね。凹むでしょ。それに寂しい」

「…ごめん」

そしてその寂しさをなんとかしようと、意味もなく何度もナルに話しかけているのだ。いや、意味もなくじゃなくて、考えを整理しようとして、かな？

「で、やっぱり？」

「…まあ、取り敢えず今考えてるのは、この組織の立て直しだね」

現在、この組織は柱となる隊長と副隊長である爽さんを失っている。いや、失っているというより、使い物にならなくなっている。

しかしそれでも、組織のメンバー達の意志が潰えているわけじゃない。

教授や教官を代表に、役割が変わろうとする動きが起こった。でも、隊長はともかく、副隊長である爽さんは、誰も変わることが出来なかった。

なんせ、彼のしていたことは、特異魔法によって有力者達の弱みを握り、彼らからの干渉を全力で防いでいたのだ。また、それを用いて、少し無理な要求も通していた。

そんな爽さんの代わりはいないので、俺達は俺達なりに、教授を一旦の代表とした組織として確立させた。爽さんの残した事を活かした、完全なボランティア団体である。

「あ、明日ナルはついてくるの？」

「うん。…ご飯は？」

ナルは、未だに俺にしか見えない。だから、毎日俺が作るか持つていったりしている。

「はい。オムライス」

「ヤッター！」

パクパクするナルをずっと眺めていた。

友達のこころもやばい

「ここ、ですか?」

「おつきいね」

「うん。ここが二人の家だよ。時たま掃除には来ていたから、埃とかも少ないと思う。じゃあ、入ろうか」

いそいそと入ってく二人。家の勝手がわからないようで、オロオロしながら靴を脱いでいた。そんな二人の傍らには、私のももなく、当然二人のでもない靴があった。

玄関を抜けて、リビングへ。約束の子、響ちゃんがそこで待っていた。

「あつ、レイカちゃん!ライカちゃん!」

「わっ」

突然の事に驚いて、私の後ろに隠れる二人。事情は説明していたので、響ちゃんはやつちやつた…?と不安顔だ。

「えっと、私は蔵元響です。覚えてるかな…?」

「やいばさん、この人が昨日言ってた人?」

ライカちゃんがそう尋ねてきたので、頷く。もうこの時点で、響ちゃんは察したような表情をして、悲しげに微笑んだ。

「あつ、ごめんなさい。えっと、覚えてなくて。それで、あ、花里ライカですっ!」

ほらレイカも!と背中を押すライカちゃん。

「花里レイカですっ!」

率先してレイカちゃんの手を引くライカちゃんには、響ちゃんも驚いている。確かに、記憶をなくす前のライカちゃんとは思えないほど、この子は前に出ている。記憶を失えば、そんなにも変わるのだろうか。

「あ、うん。よろしくね?」

「うん!よろしく!」

「よろしくお願いします」

ぎこちなさを隠せない響ちゃんに釣られてか、レイカちゃんもライ

カちゃんももどかしそうだった。

「あはは。まあそうなっちゃうよね。じゃあ、一旦あのゲームで遊ばな。一時期流行ったゲームだから楽しいと思うよ」

「ゲームー!」

「興味あります!」

拠点にはゲームがないので、二人からすると初めてかもしれない。…そういえば、二人と仲良くなったのってゲームセンターだった気がするな。今度、行ってみようかな。

「うん。じゃあ教えてあげるよ」

以前、二人にこのゲームを教えて貰っていた響ちゃんは、懐かしさと悲しさを織り交ぜた表情で、目を輝かせる二人と共に奥へと入っていった。

ここまでは、響ちゃんが望んだ通りだ。記憶の話をする、響ちゃんはまた二人と仲良くなりたと言っていたから、遊ぶ機会が出来るよかったと思う。後は、時々お菓子やジュースを運んであげよう。

「で、ナルはどうする?」

「今更なんだけど、なんで私ついてきたんだろ」

もう男の子の皮を被らなくなったナルは一種の精神安定剤である。二人の前では不審がられる訳にはいかないので、ナルとは話さない。あくまで、二人きりの時だけである。

「うくん。私のお菓子のためっていうのはどう?」

「サイコー。楽しみ〜」

ナルが楽しみにしてくれてるから、腕によりをかけてやるぜ。

「ばいばいっ! 響ちゃん!」

「さよなら! 響ちゃん!」

「うん。ばいばい。二人共」

響ちゃんの家の前でお別れして、帰路を辿る。いずれ、またあの家で暮らしたくはある。でも、二人には、拠点内にも友達がいて、まだ、

あんまり気乗りはしないようだった。残念だけど、仕方ないかな。

「そうだ。二人共。明日、私は一日いないから何かあつたら教授を頼ってね」

「え？どうかしたの？」

「お仕事？」

「そうだね。お仕事。頑張ってくるよ」

「頑張って！」

「寂しい……」

声援をくれるライカちゃん、寂しがるレイカちゃん。やっぱり、この違いはいつまでたつても慣れない。

「うん。頑張ってくるよ。レイカちゃんも、帰ってきたら一緒に遊ぼうね」

明日は、犯罪への対応だ。うちのメイン戦力となる爽さんと聡太君。隊長がいない分、私もよく駆り出される。ボランティア組織として成立させたはずだが、まだ偶に警察に頼まれるのだ。これは、警察との明確な繋がりである。無下には出来ないのだ。

運が良ければ、記憶の復元に関わる情報が得られるかもしれない。なんて、仕事のたびに願っているが、未だ情報はない。

まあだからといって、諦めることは出来ないのだ。

やばい女の子

基本的に、俺の担当は、原因すら分からない、何かしらの犯罪事件への対応だった。様々な検証をして、犯行時刻まで絞って、多くの監視カメラも見て、それでもなお分からず、特異魔法の関わりを指摘されたときに駆り出される。

というのも、それ以外は聡太君とか爽さんでなんとかなっていたのだ。反抗されても軽くいなせる聡太君に、爽さんは心を読み、危険な特異魔法持ちの取り調べを一瞬で終わらせたりと。それが出来なくなったから、俺はそこら中に駆り出されることになった。

正直、俺は反抗されても大丈夫だし、妥当とも言える。

というわけでお仕事だ。今回のお仕事は最近話題となっている魔法少女のお話である。…もちろん、この世界でみたら魔法が使える少女なんていくらでもいるというのは置いておく。

教授から動画を見せてもらったんだけど、フリフリの可愛らしい衣装を身に纏った少女が、空を飛んで魔法を乱発していた。一応この世界にも存在する、プリなんたらと似たような感じだった。

被害は余裕で出ていて、死者はいないが怪我人多数。警察も動き、身元を特定したかと思いきや、次に出現したときには顔が全く違ったらしい。複数犯の恐れもあるとして、特定した顔の人物を調べると、アライが成立し、わからなくなったらしい。

過去に10回程現れているが、基本的に、出現場所は同じ。なんなら、最近は時間帯も似たような時間帯になっていつている。まるで、見せびらかすように。

というわけで、教授から教えられた場所で、適当にご飯を買って待機する。人通りは少ないが、この辺では立派な都市とも言える場所で、交通網も集中しているから、どうしても人がゼロにはならない。後は時間帯も似たような感じとはいえ、一時間ぐらい前後している。

「お疲れ様です」

「あ、お疲れ様…」

挨拶を貰ったが、なんかこの警察官見覚えがある。

「…私の顔に何かついていませんか？」

「いや、そういうわけでは…」

そんなに昔じゃない。どこかの事件で一緒になったっけ…？と、考えていたら、一緒にいるナルが服を引っ張った。

「ねえねえ、周辺見に行きたい」

「あー、まあこの辺ならいいよ。でも、今回は無差別っぽいから気をつけな。見えないも関係ないかもしれないし」

「はーい」

最近、ナルは教授から携帯を貰ったため、俺に連絡できるようになった。それだけじゃなく、他の子達とコミュニケーションも取れるようになる。ご満悦だ。

「つて、やいば。アンタよく仲良くできるね」

「え？」

ナルは、警察官の顔と私を交互に見ている。

「この人、私と逃げるときにふっ飛ばした人じゃない？」

…配置が被ることある？

「あの、すみません。もしかして一ヶ月ほど前に物凄く申し訳ないことをした気がしたんですけど…」

「そうですね。まあ物凄い量の警察官がふっ飛ばされてるので、気になさらずとも…」

「ごめんなさいー！」

「いえ、別に…」

もつと憤つてもいいだろうに、優しく、なんなら謝罪を迷惑そうに返された。いや、ほんと合わせる顔がないです…。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「大丈夫ですよ。それより、そろそろ私は見回りの時間ですので、頑張ってください」

「はい…」

なんで配置を被らせるの…。上層部…。

そうして、警察の人事への愚痴と自己嫌悪に陥り続けて時間が経ち、ふと空を見ると――

「キヤハハハハハ！」

甲高い声とともに悪役感満載の可愛らしい女の子が笑っていた。

「じゃあ、弱っちいみんなくあ？ばいばあ〜い!!!」

特異世界、と行きたかったが、あの高度で墜落されれば死にかねないので辞める。最近の御主人様と呼ばれていた何か同様、操りという可能性があるのだ。というか、その経験からより一層命は大切にしないと思った。

「逃げてくださいー！」

警察が、総出で避難を促している。それを嘲笑うかのように放たれる魔法を体でぶつけるか、特異世界を空中にちよつとだして消していく。

「あらっ？」

俺に気付き、魔法少女は目を瞬かせた。

「か」

「か？」

ぶるぶると震え、俯き、そして少女は空を走った。

「かつわいい〜!!!」

高度が下がったので、特異世界で叩き落した。

ヤバい子達だ

「いっつったあ…。あゝもうなんで!!! ってちよっ???」

賑やかな女の子だなあと思いつつ、四肢を拘束していく。猿轡…わざわざこのあと警察行くのめんどいからここで取り調べしようかな。

「ハイ君ーなんでこんなことしたのかな?」

「……」

黙りこくる女の子。やっと俺のことを敵だと認識したらしい。まあ敵に向かつてかっわいい…とは言わないだろうしね。

「…えっと、はやく家に帰りたいから教えてくれない?」

後ろでは着々と搬送の準備が始まっていた。しかし、この子の力はシンプルながら強力だ。空を飛んで魔法というか、まあミレーさんが使うような物とは少し違うので、多分特異魔法を使っていたのだから、警察だけではダメだろう。ちゃんと手伝わないと行けないのだ。

「だから、めんどくさいからはやく帰らしてよ」

「アンタがそれで困るんだったら言わない!!」

おおー。正直な子だなあ。…特異世界で包んでみようかな? うん、流石にダメか。拷問みたいだし、やりすぎるとライカちゃんやレイカちゃんみたいに記憶がおかしくなるかもしれないもんね。

「はあ…。じゃあ、行こうか。お願いします」

「了解ですー!」

さて、警察が女の子の取り調べを始めるのだが、その際、どうしても俺が同席しないと行けない場合がある。もちろん、警察にも強い人はいるけど、そういう人がどの部署にもいるとは限らないのだ。

「…すいません。コーヒー貰いますね」

長い。余りにも長い。見た目も若かったし、こんなにも忍耐が強いとは思えなかったから、流石にすぐ吐くと思っていた。くっそねみい。

「…あの、すみません」

と、うとうとしていると、横から別の警察官が声をかけてきた。

「実は…また彼女と同じような奴が出てきました」

ううん？…そういえば、顔が違うとか、そんな話があったっけか。

「えっと、じゃあ行きますけど、ここ離れても大丈夫なんですか？」

「あ、はい。そろそろ看守が来てくださるので…」

ここで言う看守とは、面白い特異魔法を持つ人のことである。この人は、触れた物を壊れないようにすることができるとのことである。こうすることで、すり抜けとか、そういうのができない系の特異魔法持ちを全員収容できる。中々に便利だ。…まあ、それでも収容できない人もいるんだけどね。

「わかりました。じゃあ行きましょう」

「…ん？あ、もしかして貴方帰るの？いいの？私暴れるよ？」

「うん。ばいばい」

「え、ちよ」

さつさと出ていけば、すれ違いでゴリゴリのマッチョが入っていた。頑張ってほしいものである。

そうして、現場に向かえば、その場は悲惨なものだった。そこら中で人が倒れていて、もう見ていられない。これ以上被害が拡大するの…と思っただが、女の子が俺を見た途端、逃げ出した。

わざわざ地面に降りて…多分、さつきみたいに墜落させられるのを嫌ったのだろう。でも、特異世界に一瞬だけぶち込めば突然の頭痛で丸まるので関係ない。

「アアアアア」

はい。いっちょようあがり。

そしてこの子も、黙りこくったので搬送だ。看守がいる部屋に向かうと、まだ初めの方の女の子が粘っていた。かなり萎縮しているが、やはりなんとも忍耐力のある子だなあ。

「あ、やいばさん、ちよつと…」

またまたまたもや、呼び止められる。

「なんですか？」

「いや、またまたまた魔法少女が…」

「ええ…」

看守の元へ送り届けて、また、現場へ向かった。

暗闇はヤバい

流石に、日が沈み人通りも無くなれば出てこなくなった。最終的に4人。全員なすすすべなく捕まってくれた。

「帰れない…」

元々、一日で終わる事が少ないので慣れてはいるのだけど、癒やしに会えないのは辛い。

「そう思うだろナル〜！」

「知らんわ。ってどこ触ってんの！」

「仕方ないでしょ見えないんだから。だってこの場所、月明かりしかないんだよ？」

「そうだけでも…！」

ヤバい殴られるかも。こえ〜。

とまあ、現在、私達はちよつと特殊な場所にいる。とつても有名で、そんなに来ることのない、いや、普通足を踏み入れる事のない場所だ。

「ね、ねえ、お話ししない？」

「そつ、そうだね!!お話しよ！」

「昨日のドラマみた…？」

「どのドラマ…？」

4人の少女が、手足を縛られながら無理矢理にも明るい雰囲気話そうとしている。そんな部屋の片隅で、俺はナルとじやれていた。

「ねえやいば。これうまくいくの？ツカサムツ」

「可能性は何でも試すのが俺流よ！ハイ、モウフ」

「いや、確かに怖いだろうけどさあ。牢屋で明かりもなく、音もしなければ流石に。でもそれで情報だしてくれる？アリガト」

「いや、気を紛らわすために話すかもじゃん？」

現在、4人の女の子は牢屋の中で引っ付いて過ごしている。彼女らには逃げないように足をロープで繋ぎ、動き辛くしている。寒さ対策に毛布もありだ。

「ふーん。…ねえ、ちよつと遊ばない？」

「…いいね」

いいこと考えた！と手を叩くナルに、俺は暇なので賛同した。

「ね、ねえ、何か音しない？」

私以外の誰かが、ふとそんなことを言った。固まり、耳をすませば

…

びちよん。

「な、何だあゝ！ただの水じゃくん！」

「いや、なんで突然水の音がするようになったの…？」

「…」

沈黙が生まれ、それを壊すのが怖く、でも、そのままにするのも嫌。誰か喋ってっ！

キイイイイ…

「「ひやあっ！」」

背筋がピーンと伸びて、体が大きく弾けた。同時に麻痺していた足が伸びてぴりりと痺れる。

「んゝゝっ!!!」

涙目で視界がぼやけるけど、周囲はドタバタしていて落ち着きがなく、一周回って私は冷静になってきた。夜目がある程度きくので、格子の奥を、音のした方向を見た。

「うえっ」

誰もいないはずの牢屋の扉が、開いていた。麻痺のしびれとは別に、手足が小刻みに震える。

「ちよっと落ち着いて!!」

誰かが叫び、またもや周囲が静かになる。

「今気づいたんだけど、ロープが千切れてる！はやくここから逃げよう！きつとあの男はもう帰ったんだ！」

「うううんんんそうだね帰ろう!!!」

「うん！帰ろう！」

牢屋の格子に手をかざして、魔法で破壊する。そんな光景も、私は腰が抜けて見ることにしかできない。

「ほら、あなたも！」

目の前の少女が誰かは知らないけど、私の手を掴んで走り出す。彼女は、牢屋の入口が開いていることに気づいていないのだろうか？
キイト、牢屋が開く。

「「ひっ！」」

キイ

キイ?!

キイ?!

「「?!?!?!」」

私選の目の前の、牢屋が次々と開いていく。

「いや?!?!」

ぴちよん

「いやあ！」

「ちよっ!!おいてかないでよおー！」

掴まれていた手を振り払って、元の牢屋に戻って毛布に飛び込む。
他の皆も各々毛布に飛び込んだ。

「なんで…なんでえ…こんなの聞いてないよお…！」

溢れんばかりに涙が出てくる。目は冴えていて、全く眠れない。

「全部言われたとおりにやったのに…。こんなことならやらなければあっ！」

「おい」

女の人の声がした。

「お前の、……で、……くも！」

今度はちよつと機械じみた男の子の声。少なくとも今、絶対に聞こえるはずのない声。

「ごめんなさいごめんなさい言われてやったんですう!!!やれって言われたから!!!」

「だあれに…?」

「ぐちやぐちやの人ですう!!!!」

その叫びを最後に、私の意識は落ちていった。

効果ヤバい

「はい」

「はいじゃなくてですね？」

看守さんが気絶していた少女達を介抱し、その原因を私だと断定するので肯定した。嘘は良くないからね。

「まあまあ、取り敢えず私はやりたいことが出来たので、後は頑張ってください…とは行かないと思うので、今日も取り調べですね」

「いや、ほんとに何をしたんですか？」

何を…遊んでただけだが？なんかいけそうだったからやってみたら思った以上に上手く行ったただけだが？

「いやー、楽しかった楽しかった。文化祭を思い出したわ」

ナルはそう言う。いいなあ…そんな思い出。

「いや、はあ…。あなたのお陰でもっと長引きそうですけどね。気絶してますし」

「いや、起きましたよ」

看守の後ろでは、ブーツと虚空を見つめる少女。恐らく彼女の脳内は、必死で今の状況を整理しているのだろう。

「…あ、あの、私は今まで…？」

「ああ。なんか気絶してたので治療のために連れてきたんですよ。大丈夫ですか？何かわからないこととかありますか？」

スムーズに、そこにいた医療スタッフが記憶の確認に入った。指を立ててみたり、昨日のことを聞いたりしているうちに、残りの子たちも目を覚ましていく。

一通りの確認を終えたあと、彼女らは看守を見ながらヒソヒソと会話を話す。そして、

「あの、なんでもするので、ここから出してください…！」

突如、懇願しだした。楽しい以外の意味もあって素敵だね。おぼけ(づい)。

これからのことを簡潔にまとめると、魔法少女4人を命令したぐちやぐちやの人のところへ連れて行ってもらうことになった。突如サクサクである。

「やいば。チャスだね！」

「なにそれ」

「チャンスだね！」

そう。その通り。今回はわりかしマジで大チャンスなのだ。もちろん準備は怠らない。警察さん全面協力でヘルメットも貸してもらえたため、髪でバレることはなくなった。

そして、問題のぐちやぐちやの人だが、爽さんの特異魔法を持っているあたり、ナルの存在が分かる。まあ、場所がはつきりわかるわけじゃないらしいから、大丈夫だと思いたいが、今回はそのことを踏まえ、ナルに頼るのはやめた。あれ、自分の特異魔法も解かないとだから危ないしね。

「じゃ、ナル行くよ」

「ういー」

ぐちやぐちやの人は、かなりの量の特異魔法を持つうえ、不死性までも備えたやべえ奴である。しかし、特異魔法どころか魔法全般効かない俺にとっては、相手に対してバチクソ有利である。

しかし、こちら側は有効打がない。不死性がどうしようもない。一応、前回は特異世界を一瞬しただけでは死ななかつたため、元となつた男の言っていた話は当てにならない。

よって、長期的にやりながらも、有効な攻撃を与えるのが必要になるだろう。まあ、警察の強力ヨロシクウである。

突如集められることになった警察の特異魔法強い組は到着まで半日。それまでどうするべきかといえ、取り敢えず魔法少女達に連れてつてもらい入口を見張るということになった。

「さあ、行きま——」

「失礼します！魔法少女がまた現れました!!!」

お仕事が入ったので、案内役を増やしにしゅっぱーつ!!!

そうして、警察の特殊部隊が到着した時には、キラキラ衣装の少女が計8人。そのうち、4人は縛りつけられ、看守に見張られることになったのであった。

余りにもヤバい属性モリモリのぐちやぐちや

「まあこんな感じでカクカクシカジカで〜…」

「なるほど…」

これから向かう先に100%いるであろうぐちやぐちやの男。それについて、軽くでは足りないと思うのでじっくりと教えた。

「…つまり、我々の最優先事項は周囲の封鎖ですかね」

「そうなりますねえ…」

正直な話、よつぽどのことがない限り勝てないだろう。アレには。アレを倒すには、俺の特異魔法によって向こうの特異魔法を無効化した上で、あのぐちやぐちやをなんとか出来るような威力の攻撃が必要だ。

俺の特異魔法が解除された途端に、隊長の特異魔法によって元の状態まで一瞬で戻るうえ、心も読めて、様々な姿に変化できて…

取り敢えず属性モリモリのクソ野郎である。ソシヤゲならナーフ確定だ。

「…どうしよっかなあ」

あのぐちやぐちやの体はどうかなるのか？特異世界でやっても、あの男がぐちやぐちやなまま戻ることにはなかったから、姿形を変えた聡太君が特異世界の中なら変えられないのと同じなのかな？

それなら、問題はぐちやぐちやの状態の奴の耐久力と言ったところか。俺のパンチは耐える。うーん…？あんまわかんない。

「あの、銃もらえます？」

「ダメですけど？」

「ツスよね。すいません」

はい。即却下です。当然だね！

「あの…そろそろですよっ…」

魔法少女Aが恐る恐る声を掛けてきた。BCDは先に行つて、ぐちやぐちやの男を引き止める役だ。逃げてそう？…警察つて、取り外せないGPSつけれる人いるんだあ…！ちなみに元ストーリーカードだよお！

そんなわけで、問題なく、なんならこの子の誘導もいるかと言われればまあ…。

「わかった。じゃあお巡りさん。よろしくお願いします」

「承知しました！」

そして、お巡りさんは部下に呼びかけて、避難の呼びかけを始めた。ふと思ったのだが、そういうえば向こう側に瞬間移動出来る執事がいた。ということは、そいつの無力化はかなり優先事項かも、いや、優先事項だな。

「ナル。ちよつといい？」

「なにになに？」

警察が離れたのをいいことに、ナルを呼び掛けて、作戦を…

「あの…？」

「あつどうしたの〜？」

「い、いえ…」

（あつ、あつぶな〜）

危うくナルの存在がバレるとこだったなあ…。

「ねえねえ、なにになに？」

なお、ナルは久しぶりに話しかけたのが災いしたのか、ずっと耳元でささやき続けていた。うん。ほんとごめんね。後で構うからさ…。

「えつと、この中、です」

指先は洞窟を指していて、その中は重苦しそうな…いや、普通の洞窟だ。なんだろうか、人工的な感じがしなくもないから、元防空壕とかだろうか？

「ありがとうね。で、君はどうする？」

「えつと、帰ってもいいですか？」

「んー。後で警察が迎えに行くと思うけど、それでもいいなら、かな？」

「うえつ！そ、そうですよね…。なら、ついていきます…」

ほおー？ついてくるのか。…一応、捜査に協力してくれたら云々か
んぬんと言っていたから、それ目当てかな。どちらにせよ、超絶貴重な
攻撃戦力である。歓迎しない手はない。

「そっかーじゃあ、よろしくねー！」

そのまま、中へ進んで行っ

「失礼します」

「っー！」

視界が切り替わる瞬間、かろうじて特異世界を発動。転移先に、執
事も共に縫い付ける。

「グッうううアアアア!!」

「あつぶな。お前には特に逃げられたら困るからね！」

流れるようにスタンガン。特注タイプなので、容赦なく意識を奪
う。

そのまま、視界の端に映っていた怪物に目を向けた。

「正直、俺にこいつを当てるのはあんまり得策じゃないと思うんだよ
ね」

「ちよ…と、まっ…て…く…れ」

「おん？」

操り人形だと思っていたぐちやぐちやは、かろうじて声を出してい
る。窮屈に、絞り出すような音声は、かつて聞いた男とは全くの別物。

「聡太君の特異魔法でなんとかできないの?」

「つか…いこなっ!…せ、ない」

「ああ、そういうのもあるのか。…ごめんね。何が言いたかったん
だっけ」

多分、この男の発言は、あのよくわからない奴に乗っ取られるまで
の数分か数十秒。よって、ちゃんと聞いておかないと。

「こ、れ、…を」

ぐちやぐちやの中から、一本の触手がぬるりと飛び出る。その先端
は、束ねられた書類を、しわくちやに握っていた。

ペタリペタリと地面に潰して、小さくしてから渡される。これは…
レポート?

「そ…れ

『はーい』

この声は知ってる。男か女かわからない、あの、紫髪の奴だ。

『まあアレだよ。頑張って銀色の勇者を殺そう！』

「デスゲームの主権者気取り？」

『ん？違う違う。君が死ねば、その子は文字通り世界最強。だからさ、君に死んでもらおうかなって思うんだよね』

「うん？私をそのぐちゃぐちゃで倒すつもり？そおくれはちよつと見積もりが甘いんじゃないの？」

『うん！だから、スイッチオン！』

ガシヤコン

えっ

『つてあれ？なんで中にいるんだろ…？まあいいけど。もういらないからね。さあ、弾幕ゲームだよ！』

四方の壁に穴が空き、銃口を俺へ固定する。

「…そつかあ」

逃げ場所どこお…？つ！

「助けてぐちゃぐちゃー！」

返事はないけど、こいつの魔法は全部効かないのだから関係ない。盾にする。取り敢えずこれで出口を…！

『出入り口閉じまーす』

銃を魔法でちよつとずつ壊すぞ！

ヤバいけどなんとか…ならなくね？

ズドドドド

「ミレーさんの教えを見よ！」

バキン！

地面から突き出した針が、銃の強度に負けてへし折れた。

「なんですと!?!」

え、ちよ…もうどうしようもなくね？

肉壁にしているぐちゃぐちゃは、まだ耐えてくれている。それに、なんのつもりかは知らないけど、このぐちゃぐちゃを操る様子がないので、逃げる様子もない。

「…最悪、特異世界でこれと死のうかな…」

目の前のガチ目の災厄を残してもいいことはない。ほぼ確実に、レイカちゃんやライカちゃん等々一般市民の犠牲を出すことだろう。

「つてかき、なんとかできるよね？ぐちゃぐちゃ」

「な…んだ、な、にがで…きると?」

「いや、レイカちゃんかライカちゃんの特異魔法で壊してよ！」

こいつの中には、その2つもあるはずだ。雷なら熱で銃はおかしくなるだろうし、水を張れば壊れはしなくても水圧かなんかで銃弾はなんとか出来る。

それに、もし暴走したとして、この場で困るものはいない。俺には効果ないし、ぐちゃぐちゃは死なない。

「そ、こ…」

「え…?アレは…」

倒れていたのは執事男。のんきにすやすや眠っている。よくもまあそんなに余裕持っていられるね!!!!

「き…みのせい…だよ」

「わかってるけど、さらっと心読むな。んで、アレ助けるの?…どうにか出来るでしょ。何人の特異魔法取ったと思ってるの」

この際、助ける必要があるのかについては、まあ置いておく。一応、操られていただけなら強力な味方になってくれるだろう。

「うま…く、つか…えな…い」

「触手使えるやんぐちやぐちや」

それで引き寄せることはできないのか？

ぬるう…ひと

1メートル伸びて、止まった。執事まで十メートルほど。全く足りない。

「ぐちやぐちや動ける?」

「…、う…げば、線とお、る」

線?えつと…

ズドドドド

ああ(察し)

入口なため、俺の背面には銃はない。だから、このぐちやぐちやに隠れられていたのだ。進めば進むほど、横からやられる(俺が)

「詰みじゃね?」

「…」

一応足掻こうと、炎魔法に懐かしの無属性魔法を試す。やっぱり効果はない。なんで?

「わ、たしかいは、つし、ていた…もの、をつか、われた」

開発していたものを使われた…この人は、体が異形化した人達を救おうとしていたのだ。だとしたら、魔法の無効化に関する何かを作っていた可能性もなくなはない。不老不死ゆえ、時間はいくらでもあるだろう。なんなら、不老不死の元の持ち主の研究説もある。

「お菓子ない?」

「…」

特異世界は、本当にどうしようもなくなっただ。今は…そうだな。ゆっくりしよう。

「私、お茶なら行けるよ。水筒とティーパックあるし、この水筒水だから水出しで…あつ、火使えるからお湯いけるかな?」

「な、にを」

「え?だって、疲れたし。取り敢えず今はどうしようもないし。正直あれじゃない?外からの助けが来るか、銃弾切れるでしょ。流石に三

日三晩銃弾は個人が持てないだろうし、その前に多分助けが来るよ」
ぐちゃぐちゃは少し震えて、一拍置くと、

「ちがう、水筒溶けるだろう?」

「あ、そつち?なにをしてるの!?!って感じだと思ってたよ。で、なんで突然流暢になったの?」

「いや、このぐちゃぐちゃとした体で声が埋まってたけど、口を突き出させれば解決した」

言われて見てみれば、確かに、なんかにゆうつと出てる。クソキメエ。

「ちなみになんでタメ口?これまで、人のときは敬語だったくない?」

「人を肉壁にするやつに敬意は払わない」

「お菓子ない?」

「ない」

(・ロ・) チツ

希望と絶望がヤバい

「おい。お前が知っている範囲で、この体に入っている能力を教えてくださいませんか?」

「ん?んー、わかんないんだ。特異魔法ってなんだかわかるものじゃないの?」

全員とはいかなくても、わかる人にはわかる。確か、昔そんな説明を受けた気がする。

「余りにも数が多い」

「あつ確かに:」

だって、この人の体、聡太君の特異魔法があるのに、ぐちやぐちやと変化し続けてるからね。異形化何人いたんだろう?

「えーつと、まずは:好きなように体を変化させられる特異魔法。小さくも大きくも出来るし、体の構成物質も変えられるよ」

「:それ、下手したら死なないか?」

「全身スライムになっても生きれるから大丈夫でしょ」

とはいいつつも、液化させた時に一部が蒸発したらどうなるのだろうか?…こわいな。

「で、心が読める、ある程度まで時間を戻す、水を出す、雷を操る。後は、ぐちやぐちやの方が知ってるんじゃない?」

「なるほど。とは言いつつ、私も知っているのは少数だ。体の変化はわかっていても、それで何が出来るのかはわからないからな。結局のところ、特異魔法を制御出来ないだけなのだから」

と、そこで、ふと渡された手紙のことを思い出した。

「そういや、この手紙何?見てもいい?」

「いや、いつ私が君を突き飛ばそうとするか分からない。油断は得策ではないだろう」

ん、まあそうか。:本当に、なんであの紫は俺を全力で殺しに来ない?俺を殺したいのだろう?今は、これ以上なくらいに絶好の機会だと思っただけ?」

「ああ、そうだ。どうせなら、口で説明しよう。その手紙には、特異魔

法の正体について記している」

正体？

「特異魔法を消せる可能性があるかも、と調べていた最中のものだ。まあ、正体が分かったからこそ、そっちからのアプローチを諦めたのだが」

だとしたら、それをなぜ俺に伝えるんだ？意味がわからん。

「簡単だ。特異魔法、いや、君にとっては、記憶を取り戻す手がかりになるかもしれないぞ」

「それって……！」

その瞬間、ぐちゃぐちゃが一瞬固まった。すぐに乗り出しそうになった体を止め、手足を引っ込め、銃の斜線を意識……無理だ。そんなんできたら俺は最強だろう。一個なら運ゲー回避できても、数十個は話が違う。

雑に、水と雷が飛び出してくる。

当然、意味はない。特異魔法が元であるなら、俺が俺に効く訳がない。

じゃあ今の隙に……逃げも攻撃も出来ない。逃げれば銃に背中を撃たれる。攻撃なんて効くはずなし。

「時間切れ！せめて、特異世界で道連れに……っ！」

限りなく惜しく、罪悪感と嫌悪感が沸々と湧き上がっていくのを押しつけて、特異世界で、ぐちゃぐちゃを包み込んだ。

叫びは、銃声に掻き消されて、ぐちゃぐちゃとした体から、真っ赤な血飛沫が飛び散った。

そのまま——視界が切り替わった。

「っ？」

執事姿の男が、俺の体を掴んでいた。タイミングが悪かったのか、一発、肩に大きくダメージを貰っていた。

「はあっ、はあ、はあ、……やいば様。そちらのお手紙には我らが主人様の望みが入っております。ぜひ、お読みください」

「ちよ」

何か聞く前に、執事は姿を消した。と、同時に、足音が響く。紫髪

の人物は、周囲を見回し、焦ったように走り去っていった。その視界は間違いなく俺を捉えられる位置にいたが…。

「あつぶな」

紫髪の人物の後ろからひよっこりと飛び出して来た男の子、ナルによつて、ギリツギリで気づかれずに済んだのだ。

ヤバい？異世界来ちやつた？

「ちよ、えーナルどうしたの!!!」

「どうしたって勝手に消えたのそっちじゃん！めっちゃ怖かったんだからね！わかってんの？もしあんたが消えたら私はまた一人ぼっちよ！やっつけられるか！」

うがー！と噛みつかんばかりに叫ぶナル。まあ言ってることはその通りだとして…

「なんでここに？というか、なんで紫色の奴のところにいたの？」

「いや、私もあの場面見てたんだから黒幕がアイツってわかるわ舐めんな。あんたを探してたら見つけたから、どうせ関係ある場所いくでしよと思っついていったのよ。私に感謝してよね！」

いや、だとしてもなんちゆう確率なんだ…？そもそも、俺は執事に連れてこられた訳だし、なんなら、あのぐちゃぐちゃを…

「うっ」

「やいば？」

ちよつと気持ち悪い。…俺、人をちゃんと殺したんだよな。ちゃんと考えて、それも、特異魔法があるとはいえ、痛みがなくなるわけでもないのに、銃弾の盾となってくれた奴を…。

「大丈夫。なんでもないよ」

「あつそ。ならいいけど。…ねえ、この音も大丈夫？」

ナルは、若干何かを察したように言った。耳をすませば…いや、耳をすまさなくとも、何か、バキバキと、崩壊しているような音がする。でも、それにしても地面が崩れる様子を見せない。ちよつと揺れるだけ。

その音は、今もなお続く。そして、確実に俺たちの方向に近づいている。

「マジか…！ナル!!」

ナルを抱き寄せて、急所を中心に体で覆っていく。無理なところは仕方ない。そして、これが魔法であることを祈る。

そのまま、チャプンと飲み込まれた。

喧しい騒音に目を覚ました。

「はっ！ナル!!!」

地面がある。痛みはない。怪我もない。そして、ナルは、ちゃんと私の中に抱えられている。

「わー!!!ちよ、激ヤバ！土砂降りじゃん!!!」

「えっ?」

あつ、そう言われれば、この騒音は雨音で、腕の中のナルは大粒の雨にさらされ、ぐっしよりとしている。

「はやく屋根！それか傘！になつて!」

「あ、うん」

体の位置を変えて、取り敢えずナルに雨が当たらないように…:そもそも、地面がビチョビチョなので意味がなかった。むしろ沈む。

「うん。結局濡れるわ。雨宿りできそうな場所探すぞー」

「最悪!!!」

ここがどこかわからないけど、とにかく、先も見えないレベルの豪雨の中で雨を凌げる場所を探した。

「あつ、みつけ」

「連れて行って!」

足首まで来た水のせいでうまく進めないナルが、イライラしながら叫ぶ。

「はいはい。舌嚙まないでよ」

これは、民家だろうか？東南アジアとかでよく見る、高床式だ。つてうわ、水ほんとやばいな。

「ごめんくださいーい」

取り敢えず段差を登って雨が多少凌げる場所に来たので、中に入れてもらえないかなとドアを叩いた。

「はい」

人がいた。良かった。キイと軋むような音を立てながら扉が開き、そして、雨が室内に入ると見た途端血相を変えた。

「うわっ！ちよ、雨入ってくるからにはやく入ってきて!!」

俺がまず中に入れられて、

「君も！」

ナルも、むりやり中に連れ込まれた。

「（。 ㇏ ）ハア？なんでアンタ達は外に出てるの？」

とてつもなく馬鹿を見るような目で女の人が俺達を見ていた。ナルにタオルを投げつけて、着替えも渡してくれるあたり、優しそうな人であることは間違いなかった。

「いや、目が覚めたら外にいて…」

「んな馬鹿な話あるか！つか、なんでそっちのお姉ちゃんは濡れてないんだ…？」

女の人と言う通り、何もかもがびつちよびちよになったナルに対して、俺は全く濡れていない。なんか、ナルの視線が痛い。

「まあ、それはともかく…ちよつと待つてください。ナルの事が見えるんですか？」

「…え？その子幽霊だったりするの？それにしてもちゃんと君を睨んでるよ？呪われてる？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんですけど…あ、そうだ。ここってどこですか？」

もう、なんか、ナルの事は一旦置いてこう。認知されるといのは歓迎すべきことであるし、そのままにしてもあんまり悪いことはなはずだ。そんなことより現状把握。

「（。 ㇏ ）ハア？」

「あ、もうこちらのことは常識のないヤバイやつと考えていただけ

ばと思いますうー」

「何よアンタ…」

ちよつと頭おかしかったないまの。でも悲しいかな。自己紹介の変なノリと同じで、もう後戻りは出来ないのだ。

「えつと、ここはクラス。今は、雨季が始まったばかりだから…後数年は雨かな」

「え？ツツコミ待ちですか？」

「何がですか??？」

「え、そりや、雨季とか言ってるくせに年単位とか、おかしくないですか？それに、クラス？聞いたことないです」

つか、あの雨が数年続くとか、普通に沈むだろ？別に、そんなに高床式の家の造りも高くなかったし、もう外はざぶざぶしていたことから考えてもだめじゃない？

「はあ…そんなあなたはどこから？」

「日本です」

「どこですか？そこ？それ正式名称じゃないですよ？ほんとはなんて名前？」

「いや、正式名称ですけど？」

「ねえ」

ナルが、ガシガシと髪を引っ張る。

「痛いなあ。どうしたの？」

「いや、なんで意地張ってるんかわかんないけど、ここ、異世界じゃない？」

え、異世界来ちゃった？

ヤバい世界だ…

「…はあ。そうですか」

特に隠すことでもないの、俺達がどこから、どういう経緯で来たのかを軽く話してみた。ものすごい冷めた反応。風ひいちゃう。

「まあ、それはいいとしてですね…。あの、ご飯とかどうしてるんですか？こんな雨だと、外にすら出られないでしょうし、えーと？雨季とか言っていましたし簡単には止まないですよ？」

正直、外はもうザツブザブ。濡れない俺でも足はとられるので、外になんて出られない。

「あんた、ものすごい箱入り娘みたいね。はあ…あのね？雨ってというのは、水神レイカ様の、ありがた〜いお恵みなの。この水を飲んでいれば、飢えることもないし、むしろ、雨の振らない乾季に向けて準備しないといけないのよ」

…へ？

「あの！水神って…？」

「レイカ様のこと？私もね、一回しか見たことないけど、物凄く美しい御方なの！透き通るような水色の髪はサラツサラだし、手足は細いし、指先はきれいだし、歩き方も凜としていて、服装からオーラまで私達の理想って感じなの！一回しか見たことないんだけど、忘れたことなんて一度もないわ!! ああ…もしあの方に話しかけられたら私は…あつ！そうそう。声も透き通るようで、できることならどこかに保存して一生聞いていたいし、こけちやつた子供に向けたあの慈愛の笑み！ファ~~~~!!!」

「レイカ、ちゃん？」

「は？何つつたテメエ！」

飛び出して来た手を避ける。まあ、こんなにもレイカ様に依存している世界ならそうなるのかな…？取り敢えず呼び名は変えよう。

「あの、どこでその御方に会えるんですか!？」

「うーん…。普段は教会にいるらしいけど…最近、ちよつと不穏な事態が起きてるから、その対処をなされてるのかも」

「不穏な事態？」

「いやあ、なんか、一部の水に謎の生物が住み着いているらしいのよ。その生態調査…だったかなあ」

「あやふやなんですわね」

「まあ、教会の人間(笑)が話してることなんてねえ…真面目に聞くほうが馬鹿でしょ。何が終わりは近づいている、よ。馬鹿馬鹿しい」

おっと、ものすごい不穏な言葉が聞こえる。しかし、彼女は何かを切り替えたかのようにこつちを向いて、

「まあ、もう夜も遅いし、もし教会に行きたいのなら、明日にしなさい。どうせ、今行っても明日行っても変わらないだろうし」

「いや、どうやって行くんですか。外の雨やばいですよ」

「はあ…連れて行ってあげるわよ。それより、はい水。お腹すいてるんじゃない？あ、君もね。」

そうして差し出された水は、どこからどうみてもただの水。まじでこれで飢えないとか本気か？

「飲むときはお腹を膨らましたい！って思いながら飲むのよ。そうしたら、レイカ様の御力が水に現れるから」

そんな、意味不明なことを言われた俺は、疑いながらも口にする。

「…いや、ただの水じゃん」

空腹感もそのままである。ナルの方は…

「わっ、凄い。なんか、お腹が満たされていく感じがする！」

え…。あ、そうか。

特異魔法を解除して、再び一杯。

「うおっ…。これはすごい、けど」

確かに、空腹感はめっちゃ薄れた。満足感というか、少なくとも、菓子が食べたいとすら考えないレベルだ。でも、案の定というか、味はない。水味だ。

「よし。これで明日まで大丈夫ね！じゃあ、明日は教会。多分根気がいるからしっかりと寝ておくのよ！」

そうして翌日。彼女は、雨具すら用意せずに、扉を開けた。案の定外はぎぶぎぶと濁流が流れ、そして、雨もそのままだ。

それを確認して、彼女は突如、笛を取り出して、一気に吹く。
ピイイイイ!!

ズドドドドドオ!

爆速の屋根付きモーターボートが、町中を突っ走る。

「乗りな! 目的地は!」

「教会でお願いします」

「あいよ!」

そして、教会に辿り着いた俺とナルは、10時間待ちという行列の看板を持たされたのであった。

ヤバいだろこの教会！

…あつ。

急いで、俺は服のポケットを漁る。確か、あのぐちやぐちやから貰っていた手紙。おそらくは、これからの行動指針となるに違いないその手紙を、すっかり忘れていた。

「ちよつとナル。看板お願い」

「…まあいいけど」

10時間待ち看板を預けて、そして、やつとこのことで取り出せた手紙を開いた。俺の特異魔法で服ごと濡れないため、この手紙も端が濡れるだけに済んでいたのだ。

『世界を壊せ』と殴り書きされている。

「…は？」

そして、その次のページには、

『特異魔法の元は、その使用者の前世である可能性が高い』

『そしてその上位互換とも言える特異世界は、この、今わたしたちがいる世界の一部を、その前世の法則で上書きしているのだ』

『よって、特異魔法を持つ者は元々の己が住む世界が減び、そして、その世界のすべてを元に構築されたものである可能性が高い。その体のつくりに異常があるのも、それが原因と考えられる』

『そのため、特異魔法の消去をするのであれば、体内に存在する世界を完全に抹消する必要があり、それは、莫大なエネルギーを必要とする』

『このことから、特異魔法を消すには、抹消というよりは、どこかへ放流することが…』

「…まーじか」

「あの、すいません。看板貰っても？」

「あ、はいどうぞ」

この手紙というか、報告書というか、まあ、これを見ると、さつきの世界を壊せというのは、この世界を壊して、レイカちゃんの中に戻すことを言っているのか？

特異魔法の元が世界であるなら、この異世界を何らかの方法で崩壊

させれば、それによってレイカちゃんの、記憶が…戻る、けど。

そして多分同時に、この世界の人の生活も終わる。この、クラスという街だけじゃなく、多分、あの川の向こうにも、きっと人がいるはずで、それも含めて全員…。

「ねえねえ、やいば。一旦進も」

ナルの声にはつとすれば、人が動き出そうとしていた。慌てて、それについていく。…取り敢えず、今はレイカちゃんに会ってみよう。そうしてざつと10時間くらい待ってから。

「ようこそ。神殿へ。初めての信者様ですね？レイカ様にお会いしたのでしたら、こちらへ」

そうして、噴水の前にたたされた。そして、誰も何も喋らないでざつと一分くらい。

「おや、運が悪かったようですね。また後日お越しください」

そして、閉め出された。

「????」

更に2分後、ナルも連れてこられた。

「????」

「????」

「…」

「クソがあ！」

そんな叫びは、濁流に流された。

「どーいうことなんですか!？」

「そりゃ、あんな数の相手はできないだろうししかたなくない？」

「いや、それはそうだろうけど!」

とはいえ、納得なんて出来るはずもない。十時間待って1分試して変えるとかふざけている。

「まあ、毎日行ったらいつかは会えるわよ。一説によると、夜は絶対

に会えるらしいけど、そもそも、夜は水のベールによって侵入できないことから生まれた噂だから眉唾ね。信憑性皆無だし、諦めて朝一に毎日並びなさい。あ、迷惑だから、後2日か3日でどっか住処でも見つけてね」

「えっ」

「はい。今日の分の水」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございますー！」

お礼を言いながら、ナルと目を合わせて頷く。確信があつた。今、ナルとの思いは確実に一致している。

十時間待ちはもう嫌だ!!!

俺達は、その思いを胸に、こっそり夜に外へ繰り出した。

ずどどお!!!

濁流に啞然としたが、たまたま月明かりに照らされるボートに手をふれば、答えてくれたのでなんとかなつた。そして、その神殿に辿り着いた。

外見は、朝と特にかわりはない。水のベールというのも、全くわからない。だから、列のない扉に手をかける。

水音が、勢いよく迫ってくる。

「ナル。気をつけてよー！」

石の扉をこじ開けるとばかりに、神殿の中から透き通った水が溢れ出てきた。特異魔法に任せて、水を無効にし突き進む。

そうして、神殿の奥に、女性が一人佇んでいた。

「誰？」

驚きを含む、透き通った声だった。

ヤバい雰囲気だあ…

なんかすっごい神秘的な教会の奥に、ものすっごいきれいな女の人
がいたぜ！内なる男を呼び出したくなるほどにきれいだけど、そんな
ことよりもなんて言えばいいのかわからないぜ！

「えーっとお…、やいば、です」

「えっと、ナルです」

「誰？」

おっしやるとおりでございます。名前言ったらワンちゃんとか考
えてたけど、そもそもこの人がレイカちゃんの記憶を持っているとは
限らないもんなあ…。

「えっと、レイカちゃ…じゃなくて、レイカ様ですか？」

「…なんのつもりかしら？」

うわあくめっっちゃ警戒されてるなあ。うーん。いやでも、名前の一
致は何かありそうなんだけどなあ…。レイカちゃんの、名前も出して
みるかな？

「あの、レイカちゃんに頼まれて」

ピクリと彼女の眉が跳ね、同時に、とてつもない威圧感が彼女から
放たれた。ナルは飛び跳ねて、私の背中にしがみついた。

「なんのつもりかはわかりませんが、これ以上変なことを言うのであ
れば追いかけてますよ」

「あの、レイカちゃんはわかるんですか？」

「——邪神のことを私が知らないとしても？」

「へ？」

「消えろ」

教会を埋め尽くさんとばかりに、大量の水が押し寄せた。

「…なんで普通にいるのよ!!!」

「え、いや、ごめんなさい」!!!」

なんかブチギレられた。

「ライカにそんな力はないはずよ! 貴方何者!？」

「あ、えつと、なんと言いますか…。あつ、レイカ様。ちなみになんですけどライカ様ってどんな御方なのですか?」

「は?」

おおくうご立腹。まあ向こうからしてみれば敵?の使者と思つて
る人がその主の話を聞こうとしてるんだから当然っちや当然なのか
な?

「いや、そもそもなんですけど、ライカってそんな一人しかいないとは
限らないじゃないですか。私の言うライカはとつても可愛くて愛嬌
があつて優しい女の子ですけど、あなたの言う邪神ライカ?はどうな
んですか?」

「じゃああつてるじゃない!」

「ええ…」

「あのね?ライカは私の可愛いかわいい妹なの!可愛いなんて当たり
前じゃない!!!」

「ええ?」

ひとまず、理解が出来ないのでナルに話を振った。

「ナル、どう思う?」

「(; ; ω ; ;)」

「ああ、泣かないで!」

流石に水に呑み込まれるのは怖かったらしい。落ち着くまでよし
よしする。いや、俺は経験あるから大丈夫なんだけどね…

「えつと、なんで妹でそんなに可愛いって言ってるのに邪神だとか私
達を追い出そうとするんですか?」

「いや、一般的に私の妹が邪神って言われてるってだけだし、それに
習っただけよ。それに、会いに行けないんだからライカのことをライ
カちゃんとかふざけたこと言う奴は潰さないとじゃない?と、言うわ

けでー」

グググツと何かが手に集まったので、ナルを正面に抱きかかえて
いる今じゃ危ないので特異世界で打ち消す。

「ハア？なにそれ？ズル？」

「あーまあ。それは一旦置いて、あの、この世界から出たいんです
けど、どうすればいいですか？」

「…それは、ライカに聞いたら？ライカのところから来たんでしょ？
というか、世界その時点で世界を渡れるんだからそれでいいじゃな
い」

「ああいえ、それはその——実は嘘でね？」

「は？」

ライカちゃんに頼まれてとか、適当な嘘をつけてしまったので、そ
こについての軌道修正、そして、ついでにライカちゃん（神様）のこ
とも聞いた。

「なるほどなるほど。小さい頃は一緒にいたけど、創造神的な人に世
界ごとむりやり離されたから、担当の世界から出られない貴方達は会
えない、と…」

「ねえ、ちなみにレイカ様とライカ様は双子？」

「いや、違うけど？」

おっと、やっぱりなんか違う。うーん、やっぱり私の大好きな二人
とこの神様達は違うみたい？…なら、一旦は放置になるのかな。世界
を壊すというのは流石に怖い。というか、それで本当に記憶が戻るか
なんて確証もない。なら、やっぱり今目指すのは元の世界に戻ること
だろう。

「ま、というわけで、私達帰りたいたいですけど可能ですか？」

「それができるなら私もライカに会いに行ってるわよ。…まあ、最近
なんかどう考えても私の世界出身じゃないのが出てきたから、それを
見に行くのはどう？」

それは、一部の水に謎の生物が住み着いているとかの話かな？

「え！いいんですか？ありがとうございます！」

「決まり？じゃあ、私はゆっくりしてるから、また朝にね」

「あ、はい」

そんなわけで許可も取れたので、私とナルはその場を去った。

ブイイイイインン!!!!

そして、神殿から出てきたタイミングで、モーターボートが水しぶきを立てながら神殿前に止まった。

「乗りな!」

ブイイイイインン!!!!

帰宅した私達は、安心して眠りについたのだった。

名前知らないのヤバない？

「キヤーー!!!」

「わっ!？」

「へっ!？」

突如響いた叫び声に、俺とナルは飛び起きた。声の主はもちろんあの人の名前ってなんだ？聞いてたくない？

とか、そんな事を考えるんじゃない、今は悲鳴の原因を探r

「レレレレイカ様!?!美しすぎてしぬうゝ!!!」

「…」

「…すやあ」

「いや寝るなよ」

二度寝し始めたナルを、俺は軽く叩いた。

「ごめんなさい。お茶菓子ぐらいしかなくて…」シャツシャツシャツ

「頭おかしいのかしら…?」

申し訳無さそうな顔をしながらお茶菓子を出し、速攻でデッサンの続きを始める彼女。目は完全にヤバい人そのもの。ペンの速さは凄いが、ものすごいペースでボツが量産されていた。もちろん、デッサンされているレイカ様はドン引きだ。

「じゃあ向かいましょう」

「てか、良くわかりましたね。一応出向くつもりだったんですけど」

「そっちの少年に水をつけておいたから、当然よ。…あと、時間に関しては気分が変わっただけよ」

「みみがしあわせえ…(*?、*)」

「「…」」

なんか恍惚としている彼女は放っておいて、俺達はレイカ様に連れられて現場に向かうことにした。

「ここですね」

「まあ、そうね」

「わかりやすっ！」

レイカ様が言うよりもはやく、ここが例の場所なのだとして理解できた。それほどまでに特徴的だ。

透き通った湖に、一つ、ブヨブヨとした膜のようなものが浮かんでいた。それは、ところどころ透き通っているのだが、かなりの速度でそれは変化し、赤、青、黄、緑、紫、白、黒、などと、豊富な色へと変化していた。

「で、ちよつと見てほしいんだけど」

レイカ様は手を伸ばし、そして、目を瞑った。

湖から大量の水が、形を持って浮かび上がる。それは、剣や槍など、様々な武器へと姿を固め、そのブヨブヨ目掛けて飛んでいった。

しかし、飛んできた武器はそれに穴を空けるのみで、微塵も動く気配がない。なんなら、即座にもとに戻っている。いや、むしろ、武器によって凹んだのではなく、武器が来る場所に予め穴を開けたみたいなのだ。

「どうすれば…気味悪くて誰も近づかないしねえ…」

「まあ、これは気持ち悪いですねえ」

でも、なんというか、これなら、俺の特異世界でどうとでもなりそうである。アレは未知だし、俺の世界の常識にはないのだから。

と、そう思ったから何も言わずに特異世界を当ててみた。

「おお!!」

歓声のようなものがレイカ様から聞こえるが、これは言ってしまうば水に溶けた？だけである。故に…

「…なんで戻ってきてるのよー！」

「やっぱり…」

特異世界を解いた瞬間、モニュモニュとブヨブヨしたものが浮上し、集まってきた。そして、数分もしないうちにまたはじめと同じように水上にブヨブヨが浮かんだ。

「もー、あんたのそれ、もつとこう、定期的に使えないの？」
「無理ですね！」

とまあ、そんな事を言っていると、ナルが袖をくいくいと引っ張ってきた。

「どうした？」

「あれ」

そうして指さされたのは、明らかな空間の歪み。ブヨブヨとした膜の上にあって、ちようどブヨブヨが足場になる位置である。

「ちよつと、何見てるの？」

「え？見えないんですか？」

「ぶ」丁寧にナルは指を指しているし、一生懸命俺に登って、目線を合わせながら解説しているが、それでもピンと来た様子がない。

取り敢えず、見えるものの話をする。

「つてことは、あのブヨブヨはあそこから来たのよね…」

何か考えているが、その時、俺は思っていた。

行くしかなくね？

「じゃあナル、行こつか」

「この世界出られそうだもんね」

「え!?!見捨てるのですか？」

「原因わかったら戻ってくる!ばいばい!」

思い立ったが吉日と、俺達はその日のうちにブヨブヨを踏みつけて飛び上がった。

バチッ!

「あ、やいばです」

「…テルです」

おっと？ナチュラルに嘘をついていくぞ？…多分、ナルの中の女子高生が危険信号を鳴らしているのかな？

「やいばさんにテルさん！いい名前ですね！」

「あ、ありがとうございます」

「…」

ものすごいニッコニコだ。よく見ると顔も整っているし、なんというか、爽さんと同じくらいモテそう。

と、そう話している間にもピカッと雷が落ち続けている。しかし、タイカさんは全く持つて動じていない。

「あ、さつきは物凄いビビってましたね…」

「え？アハハ。そりや雷神様のお怒りですよ。怖いに決まってるじゃないですかあ」

「雷神様のお怒り？」

「ん？ええ。あー、もしかしてご存知ないですかね？それならお教えしましょう！この雷の理由！」

どこか声が嬉しそうだ。柔らかい笑顔で、つらつらと伝説を語ってくれた。ただ、やけに長々とした話ではあるが、結局のところ言いたいのは、

『お姉ちゃんに会えないから悲しい』

である。そして、悲しみの末にこうやって雷を撒き散らしているらしい。

「えっ…それ、嫌じゃないんですか？」

「…まあ、嫌ですけどね。それでも、いつも良くしてくれている神様が悲しいときぐらい泣かせてあげたいじゃないですか」

につこりと微笑むタイカさん。さつき雷にビビっていた姿からは想像できないほどにかっこいい。

「ちなみに、良くしてくれているっていうのは一体…？」

「え、ああ、雷神様は沢山の外敵から守ってくださるのですよ。農作物にイノシシが近付けば追い払ってくれますし、特に最近はブヨブヨの

変なものも吹き飛ばしてくださるのです。お陰で考えることも減りましたし助かりますよ」

「おおくなるほど。確かにそれは有り難いですね。ちなみに、雨とかは降ってないですけど、火事にはならないのですか?」

「え? 雷で火事になるわけなくないですか?」

あつ、そうなのね。

「それぐらいですか? もしまだなにか気になることがあればなんでもお教えしますよ!」

「あ、ありがとうございます。でももう思いつかないので…あ、そういうば、神様の名前はご存知ですか?」

「名前…わからないですね。雷神様としか名乗らないので…なんかすいません」

「ああいえ、こちらこそ変なことを聞いてしまつて申し訳ないです」

ひとまずは、何も思いつかないのでそれで質問をやめる。いやしかし、スリスリきて来た時にやばそうだったけど、思ったよりいい人だよかった。…だからナル。そんな離れなくていいんだよ。

「…」フルフル

「アハハ。嫌われちゃいましたかね…」

「あーまあ、ちよつとあの子は繊細なので…。ところで気になったんですけど、この家の持ち主って誰なんでしょう?」

「あ、確かに」

と、そこでナルが私の肩をとんとつついた。

一瞬で様々な思考が駆け巡り、そして、嫌な可能性が浮かんだ。

「待って、もしかして人いた?」

「え? マジですか?」

俺とタイカさんはそこら中に視線を巡らせて、そして、ナルの視線の先を見て、固まった。

屋根に張り付く、人形のなにかがそこにいた。

ヤバいぐらい不気味

「……………」

ちよつとほんとに意味がわからなくて固まってしまった。

取り敢えず、お互いに顔を見合わせる。そして、見ているものが幻覚の類ではないことを確認する。

「あの…？」

ブルリと屋根に張り付く何かが震えた。

ちなみに、この家の屋根は4メートルぐらいだろうか。どうやって登ったのかも、どれだけ長時間天井に張り付いているのかもわからない。

「あの、えつと、大丈夫ですか？降りるなら手伝いますよ？」

ブルリ。

「…その、私達も仕方なく入っただけで、その、あなたを害するつもりはありません。勝手に入ったことはどうか謝ります。でも、それはそれとしてはやく降りませんか？危ないですよ？」

「…にやあくん」

わあ！とつても可愛らしい声！これは猫

それは無理がある。

「あの、もしかしたらこの人、人が苦手で降りたくないって感じなんじゃないでしょうか。もう雷も止みましたし、出ていってみるのは…」

「そうなんですかねえ…」

まあ、取り敢えず出てみようねってことで、立ち上がる。ナ、じゃない。今はテルだ。

「テル、行くよ」

「…？」

（。ダ。）ハッ！

「うん」

手を引き、ナルを連れてタイカさんと家の外へ出た。特に何か音があるわけではない。ないが、ふと思いい立って扉をちらつと開けた。

!?!?
目があつた。

「?!?!」

「わあーごめんなさいごめんなさい!」

!?!?
影でよく見えないが、その人は物凄い動きで後退り、声にならない叫びをあげながらガン!と背中を強打した。そして、それに連動するようになりに近くに雷が落ちた。

「ギャアアア!!!」

「うえ、ちよ、大丈夫ですか…?」

待て。今はどつちを見るべきだ…? タイカさんは…まあいいだろうから今は背中を強打した人! あ、ナルがタイカさんの介抱に向かった。なら安心だ。

背中を強打した人に急いで駆け寄ると、そのタイミングで目がゆつくりと開かれた。まだ開ききつていない目で、まどろみながら、ゆつくりと顔をあげた。

「…あ、看護師さんこんにちわあああああ?!?!?!」

「ええええええ?!?!」

そして、叫ぶと同時に白目を剥いた。そして、また雷が鳴り響く。

「ギャアアア!!!」

「お兄さん落ち着いてください! ほら、当たってないんですから!」

「あつ…。そうか。ありがとうテルくん。助かったよ」

「あ、いえいえ」

ちようどいいタイミングでタイカさんをナルが宥めたので、すかさず尋ねる。

「あの、いきなりで悪いんですけど病院つて近いですか?」

「あ、えつと、すぐそこです!」

「急ぎましょう!」

すぐさま、白目を剥いた人を運び、病院へ連れて行つた。

ただ、病院の対応は極めて冷静で、私達というより、わたしが抱えている人を見て、すぐに指示した。

「連れてきてくださりありがとうございます。取り敢えず、状況を教えてくださいいただけますか?」

「あ、はい。それは…」

話しているうちに運ぶようか分からないが担架が来て、その人を乗せる。話を聞いている受付の人は、聞き終わると、髪の毛を軽く払い、「あ、やっぱり彼女でしたか。それに状況的にいつもと同じようですね。わかりました。少々お待ち下さい！」

三十分後。

看護師さんとともに、看護師さんに隠れた彼女がやってきた。

「あ、この子を運んでくれてありがとうございます。この子は…ほら、自己紹介」

「ら、らいかです」

「!?…いや、えっと、はい、やいばです。よろしく」

「あ、タイカです。どうも」

「ナ…テル。よろしく」

互いにぎこちなく会釈する。

「うん。この子、極度の人見知りだね。仲良くしてあげてよ」

「あ、それはもちろん」

なんとなく、名前からすべてを察した瞬間であった。

人見知りヤバあ…

「ほら、行ってきな。私は仕事があるからね」

とっ…と背中を押されて、ライカちゃん看護師さんが離れる。「あつ」と口から漏れた声に籠められた感情は、看護師さんの笑顔に封じ込められていた。

「…えつと、…あの、その…」

「あ、ライカちゃん？大丈夫？」

「ひやいつ！だ、だだだだだ」

おっとこれは…。うーん…。…。レイカちゃん出すか？

「あの、勘違いかもしれないんだけど、ライカちゃんって、お姉さんいる？レイカちゃんって言うんだけど…」

恐る恐る尋ねたその質問は、爆音を伴う雷によって返答される。

「な、なんでそれを…」

涙を浮かべて、その場に蹲るライカちゃん。外では、絶え間なく雷が鳴り響き始めた。

「怖い!!近寄らないでえ!!」

ライカちゃんが叫ぶ。

「ギヤアアア!!!」

!!!

タイカさんが叫ぶ。

「うわああああ!!!来ないでえ!」

ライカちゃんが叫ぶ。

「ギヤアアア!!」

タイカさんが叫ぶ。

「看護師さああん!!!」

ライカちゃんが叫ぶ。

「ギヤアアア!!!」

タイカさんが叫ぶ。

「うえええ……。……………」

ライカちゃんが叫ぶ？

「ギャアアア!!!」

タイカさんが叫ぶ。

「?????」

らいかは　こんらん　している　！

おっと、どうやらライカちゃんは異常な程にビビるタイカさんを見て冷静になったようだ。一緒に、ピタッと雷も止む。

「はっ！雷が…?」

雷が止めば、タイカさんは正気に戻る。

「……」

宇宙一気まずい空気が流れていた。そして、荒れ狂う二人を止めに来た看護師さんも、ゆっくり帰っていった。

「いや、突然変なこといってごめんね!!実は最近レイカちゃんっていう神様にあつてね?妹のライカちゃんの話聞いていたの!」

ひとまず席についたあと、取り敢えず、変な誤解をさせるまえに勢いよく説明する。恐る恐るライカちゃんを見ると、ちよつと気圧されている顔だが、こくこくと頷いてくれた。

そんなライカちゃんは今、ナルの横にいる。恐怖の対象である私とタイカさんを除いた結果である。

当然ながら、ライカちゃんは、俺の知るライカちゃんとは別物である。こっちは神様であり、なおかつ、レイカちゃんとは姉ではなく妹である。

「あの…えっと…お、姉ちゃんが…その…どうやって…」

なにを聞きたいのか分からない。ただ、この子が泣いていた理由が『お姉ちゃんに会えないから悲しい』なら、多分…

「えつとね、今、時空の裂け目的なのがあつてね？そこが、貴方のお姉さんの世界と繋がっていたんだよ」

ぱつ！と目を輝かせるライカちゃん。

「ほ、ほんと、です、か……」

「うん。多分なんだけど、最近出てきた透明のブヨブヨのせいだと思うよ。この世界からレイカちゃんの世界に移動していたっぽくてね」

「あ、ありが、とう、ございますっ！」

ぴよんと飛び跳ねて、ライカちゃんは外へ走る。

「あつ……」

「待って、ライカちゃん」

ナルが走ってついていく。その後ろをゆつくりと追いかける形で俺達も走り出した。

そして、数十分後。流石天井に貼り付いていただけあつて、中々な体力で走り続ける。そして、寸分違わずに、俺達が来た場所に来た。

「はあ、はあ」

ナルは完全に息切れだ。まあそれは仕方ないのかも。タイカさんと私は平気。もちろん、ライカちゃんも息が全く乱れてなかった。

「ど、どこっ!!」

ふるふると、頭を振るその上に空間が歪んでいた。

「あ、やっぱり見えない？この上なんだけど」

証明のために、ナルを肩車して、空間の歪みに触れてもらう。触れた部分だけ別の世界へ行き、そして外からは、消えて見えるらしい。タイカさんとライカちゃんはびっくりしている。

「うわっ、ブヨブヨしてる!!」

ナルは、空間の歪みの先の感覚に驚き、手を引つ込めた。手をさすさすして、俺の服で手を拭いている。おいこら。

「す、すごい！わ、私もいけますか？」

「どうなんだろ……」

ちよつと悩んでいると、タイカさんが胸をどんと叩く。

「俺に任せてください！俺も持ち上げますよ！」

「あ、ホントですか！」

よかった。俺はともかく、ナルとライカちゃんは確実に無理そうな高さにあつたのだ。

「じゃあ俺がテルくんを」

「私がライカちゃんですね」

二人をよつこらせと持ち上げる。そして、怪我をしないように、ゆつくりと時空の裂け目に入れていく。

「うわあ……。なんかこれ嫌ですね」

「そうですね」

姿が見えなくなれば、私もタイカさんも助走をつけて飛び込んだ。

目を開けると、柔らかな感覚に触れ、そして弾かれる。痛みには絶えながら目を開けると、

「いやああああ!!!」

ブヨン、と、上が見えないほどのサイズのブヨブヨが、ちようどレイカちゃんを飲み込んでいた。

ヤバい（泣）

なんでこうなっているのか。なにがあつたのか。それを考えるより先に、特異世界でレイカちゃんを包み込む。

「アアアアア!!!」

レイカちゃんが苦しみます。多分あれだ。特異魔法持ちにかけたらなるやつ。苦しいだろうけど、周囲のブヨブヨが力無く溶けているから、もうちよい我慢して欲しい。

「お姉ちゃんを返して!!」

爆音とともに、雷が叩き付けられる。しかし、余りにも巨大なブヨブヨには、あまり効いた様子がなかった。

効いたら良かったけど、まあ、今重要なのはレイカちゃんの救出だ。今、レイカちゃんの周囲は特異世界で包んでいるが、更にその周囲をブヨブヨに吞まれてしまっている。

!!
というわけで突っ込む。俺の体が吞まれることはきつとないはず

ブヨブヨを掻き分けて、奥にいるレイカちゃんの腕を掴む。痛みからか物凄い暴れようだが、私も一応鍛えているので、ずっと神殿の奥にいたレイカちゃんに負けるわけがない。

「アアアアア!!!」

「ごめんね！すぐ助けるから！」

ブヨブヨからレイカちゃんを引き抜く。後めっちゃ苦しそうなので特異世界の範囲からレイカちゃんを出した。

「はあはあ。痛い…」

「お姉ちゃん!!!」

「ら、レイカ!?!」

あ、姉妹が抱き合った。ただ、そんなことしている時間はないなあ…。

「タイカさん！その二人を運びましょう！ナ、テ、…もう良いや。ナルも手伝って!!!」

「り」

「わかりました！テルさん？裂け目ってどこに!？」

「あっち」

おし。後は時間を稼げばライカちゃんの方の世界に逃げられそうだが、ブヨブヨは俺達をのみこまんとブクブクと太っていく。

「ま、特異世界があればなんとかなるからね！」

うすーく広げるイメージで、特異世界による空間の壁を作っている。ほんとは、ナルとかタイカさんとかも一気に巻き込んだほうが楽なんだけど、レイカちゃんとライカちゃんがどれだけ苦しむかわからないからね。集中しなきゃ。

『あの、やいばさん。それ、やめてもらえませんか？』

「…え？」

ブヨブヨが倒れ込み、特異世界に触れたそばから溶けていく。だけど、集中が切れたからか、生まれた隙間からブヨブヨが入り込む。

たった数センチ。それが、人を丸呑みできるサイズに一瞬で広がった。

「お姉ちゃん!!」

危機を感じて放たれた高速の雷が、私の特異世界に掻き消される。

そのまま、立ちはだかるライカちゃんを無視して、レイカちゃんだけを飲み込んだ。

そのブヨブヨはすぐに小さくなり、コロコロと転がり、特異世界の隙間から、もとのブヨブヨに合流する。

「待ってー！」

ライカちゃんが叫ぶ。その一連の流れを、私はブーツと眺めていた。

淡い期待を胸に、そのブヨブヨを見つめる。

ゴコゴコと膨らみ、縮み、ちぎれ、そして、人1人分のブヨブヨとした塊が、ポイツと投げ捨てられた。

「ねえ、やいば。さっきの声…」

「ごめん。ちよつと待って」

「お姉ちゃん!!!」

「あー、今は暴れないで！雷神様！落ち着いて！なにがあるかわからないから！後やいばさん！なにをしているんですか!!!」

その塊は、ゆつくりと人を形作っていく。その横で、元々のブヨブヨが、破裂し、そして、消えていった。

やっぱり、今、人の形を作っているのが本体だ。私より小さい女の子。既視感の強い背の高さ。そして、さっきの声。

ブヨブヨが、完全に人となる。私が愛した、二人の少女の片割れ。私の求めてやまなかった、レイカちゃんが、そこにいた。

「…お久しぶりです。やいばさん」

少し、距離のある物言いに、涙が溢れた。

ヤバい方面に向かってそう

レイカちゃんは体を大きく伸ばし、飛んだり、声を出したり、手から水を出したりして、調子を確かめているようだった。

そんな彼女を見ていると、どうしても涙が止まらない。間違いない、彼女は記憶を持っていて、そして、俺はその状態のレイカちゃんをどれほど求めていたのかと、思い知った。

「泣きすぎですよ。やいばさん」

「だつてえ…。もう会えないって…」

「まあ…。正直、私からしたらちよつと前はやいばさんと一緒にいたので、あんまり実感がわきませんけど…」

「うわああああ!」

駆け寄って抱き着く。レイカちゃんは驚いたようにビクリと体をはねさせたけど、受け入れてくれた。

「あ、ナルくん。久し振り。というか見えるんだね」

「久し振り! そうなんだ! なんでかわからないけど!」

「そっか」

どうやら、ナルも来たみたいだ。仲良く話し合っている。

「お姉ちゃんを返して!」

そんな、感動の再開に、怒りと悲しみを含む叫びが響いた。

「お姉ちゃんはどこにいったの! あなたは誰なの! 返してえ!」

雷は落ちない。これまでを考えれば驚きだ。おかげで、タイカさんが暴れてない。

「…そうですね。やいばさん。説明してもらえますか?」

タイカさんも、ライカちゃんが飛び出さないよう抑えながら疑問を投げ掛けて来ている。若干、俺の方を敵視しているかな?

「いやこれは――」

そうして、説明しようとする

「えい」

軽い一言とともに現れた水流が、タイカさんごと、ライカちゃんをさらっていった。

「え？」

勢いそのままに、時空の裂け目まで二人を押し込んだ。

「なにをして「ライカのためです」

「っ!？」

その一言で、レイカちゃんがなにをしようとしているのかがわかった。

「ナル！」

「いいの？」

「まだなんとかできるかもでしょ！」

「はいよー。捕まえた」

「ナルくん？」

ナルがレイカちゃんを捕獲したのを見届けて、私も時空の裂け目に飛び込んだ。

到着と同時に、爆音が響く。音の余韻が消え去る前に、次々と雷が落ち、レイカちゃんの世界にどつしりと居座る、ブヨブヨとした物体を弱らせていく。

レイカちゃんの方にいたのはたった少し。だというのに、ブヨブヨはレイカちゃんの方と遜色ないほどの大きさを誇っていた。

つまりは、もう既に大量の人、いや、世界を巻き込んでいることになる。

そんな中、ブヨブヨの攻撃を避け、そして、雷を落としている二人のコンビが目映る。

「ちよ、ちよっと!!!」

「ギャアアア!!!」

違う。タイカさんが暴走して、たまたまブヨブヨの攻撃を避けられているだけだ。そのタイカさんに抱かれているライカちゃんはひたすらに攻撃を繰り返している。

だが、ブヨブヨも学ぶようで、タイカさんの周囲を囲み始めた。暴走するタイカさんは、それを気にせず突っ走る。

「いやあああ!!…あ?」

迫るブヨブヨを見て叫ぶライカちゃん。でも、その先にあるブヨブヨがぺしやつと潰れたのを見て、不思議そうに声を上げた。

当然というか、俺だ。タイカさんの足が早いため、追いつくのは難しいから声を張る。

「ライカちゃん! タイカさんが進んでいる方向に時空の裂け目があるよ! 雷は一旦止めてタイカさんを落ち着かせて! 今度は絶対通さないから!」

こつちを振り向くライカちゃん。でも、信じきれないようで、雷を止める気配がない。お姉さんを助けられなかったのが響いてるのだろう。

その代わりにライカちゃんは、ブヨブヨには当たらない位置に雷を落とした。

三方向に落とされた雷は、雷に怯えるタイカさんを誘導する。

そのまま、ライカちゃんだけでブヨブヨを捌き、そして、そこだけは賭けなのだろう。俺の言った時空の裂け目に飛び込んだ。

「あー、よかった」

ライカちゃんとタイカさんがいなくなった世界でブヨブヨは、俺に全くの注目をせず、動きを止めた。

「わー!」

「…んー」

そんな傍ら、時空の裂け目から水が溢れ出し、ライカちゃんとナルが流されて来た。なんかナルは楽しそう。

「…やいばさん。その様子だとわかっていますよね。私がやること」

「うん」

「で、うまく逃がしたんですね。あれの裂け目ですか?」

「…」

「じゃあ私は…その前にさ」

先に行こうとしたレイカちゃんを止める。

「もうちよつと詳細を教えてくださいな。このブヨブヨのことか、レ
イカちゃんの知っていることをさ」

ヤバい決意

「はあ」

一つ、ため息をついたレイカちゃんは、そびえたって動こうとしないブヨブヨにもたれかかった。

「急ぐことでも無いですし、いいですよ。と言っても、私は、私のことしかわからないので、やいばさんが求めているものとは違うかもですけど」

「そっか」

レイカちゃんは、言葉を選ぶように目を閉じて、そして、話し始めた。

「では。まず、このブヨブヨの正体は、あまりわかりません。でも、このブヨブヨの目的は、なんとなくわかります。多分、一つにしようとしているんです。少し前までそうだったように」

「一つに？」

「はい。レイカはどうかわかりませんが、私は今、色々な人の記憶がちよつとずつ、本当にちよつとずつあるんです。前までは忘れていた記憶。そして、この記憶の断片と言うんですかね？これらにポツポツと生活がおかしくなっていく様子が感じられるんです。なので、あの世界が滅亡するの的があったんじゃないかな？的、勿論、このブヨブヨが原因じゃない、別のことで」

「それってちゃんと覚えてたりするの？」

「いえ、覚えてないです。でも、正直そこはどうでもいいです。ただ言えるのは、このブヨブヨとした存在が、あっちの世界の存在を飲み込むたび、私を取り戻せました」

「…」

「人や物を、一人ひとり、一つひとつ、そうしたら、ちよびつとずつ、でもある時は、ピースがハマったかのようにどつ、て、どんどん私が再構築されているような感じがありました。」

…そして、完全に記憶が戻ったのは、あの人…あの世界の神様を飲み込むちよつと前です」

「え…!？」

突然、驚きの一言が発せられた。

「じゃあ、もうあの時点でレイカちゃんは…」

「はい。多分この形にはなれたと思います」

「そう、なんだ」

「でも、間違いなく、ライカを思う気持ちと、私のこの特異魔法は失われると思います」

ぐるんと、雰囲気が変わった。

「記憶が戻った時点で、確信がありました。この記憶の中の私には絶対にまだ足りない。だから、目の前に何故かいたやいばさんに声を掛けて、動揺させようと思ったんです。私の記憶が、記憶どおりの私を作るには、あの女の人を取り込まないとつてずつと言っていたので」

「そして実際、私の認識が明確に変わったと思います。ライカという姉がいる私から、何よりも大切な、命に替えてでも守りたいと思える姉がいる私になりました。だから、私と同じように、ライカをもとに戻すには、あの二人を余さずに取り込みたい。それでやっと、ライカが戻ると思います」

そして、ブヨブヨをペチペチと叩く。

「ねえ、この世界が、ライカちゃんのである確証ってある？」

ふと、思いついた質問が、レイカちゃんの動きを止めた。

「それは…ないです。…あ、あの、やいばさん。ちよつと質問なんですけど、元の世界の私達ってどうなっているんですか？ここって、あそことは違う場所ですよね？」

「あ、えつとそうだな。皆、生きてはいるよ。でも、これまでの記憶は全部失くなって、レイカちゃんとライカちゃんは双子であることすら忘れてた。後この場所は…ちよつと難しいな。逆にどんな世界だと思う？」

「えつ。待ってください。私は、取り込むたびに私が戻ってくる感覚があったので、つきりそつちの世界では消えているんだと思っただんですけど…いるんですね。…この世界についてなんて言われ

ても分かりません。私を広く薄く広げた世界とかですか?」

ちよつと要素外のことに驚きつつ、レイカちゃんは突然の質問に投げやりながらもちゃんと答えてくれた。

「多分この場所、というか、この世界はレイカちゃんやライカちゃんが持つように、特異魔法の元になった世界だと思うよ」

「…なるほど。それってやっぱ、あの御主人様とか言われていた人のせいですか?」

「んー、ちよつと違うなあ。その人が、というより、その人の能力が悪用されたつて感じ」

「んー、いや、はい。詳細は今度聞きましょう。それより今はライカです。やいばさんは多分落とし所を探そうとしていると思うんですけど、無理です。私はライカから何か失われるのなんて嫌です。何が何でもやります。もしここがライカの世界じゃないなら、どうせ繋がってるんだらうからライカを見つけるまでやります」

「んー、なら、私を倒してから先に行け、かな?」

「なつー!卑怯です!そんなの勝てるわけ無いじゃないですか!」

実際そう。私は、レイカちゃんのような、特異魔法以外の攻撃手段が無い相手に対してはかなり強い。

「やらないよりマシかな」

そう呟いたレイカちゃんは、大量の水を操り始めた。

何をするのかわからないけど、何をしたとして、私はどうにもならない。ちゃんと、レイカちゃんから目を離さなければ、逃げられることはないんだ。

「やいば。えいっ」

「えっ」

グラつと、突然手を引かれて体制を崩した。

「ナルくん。ありがとうございます!」

待っていたと言わんばかりに、レイカちゃんは水のブースト込みで時空の裂け目にダツシュする。

咄嗟に特異世界をやるうとして、ピタリと理性がストップをかけた。

そんなことをしているうちに、レイカちゃんはもう見えなくなつた。

「…ナル。裏切つたね」

「まあね」

フフンとちよつと得意げそう。全くこの子は、いつの間にも買収されただんだ？

「ナル的にはいいの？タイカさんや、神様の方のライカちゃんを見捨てて」

「うん。どつちかを見捨てないといけないのなら、そりや関係が浅い方を選ぶでしょ。ていうか、やいばもどうせ、最後にはこうしてたでしょ？」

「…わかんないよ」

「あつそ。で、これからどうする？」

追いかけるか、追いかけないか。…やっぱり責任は持ったほうがいいよなあ。ここで、追いかけないなら、それは間違いなく逃げだと思ふし。

「行こうか」

「うい」

時空の裂け目に飛び込んだ。

久し振りのやばい人

時空の裂け目の先には、3つ目の世界。そこには、頭部のみが爬虫類の、ファンタジーでいうリザードマンが集落を作っていた。

「そういえば、そういう特異魔法の人いたね」

「うん。関係は薄かったけど、でも見ている限りあの御主人様を慕ってた人だった」

女声のリザードマン。余りにも衝撃が強かったため、まだ覚えてい

る。「ていうか、皆が記憶をなくしたときって、あの人の本当の顔見れたのか。えっ気になる」

「確かに」

「というか、もしかして、これって全部の世界が繋がっているのか？御主人様大好きで腕が職種になる春っていう女の子とかぐらいしか交流ないけど、まだまだいたよね？」

「ま、まあ、今はレイカちゃんやタイカさんと雷神のライカちゃんと合流しよう。」

「そうして、探すこと1時間。クソ広い荒野のようなこの世界で当てずっぽうに方角を決めて探したら見事に正反対を引いた。ある程度で追いつかないわけがないと気づき、方向転換したばかりに時間がかかってしまった。」

「あついたー！…ん？」

「やいば？…おおう」

「やっと見つけたと思えば、レイカちゃんのその奥には、沢山の人影が。さっきまで追いかけていたのであろう雷神のライカちゃんとタイカさんとはかく、その先の顔ぶれに思考が止まる。」

「ん？あ、おーい!!」

「爽やかな声で、俺に気付いた男が手を振った。その行為が攻撃だと勘違いしたのか、雷神のレイカちゃんによる雷が放たれ、まるで知っていたかのように避けられる。」

「やいば！久し振り！」

笑顔でそう話しかけてきたのは、爽やかなイケメン、もとい、人の心を読み、相手の弱みにつけ込んで有利な条件を引き出す副隊長。

「爽さん……！」

私達の組織を最も支えてくれた爽さんがそこには立っていた。

「どいてー！」

「どいてくださいー！」

雷神のライカちゃんとタイカさんは時空の裂け目の前に立つ集団に叫ぶ。おかしい、二人は見えていないと思うのだが。と、そう思っている、まだ裂け目から人が出てきている。恐らくは爽さんの仲間、そして、二人はそこから時空の裂け目の位置を割り出しているのだろうと思った。

「爽さん、ライカのために、捕まえてください」

レイカちゃんは、淡々と爽さんをお願いする。が、声の調子からして、多分任せきっていない。逃げられたら容赦なく水で攻めるのだろう。

さて、そんな中で爽さんが口を開ける。

「特異世界」

そう呟き、タイカさんと雷神のライカちゃんはピタリと行動を辞めた。座り込み、虚ろを見つめている。

「やいば、レイカ。これでいい？」

「っ……はい」

「…何したの？」

余りにも異様な様子。原因は言うまでもなく、爽さんの特異世界なのだが、結果が怖い。

「何も。ただ、俺の立場はレイカと、ナルを見る限り、ナルとやいばも同じだね。うん。君達3人の味方だよ」

爽やかな笑顔で言い切った。